西新町遺跡Ⅵ

－福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第14・15次調査報告書－

福岡県文化財調査報告書　第200集

２００５
福岡県教育委員会

西新町遺跡 Ⅵ

－福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第14・15次調査報告書－

福岡県文化財調査報告書　第200集

1．西新町遺跡第14次調査地遠景（南から）

2．井戸（南から）

序

本書は、福岡県立修猷館高校の校舎改築に伴い発掘調査された西新町遺跡の調査記録です。西新町遺跡は福岡市早良区西新に所在する弥生時代から古墳時代の大規模な集落で、とくに朝鮮半島を中心とする、国内外の他地域との交流がみられ、玄界灘を往来した人々の軌跡をしめす遺跡として著名です。

福岡県教育委員会では、平成10年度より発掘調査を開始し、集落中心部の様相が次第に明らかになってきております。本書では平成13年度に実施した第14次調査と、平成14年度に実施した第15次調査の成果を収めました。第14次調査では、井戸を取り巻く集落の様相を捉えることができました。第15次調査では集落の西南部の範囲を確定することが出来ました。

発掘調査および報告書作成に至る整理作業にあたり、福岡市教育委員会・県立修猷館高校をはじめ多くの方々にご尽力頂きました。深く感謝いたします。本書が教育・研究、文化財愛護の思想の普及にわずかなりとも寄与できれば望外の喜びとするところであります。

平成17年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　森山　良一

例言

1　本報告書は平成13・14年度に福岡県教育委員会が実施した、福岡県立修猷館高等学校改築事業に係る埋蔵文化財の発掘調査報告書であり、同高等学校敷地内での埋蔵文化財発掘調査報告の6冊目にあたる。なお、調査に関しては県立修猷館高等学校・福岡市教育委員会の多大なご協力を得た。

2　本書に掲載した遺跡は福岡市早良区西新6－1－10に所在する西新町遺跡で、福岡市教育委員会実施の埋蔵文化財発掘調査も含めて第14・15次調査にあたる。福岡市教育委員会の調査番号は0161である。

3　本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が、遺物写真の撮影は、ガラス製品については福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎が、その他の遺物については九州歴史資料館北岡伸一が行った。空中写真は、東亜航空技研株式会社に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。

4　本書に掲載した遺構図の作成は、調査担当者のほか、福田匡朗、山根謙二、植木美江、近藤幸子、古賀理恵子の協力を得た。

5　出土遺物の整理・復元は九州歴史資料館で行った。

6　出土遺物の実測は、土器・陶磁器については渡辺誠（九州大学大学院生）・平田春美・棚町洋子・堀江圭子・坂田順子・橋之口雅子・西亜彩子が、鉄製品は岡寺良が、その他の遺物については坂元雄紀が行った。

7　遺構の浄書は豊福弥生、原カヨ子が、遺物の浄書は豊福弥生が行った。

8　本書掲載の遺構実測図の座標は国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）に基づいたものであり、使用した方位はすべて座標北（G.N.）である。

9　土層注記のうち、土色の記号があるものは『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社1999年）に基づき行った。

10　本書の執筆分担は第4章については委託した分析担当者、第6章は岸本圭が、他は岡寺未幾、岡寺良、坂元が行い、文末に執筆分担を明示していないものは岡寺未幾が行った。

11　本書の編集は岸本、坂元の協力を得て、岡寺未幾が行った。

本　文　目　次

第1章　はじめに ……1
　第1節　調査に至る経緯 ……1
　第2節　調査・整理の担当者 ……1
　第3節　調査の経過 ……2
第2章　位置と環境 ……4
第3章　西新町遺跡第14次調査 ……9
　第1節　調査の概要 ……9
　第2節　基本層序 ……9
　第3節　縄文・弥生時代の遺物 ……12
　第4節　古墳時代の遺構と遺物 ……13
　　1. 古墳時代の竪穴住居跡と出土土器 ……13
　　2. 古墳時代の金属製品 ……112
　　3. 古墳時代の石製品 ……113
　　4. 古墳時代の土製品 ……121
　　5. 古墳時代のガラス製品 ……121
　第5節　近世・近代の遺構と遺物 ……123
　　1. 近世・近代の遺構と出土陶磁器 ……123
　　2. 近世・近代の金属製品 ……136
　　3. 近世・近代の石製品 ……138
　　4. 窯道具 ……139
　　5. 近世・近代の土製品 ……139
第4章　自然科学分析 ……141
　第1節　竪穴住居跡カマド焼土の焼成年代推定 ……141
　第2節　放射性炭素年代測定 ……145
　第3節　砂礫から見た西新町遺跡基盤の古環境 ……147
　第4節　西新町遺跡第14次調査出土のガラス小玉の調査 ……151
第5章　西新町遺跡第14次調査のまとめ ……163
　第1節　古墳時代について ……163
　第2節　近世以降について ……166
第6章　西新町遺跡第15次調査 ……171
　第1節　調査の概要 ……171
　第2節　古墳時代の遺構と遺物 ……172
　第3節　近世以降の遺構と遺物 ……175
　第4節　西新町遺跡第15次調査のまとめ ……176

図　版　目　次

巻頭図版　1．西新町遺跡第14次調査地遠景（南から）
　　2．井戸（南から）
カラー図版1　西新町遺跡第14次調査18号竪穴住居跡出土ガラス玉（1）（約5倍）
カラー図版2　西新町遺跡第14次調査18号竪穴住居跡出土ガラス玉（2）（約5倍）
図版1　1．調査区北半古墳時代遺構空中写真（上が北）
　　2．調査区南半古墳時代遺構空中写真（上が北）
図版2　1．1号竪穴住居跡土器出土状況（北から）
　　2．2号竪穴住居跡完掘状況（北から）
　　3．2号竪穴住居跡（東から）
　　4．2号竪穴住居跡カマド（南西から）
図版3　1．3号竪穴住居跡（西から）
　　2．4号竪穴住居跡（北から）
　　3．5号竪穴住居跡（西から）
　　4．6号竪穴住居跡（南から）
図版4　1．7号竪穴住居跡（北から）
　　2．8号竪穴住居跡土器出土状況（東から）
　　3．8号竪穴住居跡完掘状況（東から）
　　4．8号竪穴住居跡（南から）
図版5　1．10号竪穴住居跡（北西から）
　　2．11号竪穴住居跡（北から）
　　3．12号竪穴住居跡（北から）
図版6　1．12号竪穴住居跡カマド（南から）
　　2．13号竪穴住居跡（西から）
　　3．14号竪穴住居跡（南から）
図版7　1．15号竪穴住居跡（南から）
　　2．15号竪穴住居跡カマド（南から）
　　3．16号竪穴住居跡（南東から）
図版8　1．17号竪穴住居跡（南から）
　　2．18号竪穴住居跡（北から）
　　3．18号竪穴住居跡カマド（南から）
図版9　1．19号竪穴住居跡（南から）
　　2．19号竪穴住居跡カマド（南から）
　　3．20号竪穴住居跡（南から）
図版10　1．20号竪穴住居跡カマド（東から）

2．21号竪穴住居跡（南から）
3．21号竪穴住居跡カマド（南から）
図版11　1．22号竪穴住居跡（西から）
2．23号竪穴住居跡（南から）
3．23号竪穴住居跡カマド（南から）
4．24号竪穴住居跡（南から）
図版12　1．25号竪穴住居跡（北から）
2．26号竪穴住居跡（南東から）
3．26号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版13　1．27号竪穴住居跡（南から）
2．28号竪穴住居跡（北から）
3．29号竪穴住居跡（南から）
図版14　1．井戸北半（南から）
2．井戸土層東西断面（北から）
3．井戸南半土器検出状況（北から）
4．井戸南半（北西から）
図版15　1．井戸中央ピット土器出土状況（北から）
2．井戸中央ピット土器・井戸枠検出状況（北から）
3．井戸中央ピット掘方東西土層断面（北から）
図版16　1．8号土坑（南から）
2．10号土坑（北から）
3．11号土坑（南から）
図版17　1．12号土坑（北から）
2．13号土坑（南西から）
3．29号竪穴住居跡銅鏃出土状況（東から）
図版18　1．調査区北半近世遺構（南から）
2．1号石組遺構（西から）
3．2号石組遺構（南から）
図版19　1．3号石組遺構（北から）
2．4号石組遺構（西から）
3．近世井戸（北から）
図版20　1・2号竪穴住居跡出土土器
図版21　3・4号竪穴住居跡出土土器
図版22　4～8号竪穴住居跡出土土器
図版23　8・9・11・12・14号竪穴住居跡出土土器
図版24　14～18号竪穴住居跡出土土器
図版25　18・19号竪穴住居跡出土土器
図版26　19号竪穴住居跡出土土器

図版27　19～21号竪穴住居跡出土土器
図版28　21・23号竪穴住居跡出土土器
図版29　26号竪穴住居跡出土土器
図版30　27・28号竪穴住居跡出土土器
図版31　28号竪穴住居跡出土土器
図版32　28・29号竪穴住居跡・井戸出土土器
図版33　井戸・土坑出土土器
図版34　土坑・表土・検出面・排土中出土土器、半島系土器
図版35　半島系土器・銅鏃
図版36　石製品
図版37　石製品・鉄製品・縄文時代の遺物
図版38　近世遺構出土陶磁器①
図版39　近世遺構等出土陶磁器②・青銅製品
図版40　近世鉄製品・石製品・土製品

挿　図　目　次

第１図　西新町遺跡の位置
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/50000）
第３図　西新町遺跡と関連する韓半島の遺跡
第４図　発掘調査区の位置と周辺調査地（1/4000）
第５図　調査区周辺地形図（1/1500）
第６図　古墳時代遺構全体図（1/200）
第７図　近世・近代の遺構配置図（1/200）
第８図　縄文・弥生時代の遺物実測図（１～３は1/3、４～７は1/4、８・９は1/2）
第９図　１・３号竪穴住居跡・１号住居跡カマド実測図（1/60、1/30）
第10図　１号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）
第11図　１号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）
第12図　２号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）
第13図　２号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）
第14図　２号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）
第15図　２号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）
第16図　３号竪穴住居跡出土土器実測図（１～３は1/4、他は1/3）
第17図　４～６・９号竪穴住居跡実測図（1/60）
第18図　４号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）
第19図　４号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）
第20図　４号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）
第21図　４号竪穴住居跡出土土器実測図④（42は1/4、他は1/3）
第22図　４号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（1/3）
第23図　５・６号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）
第24図　７・８号竪穴住居跡実測図・８号竪穴住居跡東壁土層断面図（1/60）
第25図　７号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）
第26図　８号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）
第27図　８号竪穴住居跡出土土器実測図②（15は1/4、他は1/3）
第28図　８号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）
第29図　８号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）
第30図　８・９号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（1/3）
第31図　10～12号竪穴住居跡実測図（1/60）
第32図　10・11号竪穴住居跡・11・12号竪穴住居跡拡張部出土土器実測図（1/3）
第33図　12号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）
第34図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）
第35図　13～15号竪穴住居跡実測図（1/60）

第36図　13号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）
第37図　14号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）
第38図　14号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）
第39図　15号住居跡カマド実測図（1/30）
第40図　15号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）
第41図　15号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）
第42図　15・16号竪穴住居跡出土土器実測図③（48・49は1/4、他は1/3）
第43図　16・17号竪穴住居跡実測図（1/60）
第44図　17号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）
第45図　18号竪穴住居跡・同西壁土層断面・同ガラス小玉出土状況実測図（1/60、1/30）
第46図　18号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）
第47図　18号竪穴住居跡出土土器実測図②（29は1/4、他は1/3）
第48図　18号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/4）
第49図　18号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/4）
第50図　18号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（113・114は1/3、他は1/4）
第51図　19号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）
第52図　19号竪穴住居跡出土土器実測図①（3は1/4、他は1/3）
第53図　19号竪穴住居跡出土土器実測図②（7は1/4、他は1/3）
第54図　19号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）
第55図　19号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）
第56図　19号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（1/3）
第57図　19号竪穴住居跡出土土器実測図⑥（1/3）
第58図　20号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）
第59図　20号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）
第60図　21号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）
第61図　21号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）
第62図　21号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）
第63図　21号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）
第64図　21号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）
第65図　21号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（1/3）
第66図　22号竪穴住居跡・同西壁土層断面実測図（1/60）
第67図　22号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）
第68図　23号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）
第69図　23号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）
第70図　23号竪穴住居跡出土土器実測図②（15は1/4、他は1/3）
第71図　23号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）
第72図　24～26号竪穴住居跡実測図（1/60）
第73図　24・25号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

第74図　26号住居跡カマド実測図（1/30）
第75図　26号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）
第76図　26号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）
第77図　26号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）
第78図　26号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）
第79図　27号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）
第80図　27号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）
第81図　27号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）
第82図　28号竪穴住居跡実測図（1/60）
第83図　28号竪穴住居跡出土土器実測図①（8は1/6、他は1/4）
第84図　28号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）
第85図　28号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）
第86図　28号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）
第87図　28号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（1/3）
第88図　29号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）
第89図　29号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）
第90図　井戸実測図（1/100）
第91図　井戸土層断面図(1/60)
第92図　井戸中央ピット土層断面図(1/60)
第93図　井戸出土土器実測図①（1/4）
第94図　井戸出土土器実測図②（1/4）
第95図　井戸出土土器実測図③（65は1/3、他は1/4）
第96図　土坑実測図(1/60)
第97図　土坑出土土器実測図①（1/3）
第98図　土坑出土土器実測図②（1/3）
第99図　土坑出土土器実測図③（34・38は1/4、他は1/3）
第100図　ピット出土土器実測図（1/3）
第101図　表土・検出面出土の土器実測図（1/4）
第102図　撹乱等出土の土器実測図（1/4）
第103図　検出面等出土の半島系土器実測図（1/3）
第104図　銅鏃実測図（2/3）
第105図　鉄器実測図（2/3）
第106図　石製品実測図①（1/2）
第107図　石製品実測図②（1/2）
第108図　石製品実測図③（1/4）
第109図　石製品実測図④（1/2）
第110図　石製品実測図⑤（1/2）
第111図　石製品および土製品実測図（47～52、55・56は1/2、53・54は2/3）

第112図　ガラス玉実測図（2/1）
第113図　石組遺構実測図①(1/60)
第114図　石組遺構実測図②(1/60)
第115図　石組遺構出土陶磁器実測図①（1/3）
第116図　石組遺構出土陶磁器実測図②（1/3）
第117図　近世井戸・埋甕・土坑実測図(２は1/30、他は1/60)
第118図　近世井戸出土陶磁器実測図①（1/3）
第119図　近世井戸出土陶磁器実測図②（1/6）
第120図　近世井戸出土陶磁器実測図③（1/4）
第121図　土坑出土陶磁器実測図（1/3）
第122図　溝断面実測図・土層断面実測図（1/40）
第123図　溝出土陶磁器実測図（1/3）
第124図　ピット・検出面等出土の陶磁器実測図（1/3）
第125図　近世・近代の鉄器実測図(2/3)
第126図　近世・近代の青銅製品および貨幣実測図（2/3）
第127図　近世・近代の石製品実測図（１・２は1/2、３～５は1/3）
第128図　窯道具および近世・近代の土製品実測図（１～10は1/3、11～18は1/2）
第129図　西新町遺跡第14次調査区出土半島系土器(1/6)
第130図　西新町遺跡竪穴住居跡変遷図(1/2000)
第131図　第15次調査遺構配置図（1/200）
第132図　土坑1実測図（1/30）
第133図　第15次調査出土遺物実測図（1/3）

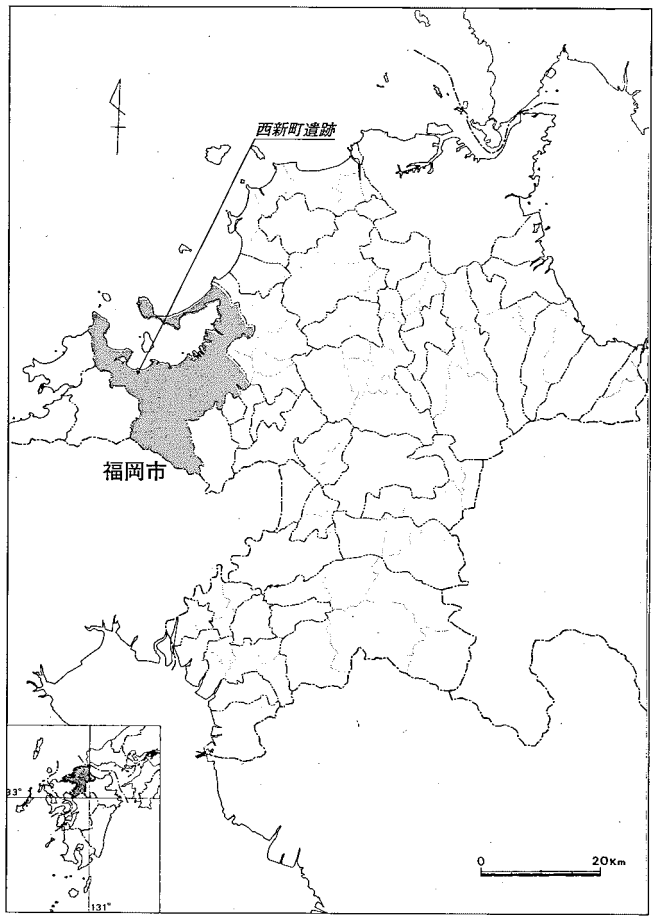
表　目　次

第１表　西新町遺跡調査次数一覧
第２表　西新町遺跡第14次調査竪穴住居跡一覧
第３表　西新町遺跡第14次出土石製品・土製品・金属製品一覧

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

西新町遺跡第14・15次調査は、平成10年度より継続する県立修猷館高校の校舎改築に伴う発掘調査である。本調査も福岡県教育庁総務部施設課より、県文化財保護課が執行委任の手続きを得て発掘調査を行った。第14次調査は、平成13年9月25日から平成14年3月11日まで実施した。調査対象地は、体育館の建設予定地となった、旧テニスコート地点2400㎡であったが、学校活動で使用されている運動場に隣接することから、安全上野球のバックネットにかかる土地は調査を行うことができなかった。このため、実際に発掘調査できたのは1110㎡である。



第1図　西新町遺跡の位置

平成14年度は旧通信制棟・事務棟の解体後に駐輪場を新設する工事が計画された。校舎の基礎は遺構面よりも深い地点にまで及んでいると考えられたために、解体時には遺構を傷つけることが想定された。したがって、校舎範囲を対象として発掘調査を実施することとなった。調査面積は1800㎡であるが、建物の基礎を残しての調査であり、かつ遺構の残存状況が悪かったために精査した面積は800㎡である。

本書では、第14次調査については第2～5章、第15次調査については第6章で報告する。

第2節　調査・整理の担当者

西新町遺跡第14・15次発掘調査・整理報告関係者

総括		平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
福岡県教育委員会	教育長	光安　常喜	森山　良一	森山　良一	森山　良一
	教育次長	森山　良一	三瓶　寧夫	三瓶　寧夫	清水　圭輔
教育企画部	部長	黒見　義正	黒見　義正	黒見　義正	楢崎洋二郎
施設課	課長	今村　芳晴	今村　芳晴	杉光　誠	杉光　誠
	課長補佐	籐　祐志	釘丸　義和	釘丸　義和	辰田　一郎
	課長技術補佐	井本　喜三郎	池田　静雄	平　信二	平　信二
	施設係長	平　信二	舩越　美智雄	舩越　美智雄	石塚　康弘
総務部	部長	三瓶　寧夫	松本　通憲	清水　圭輔	中原　一憲

文化財保護課	課長	井上　裕弘	井上　裕弘	井上　裕弘	井上　裕弘
	参事兼課長技術補佐	橋口　達也	橋口　達也	川述　昭人	川述　昭人
		川述　昭人	川述　昭人	木下　修	木下　修
	参事				新原　正典
	参事兼課長補佐	平野　義峰	久芳　昭文	久芳　昭文	
	課長補佐				安川　正郷
庶務					
	管理係長	三笠ひとみ	古賀　敏生	古賀　敏生	稲尾　茂
	主任主事	秦　俊二	秦　俊二	末竹　元	末竹　元
調査・整理	参事補佐兼調査第一係長	佐々木　隆彦	佐々木　隆彦	小池　史哲	小池　史哲
	主任技師	岸本圭（整理担当）	岸本圭（整理担当）		岸本圭（北筑後教育事務所）
			今井　涼子（整理担当）		
				岡寺　未幾	岡寺　未幾
	技師	野口　未幾	岡寺　未幾	坂元雄紀（整理担当）	坂元雄紀（整理担当）
		坂元　雄紀	坂元　雄紀		

また調査期間中に次の方々の来訪があり、現地で有益なご教授をいただいた。記して感謝する。（敬称略）

西谷　正　岩永省三　溝口孝司（九州大学）　武末純一（福岡大学）　磯　望　高倉洋彰（西南学院大学）　亀田修一（岡山理科大）　申熙權（韓国国立文化財研究所）　角　浩行　楢崎直子（前原市教育委員会）　舟山良一（大野城市教育委員会）　大賀克彦（京都大学）　福岡市教育委員会のみなさん　九州大学学生のみなさん

調査前風景

第３節　調査の経過

第14次調査対象地は、西門そばのテニスコート部分である。このため従来のような大規模な解体工事の必要はなかったが、修猷館高校の体育祭には多数の父兄や関係者が訪れるため、安全面から調査のための解体工事に着手するのは、体育祭終了以降とした。よって実際に調査を開始したのは、平成13年10月9日である。調査は排土置き場を確保するため、南北に二分割して行った。記録は全体に1/20の縮図を作成するとともに、遺存の良好な遺構では1/20、1/10の個別図を作成した。また主要遺構は個別の遺構写真を作成することにつとめた。調査の経過は以下の通りである。

空よりみた第14次調査区（撮影西谷正氏）

平成13年

５月25日　施設課・高校と現地にて協議

6月2・3日　第55回修猷大文化祭で12次調査の発掘出土品の展示を行う
8月27日　高校と発掘調査に関して再協議
9月25日　調査区北側の表土除去開始
10月9日　作業員を投入、環境整備および調査区北側の近世発掘調査開始
10月16日　調査区北側古墳時代発掘調査開始
12月19日　調査区北側の発掘調査終了、重機による埋め戻し及び調査区南側の表土除去
平成14年
1月10日　人力による表土剥ぎ開始
1月24日　調査区南側近世発掘調査開始
2月4日　調査区南側古墳時代発掘調査開始
3月7日　調査区南側の発掘調査完全に終了、重機による埋め戻し開始
3月11日　調査終了

文化祭展示風景

第14次調査発掘作業員のみなさん

また調査を機に、修猷館高校の学生および教職員を対象に考古学に関心を持ってもらうための活動も行った。6月2・3日に行われた修猷大文化祭では、生徒会の協力を得て調査成果の報告展示を行うことができ、約450名の人々に見てもらうことができた。また調査時には、これまでも当教育委員会での調査時に発行してきた、調査経過および遺跡の概要を記した『西新町だより』の発行および配布や、出土遺物の展示会もおこなった。また世界史の授業時間や、放課後考古学に関心のある有志で遺跡に集ってもらい、現地で考古学調査の概要や遺跡の説明させてもらう機会を得た。高校生の反応に触れることができ、新鮮な感動を受けたことを覚えている。このような機会を与えてくださった先生方に記して感謝を申し上げる。

また調査中は、西門への通路を狭くせざるを得ず、毎日この道を利用する学生さん、教職員の方々には非常に迷惑をおかけした。また遺構面は地表から1.5mの深さにあり、安全面では気を配っていたつもりであったが、足場の悪い砂地での作業のため、怪我人を出してしまった。しかし、それ以降は事故もなく、無事調査を行えたのは調査に関わってくださった作業員さん全員の安全に対する意識が高かったおかげであり、記して感謝したい。

第15次調査対象地は、学校敷地の南東角にあたる。既存の校舎解体は夏休み期間中に実施され、基礎を残した状態で重機により表土の除去を開始したのは、平成14年10月3日である。表土除去の結果、第6章でも述べるとおり、遺構が当初の予想に反して希薄であることが判明し、調査期間を短縮することで協議をすすめた。その後発掘作業員さんとともに掘削を開始したが、数日により作業が終了した。安全対策のために埋め戻しを行い、全ての作業を終えたのは10月29日である。

第２章　位置と環境

西新町遺跡は早良平野の東北端博多湾に面した古砂丘上に位置する遺跡である。遺跡をとりまく考古学的・歴史的環境については、既往の報告でほぼ網羅されている。遺跡の縄文時代から古墳時代までは『西新町遺跡Ⅱ』に、古代から近世については『西新町遺跡Ⅲ』および『西新町遺跡Ⅴ』で報告されている。また、博多湾沿岸の砂丘遺跡についての概要が『西新町遺跡Ⅳ』で報告されているほか、既往の調査の概要は『西新町遺跡Ⅱ』を参照されたい。西新町遺跡では韓半島に源流が求められる遺構・遺物が出現するのが特徴である。ここでは整理の意味をこめて、同時期の韓半島の背景および、既報告で半島系の遺構・遺物と対比された韓国の遺跡についてとりあげてみたい。

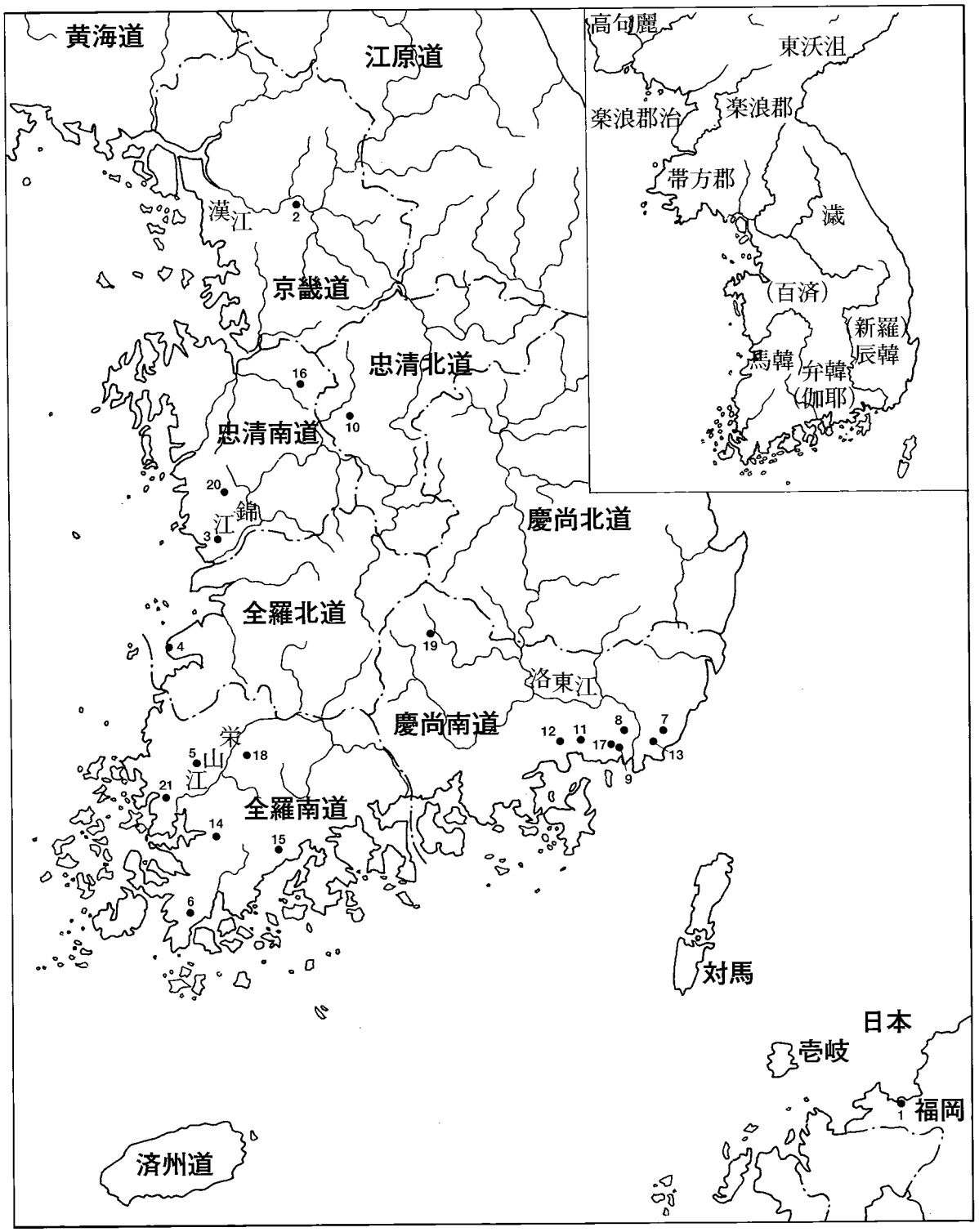
西新町遺跡が築かれる西新町１式の時代は弥生時代終末であるが、この紀元後３世紀後半頃の韓半島は小国家が分立する時代であった。『三国志』魏志東夷伝によると朝鮮半島南部地域は馬韓50余国・辰韓12国・弁韓12国の地域集団が併存し、原三国時代と呼ばれる。高句麗による楽浪郡制圧が313年に起こり、高句麗は版図を中国東北地方と朝鮮半島北半に拡大する。このような背景の下で、馬韓からは百済、辰韓からは新羅が台頭し、弁韓からは伽耶諸国が起こる。これより676年に新羅が朝鮮半島を統一するまでの時代を三国時代とよぶ。

西新町遺跡の営まれた頃は、原三国時代から三国時代への過渡期にあたり、韓半島は群雄割拠する時代にあって、交易ルートの拡大には様々な思惑があったに違いない。武末純一は、西新町遺跡を「伽耶の鉄」を一つの目的とした国際交流港と考え、伽耶や百済（馬韓）系の渡来人が近畿系・山陰系・北部九州系の人々と混在しながら竈を用いる生活様式をしていたと説く〔武末2004〕。また、白井克也は、古墳時代前期に博多湾岸が朝鮮半島から西日本各地に及ぶ交易の中心となるという「博多湾貿易」と言う考えを打ち出している〔白井2001〕。これを受け久住猛雄は西新町３式後半以降（久住ⅡＢ～ⅡＣ期）は西新町遺跡が中心となり博多湾沿岸地域が初期大和政権の対外交易および列島内交易の大拠点となるという「後期博多湾貿易」を提唱する。これらは西新町遺跡の特殊な性格を考える上で、重要な提言と考える。

半島の影響をよくあらわす遺構としてカマドがある。カマドは西新町１・2式段階より出現し、3式後半以降増加する。しかし、同時期の日本列島においては福岡市南八幡遺跡や前原市前原西町遺跡など近郊のごくわずかな例をおいてしか存在せず、５世紀に広く普及したカマドとは直接つながらない特殊な遺構である。西新町遺跡のカマドについては吉田東明により三分されている〔吉田2003〕。Ⅰ類は住居コーナーに付く煙道は無い、あるいは非常に短いもの、Ⅱ類はカマド燃焼部が住居壁から離れた内側にあり、煙道が住居隅に向かって長く伸びるもの、Ⅲ類は壁のほぼ中央に付くもので、煙道は無い、もしくは非常に短いものである。原三国期に属する集落遺跡のうち、慶尚南道居昌郡大也里遺跡、全羅南道務安郡良将里遺跡、同道昌州郡大谷里道弄遺跡ではⅠ・Ⅲ類が、全羅南道光州雙村洞遺跡ではⅡ類が、忠清南道舒州松内里遺跡や同道天安市斗井洞遺跡ではⅠ・Ⅱ類が確認される。次に半島系の遺物であるが、これらは西新町２式以降みられる。これまで、西新町遺跡出土半島系土器と類似した資料としてあげられた韓半島の遺跡を列挙していく。陶質土器のタタキ文短頸壺の類例が見られるのは、全羅北道扶安竹幕洞遺跡、全羅南道寶城郡金坪遺跡である。両耳付短頸壺は、忠清南道舒川烏石里遺跡、

1．西新町遺跡
2．藤崎遺跡
3．元冠防塁
4．西皿山窯跡推定地
5．東皿山窯跡推定地
6．姪浜遺跡
7．五島山古墳
8．拾六町ツイジ遺跡
9．橋本一丁目遺跡
10．有田遺跡
11．原遺跡
12．飯倉遺跡群
13．梅林古墳
14．野方久保遺跡
15．野方中原遺跡
16．羽根戸古墳群
17．吉武遺跡群
18．田村遺跡
19．金武古墳群
20．都地遺跡
21．四箇遺跡群
22．重留遺跡
23．東入部遺跡
24．重留古墳群
25．野芥遺跡
26．山崎古墳群
27．クエゾノ遺跡
28．七隈古墳群
29．大谷古墳群
30．倉瀬戸古墳群
31．鳥越古墳群
32．能古焼窯跡

第2図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/50,000）



1．福岡市西新町遺跡
2．河南市渼沙里遺跡
3．舒川鳥石里遺跡
4．扶安竹幕洞遺跡
5．昇州大谷里遺跡
6．海南郡郡谷里遺跡
7．釜山市老圃洞遺跡
8．金海市禮安里遺跡
9．金海市府院洞遺跡
10．清州松節洞遺跡
11．昌原東三洞遺跡
12．馬山懸洞遺跡
13．東莱楽民洞遺跡
14．霊岩月松里遺跡
15．寶城郡金坪遺跡
16．天安斗井洞遺跡
17．金海鳳凰台遺跡
18．光州雙村洞遺跡
19．居昌郡大也里遺跡
20．舒州郡松内里遺跡
21．務安郡良将里遺跡

第3図　西新町遺跡と関連する韓半島の遺跡

全羅南道大谷里遺跡、清州松節洞遺跡である。二重口縁壷は全羅南道霊岩月松里遺跡、無文短頸壷は釜山市老圃洞遺跡、慶尚南道金海市禮安里遺跡、慶尚南道馬山懸洞遺跡14号土壙墓、慶尚南道昌原東三洞遺跡が上げられる。赤焼き土器の鉢については、慶尚南道東莱楽民洞貝塚、忠清南道天安斗井洞遺跡、金海鳳凰台遺跡、瓦質土器の甑については全羅南道昇州大谷里トロン遺跡、全羅南道海南郡郡谷里遺跡、金海府院洞遺跡がある。このように土器は広く半島西南部地域に由来するものが出土しており、混在する状況を示す。ただしこれらの土器は胎土分析によると、半島からの搬入品ではなく、在地で作られたものと考えられる〔三辻2002・2003〕。しかし技法的にも問題なく作られていることを考えると、半島系の人が来て、この遺跡周辺で作成したと考えるのが妥当であろう。

また、土器以外で半島系資料と考えられるものについてはガラス小玉の鋳型がある。これについては京畿道河南市渼沙里遺跡、全羅南道海南郡郡谷里遺跡に類例がある。

以上のように、西新町遺跡から検出された半島系の遺構・遺物は特定の地域ではなく、ひろく半島中南部地域と関連する土器の出土が見られ、多様な交流のあり方が窺えるのである。

<参考文献>

小田富士雄・韓炳三1991『日韓交渉の考古学　弥生時代編』

久住猛雄2004「古墳時代初頭前後の博多湾岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と倭』

小林義彦編2000『南八幡遺跡』福岡市文化財調査報告書第641集

公州大学校博物館・韓国道路公社1996『烏石里遺蹟』

慶尚南道・東義大学校博物館1989『大也・武陵里住居址』

高麗大学校発掘調査団編1994『渼沙里　弟5巻』

国立中央博物館1992『固城貝塚』

国立中央博物館1998『東莱楽民洞遺跡』

国立全州博物館1998『扶安竹幕洞祭祀遺蹟研究』

重藤輝行編2000『西新町遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第154集

重藤輝行編2001『西新町遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告第157集

昌原大学博物館1990『馬山懸洞遺蹟』

白井克也2000「日本出土の朝鮮産土器・陶器―新石器時代から統一新羅時代まで―」『日本出土の舶載陶磁』

白井克也2001「勒島貿易と原の辻貿易」『弥生時代の交易』第49回埋蔵文化財研究集会

全南大学校博物館1998『寶城金坪遺蹟』

全南大学校博物館1999『光州雙村洞住居跡』

武末純一2004「伽耶と倭の交流－古墳時代前・中期の土器と集落－」『国立歴史民族博物館研究報告』第110集

釜山大学校博物館1993『金海禮安里古墳群』2釜山大学校博物館遺蹟調査報告書第15輯

釜山大学校博物館1988『釜山老圃洞遺跡』釜山大学校博物館遺蹟調査報告書第12輯

釜山大学校博物館1998『金海鳳凰台遺蹟』釜山大学校博物館遺蹟調査報告書第23輯

釜山女子大学博物館1984『昌原三東洞甕棺墓』釜山女子大学博物館遺蹟調査報告第1輯

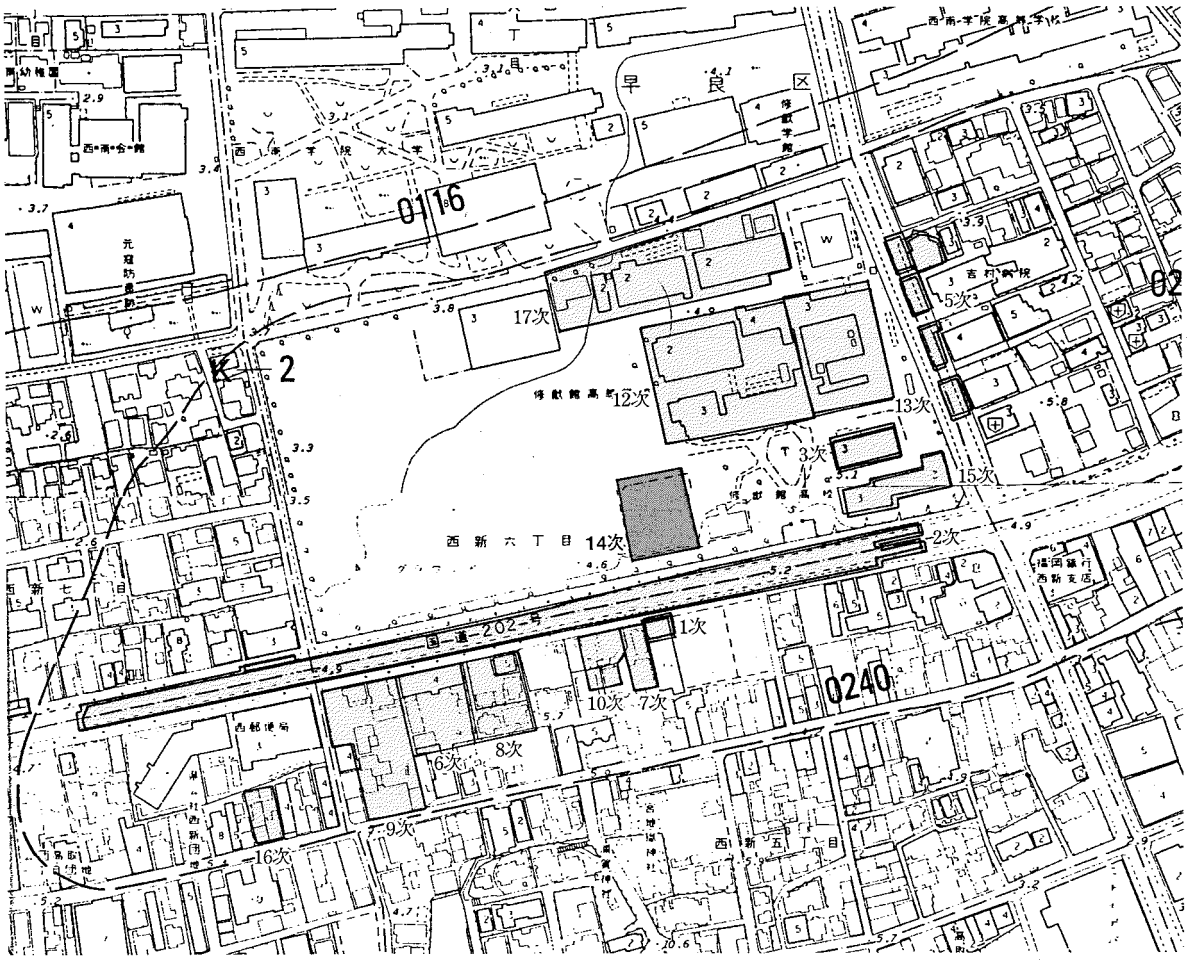
平尾和久編2000『前原西町遺跡』前原市文化財調査報告書第68集

三辻利一2002「西新町遺跡第12次調査出土土器の蛍光X線分析」『西新町遺跡Ⅳ』

三辻利一2003「西新町遺跡第13次調査出土土器の蛍光X線分析」『西新町遺跡Ⅴ』

木浦大学博物館1987～1989『海南郡谷里貝塚Ⅰ～Ⅲ』

吉田東明編2003『西新町遺跡Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第178集



第４図　発掘調査区の位置と周辺調査地（1/4,000）

第1表　西新町遺跡調査次数一覧

調査次数	住所	調査原因	調査主体	調査面積(㎡)	調査年月日	報告書名	報告書発行年月日
1		民間開発					
2	早良区西新6丁目	地下鉄建設工事	市教委	6230	1976.8.－1978.4.	福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集	1982.3.31
3	早良区西新6丁目6－10	高校改築	県教委	700	1984.8.6－8.27	福岡県文化財調査報告書第72集	1985.3.31
4	早良区西新3丁目	道路拡幅工事	市教委	800	1986.6.29－10.3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第203集	1989.3.31
5	早良区西新3丁目606－4	病院増築	市教委	303	1992.11.2－11.14	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集	1994.3.31
6	早良区西新5丁目643－4他	民間開発	市教委	1041	1994.3.31－6.15	福岡市埋蔵文化財調査報告書第483集	1996.3.31
7	早良区西新5丁目638－9	民間開発	市教委	368.96	1994.4.16－5.22	福岡市埋蔵文化財調査報告書第483集	1996.3.31
8	早良区西新5丁目644－1・644－2	民間開発	市教委	610	1994.9.6－11.18	福岡市埋蔵文化財調査報告書第484集	1996.3.31
9	早良区西新5丁目594他6筆	民間開発	市教委	920	1995.1.9－4.24	福岡市埋蔵文化財調査報告書第505集	1997.3.31
10	早良区西新5丁目641－3他	共同住宅建設	市教委	462	1995.10.28－1996.2.3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第683集	2001.3.30
11	早良区西新5丁目632－6	店舗建設	市教委	52	1997.10.13－10.15	福岡市埋蔵文化財年報Vol.12	1999.3.31
12	早良区西新6丁目6－10	高校改築	県教委	5214	1998.4.22－1998.12.28	福岡県文化財調査報告書第154集 福岡県文化財調査報告書第157集	2000.3.31 2001.3.30
13	早良区西新6丁目6－10	高校改築	県教委	2800	2000.7.3－2001.2.16	福岡県文化財調査報告書第168集 福岡県文化財調査報告書第178集	2002.3.29 2003.3.31
14	早良区西新6丁目6－10	高校改築	県教委	1110	2001.10.1－2002.3.11	福岡県文化財調査報告書第200集	2005.3.31
15	早良区西新6丁目6－10	高校改築	県教委	1800	2002.9.2－10.29	福岡県文化財調査報告書第200集	2005.3.31
16	早良区高取1丁目105	共同住宅建設	市教委	394.5	2003.5.28－8.12		
17	早良区西新6丁目6－10	高校改築	県教委	約1990	2003.8.26-2004.3.18		

第３章　西新町遺跡第14次調査

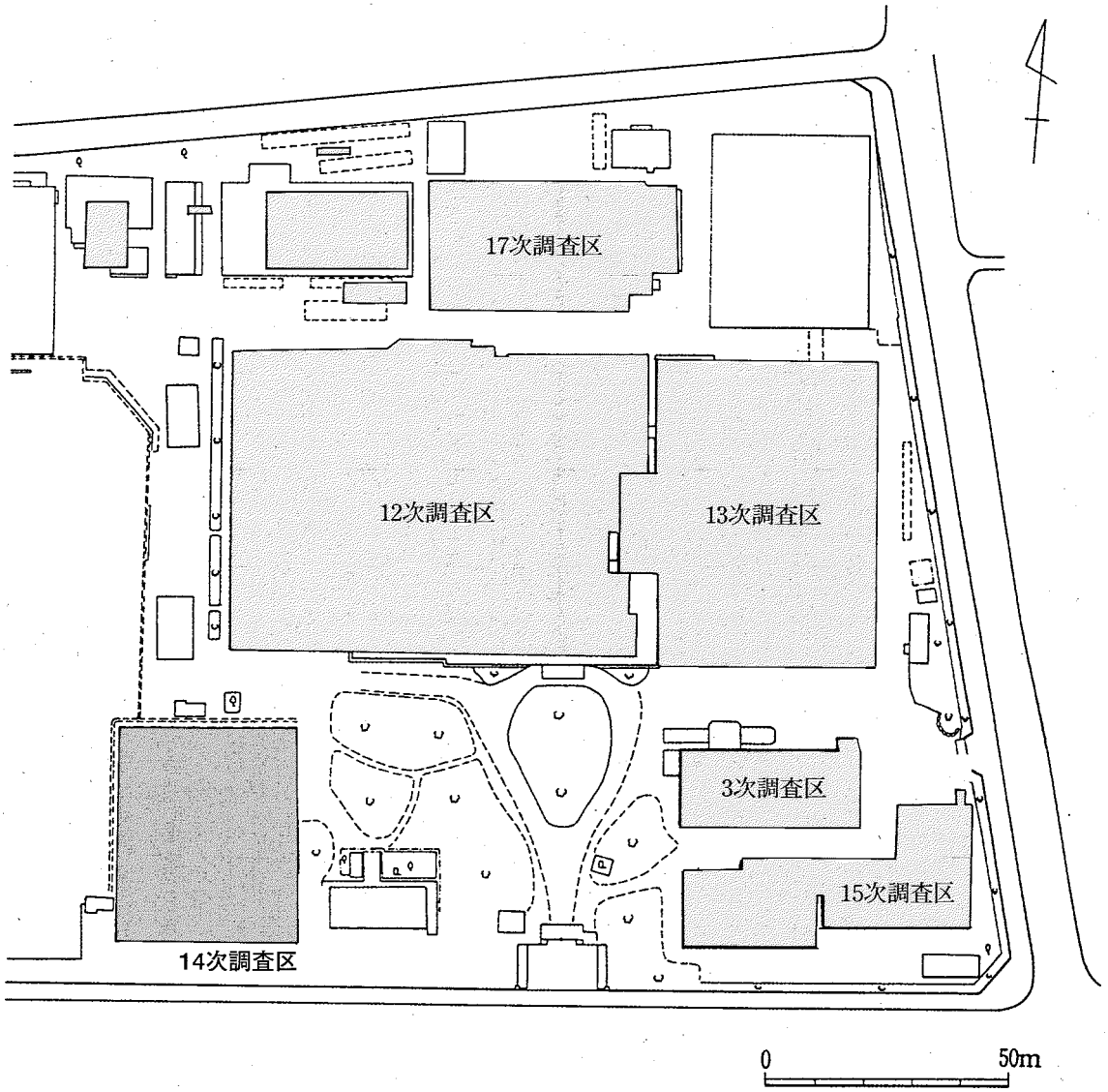
第１節　調査の概要

第14次調査で検出された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡29軒・井戸１基・土坑７基、および近世以降の石組み遺構４基・井戸１基・溝４条・土坑５基である。また、遺構は検出されなかったが、縄文・弥生時代の遺物が確認されている。

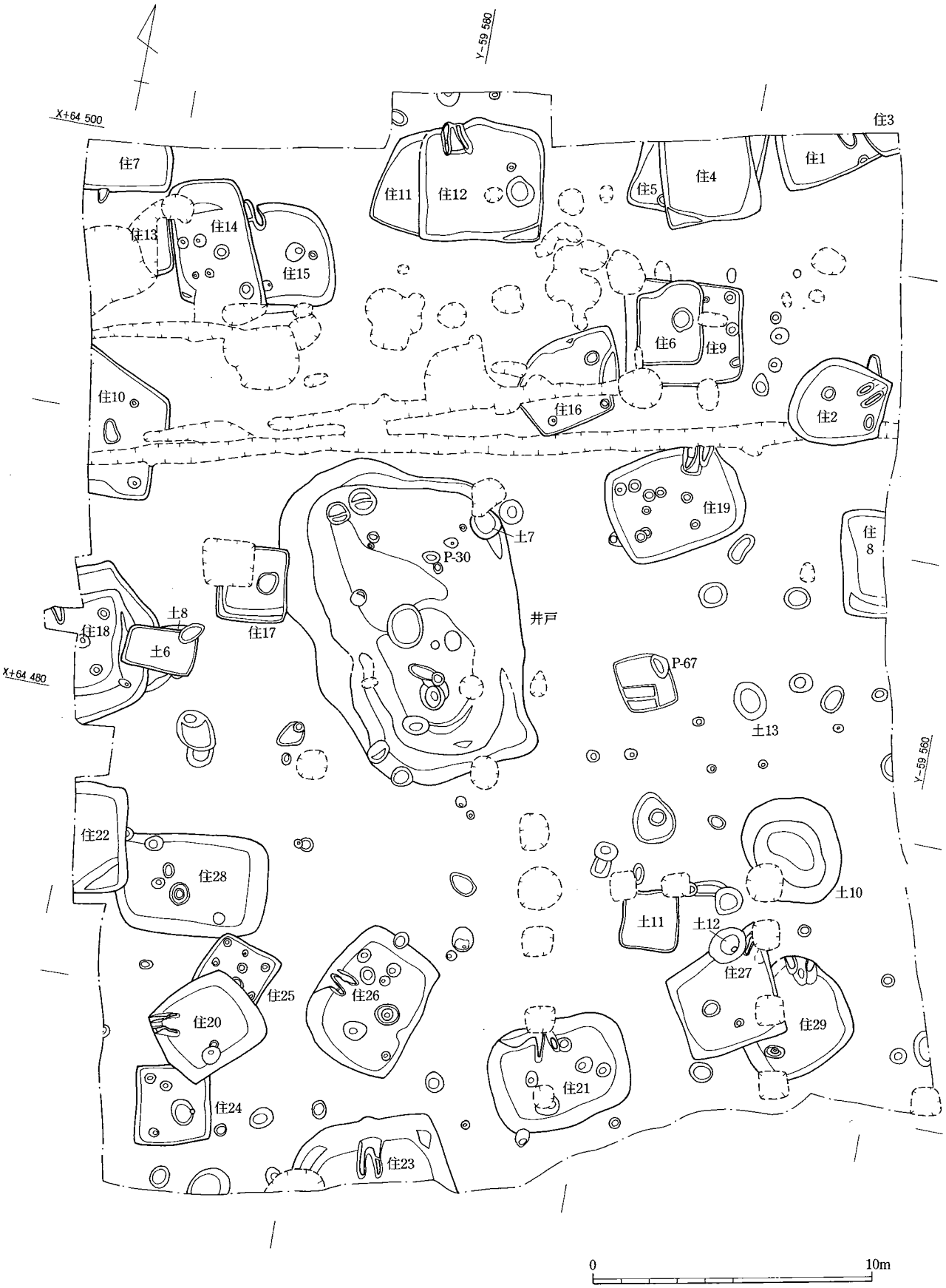
調査地はテニスコートとして使われていたため、遺跡はこれまでの校内の調査と比べて、ほとんど撹乱を受けておらず、良好な状態で検出された。調査については、調査地を南北に二分し、反転する段取りで行い、北半から先に着手した。

第２節　基本層序（第24図）

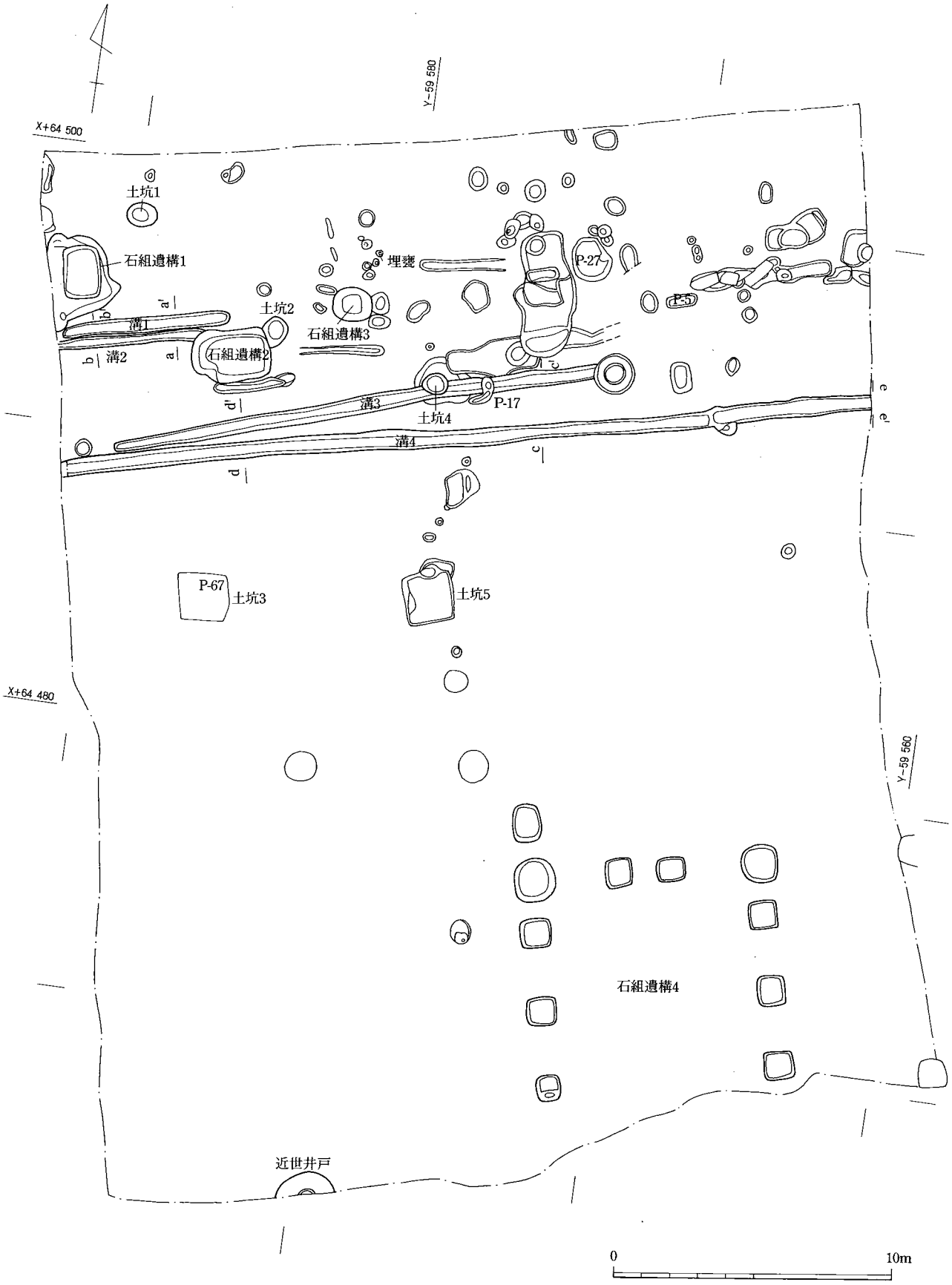
８号竪穴住居跡西壁で基本層序をみていく。第２～４層は近代以降、第５層は近世の遺物が出土し、以下は遺物を含まない層が続く。第10～20層より古墳時代の遺物が出土する。そこで



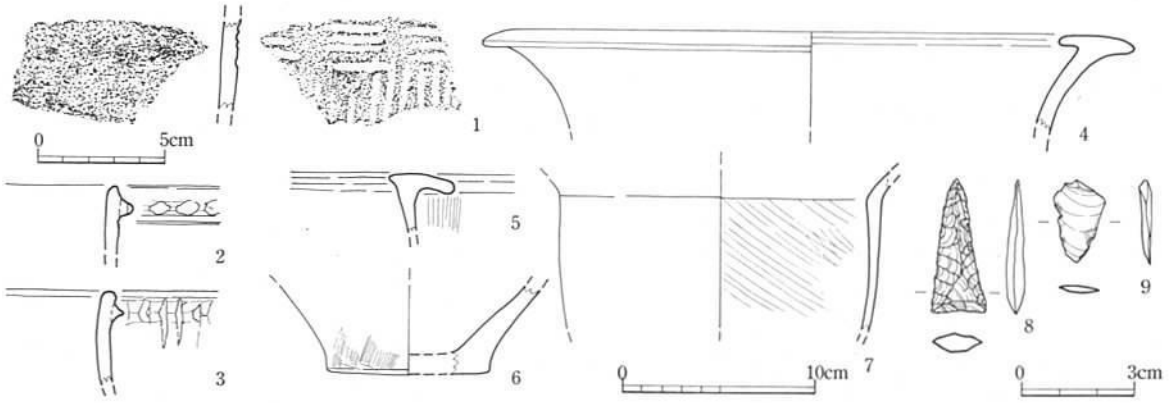
第５図　調査区周辺地形図（1/1,500）



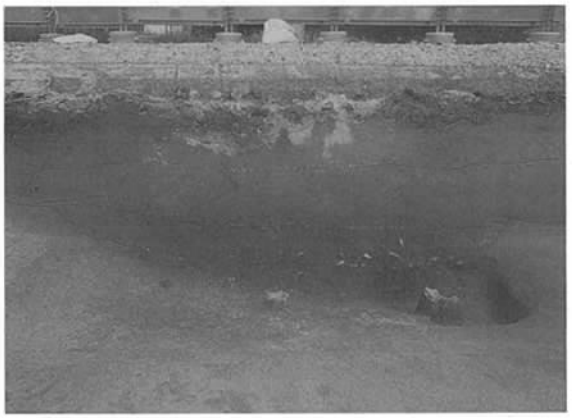
第6図　古墳時代遺構配置図（1/200）



第7図　近世以降の遺構配置図（1/200）



第8図　縄文・弥生時代の遺物実測図（1～3は1/3、4～7は1/4、8・9は1/2）



8号竪穴住居跡西壁土層断面写真

第9層より下を遺構検出面とし、調査をおこなった。第22層以下は粗砂で無遺物層である。第2・3層は焼土を多く含む火災面である。昭和20年6月19日に福岡市は米軍機による大空襲を受け、その際西新町から今川橋にかけての電車道の両側は焼夷弾により火の海になっている。修猷館高校も校舎は被災を免れたが、運動場には十数個の焼夷弾が落下したという記録があり、第2層はそれに当たる可能性が高い。第5層上層が近世の遺構面に当たるが、調査期間の都合上、古墳時代の遺構面まで下げてから近世以降の調査も行った。遺構面のレベルは、東西では東側が高く、南北では北側が高くなっている。レベルは、北端が3.30 m、南端が2.93、東端が北側では3.45 m、南側では2.99 m、西端は北側で3.27 m、南側で3.03 mである。

第3節　縄文・弥生時代の遺物

1．縄文・弥生時代の土器（図版37、第8図1～7）

1は外面に平行沈線を施す、曽畑式土器の深鉢破片。暗褐色を呈し、胎土は粗く、長石・石英・角閃石を含む。2・3は突帯文土器。2は粘土紐を貼り付けた後に工具で押さえるのに対し、3は工具で粘土紐を区切って突帯を作り出すタイプ。4～7は弥生中期の土器。4は鋤先状口縁の壺口縁。5はやや外に垂れる鋤先状口縁甕口縁。6は甕胴部。7は甕底部破片。

2．縄文・弥生時代の石器（図版37、第8図8・9）

8は姫島産黒曜石製の打製石鏃で、18号竪穴住居跡出土である。表面の風化がやや激しい。両面ともに丁寧な微細剥離により整形され、基部は平基無茎である。長さ3.5㎝、幅1.5㎝、厚さ0.5㎝で重さ1.8ｇ。9は黒曜石製剥片で、28号竪穴住居跡出土である。微細剥離は見られない。長さ2.2㎝、幅1.3㎝、厚さ0.2㎝で重さ0.5ｇ。これら2点は竪穴住居跡からの出土であるが、弥生時代の所産の混入品であろう。（坂元）

第4節　古墳時代の遺構と遺物

1．古墳時代の遺構と出土土器

1）竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版2、第9図）

調査区北東隅に位置し、東を3号竪穴住居跡に切られる。住居北側は調査区外にあたり、南側半分のみ検出できた。プランは長方形で、主軸方向はN 25°Wである。規模は長軸残存長3.25 m、短軸残存長1.93 m、遺構面からの深さは30 cmを測る。カマドは、住居東側南壁にかかる部分で片袖のみ確認された。住居南西隅に炭の広がる部分が認められる。住居覆土は上層が黒褐色砂で、蛸壺を中心に土器が出土する。

カマド（第9図）

住居自体が調査区外に及ぶと共に3号竪穴住居跡に切られており、粘土塊も調査区北壁際での部分的な検出で、更に調査区外に及んでいるため、この粘土塊を完全にカマドとみなすのに必ずしも十分な条件は整っていない。その為、カマドと異なる可能性も考慮しなければならないが、周辺の覆土中に非常に多量の炭粒や焼土を含み、粘土塊自体も被熱することからカマドの一部である可能性が高いと思われる。ただいずれにしても、主軸や燃焼部の位置など住居内での詳細な位置関係等は、想定し難い。壁体は、ブロック状の粘土が主体で強固である。（坂元）

出土土器（図版20、第10・11図）

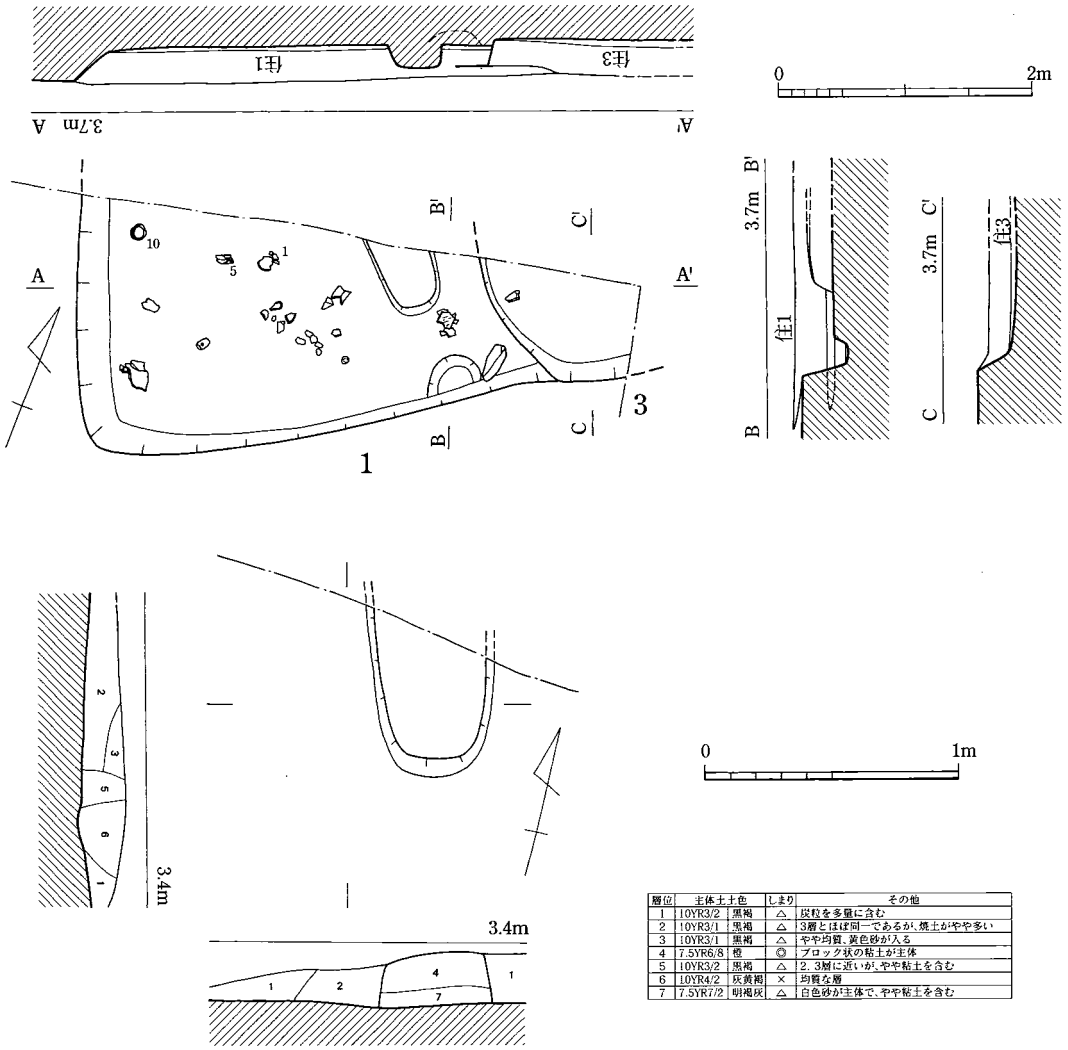
1は直口壷。外面口縁部に集中して煤が付着。2・3は二重口縁壷。2は波状沈線を施し、肩部に薄くタタキ痕が残る。4は山陰系の直口壷の肩部以下か。肩部に一条沈線。5は小型精製器種の直口壷。外面胴部半周にわたり黒斑がみられる。6は在地系甕の口縁か。7は布留系甕。全体に煤付着。8・9は高杯破片。8は杯部、9は脚部。穿孔が二箇所残る。10は鉢形の小型丸底壷。11は脚付鉢の脚部。12は小型器台の受部。13は山陰系鼓形器台。ミガキの単位が太い。14～23は蛸壺。14・15はやや小型。16は二次被熱で赤変。20は穿孔部分が残っていない。

2号竪穴住居跡（図版2、第12図）

調査区北東に位置し、住居南は近世の溝4に切られる。プランは西側に広がる隅丸方形で、主軸方向はN 8°Eである。規模は長軸3.28 m、短軸3.05 m、遺構面からの深さは31 cmを測る。住居北東隅にカマドが作られる。住居覆土は上層が黒褐色土のレンズ状堆積であり、残りの良い土器が多く出土する。下層はにぶい黄色土である。床面は住居北東部がとくにしまりが強い。また住居南で板石（第108図28）が出土しており、住居での使用が想定される。

カマド（第12図）

住居の北東隅近くに位置し、南西隅とのほぼ対角線軸に近い主軸をなし、煙道部がそのまま隅へと延びていたと考えられる。当初カマドと認識できず上部を削っており、下部が部分的にしか残存していない。そのため、直上から出土した甕はカマドに伴っていた可能性もある。ごく一部ではあるが非常に焼き締まっており燃焼部と考えられ、周囲の住居床面とほぼ同じ高さである。その近接した内部からは完形に近い鉢が伏せた状態で出土しており、被熱が激しくカマドの使用時から所在したものと思われる。壁体は、粘土主体で細砂を含む混合土により、わりと強固に構築される。（坂元）



層位	主体土土色	しまり	その他
1	10YR3/2	黒褐	△	炭粒を多量に含む
2	10YR3/1	黒褐	△	3層とほぼ同一であるが、焼土がやや多い
3	10YR3/1	黒褐	△	やや均質、黄色砂が入る
4	7.5YR6/8	橙	◎	ブロック状の粘土が主体
5	10YR3/2	黒褐	△	2、3層に近いが、やや粘土を含む
6	10YR4/2	灰黄褐	×	均質な層
7	7.5YR7/2	明褐灰	△	白色砂が主体で、やや粘土を含む

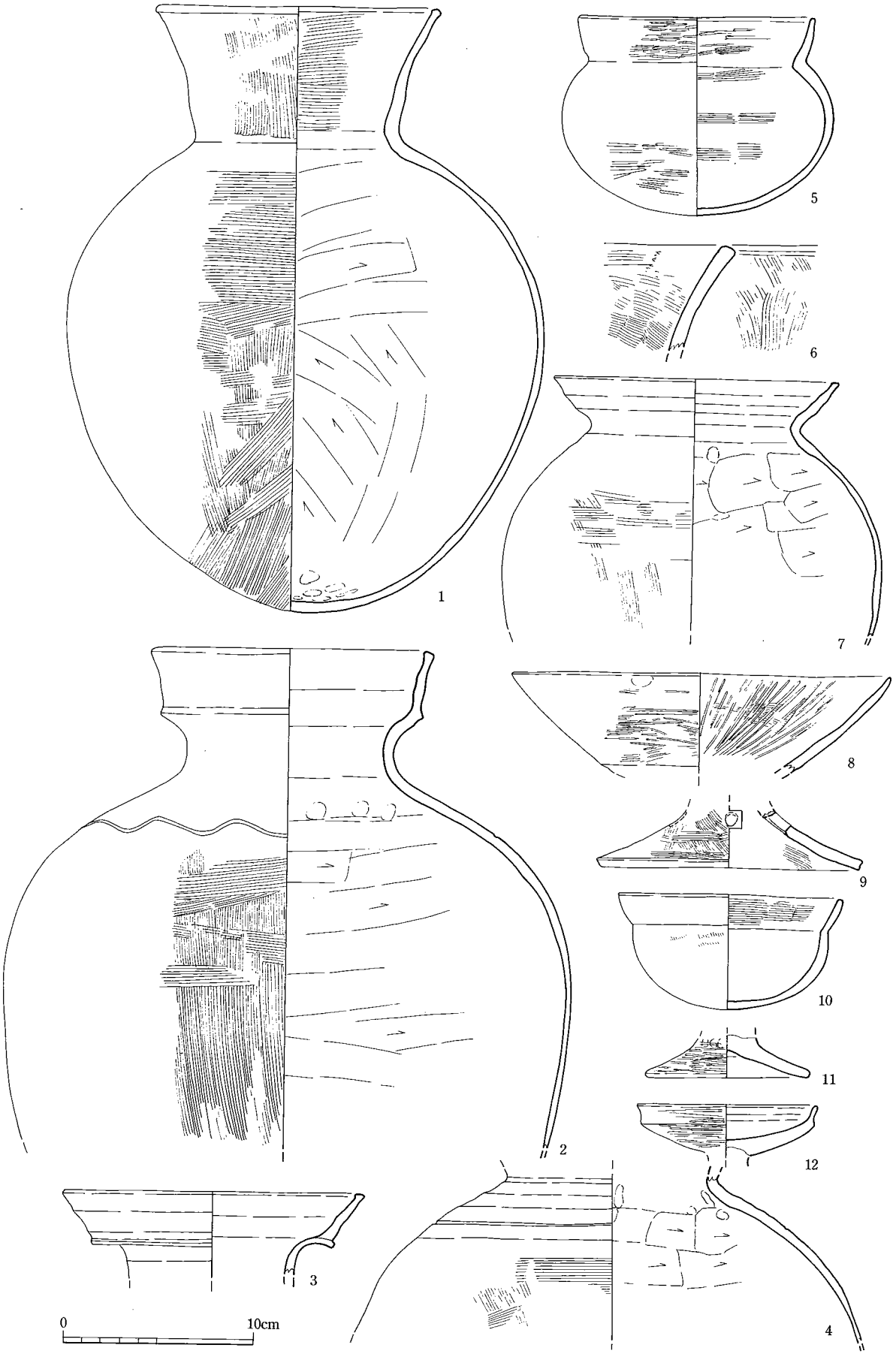
第9図　1・3号竪穴住居跡・1号住居跡カマド実測図（1/60、1/30）

出土土器（図版20、第13～15図）

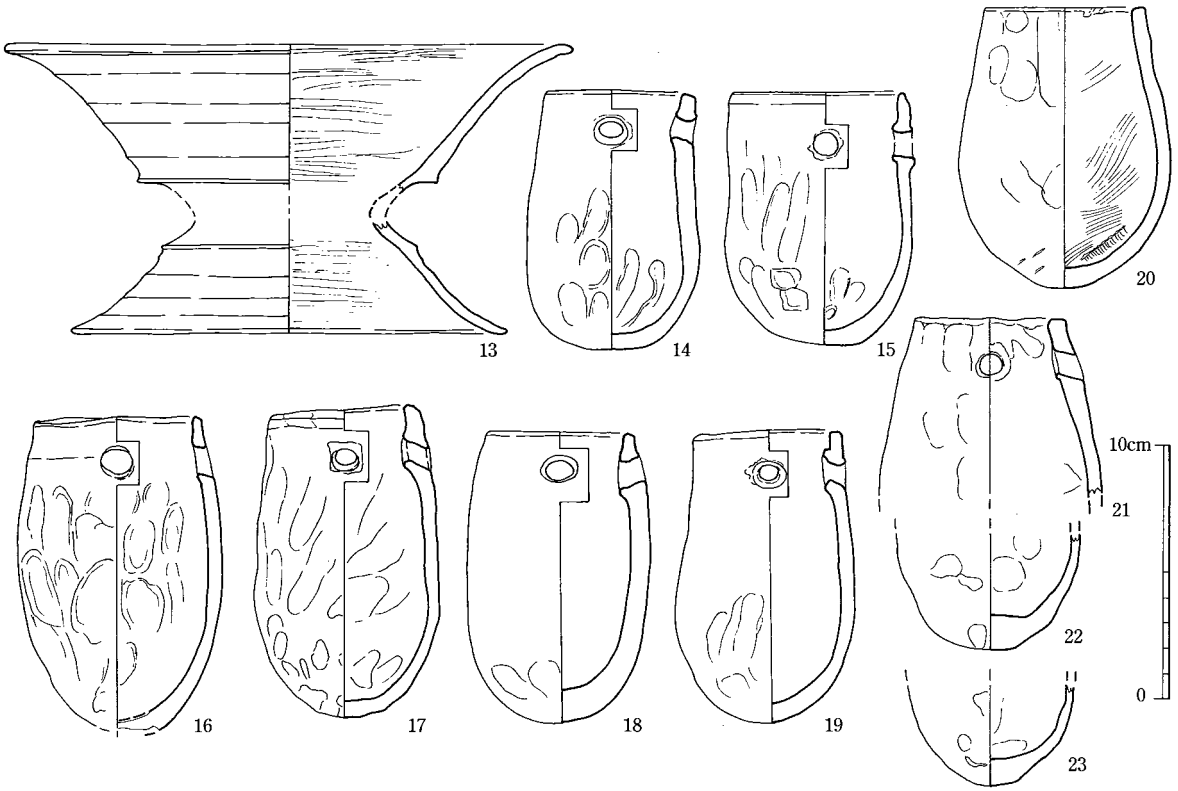
1～4は直口壷。1は胴部に粗いハケが残る。3はナデを複数回行う。4は口縁端部に平坦面を作り出す。5～9は山陰系二重口縁壷。5の外面調整は全体にタテハケを施し、肩部はヨコハケを行う。内面は焼成不良。6は肩の張らないタイプ。10は口縁が直立する吉備系の壷口縁。11～14は小型精製器種の直口壷。12は製作時に底部部分を乾燥させすぎており、製作単位がよく分かる。15～20は布留系の甕。21～25は高坏。21は摩滅が激しいが、赤彩が残る。穿孔は二箇所残る。本来三箇所か。26・27は埦。26は粗いミガキ。27は底部が凹む。28・29は小型丸底鉢。30・31は脚付鉢。32～34は小型器台。32は内面に指頭痕残る。35は半島系陶質土器。甕底部か。色調は暗灰褐色。焼成は堅緻。

3号竪穴住居跡（図版3、第9図）

調査区北東隅に位置し、1号竪穴住居跡を切る。住居南東隅部分のみ確認できた。プランは方形か。規模は長軸残存長1.15 m、短軸残存長0.9 m、遺構面からの深さは28 cmを測る。住居



第10図　1号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



第11図　1号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）

覆土は黒色砂で炭を多く含む。

出土土器（図版21、第16図）

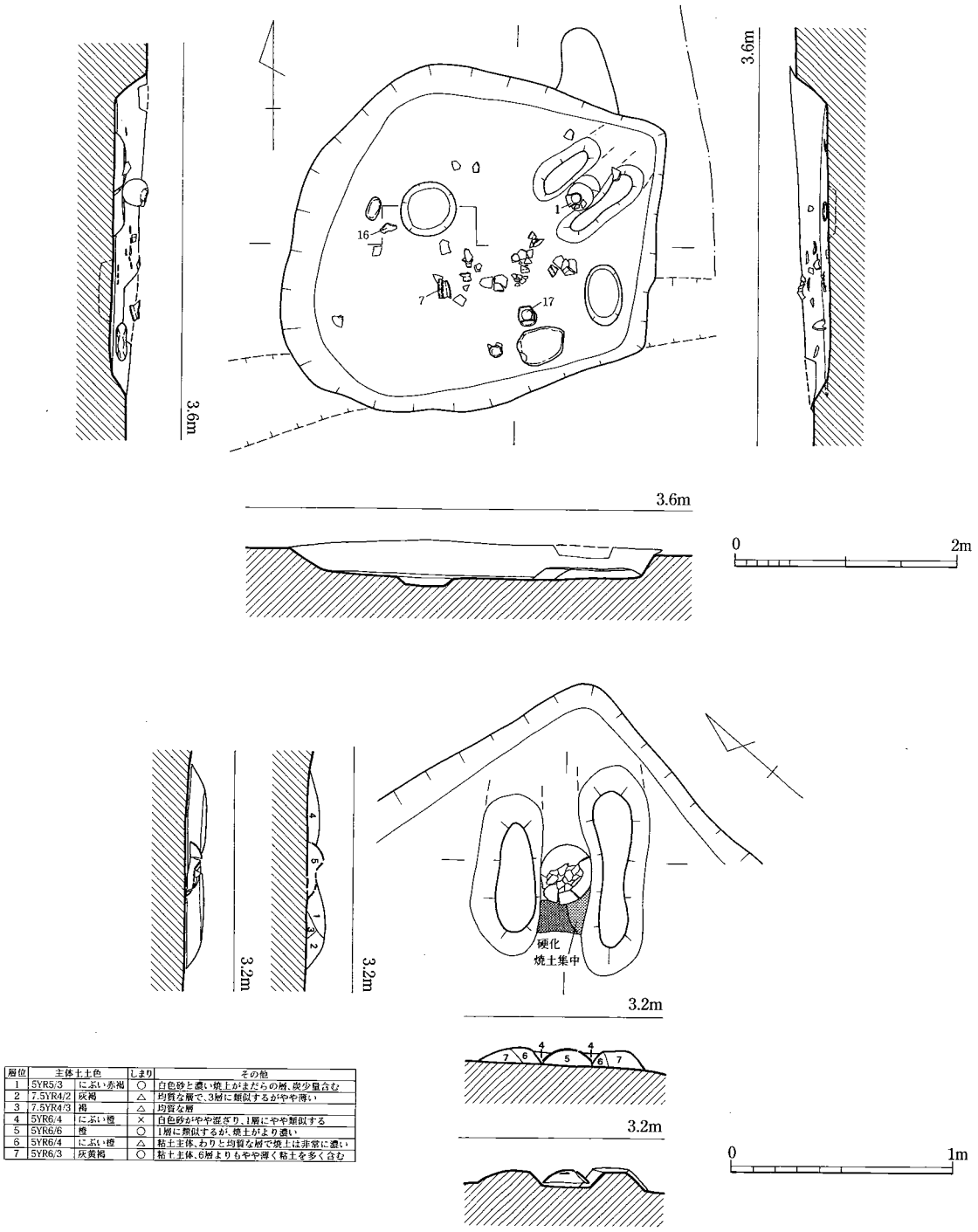
1～3は在地系の複合口縁壷。1は口縁。2・3は胴部、2は突帯に刻目を施す。4は直口壷。5・6は山陰系二重口縁壷。5は外面胴部に黒斑。7は在地系の甕。口縁外面に指オサエが残る。8・9は布留系の甕。10は高坏脚部。11は半島系陶質土器の無文短頸壷。6号竪穴住居跡・井戸出土破片と接合。色調は青灰～黒灰褐色。内面頸部から外面にかけて自然釉がかかる。調整は内外面ともヨコナデ。12は半島系陶質土器のタタキ文短頸壷。1・18号住・遺構面出土個体と接合。色調は黒褐色。断面は淡黄褐色。外面は細い平行タタキ後、螺旋状沈線を施す。外面胴下半以下は斜格子タタキ。内面はナデ、一部板状工具の擦痕が残る。底部付近の破片には擬口縁が残る。

4号竪穴住居跡（図版3、第17図4）

調査区北壁に接し、5号竪穴住居跡を切る。北壁は調査区外であるが、住居プランは整った方形を呈する。主軸方向はN 20°W。規模は長軸3.47 m、短軸残存長3.0 m、遺構面からの深さは50 cmを測る。住居南西に段を有する。住居覆土は二層に分かれ、上層は少量であるが土器片を含む暗褐色砂、下層は残りの良い土器を多く包含する黒褐色砂である。

出土土器（図版21、第18～22図）

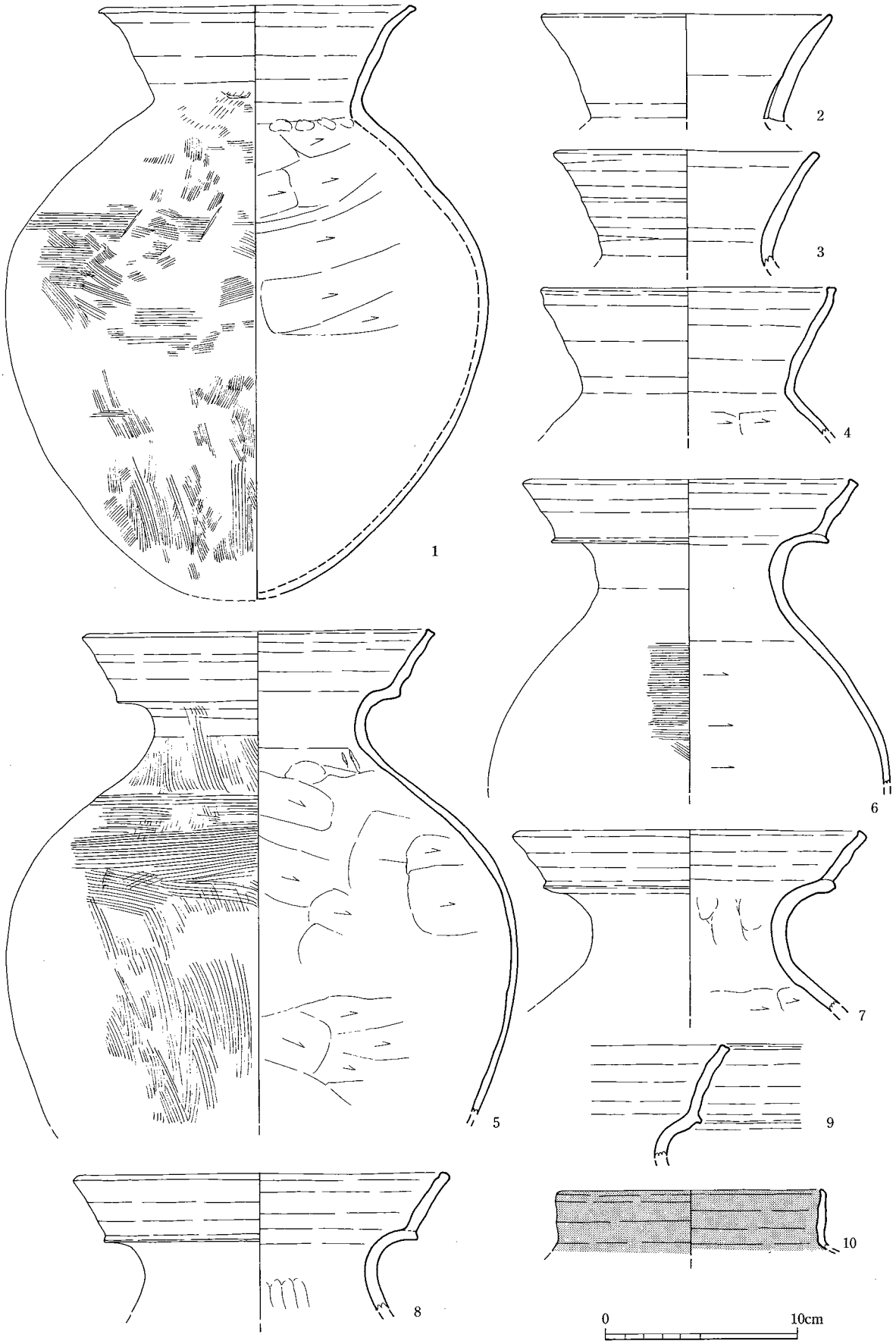
1～12は壷。1・2は畿内系直口壷。2は底部付近に指頭痕が残る。3は畿内系の広口丸底壷。内面に粘土の接合痕が残る。4～6は在地系複合口縁壷の破片。4は頸部と肩部の境の突帯。5は胴部下半の突帯。6は肩部の突帯。刻み目を施す。7は二重口縁壷の口縁。8～12は山陰系二



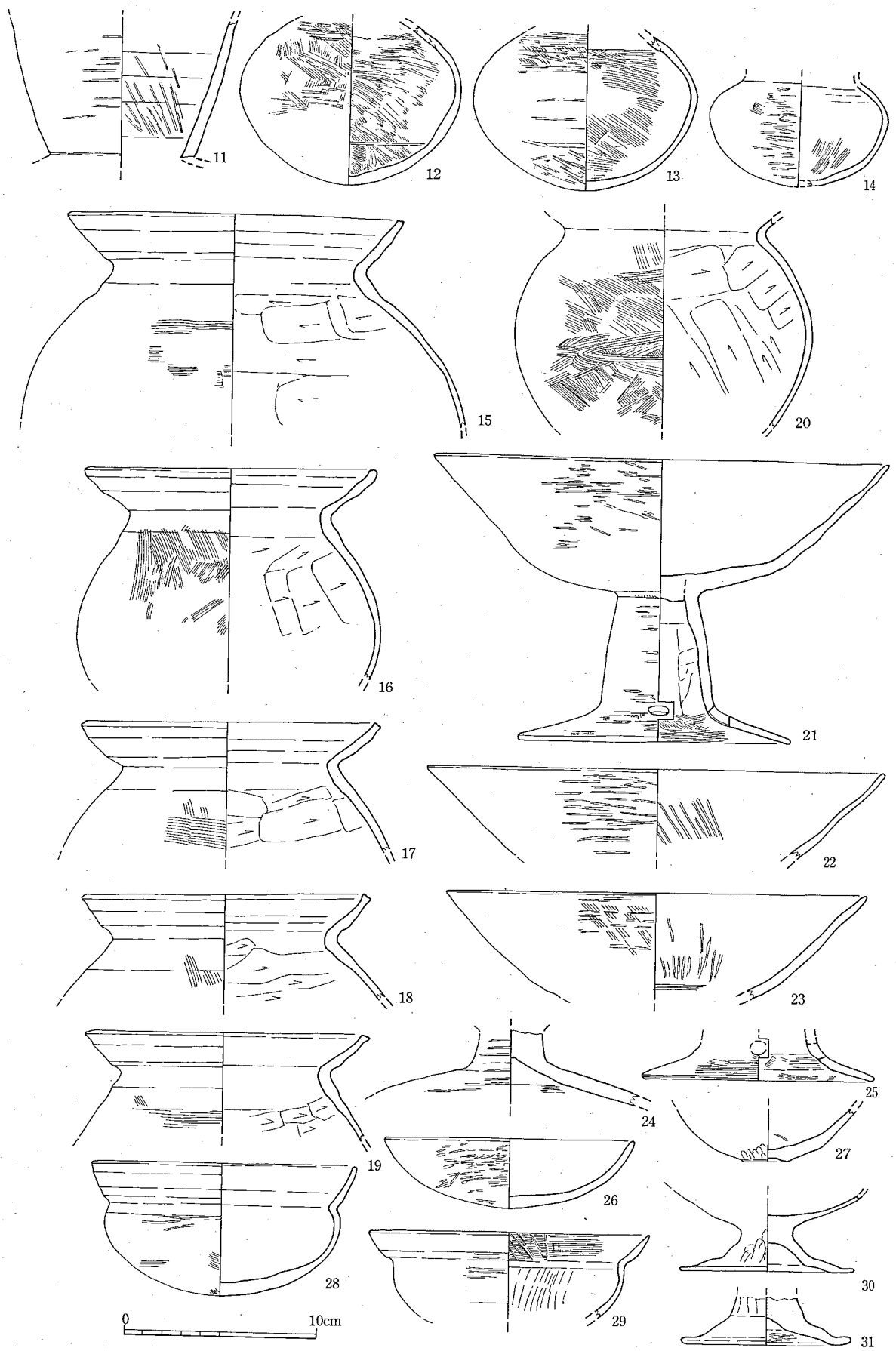
層位	主体土土色		しまり	その他
1	5YR5/3	にぶい赤褐	○	白色砂と濃い焼土がまだらの層、炭少量含む
2	7.5YR4/2	灰褐	△	均質な層で、3層に類似するがやや薄い
3	7.5YR4/3	褐	△	均質な層
4	5YR6/4	にぶい橙	×	白色砂がやや混ざり、1層にやや類似する
5	5YR6/6	橙	○	1層に類似するが、焼土がより濃い
6	5YR6/4	にぶい橙	△	粘土主体、ねりと均質な層で焼土は非常に濃い
7	5YR6/3	灰黄褐	○	粘土主体、6層よりもやや薄く粘土を多く含む

第12図　2号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）

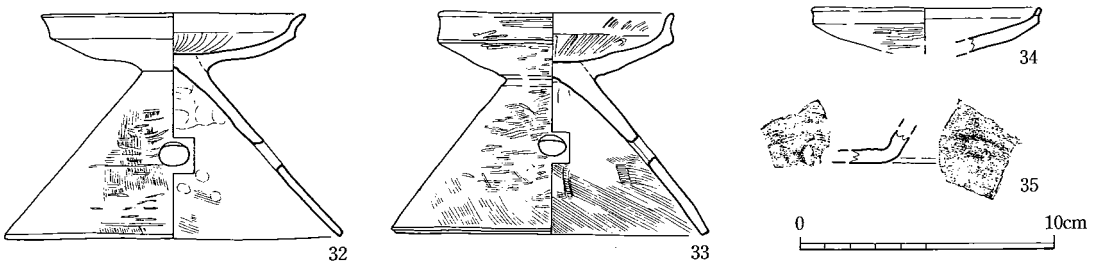
重口縁壷。8・9は頸部が短いタイプ。10は頸部に綾杉文を施す。13～18は小型の壷。13・14は短頸壷。内外面はハケ調整、口縁部のみミガキ。15は山陰系の小型二重口縁壷。16～18は広口壷。19～23は精製品の小型丸底壷。24は在地系の甕口縁破片。25～49は布留系の甕。27は外面に吹き零れた痕跡が残る。33・38は一条沈線、34・35・37・39は波線をめぐらす。50～53は高坏。53は畿内系高坏の脚部。穿孔は3箇所。54～58は埦。54は手づくね。内面は



第13図　2号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



第14図　2号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）



第15図　2号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）

工具によるナデ。55は内外ともナデ。57は歪みが激しく、楕円形に近い。内面に圏線状の黒斑。外面はケズリ後ナデ、内面は指ナデ後ケズリ。59は精製器種の屈曲口縁鉢。外面底部付近はケズリ後ミガキ、口縁～内面はヨコナデ後ミガキ。60～62は脚付鉢。62は埦部内面は摩滅、外面は煤が付着。63～65は蛸壺。66は半島系陶質土器。器種は特定できない。細片の為、傾きに不安が残る。色調は暗灰褐色。焼成は堅緻、混和材は非常に少ない。調整は内外面ともヨコナデ。暗灰褐色。67は半島系瓦質土器の甑把手。灰褐色、焼成は良好。煤が付着する。

5号竪穴住居跡（図版3、第17図5）

調査区北壁に接し、中央を4号竪穴住居跡に切られている。住居西側3分の1および東南隅部分が検出できた。プランは方形で、主軸方向はN2°Eである。規模は長軸4.35 m、短軸残存長2.38 m、遺構面からの深さは29 cmを測る。住居覆土は暗灰黄色で、炭化物粒が微量含まれる。住居南西隅に炭が集中する。また、住居南壁で4号住に切られる部分に黒褐色砂のピットがあり、炭化物の細粒が微量含まれ、炉の可能性もある。

出土土器（図版22、第23図1～13）

1は山陰系二重口縁壷口縁。2～4は布留系の甕。2は一条沈線を施す。5～8は高坏。坏部。9は埦。10・11は低脚鉢。12・13は小型器台の脚部。12は穿孔が二箇所残る。13は外面ナデ。

6号竪穴住居跡（図版3、第17図6）

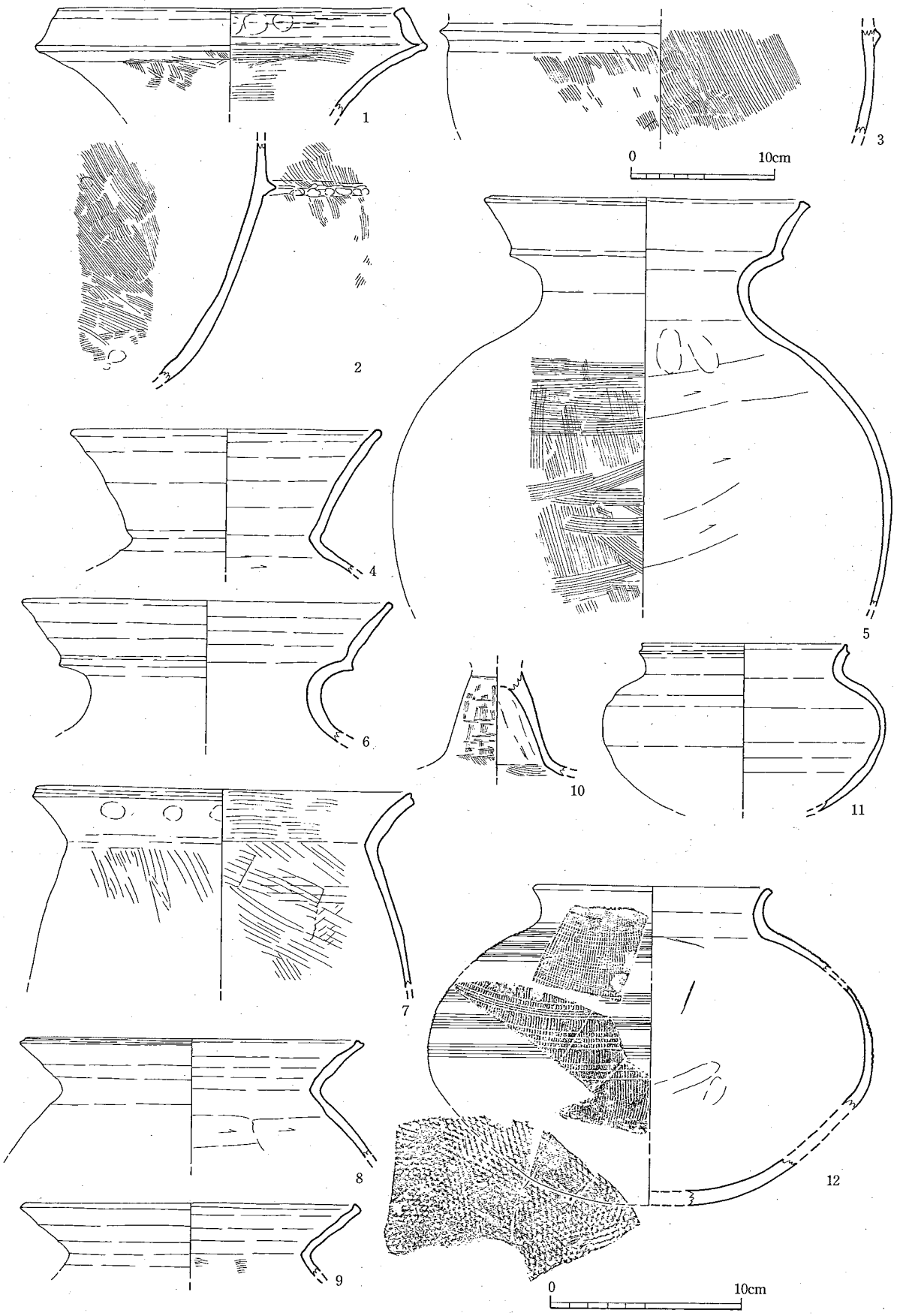
調査区北東に位置し、9号竪穴住居跡を切る。プランは北西隅がやや乱れるが、南北に長軸をとる長方形である。主軸方向はN 11°W。規模は長軸2.95 m、短軸2.31 m、遺構面からの深さは17 cmを測る。当調査区内では比較的小型の住居である。中央やや東に炉を持つ。覆土は黒褐色で、全体に炭化物粒が混じる。

出土土器（図版22、第23図14～21）

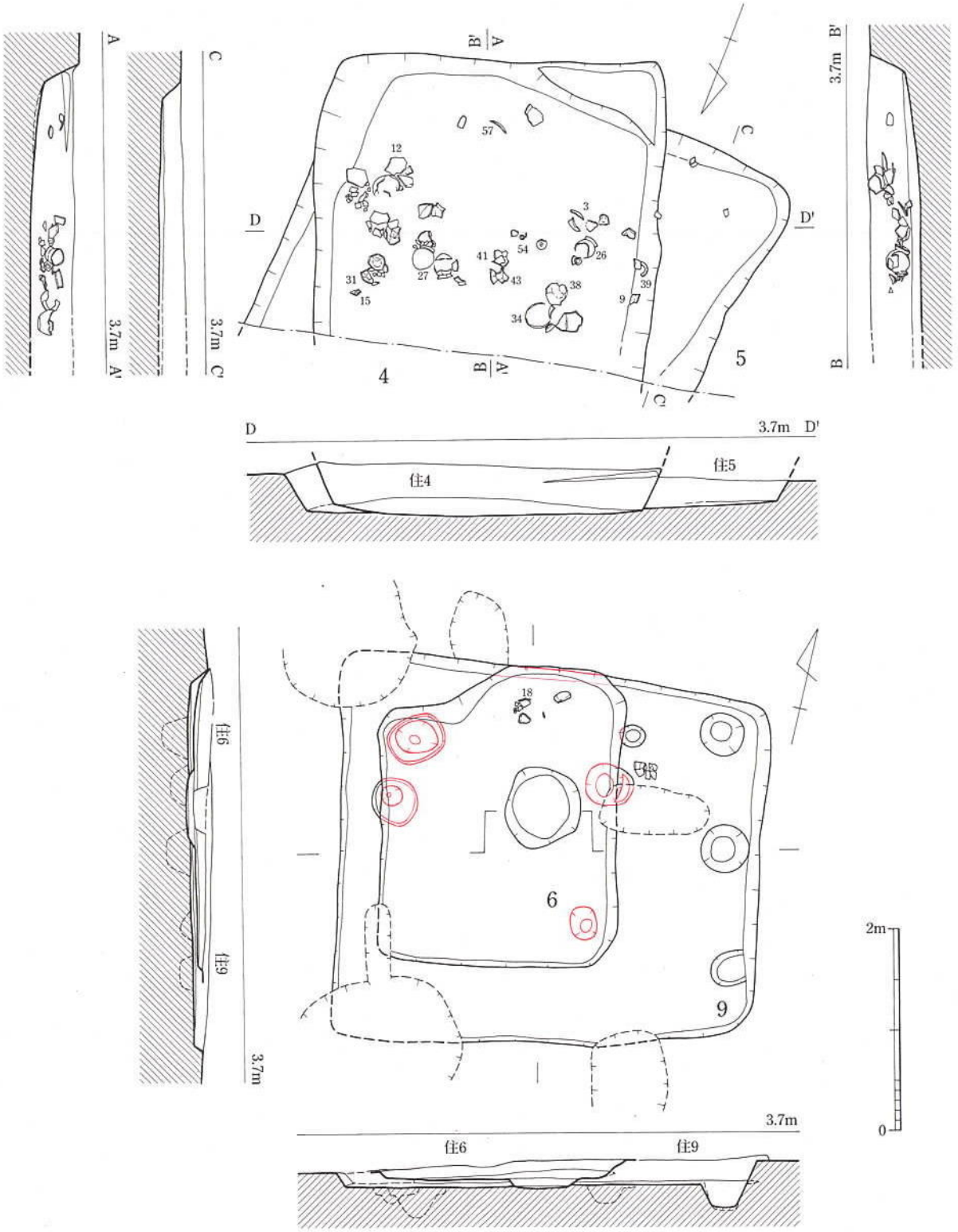
14は在地系甕の口縁。15は布留系の甕。16～18は埦。16は外面摩滅。全体に被熱を受ける。19は小型丸底鉢。外面は明瞭でないが横ミガキ。20は鼓形器台破片。21は小型器台の脚部。

7号竪穴住居跡（図版4、第24図7）

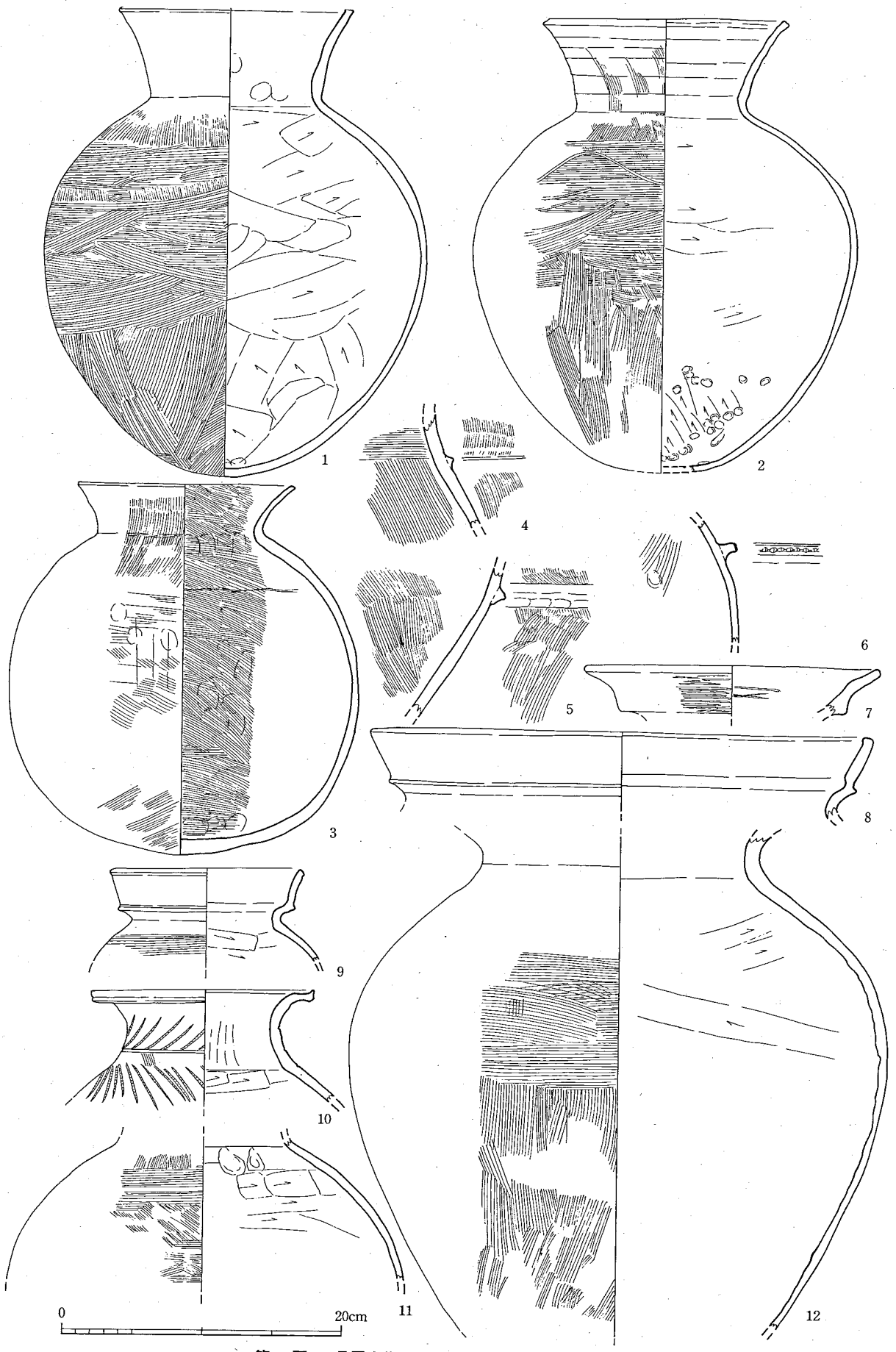
調査区北西隅に位置し13号竪穴住居跡を切るが、大半は調査区外で、住居南西部が検出された。プランは整った長方形で、主軸方向はN 9°Wである。規模は長軸残存長3.15 m、短軸残存長1.76 m、遺構面からの深さは26 cmを測る。住居北東に焼土の分布する範囲があり、炉跡と考



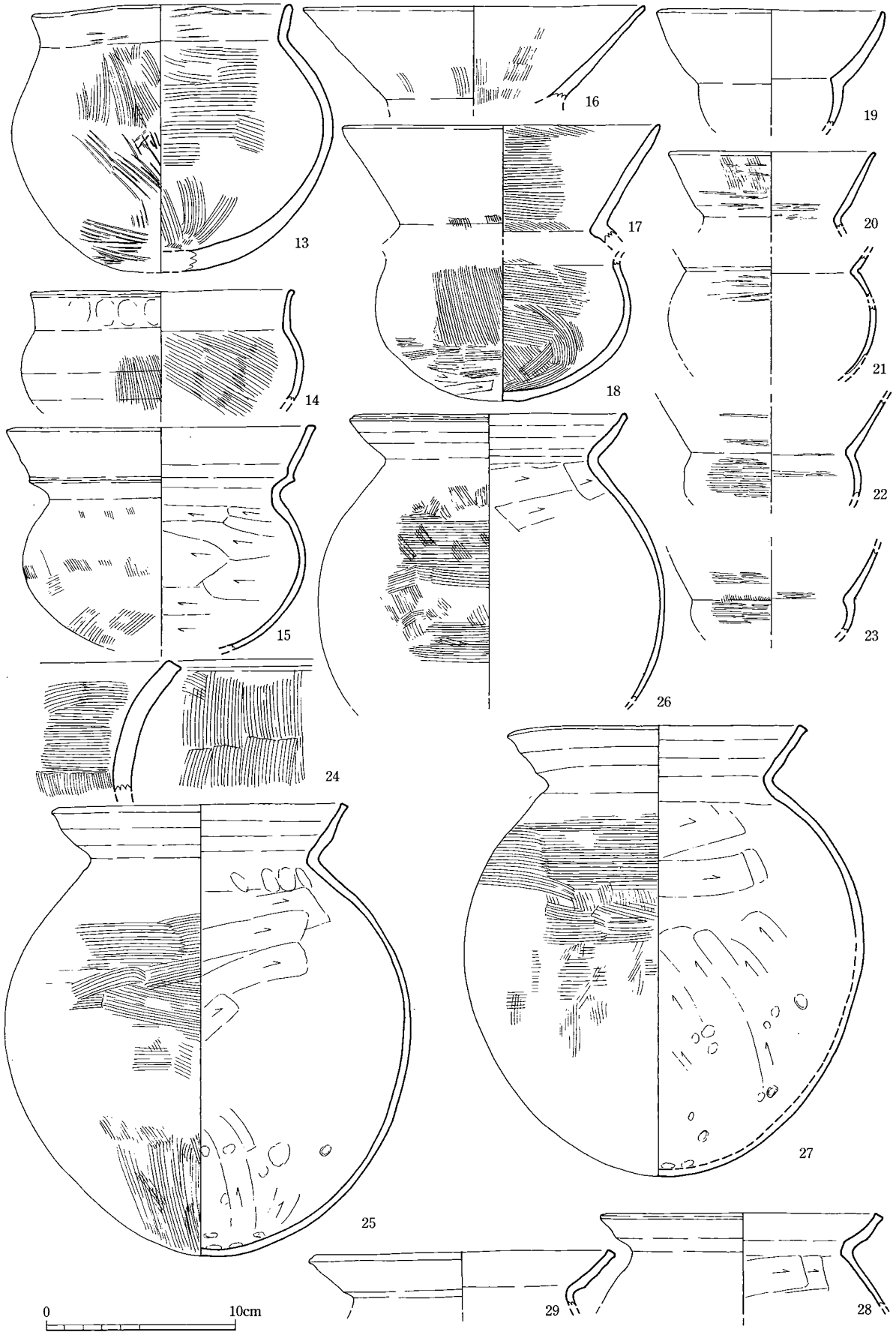
第16図　3号竪穴住居跡出土土器実測図（1～3は1/4、他は1/3）



第17図　4～6・9号竪穴住居跡実測図（1/60）

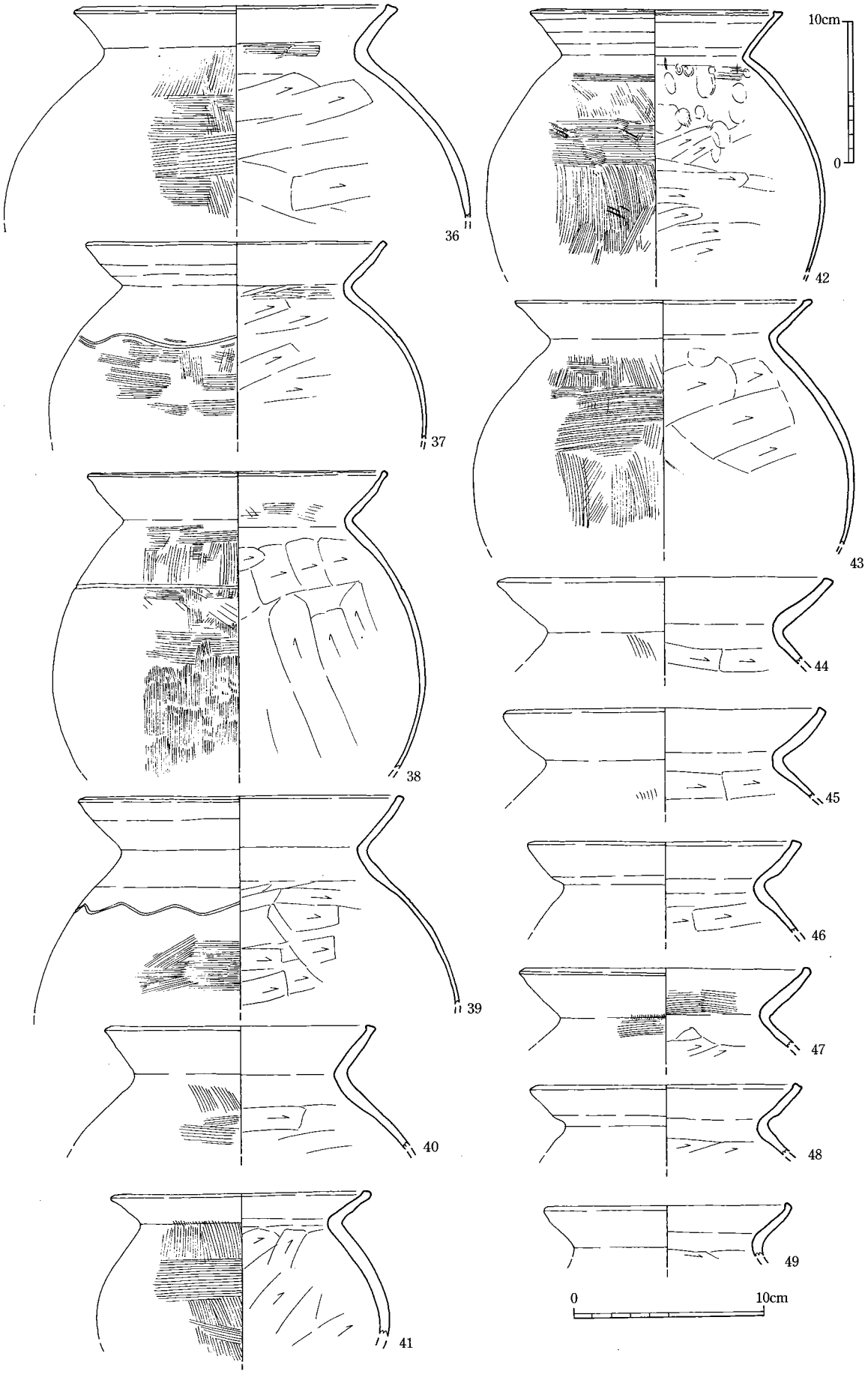


第18図　4号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）

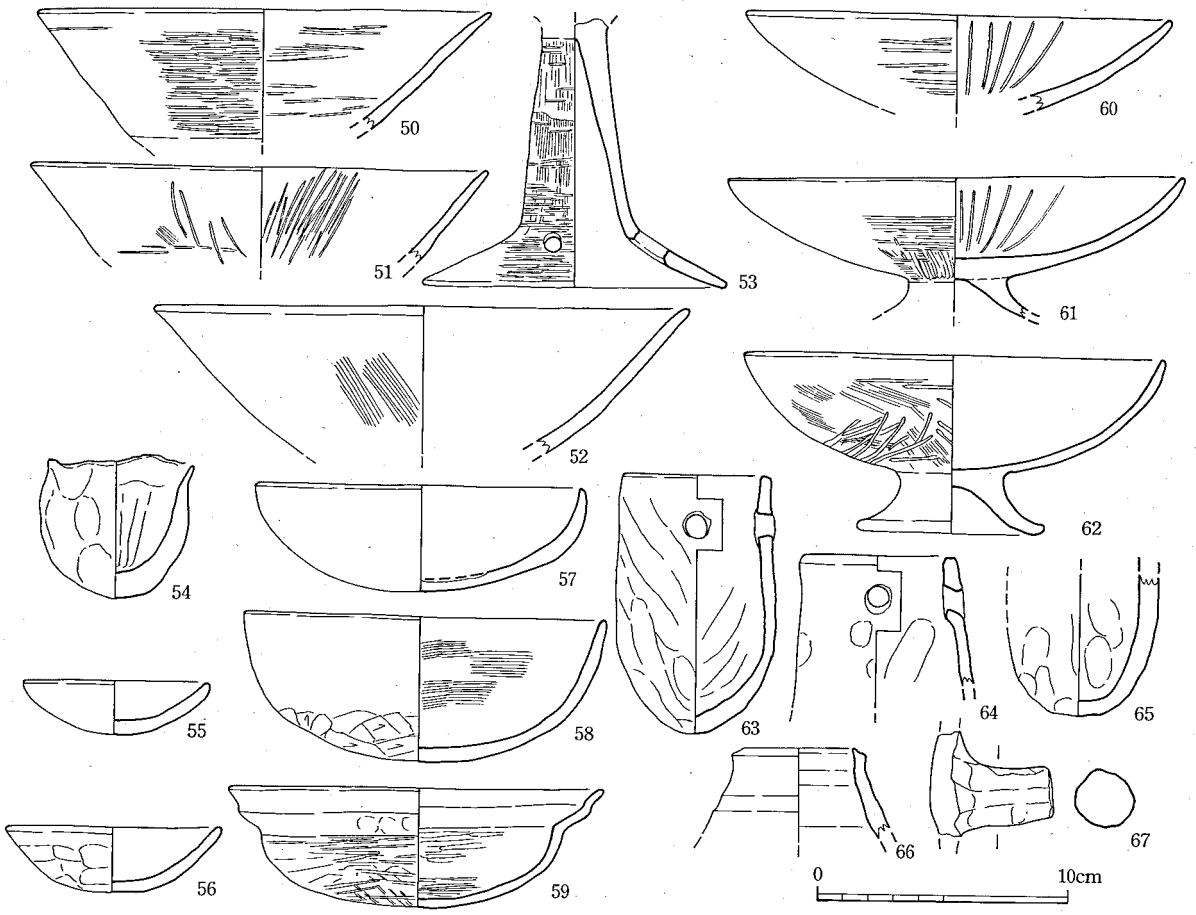


第19図　4号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）

第20図　4号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）



第21図　4号竪穴住居跡出土土器実測図④（42は1/4、他は1/3）



第22図　4号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（1/3）

えられる。東壁側より土器が出土している。

出土土器（図版22、第25図）

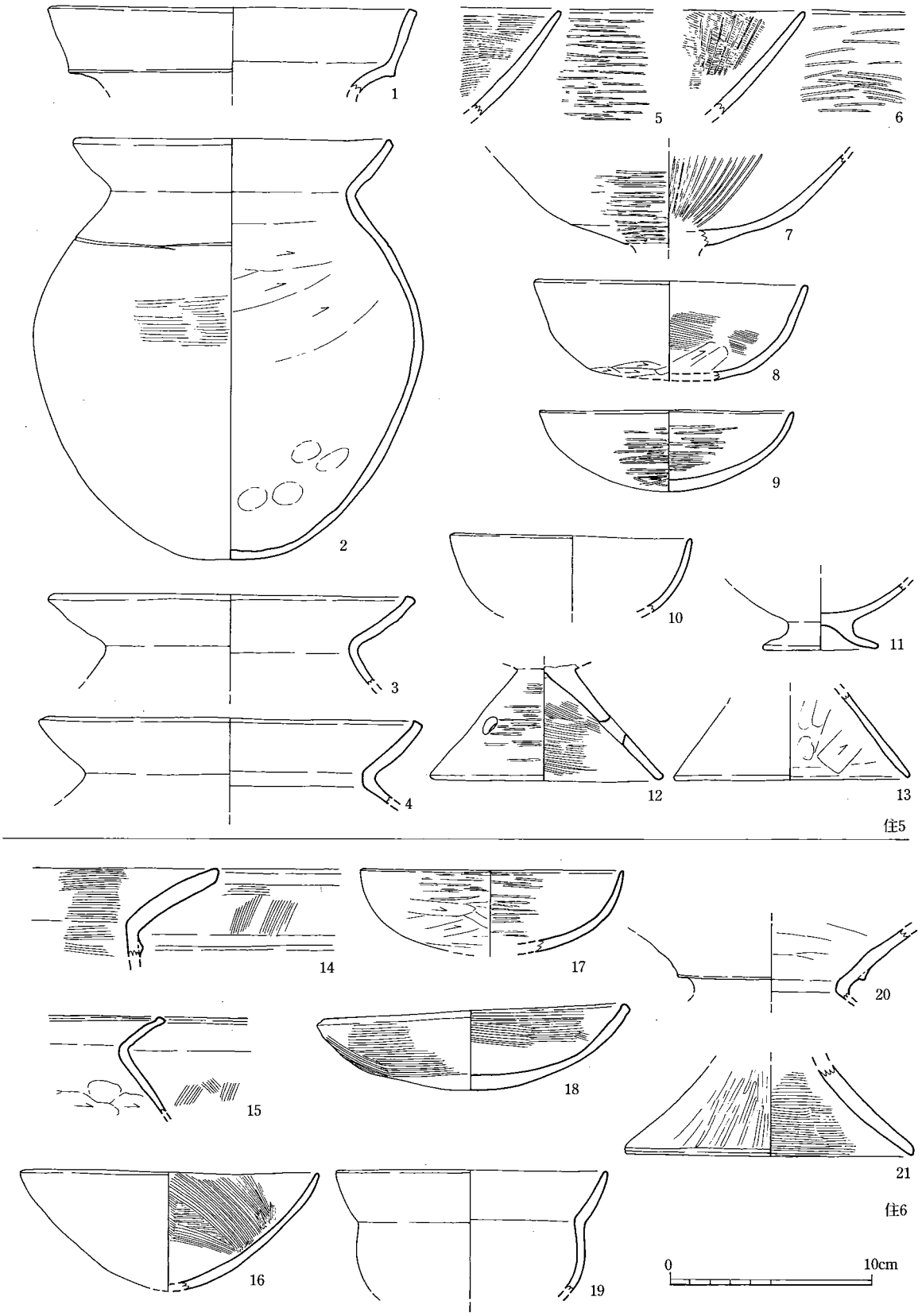
1は山陰系二重口縁壷。2・3は在地系の甕。2は外面タタキ後、粗いタテハケ。口縁部付近はヨコナデ後指ナデ。内面は底部付近はハケ後指ナデ、胴部はナナメタテハケを行い、口縁部は横ハケ後指オサエ。底部に焼成後の穿孔。全体に煤が付着。3は外面口縁部はナデ。4は高坏脚部。穿孔は1箇所のみ残る。

8号竪穴住居跡（図版4、第24図8）

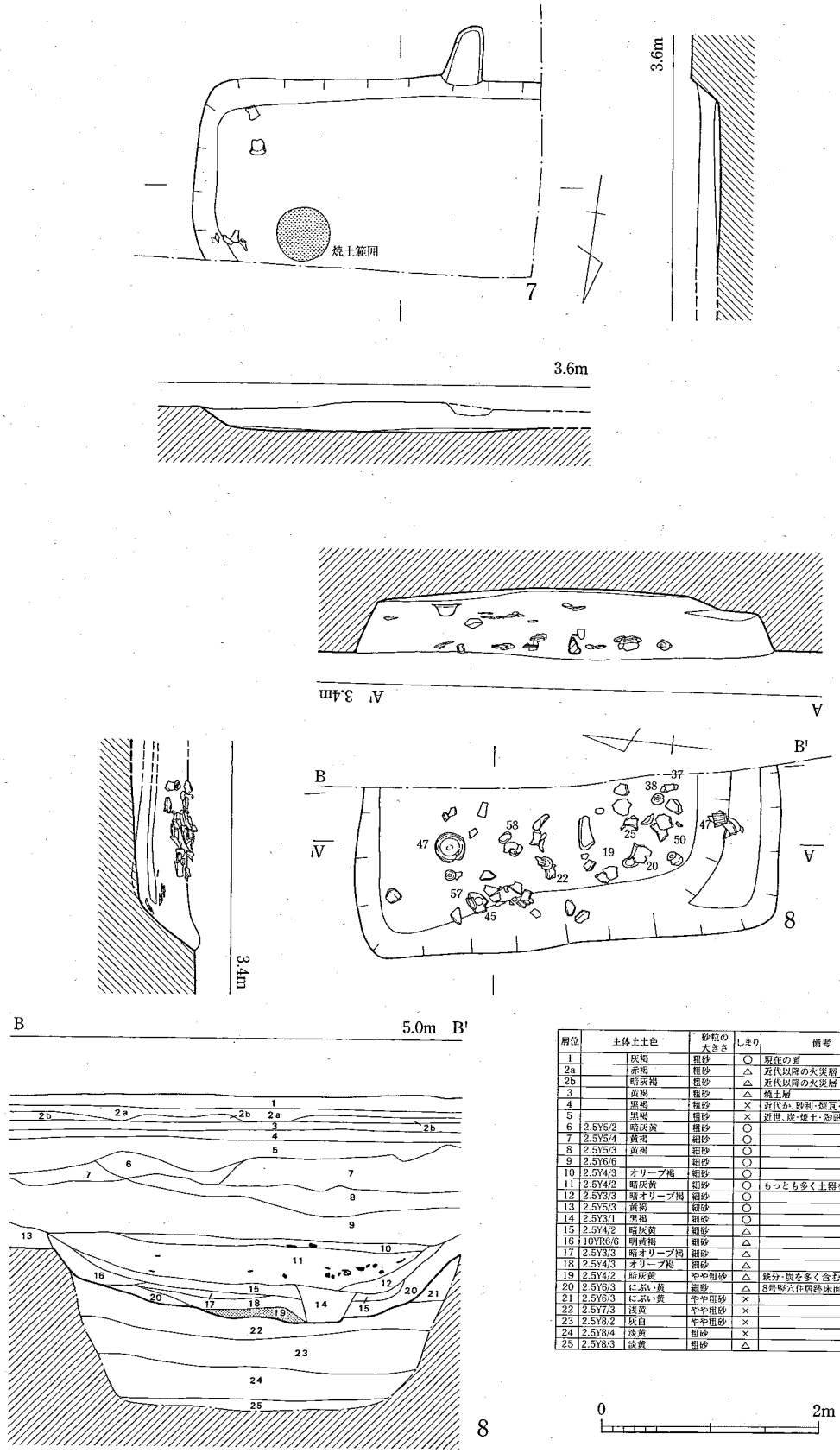
調査区東壁中央やや北寄りに位置する。住居東側の大半は調査区外であるが、プランは長方形を呈し、主軸方向はN 10° Wである。規模は長軸3.88 m、短軸残存長1.43 m、遺構面からの深さは63 cmを測る。南側に段が作られる。炉跡は平面では確認できなかったが、第19層が炭を多く含むことから、炉跡と考える。上層では土器が集中して廃棄されているほか、住居床面で鉢一点がほぼ完形で出土している。

出土土器（図版22・23、第26～30図）

1は在地系複合口縁壷の頸部。2は広口壷、口縁部。3は直口壷口縁。4～9は二重口縁壷。4は肩部に4条の沈線を施す。10は二重口縁壷の肩部か、ハケ後に竹管文が施される。11・12は

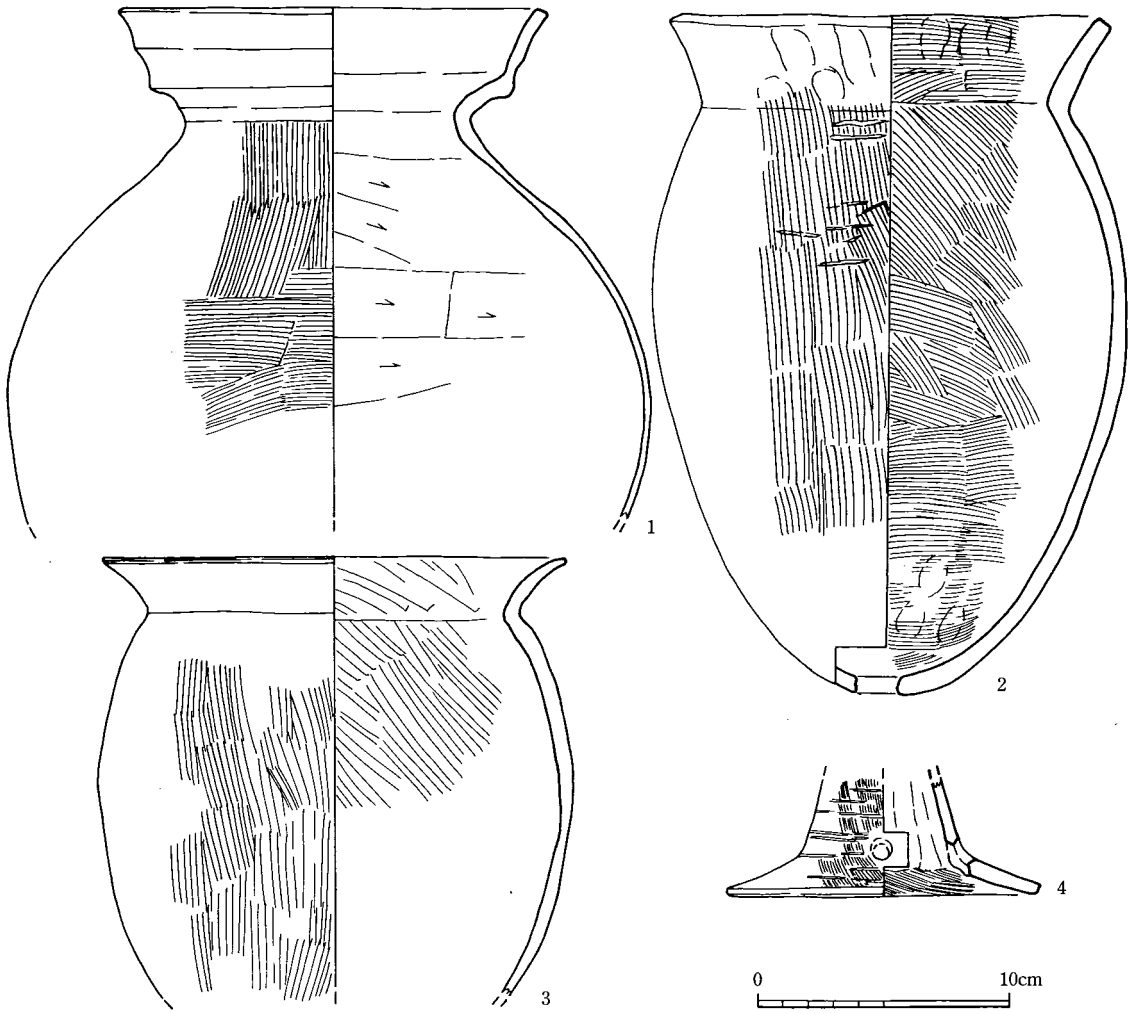


第23図　5・6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



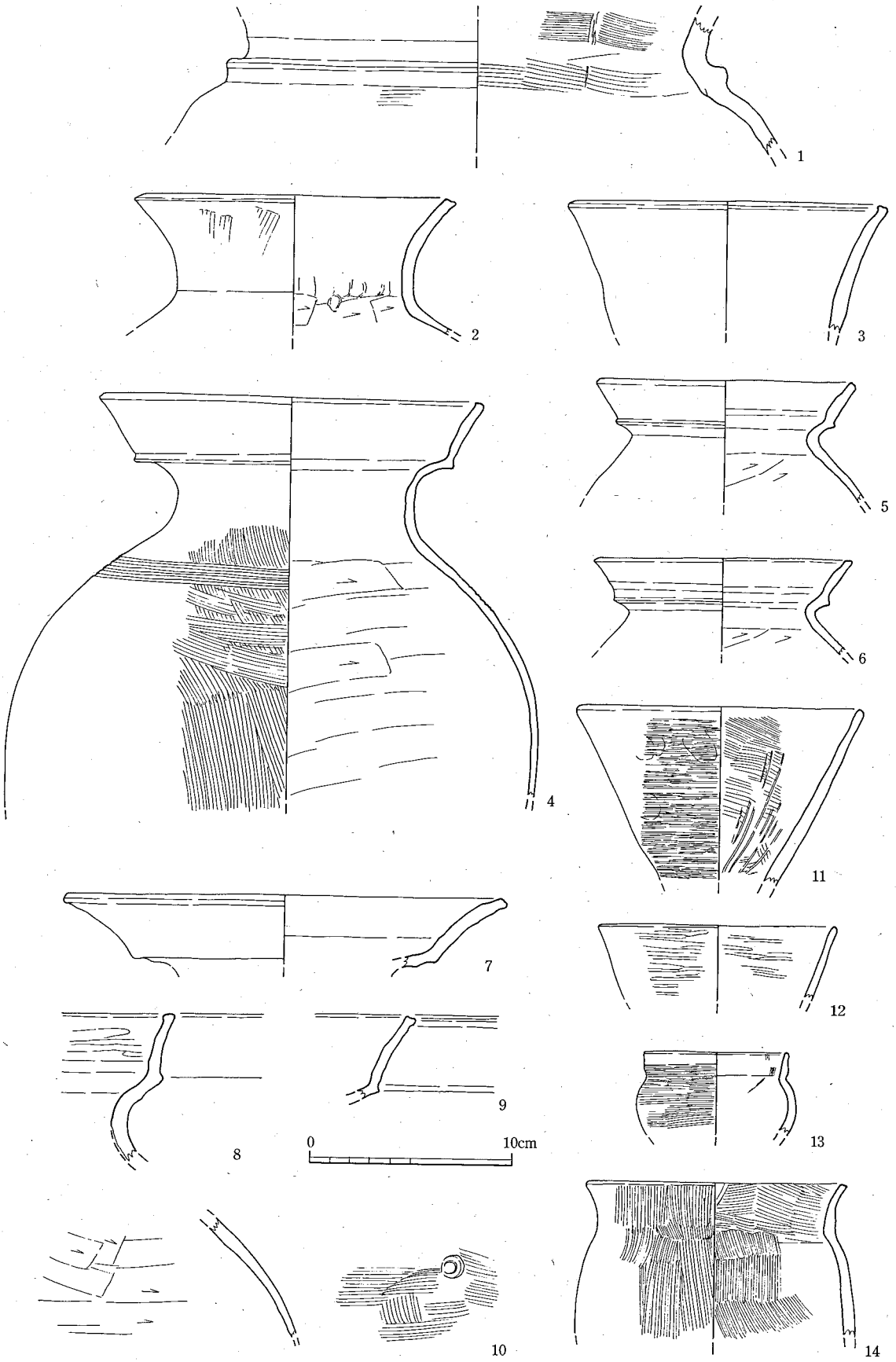
層位	主体土土色		砂粒の大きさ	しまり	備考
1		灰褐	粗砂	○	現在の面
2a		赤褐	粗砂	△	近代以降の火災層
2b		暗灰褐	粗砂	△	近代以降の火災層
3		黄褐	粗砂	△	焼土層
4		黒褐	粗砂	×	近代か、砂利・焼瓦・瓦を含む
5		黒褐	粗砂	×	近世、炭・焼土・陶磁器を含む
6	2.5Y5/2	暗灰黄	粗砂	○	
7	2.5Y5/4	黄褐	細砂	○	
8	2.5Y5/3	黄褐	細砂	○	
9	2.5Y6/6		細砂	○	
10	2.5Y4/3	オリーブ褐	細砂	○	
11	2.5Y4/2	暗灰黄	細砂	○	もっとも多く土器を含む
12	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	細砂	○	
13	2.5Y5/3	黄褐	細砂	○	
14	2.5Y3/1	黒褐	細砂	○	
15	2.5Y4/2	暗灰黄	細砂	△	
16	10YR6/6	明黄褐	細砂	△	
17	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	細砂	△	
18	2.5Y4/3	オリーブ褐	細砂	△	
19	2.5Y4/2	暗灰黄	やや粗砂	△	鉄分・炭を多く含む
20	2.5Y6/3	にぶい黄	細砂	△	8号竪穴住居跡床面
21	2.5Y6/3	にぶい黄	やや粗砂	×	
22	2.5Y7/3	浅黄	やや粗砂	×	
23	2.5Y8/2	灰白	やや粗砂	×	
24	2.5Y8/4	淡黄	粗砂	×	
25	2.5Y8/3	淡黄	粗砂	△	

第24図　7・8号竪穴住居跡実測図・8号竪穴住居跡東壁土層断面図（1/60）

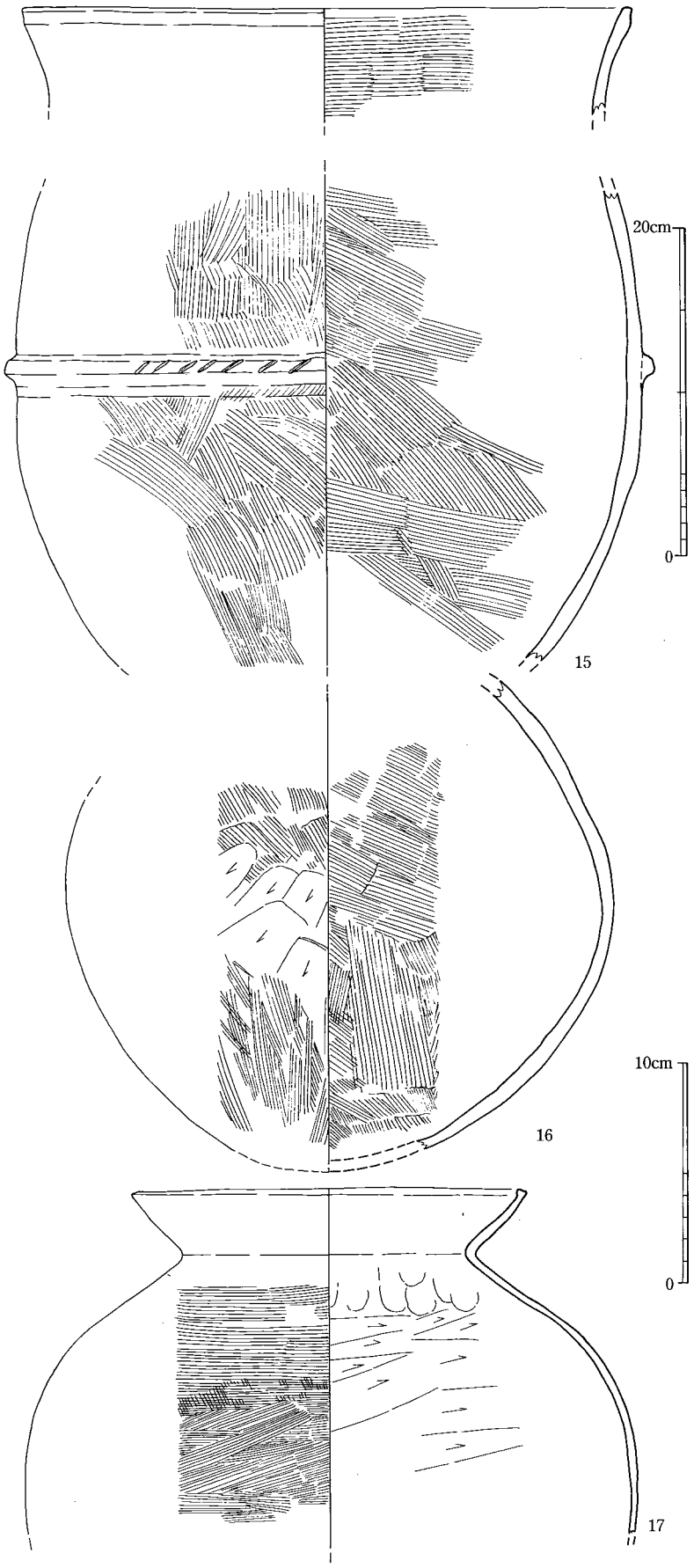


第25図　7号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

小型精製器種の直口壷。13は小型精製器種、短頸壷。14はやや小型の在地系の甕。外面被熱。15は在地系の甕。胴部突帯には刻目を施す。16は畿内Ⅴ様式系の甕胴部。17はやや肩が張る器形であるが、布留系の甕か。18～30は布留系甕。20は3条、21は4条の沈線を、18・19・22・28・30は櫛描の波状文を施す。19は内面指ナデ痕が良く残る。30は内面に赤色顔料の飛沫。31は吉備系の甕。内面ケズリ。32～38は高坏。32～35は坏部。35は腰が折れ、口縁が外に開かない。36～38は脚部。39～43は椀。40は底部に凸部がある。41～43は調整はミガキ。44・45は大型の椀。44は外面板状工具によるナデ、口縁部は指オサエ。45は内外ともケズリ後ナデ。46・47は鉢。46は内外面調整はハケ後ナデ。47は8号住床面より出土。土器中央が内側より穿孔されている。内面底部付近にはミガキ。48・49は小型丸底鉢。50は脚付鉢 。脚部接合部に凹部が作られる。51は小型精製器種の脚付鉢。52～55は小型器台。52は脚部に穿孔が6箇所確認できる。56は在地系器台。57～60は蛸壺。59は穿孔部分が残っていない。61～63は半島系土器。61は半島系軟質土器、両耳付壷か。小片のため、復元径には不安が残る。色調は淡黄茶褐色。外面はナデ。内面はケズリ。耳は1つのみ残り、穿孔は上から行う。長石・雲母を含み、胎土は在地のものと変わらない。類例に西新町遺跡第12次住21-79がある。62は半島



第26図　8号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



第27図　8号竪穴住居跡出土土器実測図②（15は1/4、他は1/3）

系軟質土器の甑底部。淡黄褐色。穿孔は外面から行う。63は半島系軟質土器の甑把手。黄灰褐色。調整はナデ。

9号竪穴住居跡（図版4、第17図9）

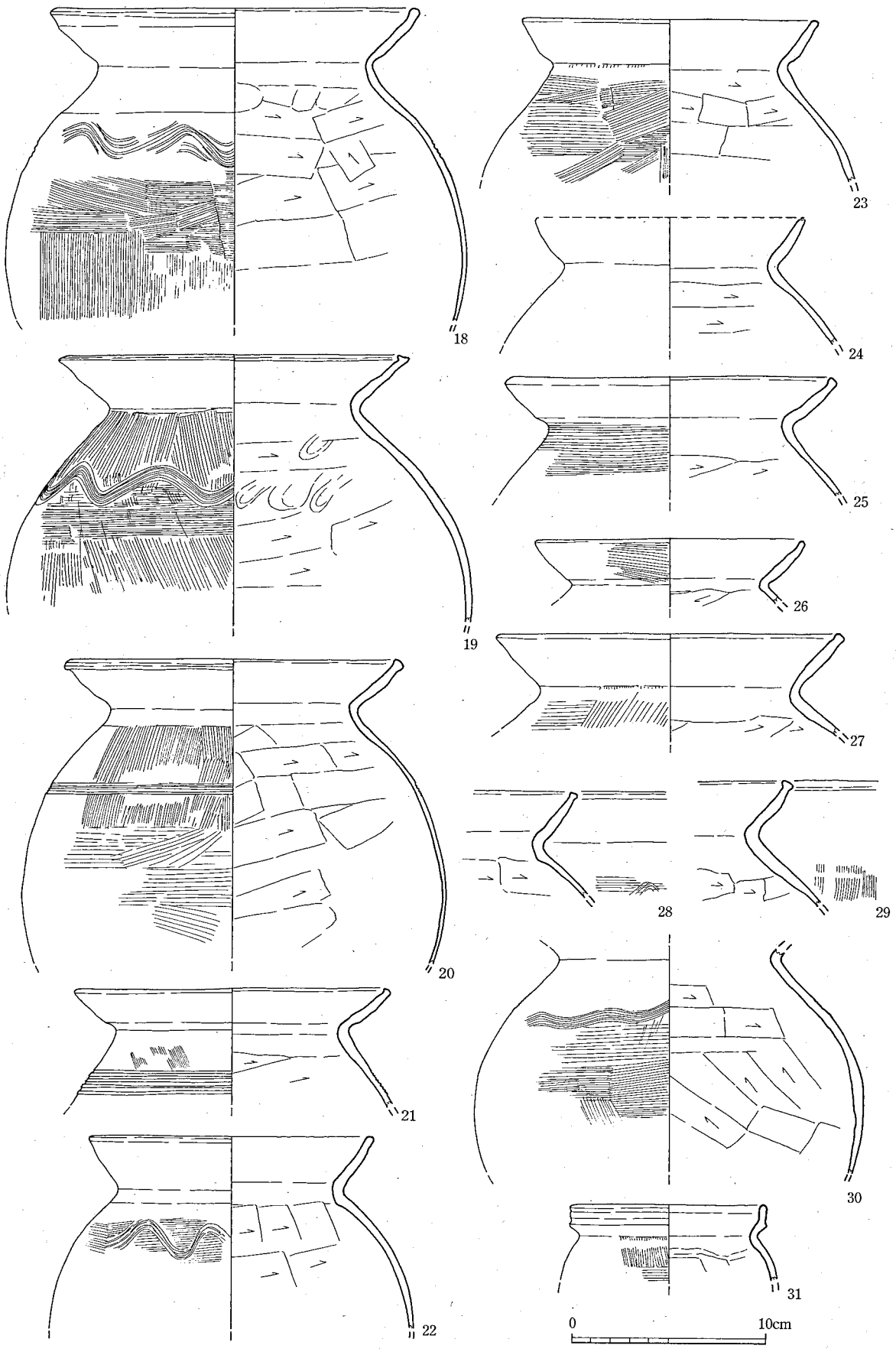
調査区北東に位置し、6号竪穴住居跡に切られる。住居のプランは整った長方形であり、主軸方向はN 10°W。規模は長軸4.14 m、短軸3.75 m、遺構面からの深さは25 cmを測る。柱穴は8基確認できた。住居覆土は2層に分かれ上層はにぶい黄色砂、下層は黄褐色砂で、遺物は上層に集中する。床面は硬くしまる。

出土土器（図版23、第30図64～66）

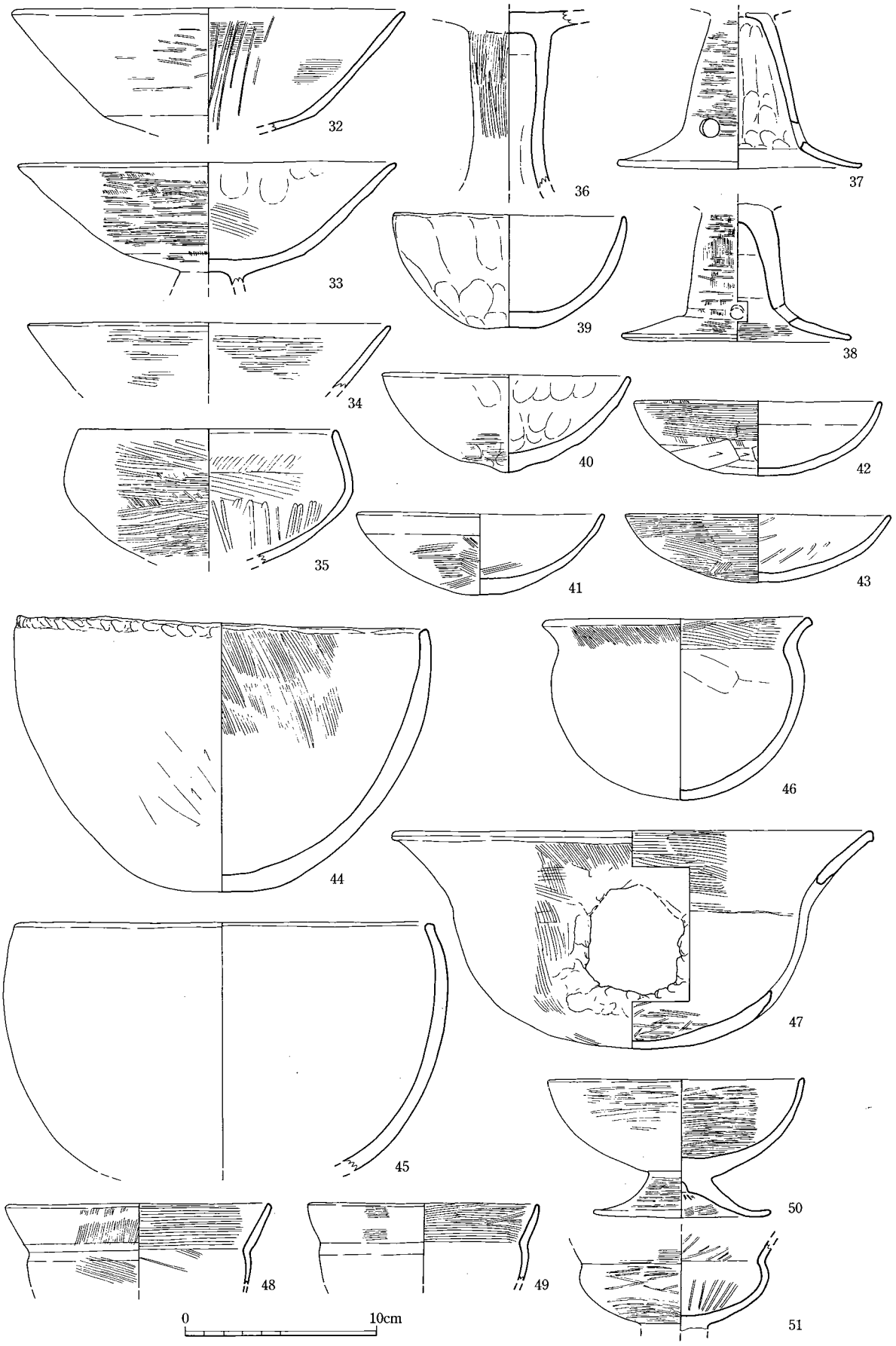
64・65は布留系甕の口縁部破片。64の調整は外面ヨコハケ、内面はケズリ。66は埦。やや摩滅するが内外面ともミガキ。

10号竪穴住居跡（図版5、第31図10）

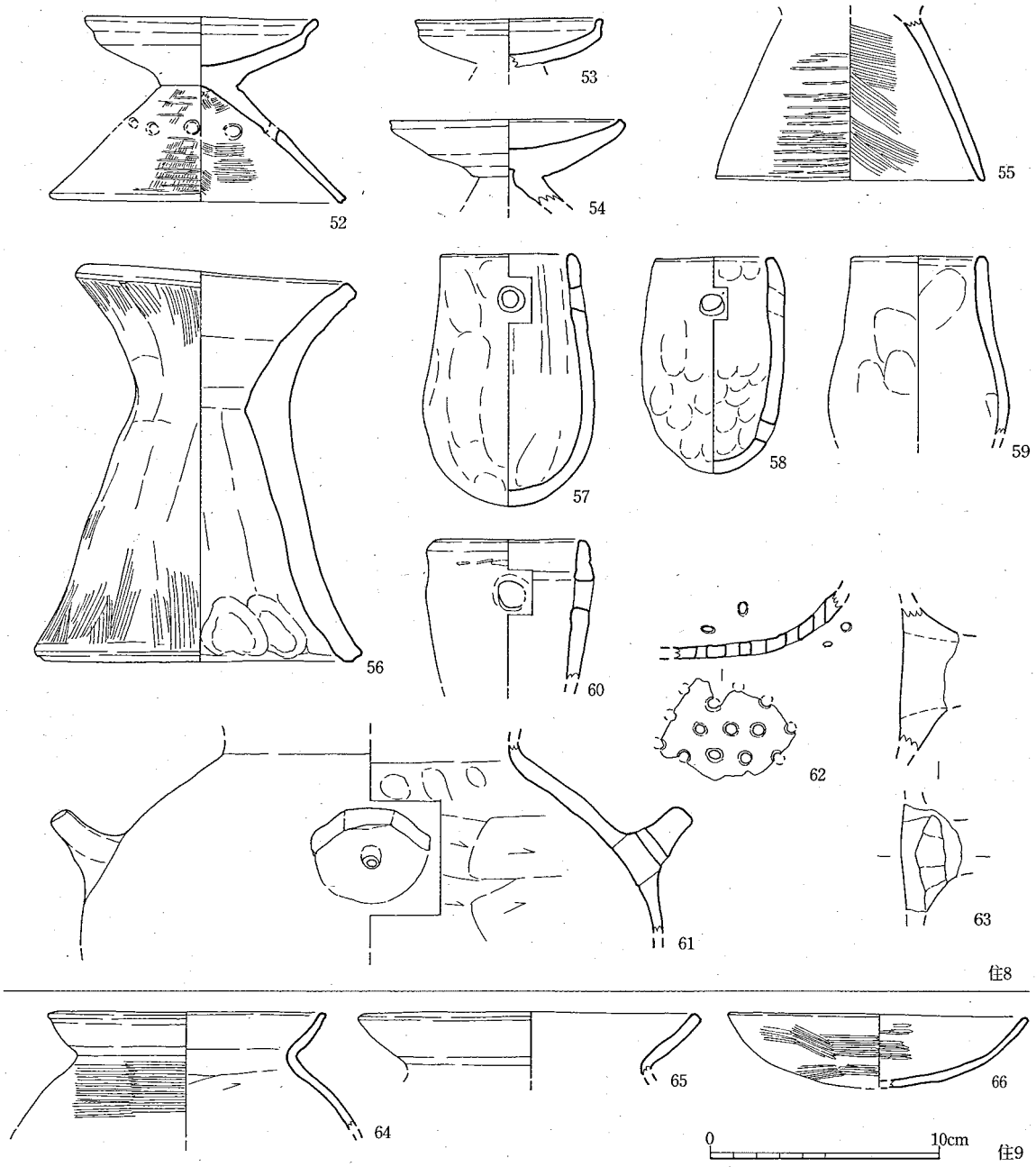
調査区西壁中央やや北よりに位置し、3分の1は調査区外である。住居中央を近世の溝4に切られる。プランは北西に開く方形で、ややいびつである。主軸方向はN 10°W。規模は長軸5.49 m、短軸残存長2.88 m、遺構面からの深さは28 cmを測る。住居覆土はオリーブ褐色砂の均



第28図　8号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）



第29図　8号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）



第30図　8・9号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（1/3）

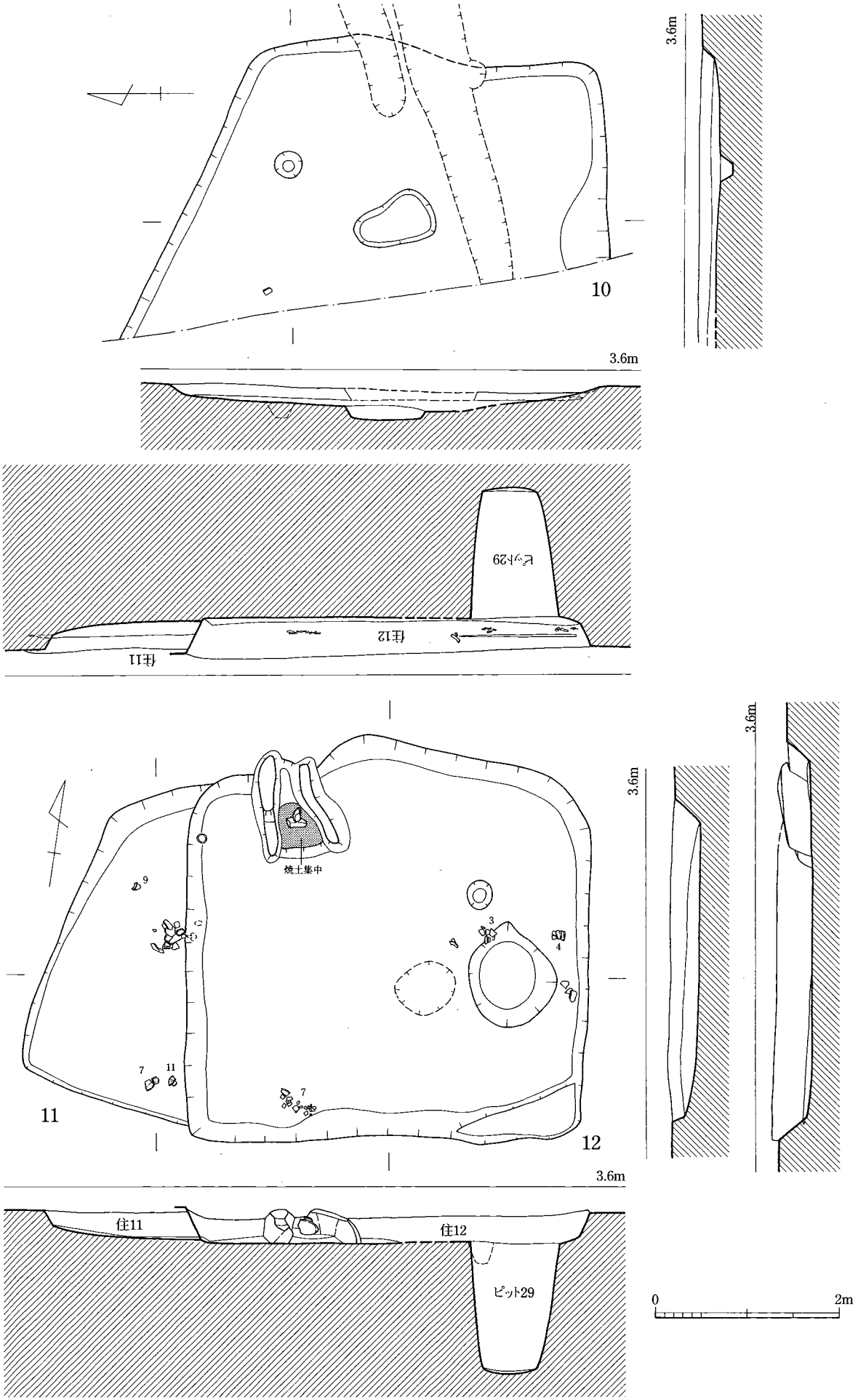
質な層で、水平に堆積する。床面は硬くしまる。

出土土器（第32図１～５）

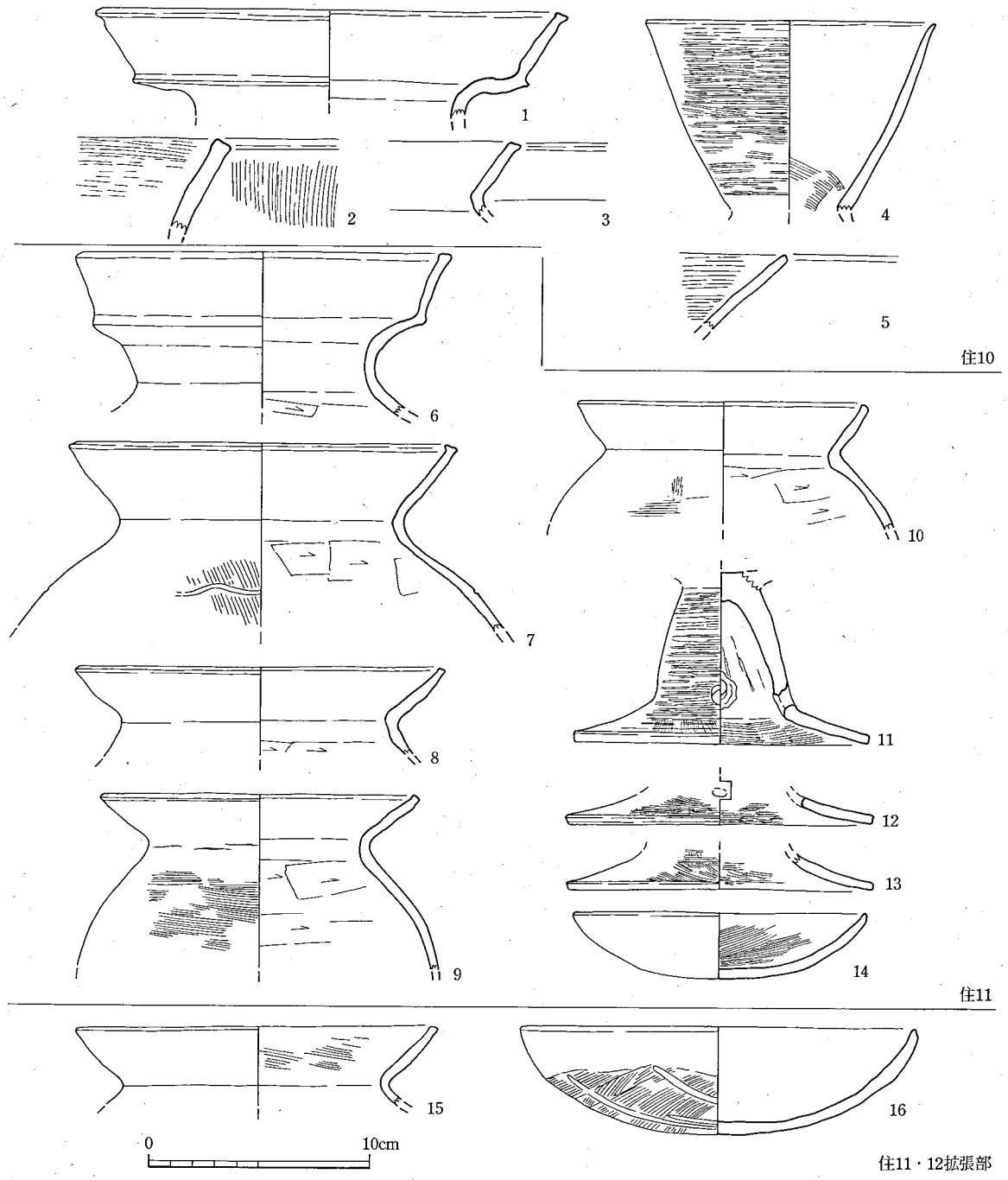
１は山陰系二重口縁壷。口縁部破片。２は在地系甕口縁。３は布留系甕口縁。４は小型精製器種の直口壷口縁部。外面はミガキ。内面は摩滅するが頸部付近はハケが残る。５は高坏坏部破片。傾きやや不安。

11号竪穴住居跡（図版５、第30図11）

調査区北壁中央に位置する。東側の大半を12号竪穴住居跡に切られる。プランは方形で、主軸方向はN9°Eである。規模は長軸3.56 m、短軸残存長1.90 m、遺構面からの深さは27 cmを測



第31図　10～12号竪穴住居跡実測図（1/60）

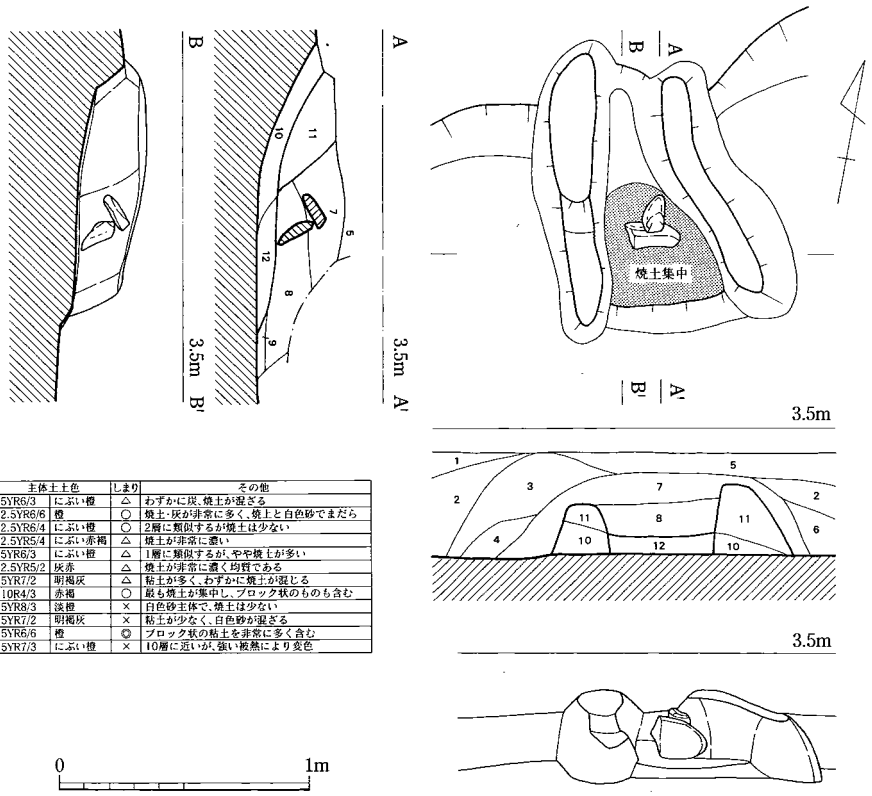


第32図　10・11号竪穴住居跡・11・12号竪穴住居跡拡張部出土土器実測図（1/3）

る。住居覆土は二層に分かれ上層は浅黄色砂、下層はにぶい黄色砂である。

出土土器（図版23、第32図）

6は山陰系二重口縁壷、口縁。内外面ともヨコナデ。7～10は布留系甕。7は波状沈線を施す。9は外面ヨコハケ。頸部には工具痕。11～13は高坏の脚部破片。14は埦。外面ナデ。内面ハケ。15・16は11・12号住居拡張時に出土したもので12号竪穴住居跡と帰属があいまいである。15は布留系甕。口縁破片。16は埦。外面ハケ後、幅広のミガキ。内面はナデ。



層位	主体土土色		しまり	その他
1	5YR6/3	にぶい橙	△	わずかに炭、焼土が混ざる
2	2.5YR6/6	橙	○	焼土・灰が非常に多く、焼土と白色砂でまだら
3	2.5YR6/4	にぶい橙	○	2層に類似するが焼土は少ない
4	2.5YR5/4	にぶい赤褐	△	焼土が非常に濃い
5	5YR6/3	にぶい橙	△	1層に類似するが、やや焼土が多い
6	2.5YR5/2	灰赤	△	焼土が非常に濃く均質である
7	5YR7/2	明褐灰	△	粘土が多く、わずかに焼土が混じる
8	10R4/3	赤褐	○	最も焼土が集中し、ブロック状のものも含む
9	5YR8/3	淡橙	×	白色砂主体で、焼土は少ない
10	5YR7/2	明褐灰	×	粘土が少なく、白色砂が混ざる
11	5YR6/6	橙	◎	ブロック状の粘土を非常に多く含む
12	5YR7/3	にぶい橙	×	10層に近いが、強い被熱により変色

第33図　12号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

12号竪穴住居跡（図版5、第31図12）

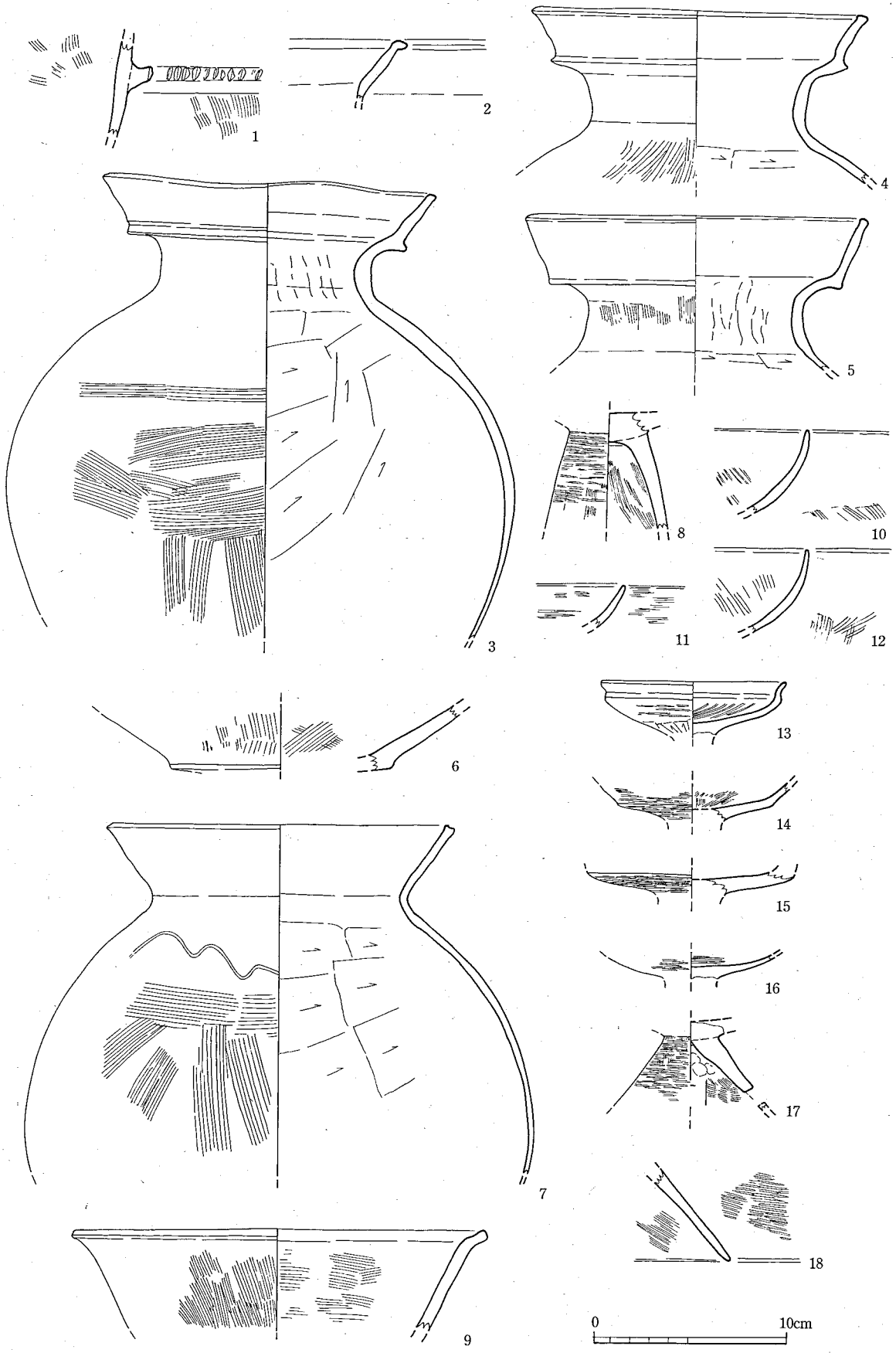
調査区北壁の中央に位置する。当初住居北壁は調査区外だが、北壁西でカマドが検出されたため、この部分のみ拡張して調査を行った。プランは長方形で、主軸方向はN 8° Wである。規模は長軸4.39 m、短軸4.37 m、遺構面からの深さは42 cmを測り、残りの良い住居である。カマドは住居北壁西側に作られる。住居東のピット29はこの住居に先行する遺構である。

カマド（図版6、第33図）

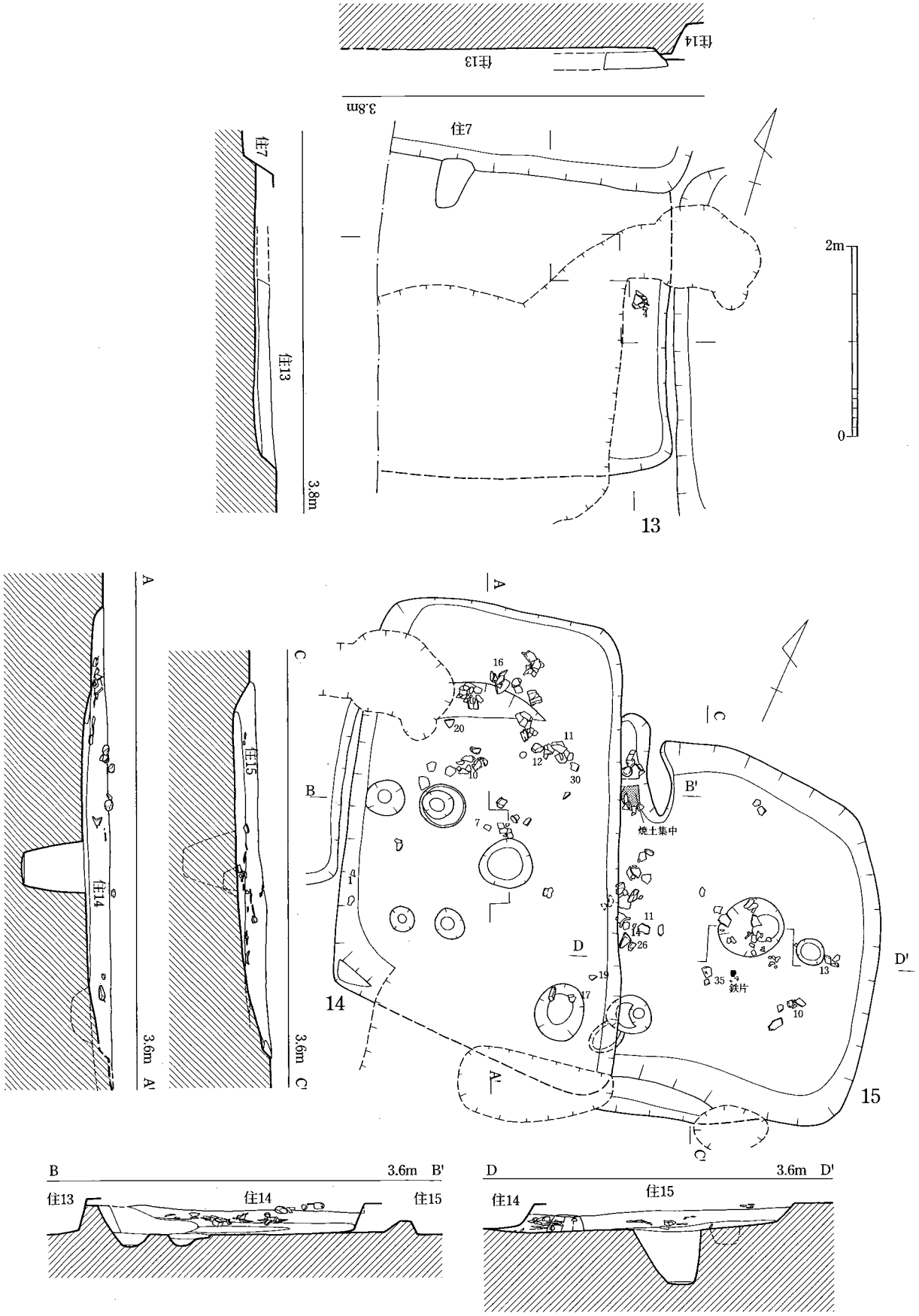
12号竪穴住居跡は、当初北側が調査区外に及んでおり、後にその部分の調査区を拡張した。そのため、カマドも当初燃焼部の部分的な調査であったが、拡張後に再度大部分の残りを調査した。住居の北西隅より北壁のやや中央よりに位置し、住居の南北方向主軸よりもわずかに焚き口が住居中央方向に向く主軸をなしている。左袖はほぼ直線的であるが、右袖は外側へやや曲がり燃焼部が広がっている。燃焼部は周辺の床面よりも7㎝程度高く、非常に強く焼き締まり、赤変も著しい。内部からは石が二点検出されたが、一点は床面に近いが支脚には大きく、もう一点は床面よりもある程度浮いた状態で、支脚であっても原位置等は不明である。煙道床面は外へ向けてわずかながら高くなっており、煙出は壁面の外側まで張り出している。壁体は、上部は粘土ブロックを主体に非常に強固に構築されており、最下部は細砂主体で脆い。　（坂元）

出土土器（図版23、第34図）

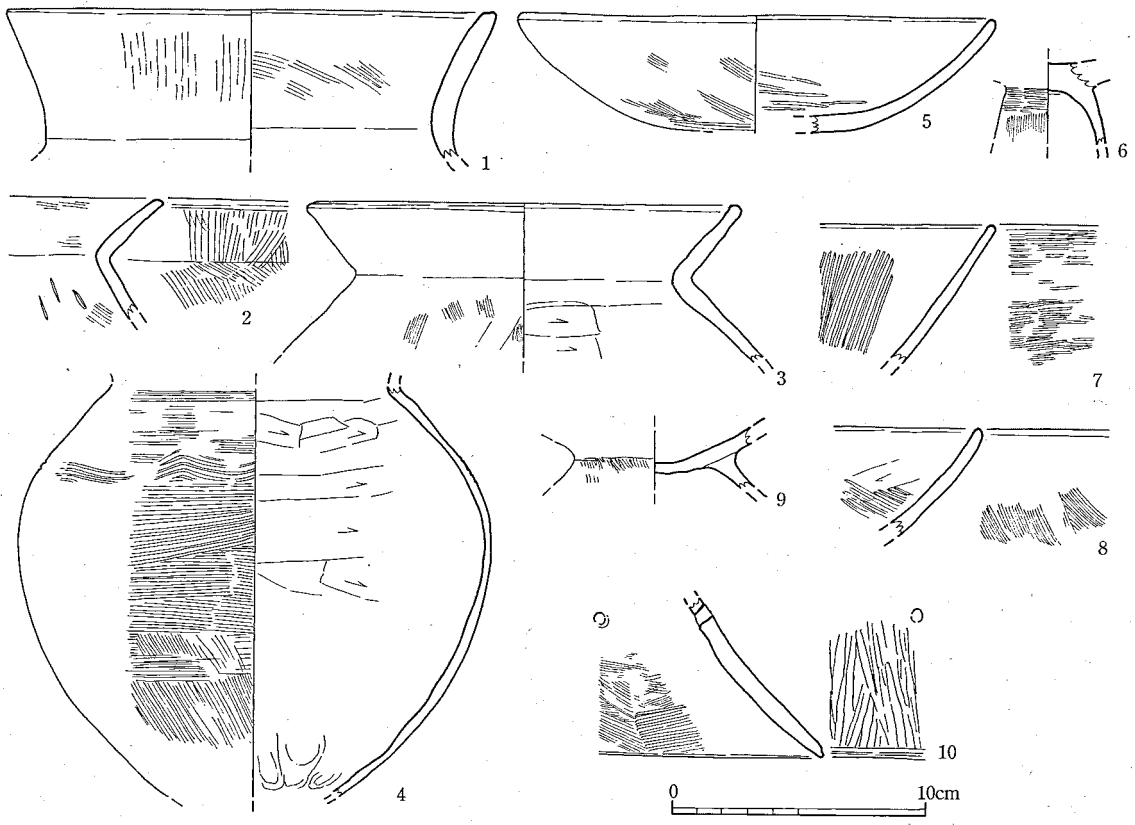
1は在地系複合口縁壷の胴部突帯部分。刻目が施される。2は畿内系の二重口縁壷二次口縁破片。3～5は山陰系二重口縁壷。3は口縁部に歪み。外面調整はハケ後ヨコナデ。6は在地系の二重口縁壷口縁破片か。7は布留系の甕。肩部に波状沈線を施す。8は高坏脚部破片。9は鉢



第34図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第35図　13～15号竪穴住居跡実測図（1/60）



第36図　13号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

の口縁部破片。10～12は埦の破片。11は内外面ともミガキ。13～18は小型器台。13～16は受部破片。17・18は脚部破片。16は接合部が残る。

13号竪穴住居跡（図版6、第35図13）

調査区北西隅に位置し、14号竪穴住居跡の西に隣接する。住居北は7号竪穴住居跡に切られる。住居東南の壁および、7号竪穴住居跡の南側で床面がとらえられた。プランは長方形か。規模は長軸残存長1.93 m、短軸残存長0.65 m、遺構面からの深さは24 cmを測る。

出土土器（第36図）

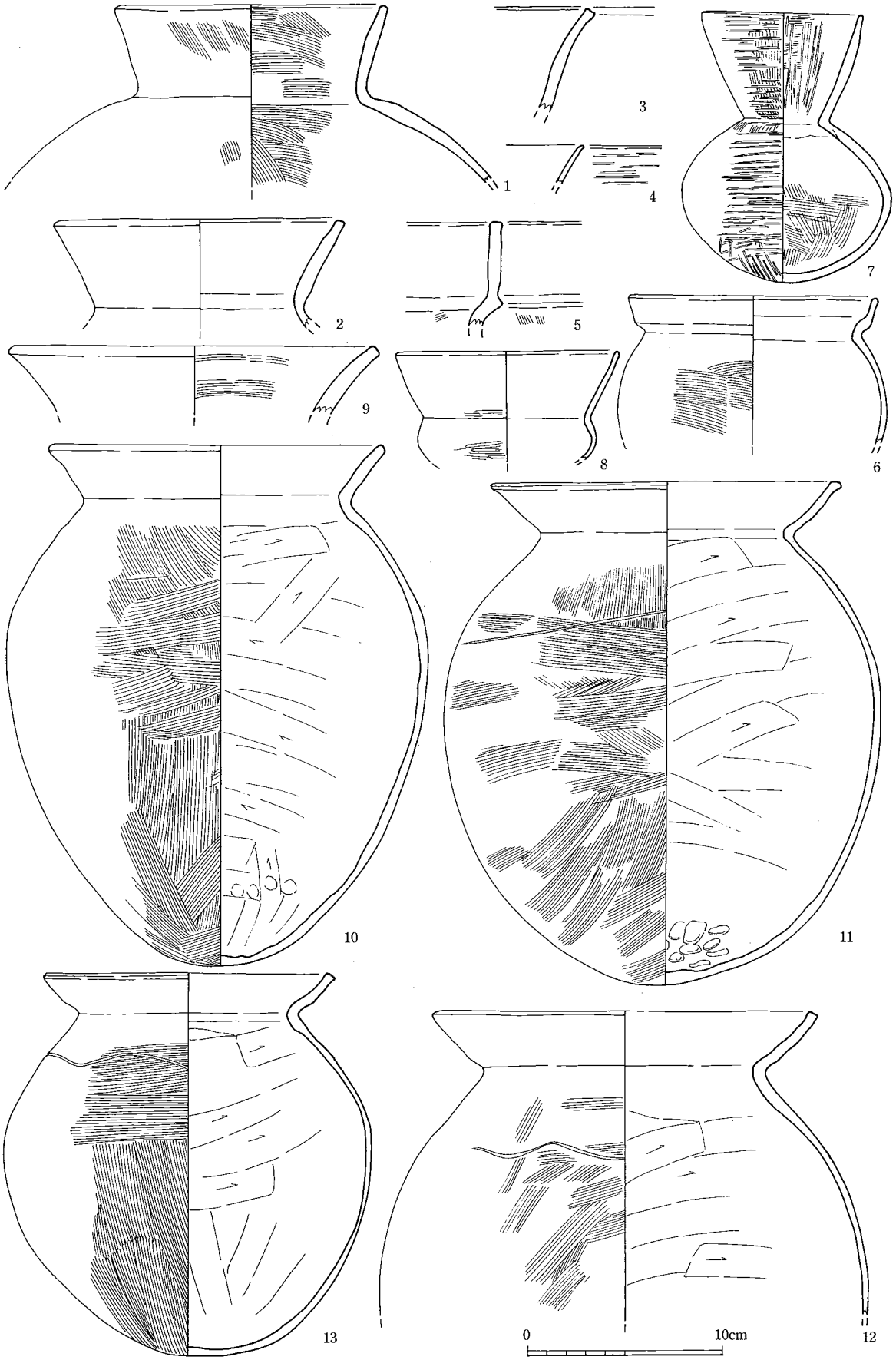
1～2は在地系甕口縁部破片。3・4は布留系の甕。3は口縁破片。4は胴部。肩部に櫛描波状文。5は埦。底部を欠く。外面ハケ後ナデ。内面ミガキ。6～8は高坏。6は脚部破片。7・8は坏部破片。9は脚付鉢の脚部。10は小型器台脚部破片。穿孔が残る。

14号竪穴住居跡（図版6、第35図14）

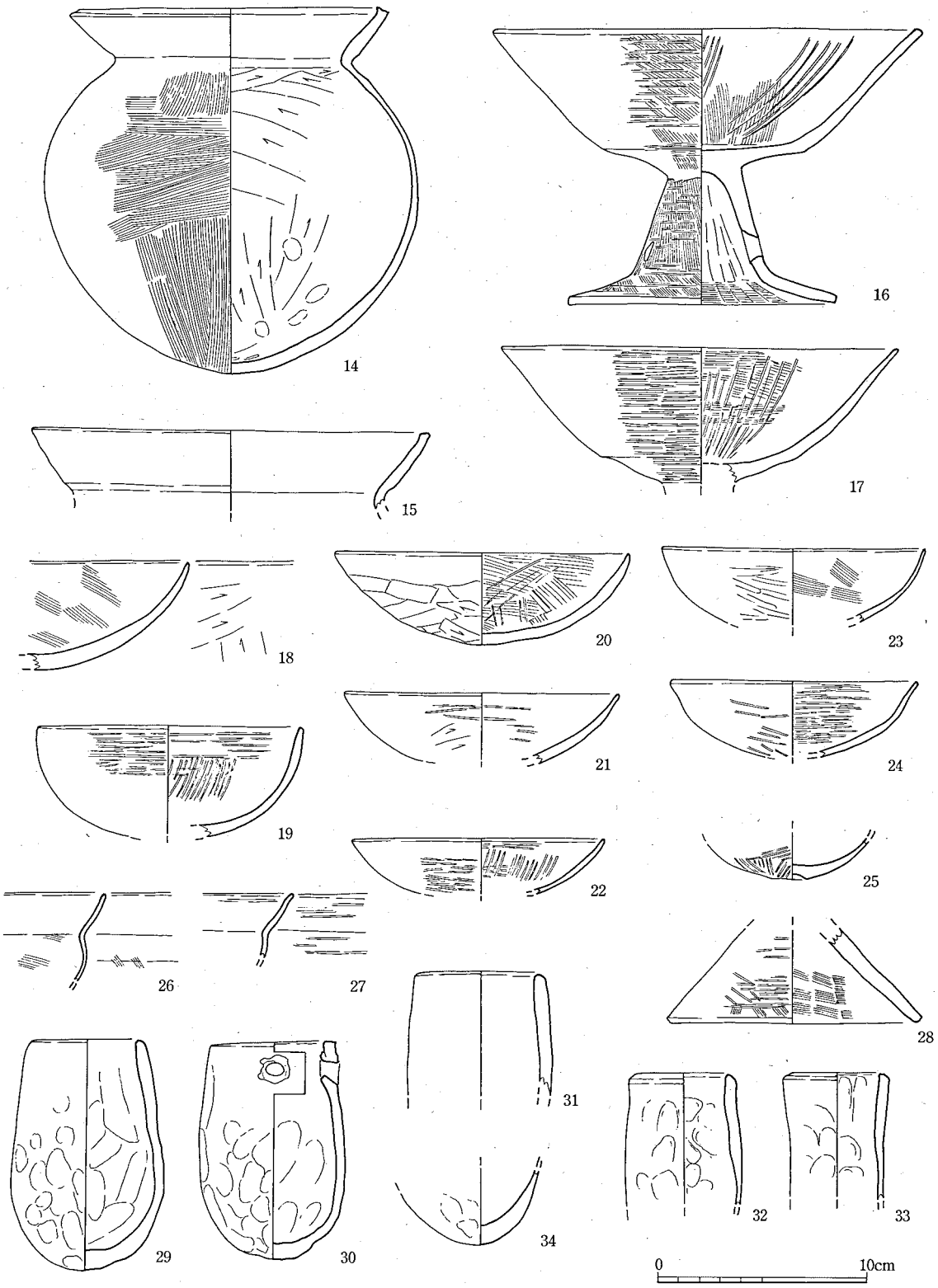
調査区北西に位置し、15号竪穴住居跡を切る。プランは南壁が撹乱を受けるが、南北方向に長い長方形で、主軸方向はN 25°Wである。規模は長軸残存長4.6 m、短軸2.85 m、遺構面からの深さは30 cmを測る。住居北側で土器が多く検出された。住居覆土は黄褐色を呈する。

出土土器（図版24、第37～38図）

1～3は直口壷。1は内外面ともハケ。在地系か。2は外面煤付着。4～6は二重口縁壷。4は



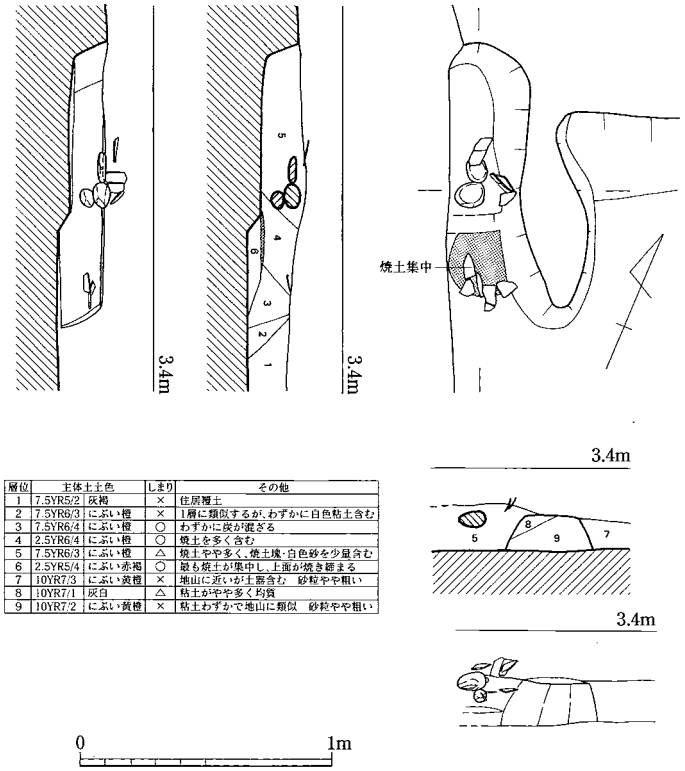
第37図　14号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



第38図　14号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）

二次口縁破片。薄手で精良、畿内系。5・6は山陰系。5は大型、6は小型で全体に煤が付着。7・8は小型精製器種。7は直口壷。頭部内面に継目が残る。8は小型丸底壷。9・10は在地系の甕。9は口縁部破片。10の外面底部から胴上半および内面底部には円形に煤が付着。11～15

は布留系甕。11は肩部に沈線。沈線は半周程めぐる。底部に指頭痕がのこる。底部付近に煤付着。12・13は波状沈線を施す。13・14は外面に煤付着。15は口縁部破片。16・17は高坏。坏部外面ハケ後細いヨコミガキ、内面ハケ後暗文風の細いタテミガキを施す。17は脚部内面は指ナデ、底部は連続するヨコハケ。18～25は埦。19・21・22・24は内外面を磨く。20は内面、23は外面のみミガキが残る。25は外面にハケ。内面ナデ。底部に直径1.5cmの凹みを作る。外面はタタキ。底部被熱。26・27は小型丸底鉢口縁。29～34は蛸壺。29・31～33は穿孔部分が残らず。34は底部。



層位	主体土土色	しまり	その他
1	7.5YR5/2	灰褐	×	住居覆土
2	7.5YR6/3	にぶい橙	×	1層に類似するが、わずかに白色粘土含む
3	7.5YR6/4	にぶい橙	○	わずかに炭が混ざる
4	2.5YR6/4	にぶい橙	○	焼土を多く含む
5	7.5YR6/3	にぶい橙	△	焼土やや多く、焼土塊・白色砂を少量含む
6	2.5YR5/4	にぶい赤褐	○	最も焼土が集中し、上面が焼き締まる
7	10YR7/3	にぶい黄橙	×	地山に近いが土器含む　砂粒やや粗い
8	10YR7/1	灰白	△	粘土がやや多く均質
9	10YR7/2	にぶい黄橙	×	粘土わずかで地山に類似　砂粒やや粗い

第39図　15号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

15号竪穴住居跡（図版7、第35図15）

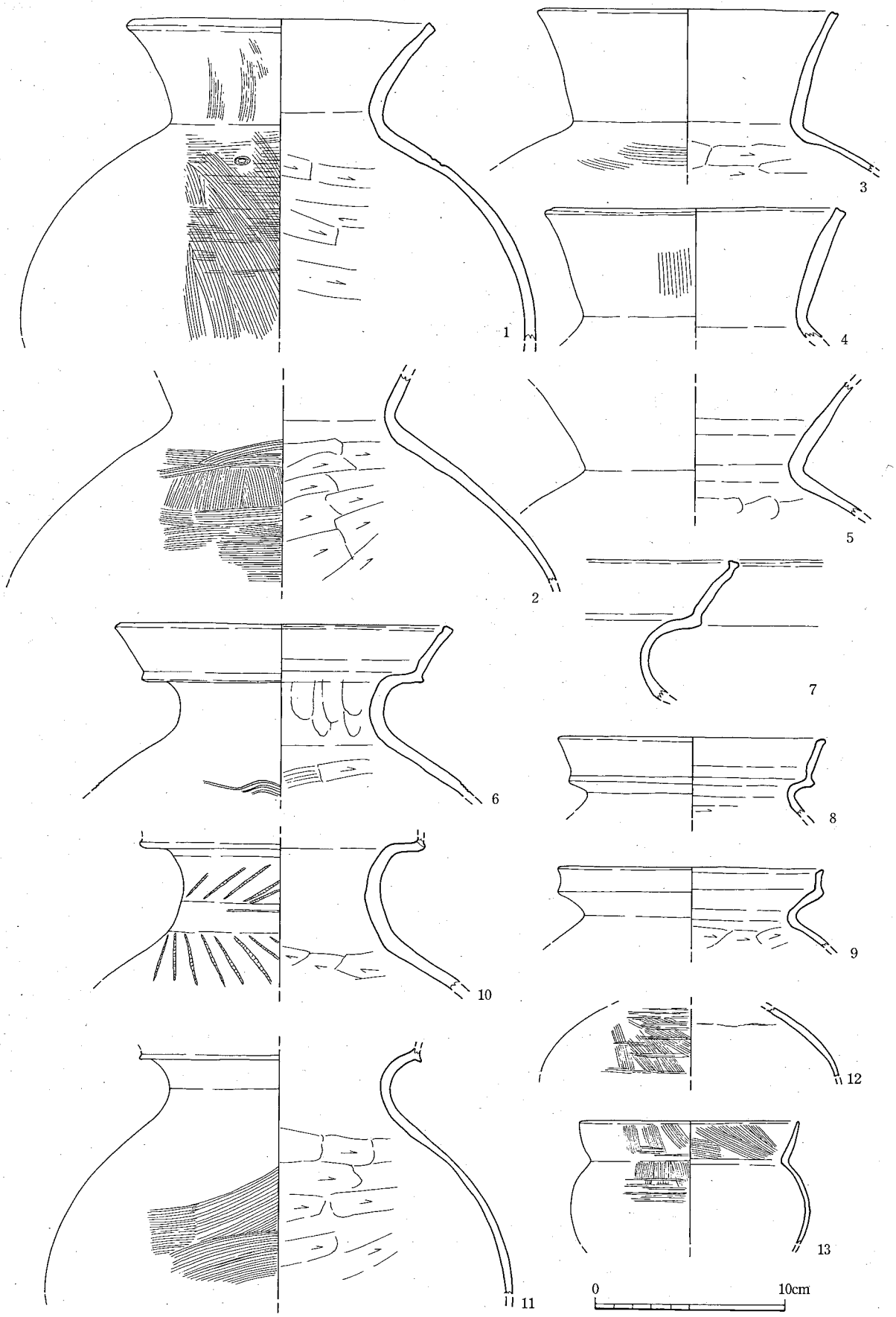
調査区北西に位置し、西壁を14号竪穴住居跡に切られる。プランは隅丸方形か、主軸方向はN 9° W。規模は長軸3.06 m、短軸残存長2.74 m、遺構面からの深さは33 cmを測る。カマドは北壁西側につくが、東側の袖を14号竪穴住居跡に切られている。覆土は住居西半分がにぶい黄色砂、東半分はオリーブ褐色砂、炭が混じる。住居南東より陶質土器・不明鉄製品が出土している。

カマド（図版7、第39図）

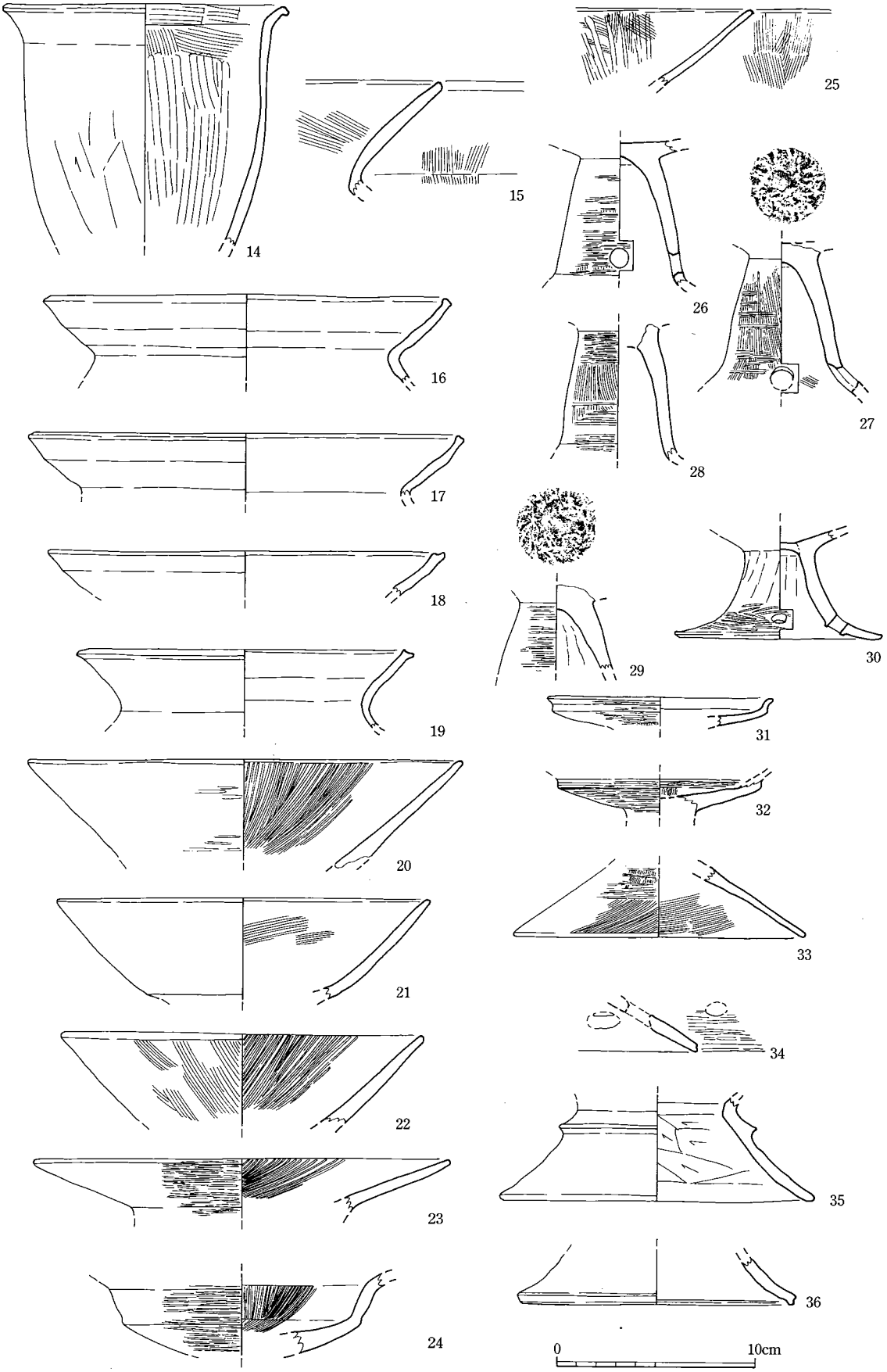
15号竪穴住居跡は、14号竪穴住居跡に切られており、そのためカマドもほぼ左半分が消失している。住居のほぼ北西隅に位置するものと考えられ、住居の南北方向主軸にほぼ沿った主軸をなす。袖の上部は粘土主体でやや強固だが、下部は粘土が少なくやや粗い砂が主体で脆い。煙道部の床面は周辺の住居床面よりも7㎝程度高くなっており、煙出は住居壁面の外側まで張り出している。燃焼部は当初周辺の住居床面とほぼ同一の高さであったが、煙道床面とほぼ同一面で著しく焼き締まった部分があり、最終的な焼床面にあたると思われる。内部からは礫が3点検出されたが、支脚の可能性は低い。（坂元）

出土土器（図版24、第40～42図）

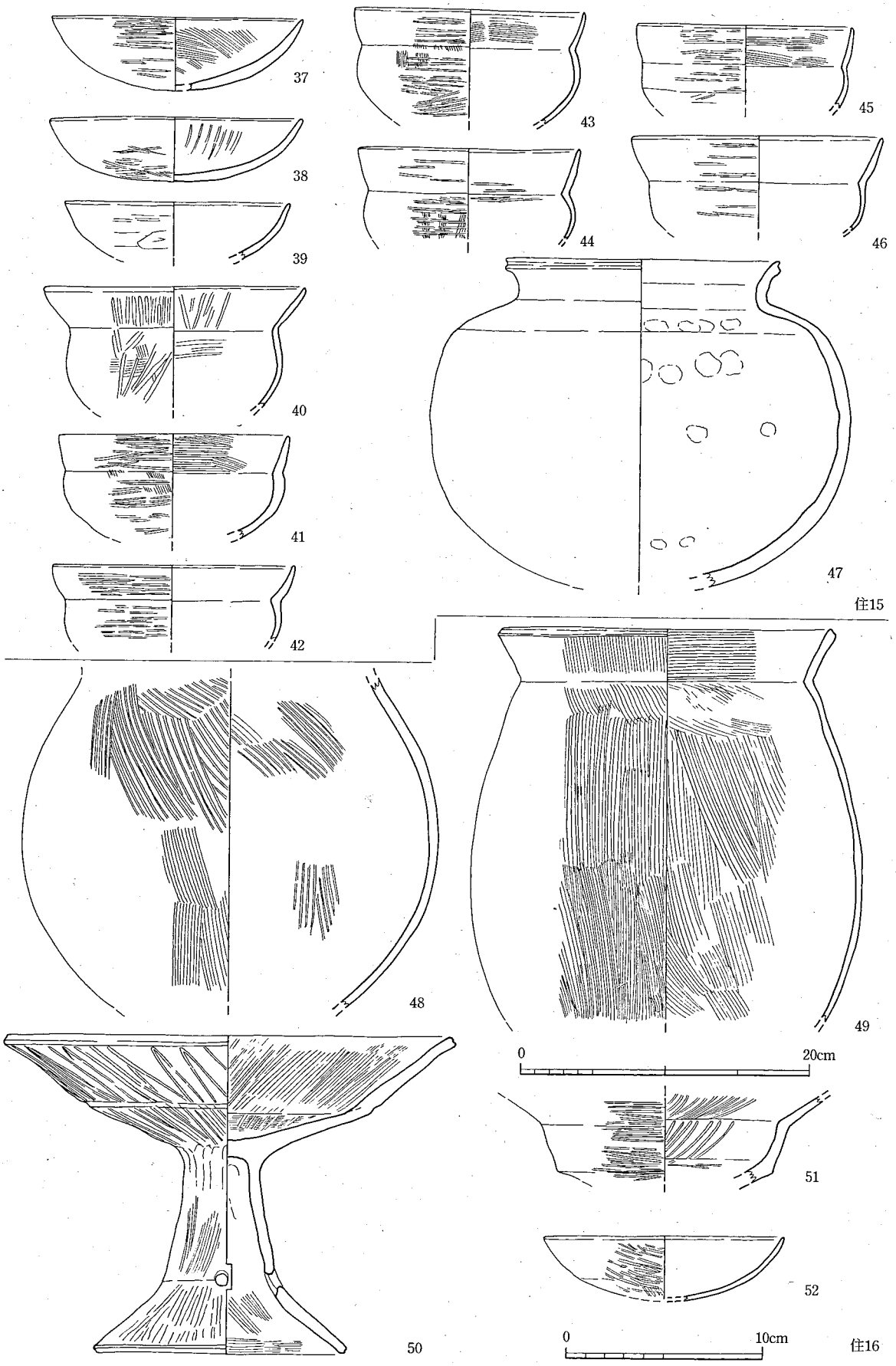
1～5は畿内系の直口壷口縁。1は肩部に竹管文。6～11は山陰系二重口縁壷。6は肩部に櫛描波状文、10は頸部に綾杉文を施す。12・13は小型精製器種、12は直口壷肩部、頸部内面に粘土の継ぎ目が残る。13は短頸壷。14は在地系の小型の甕か。底部を欠く。外面は板状工具によるナデ。内面は粗いタテハケ、口縁付近はヨコハケ。15は在地系甕の口縁部。16～19は布留系の甕の口縁。20～30は高坏。20～25は坏部破片。26～30は脚部破片。30は穿孔二箇所残



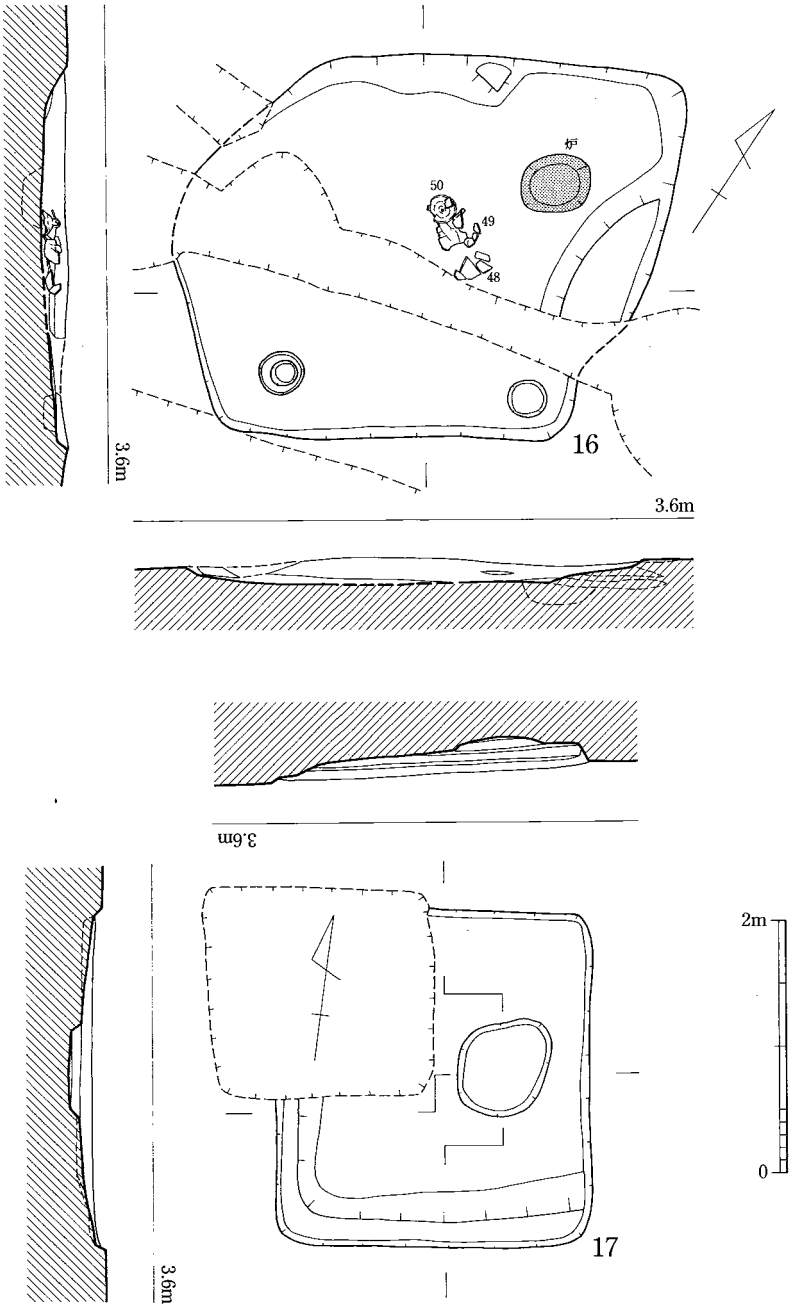
第40図　15号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



第41図　15号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）



第42図　15・16号竪穴住居跡出土土器実測図③（48・49は1/4、他は1/3）

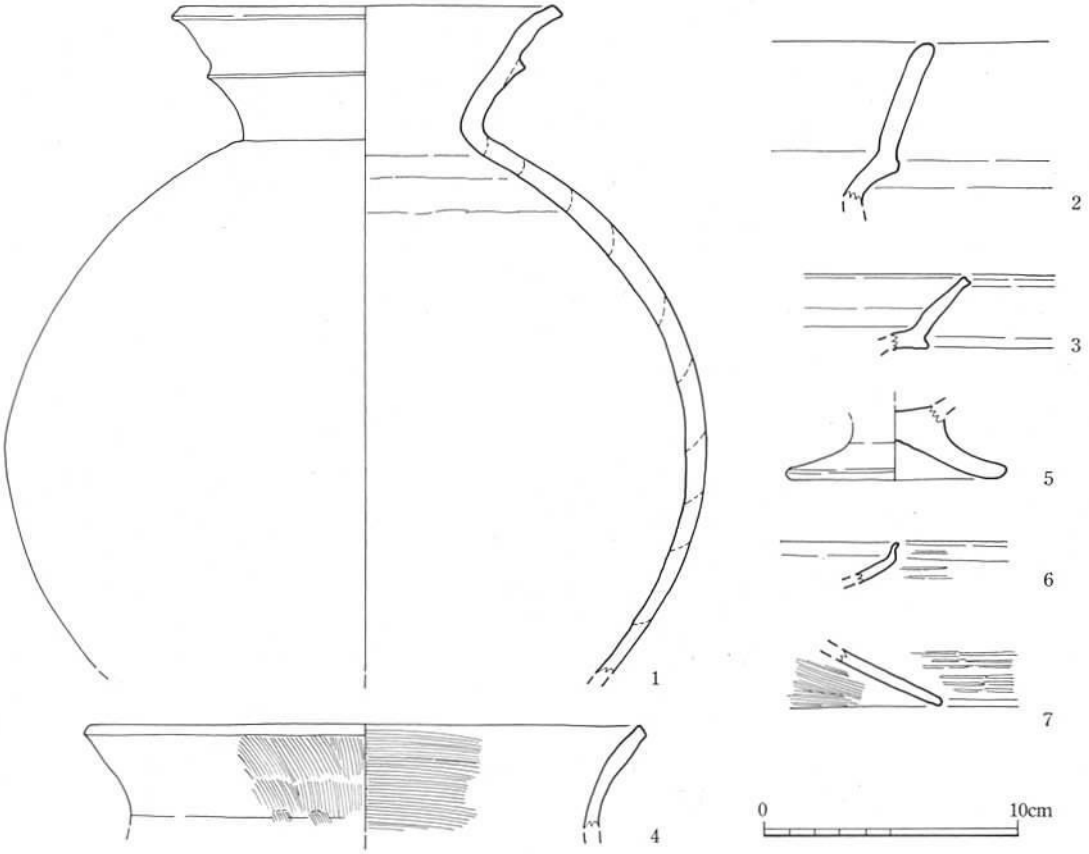


第43図　16・17号竪穴住居跡実測図（1/60）

る。31～34は小型器台。31・32は受部。33・34は脚部破片。35は鼓形器台。36は器台脚部か。37～39は埦。40～46は小型丸底鉢。40は太いミガキ。47は半島系陶質土器の短頸壷。色調は黒灰色、断面はにぶい赤褐色。肩部から胴部にかけて灰かぶり。外面は強いヨコナデ、内面もヨコナデ、頸部内面は連続的に指オサエ。

16号竪穴住居跡（図版7、第43図16）

調査区北東に位置し、9号竪穴住居跡の西に位置する。住居中央を溝3に切られる。プランはいびつな長方形で、主軸方向はN 30°Eである。規模は長軸3.72 m、短軸3.02 m、遺構面から

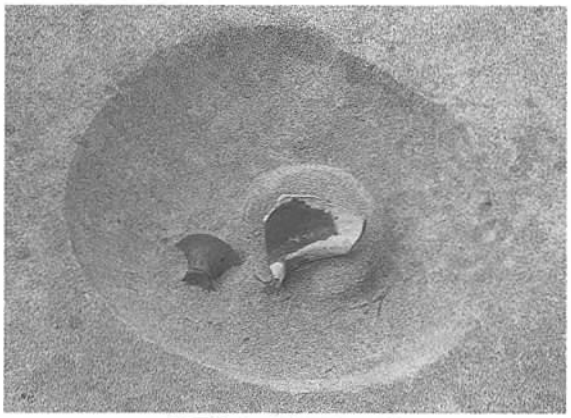


第44図　17号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

の深さは21 cmを測る。住居北側のピットは覆土に焼土粒を含み、炉跡と考えられる。南側の二つのピットは、柱痕と考えられる。住居覆土は3層にわかれ、上層は黒褐色土が多く入るオリーブ褐色砂、中層は黒褐色土がまだらに入る黄褐色砂、下層はにぶい黄色砂。

出土土器（図版24、第42図48～52）

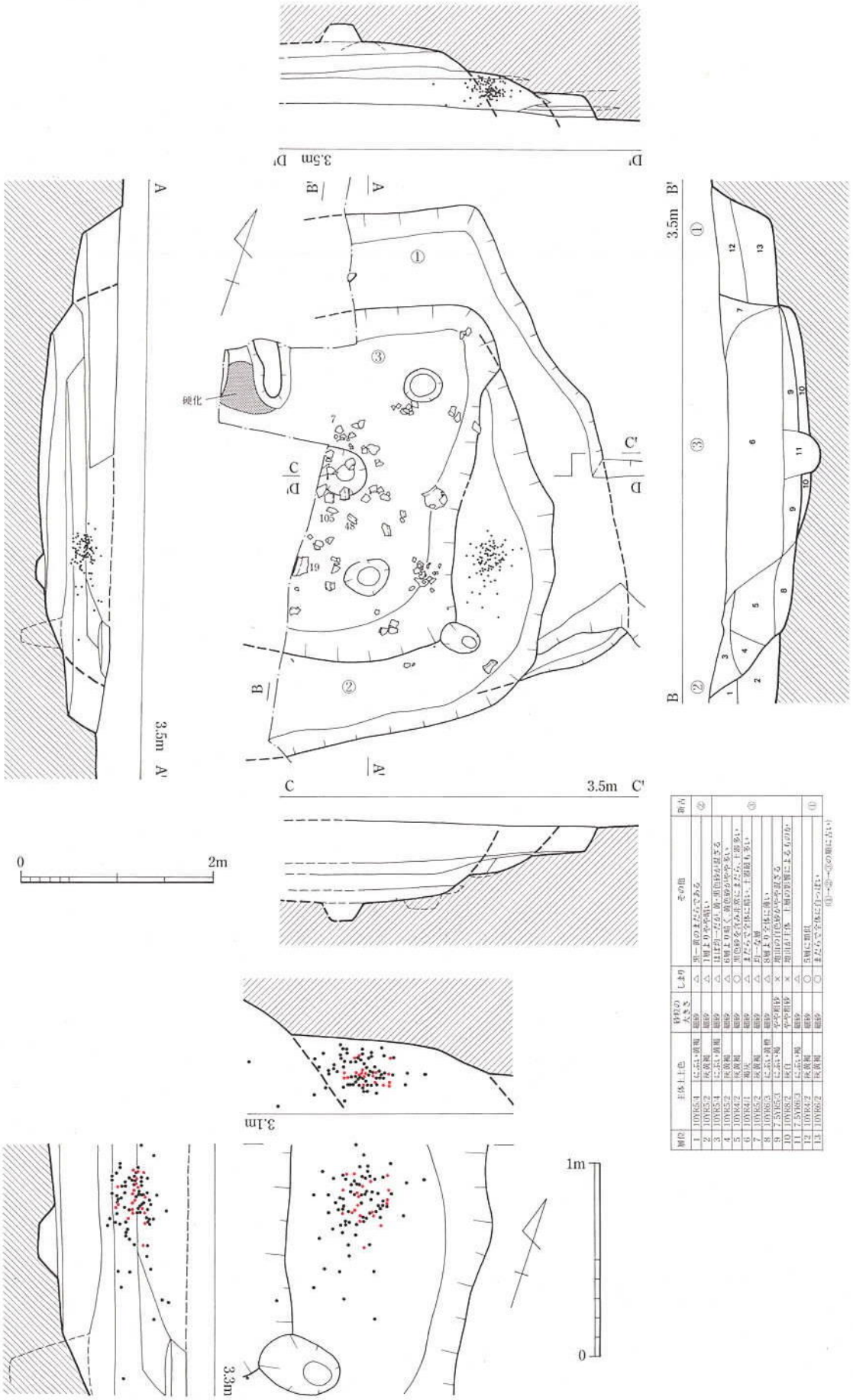
48はほぼ球形の壺胴部。外面に煤。内外面とも粗いハケ。49は在地系の甕。胴下半を欠く。ハケは外面は明瞭であるが内面は不明瞭。外面全体に煤付着。50・51は高坏。50は赤彩が一部残る。坏部外面は鋸歯状にミガキを行う。51は坏部破片。外面はヨコミガキ、内面はタテミガキ。52は椀。



15号竪穴住居跡土器出土状況

17号竪穴住居跡（図版8、第43図17）

調査区中央西に位置し、井戸を切る。北側は撹乱を受けるが、正方形の整ったプランを呈する。規模は長軸2.65 m、短軸2.48 m、遺構面からの深さは18 cmを測る小型の住居である。主軸方向はN 9°Wである。中央にピットがあり炉の可能性が高いが、覆土に炭・焼土粒は確認できなかった。住居覆土は上層が黄褐色砂、下層はにぶい黄色砂である。床面より陶質土器片が



層位	土色	硬さ	しまり	その他	出土
1	10YR5/4 にぶい黄褐	軟質	△	第一層のまだらである	②
2	10YR5/3 灰黄褐	軟質	△	1層より中粗い	
3	10YR5/4 にぶい黄褐	軟質	△	1は比較一様だが、第一層の特徴は残る	③
4	10YR5/2 灰黄褐	軟質	△	6層より明るく、第四層の特徴を多く	
5	10YR4/2 灰黄褐	軟質	○	第四層全体が非常にまだらで、土器多く	
6	10YR4/1 褐灰	軟質	△	まだらで全体に粗い、土器最も多い	
7	10YR5/2 灰黄褐	軟質	△	均一な層	③
8	10YR6/3 にぶい黄橙	軟質	△	8層より全体に薄い	
9	7.5YR5/3 にぶい褐	やや軟質	×	第四層の特徴がやや残る	
10	10YR6/2 灰白	やや軟質	×	第四層が主体、土器の出土多くもろい	
11	7.5YR6/3 にぶい褐	軟質	△		
12	10YR4/2 灰黄褐	軟質	○	5層に類似	①
13	10YR6/2 灰黄褐	軟質	○	まだらで全体にブロック状に	

①…②…③…①

第45図　18号竪穴住居跡同西壁土層断面図・同ガラス小玉出土状況実測図（1/60、1/30）

出土する。

出土土器（図版24、第44図）

1～3は二重口縁壺。1は胴部球形を呈する。内外面とも胴部はタテハケ後ナデ、口縁部はヨコナデ。内面は全体に接合痕が残る。2は大型の山陰系二重口縁壺の口縁部破片。4は在地系甕の口縁部破片。5は脚付鉢の脚部。6・7は小型器台。6は受部破片。7は脚部破片。

18号竪穴住居跡（図版8、第45図）

調査区西壁中央に位置し、住居西半は調査区外である。6号土坑に切られる。住居は3回の立てなおしが行われ、北側および東側に張り出す住居①が最も古く、次に南東に広がる住居②が作られ、最後に中央の住居③が作られた。いずれも住居プランは方形である。住居①の主軸方向はN 25°W、規模は長軸残存長4.92 m、短軸残存長1.56 m、遺構面からの深さは46 cmを測る。住居②の主軸方向はN 25°W、規模は長軸残存長3.40 m、短軸残存長2.60 m、遺構面からの深さは48 cmを測る。住居③の主軸方向はN0°W、規模は長軸残存長3.73 m、短軸残存長1.50m、遺構面からの深さは78cmを測る。調査区外と接する北壁にカマドが設けられている。住居③廃棄後に大量の土器が投棄されている。また、ガラス小玉が住居②北側の上面で集中して出土しているが、これらも土器同様住居③の廃棄に伴うものと考える。

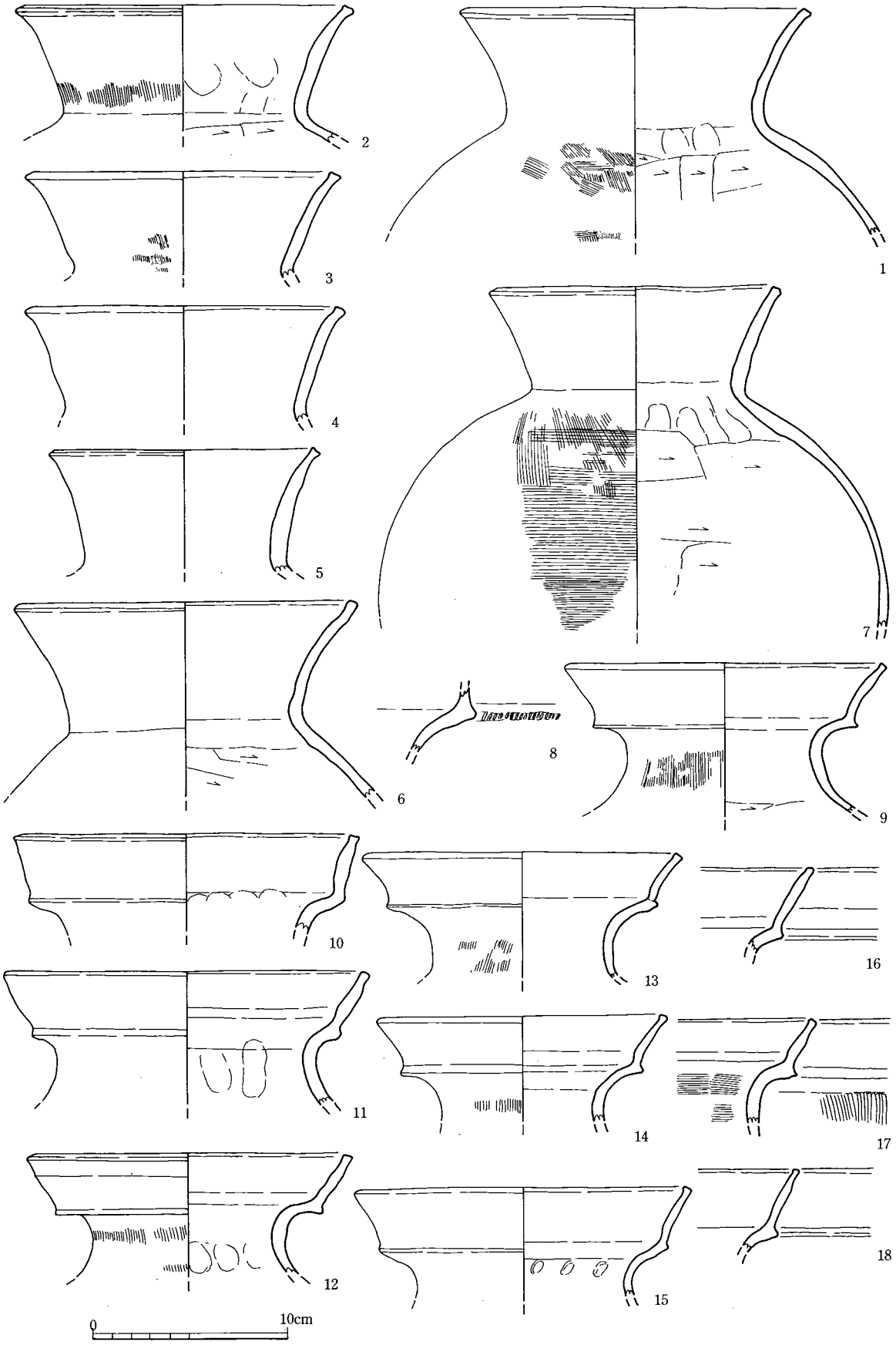
カマド（図版8、第45図）

18号竪穴住居跡は3軒が切り合うという結果となったが、カマドは住居③に伴う。このカマドは、調査終了間際に、遺物を回収するために調査区西壁を掘り込んだ際に部分的に検出したものである。そのため、その位置とおおよその主軸方向等を確認するに止まった。カマドの位置は、住居の北西隅付近、もしくは北壁の中央付近に対応すると思われ、住居の南北の軸線方向に近い主軸をなすと考えられる。燃焼部は、赤変が著しく明確である。壁体は粘土主体の細砂との混合土で強固に構築されている。（坂元）

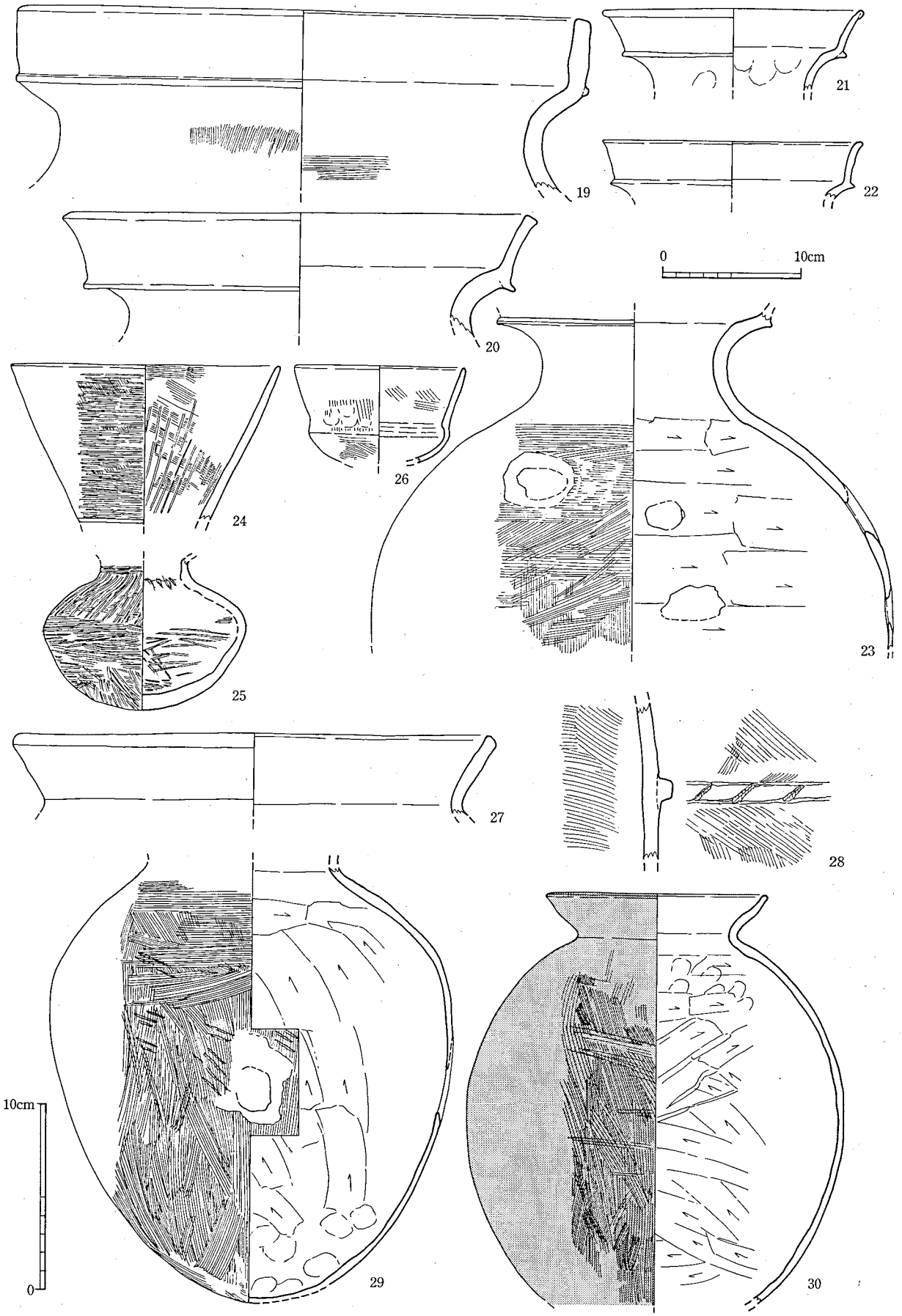
出土土器（図版24、第46～50図）

1～7は直口壺。6は口縁端部付近でゆるく内湾する。7は頸部内面の指ナデが明瞭に残る。8は在地系の複合口縁壺の口縁屈曲部。9～22は山陰系二重口縁壺の口縁部破片。15は頸部内面にしぼり痕。19・20は大型品。23は頸部から胴上半の破片で、内側からの穿孔が3箇所確認できる。24～26は小型精製器種。24・25は直口壺、24は口頸部。25は胴部。26は小型丸底壺。27は在地系甕の口縁部破片。28は在地系甕の胴部破片か。刻目を持つ突帯を貼り付ける。29はV様式系の甕、倒卵形。胴部中央に穿孔。底部付近は二次被熱により赤変。30は布留系の甕。頸部は強くしまる。内面は粗いケズリ。外面は摩滅が激しいが丹塗。31～77は布留系の甕。肩部の装飾は、32・47・71に一条沈線、68は平行する二条の沈線、37は櫛描のやや甘い波状沈線、63は一条の波状沈線を施すほか、65は竹管文を施す。72は小型の甕。78は口縁が直立す

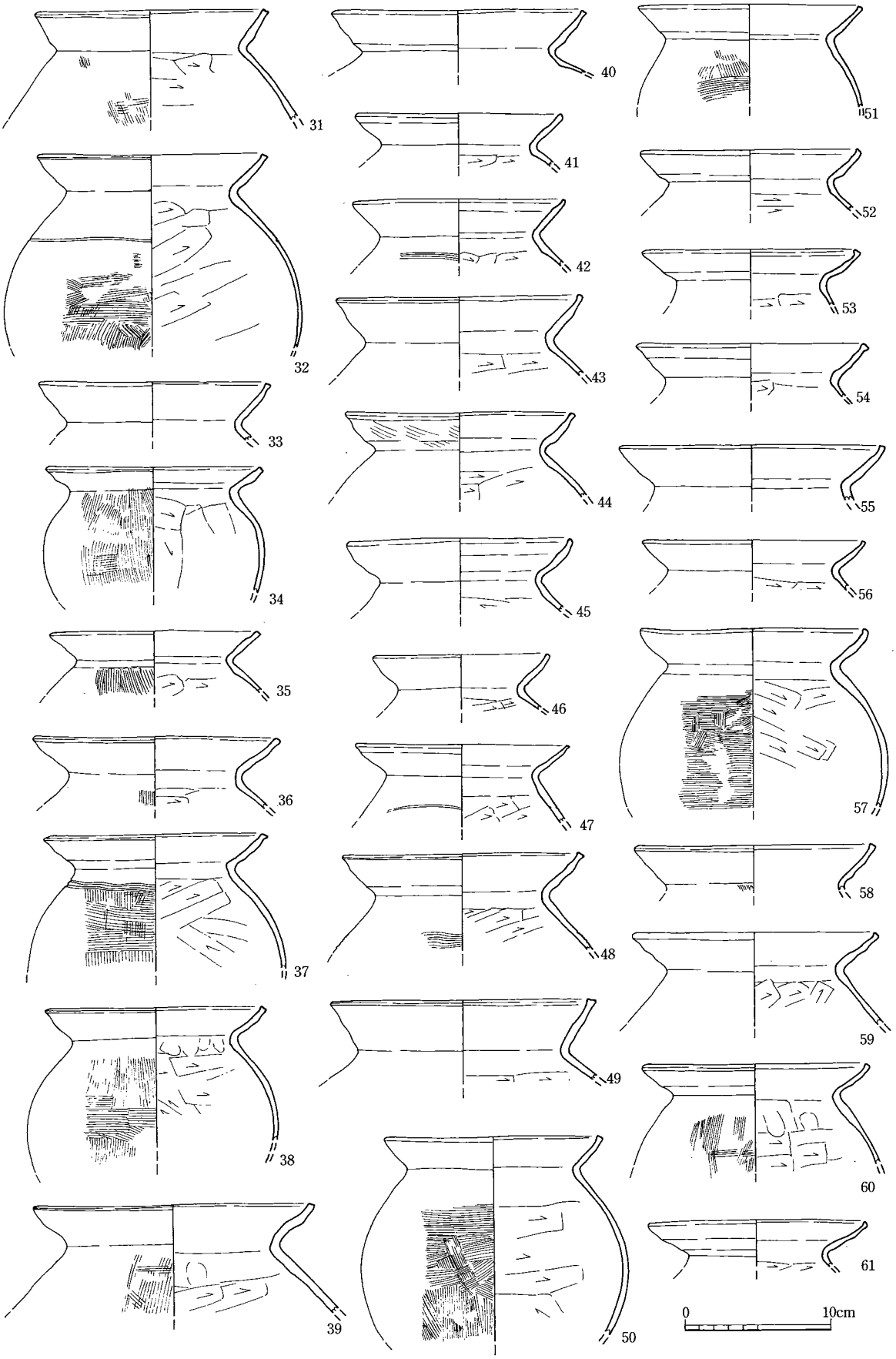
18号竪穴住居跡ガラス小玉出土状況



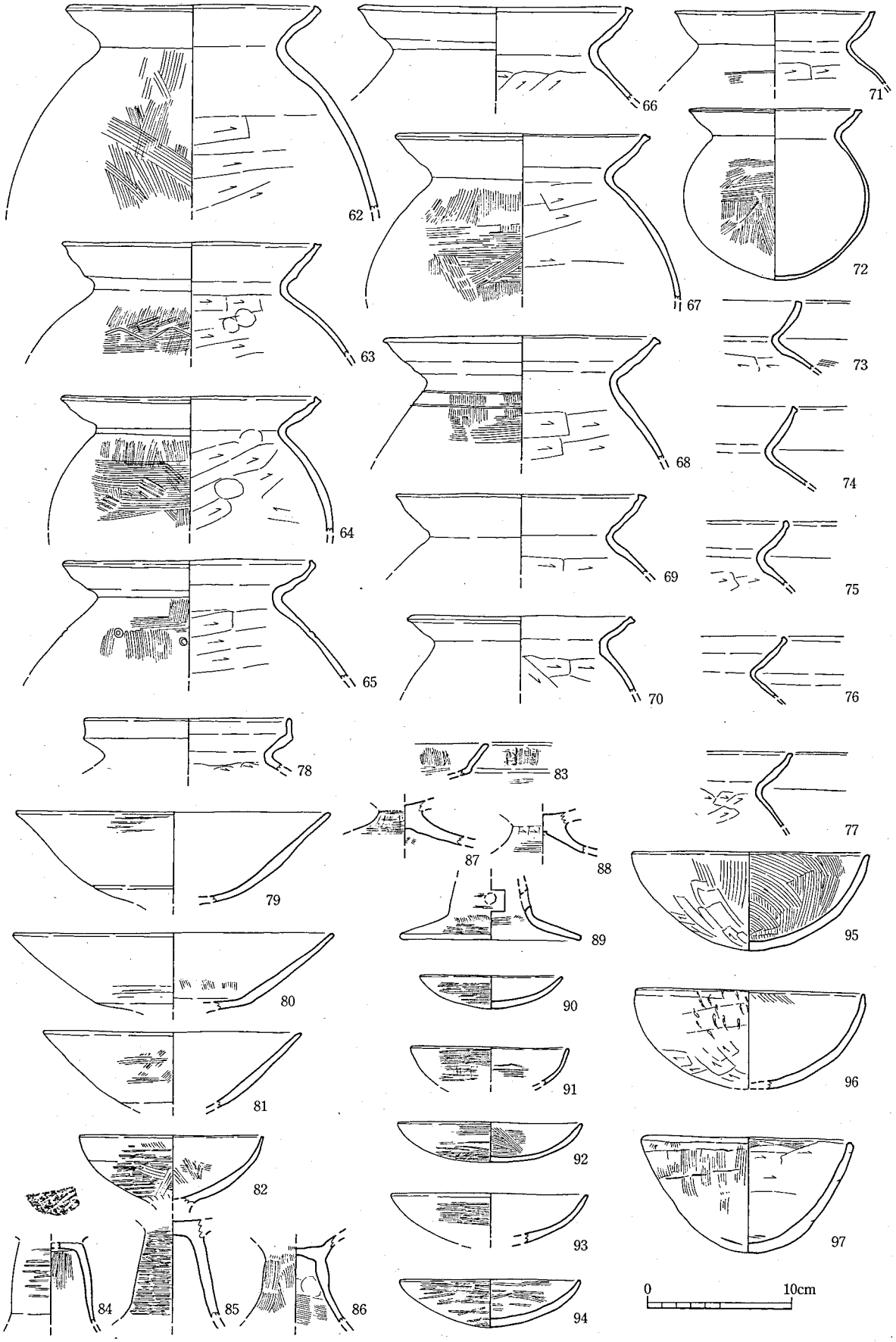
第46図　18号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



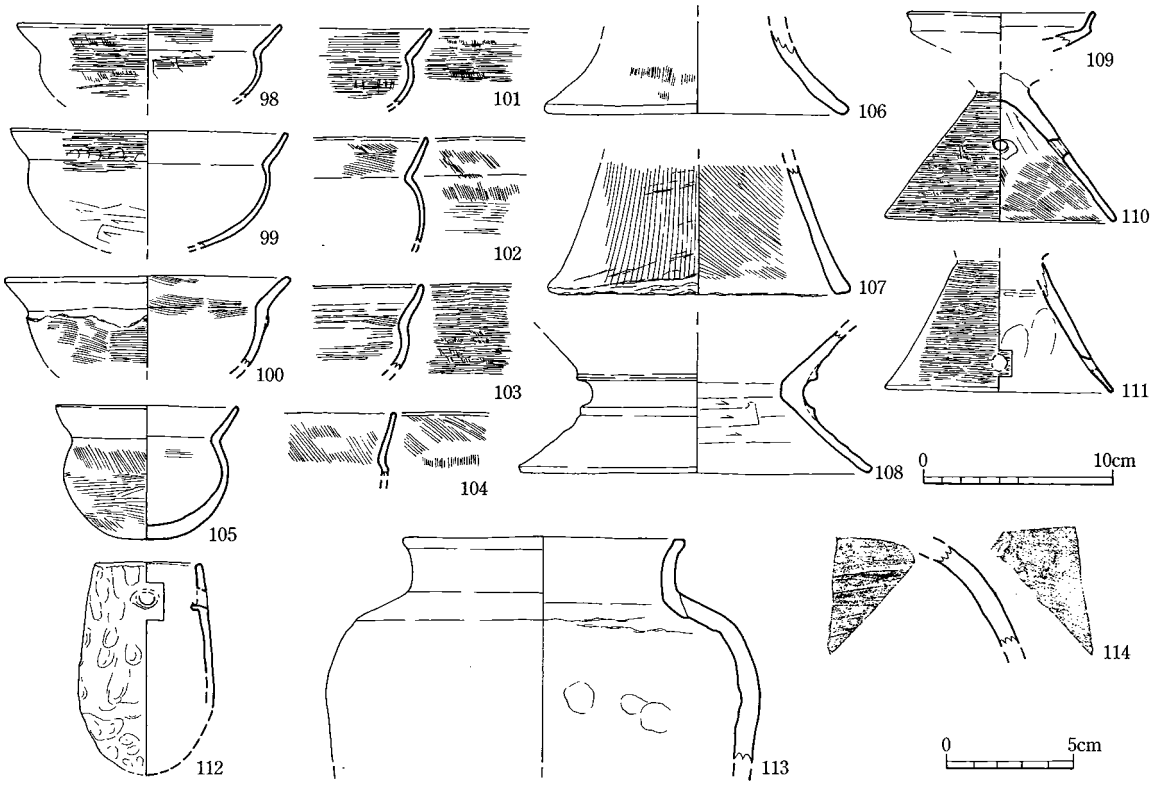
第47図　18号竪穴住居跡出土土器実測図②（29は1/4、他は1/3）



第48図　18号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/4）



第49図　18号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/4）



第50図　18号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（113・114は1/3、他は1/4）

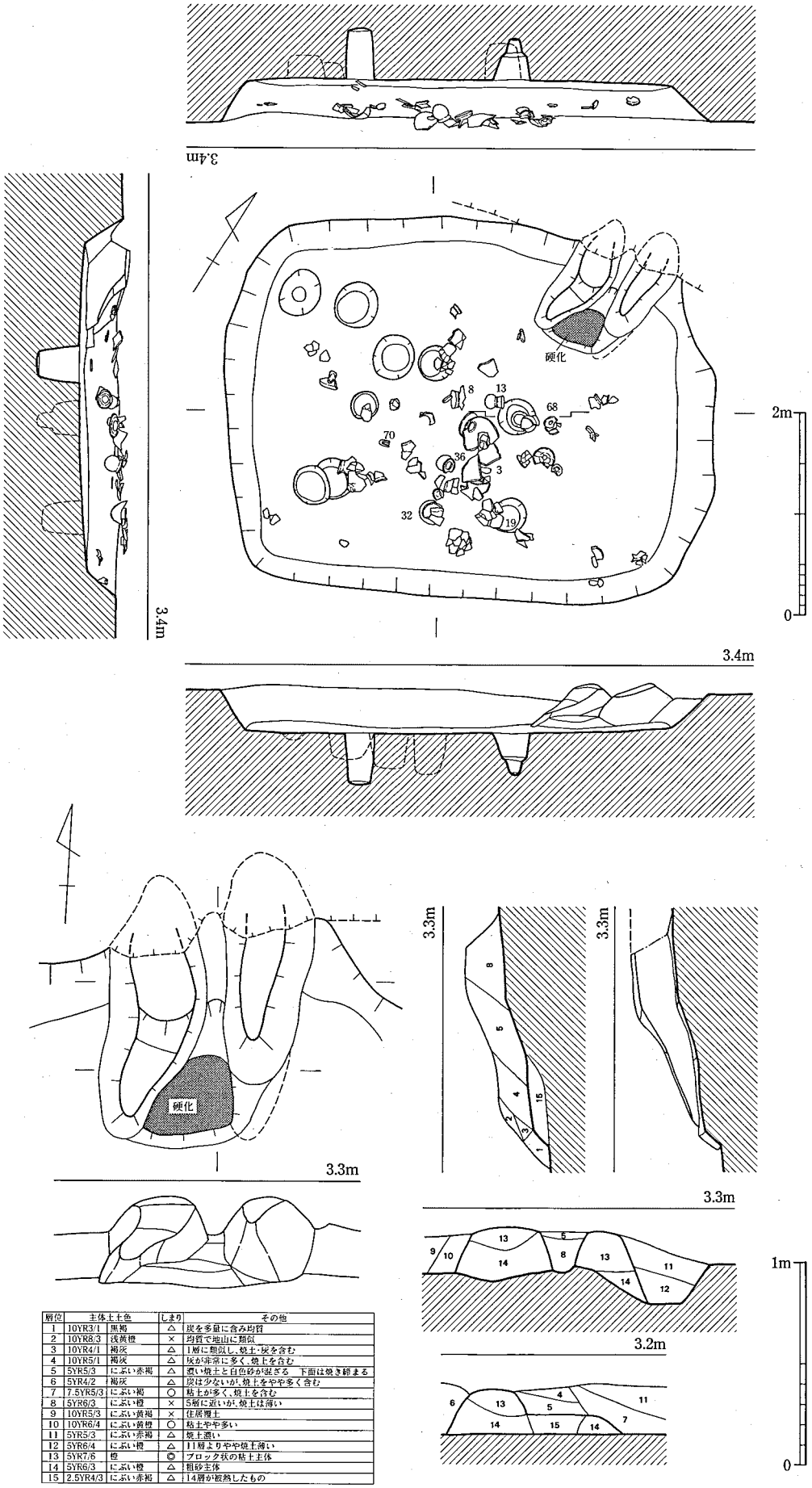
吉備系の甕口縁部破片。79～89は高坏坏部。79～83は坏部破片。84～89は脚部破片。89は穿孔残る。90～97は埦。90～94は磨かれており、丁寧な作り。96はケズリ後ナデを行うが、外面口縁付近は未調整のままである。97は外面タテハケであるが、粘土の接合痕が残る。98～99・101～104は小型精製器種の小型丸底鉢。100は外面に接合痕を残す粗雑な作りの鉢。全体に煤が付着する。105は小型の鉢。外面は一部ハケが残るナデ、内面ナデ。106・107は器台、基部。107は端部指オサエ。108は鼓形器台。109～111は小型器台。109は受部。110・111は脚部。110は二箇所穿孔。112は蛸壺、底部を欠く。113は半島系陶質土器壺。井戸出土の破片と接合。外面暗黒灰色、内面青灰色。調整は内外面ともヨコナデ、頸部から口縁にかけては特に強いナデ。内面頸部に接合痕、内面にヨコナデ前の指オサエの痕跡が残る。焼成は堅緻で、混和材は少ない。114は半島系陶質土器。壺の肩部破片か。暗灰褐色、断面は暗赤褐色。焼成は堅緻で、混和材は非常に少ない。

19号竪穴住居跡（図版9、第51図）

調査区南西中央よりに位置する。非常に残りの良い住居である。プランは長方形を呈し、主軸方向はN 27°Wである。規模は長軸4.82 m、短軸3.72 m、遺構面からの深さは41 cmを測る。住居北隅にカマドがつく。住居覆土は、4層に分かれ、上2層が炭化物粒の微粒を多量に含む黒褐色土のレンズ状の堆積になっており、下の層に土器が多く含まれる。下2層はにぶい黄色土が堆積する。住居中央に集中して残りの良い土器が多く投棄されている。

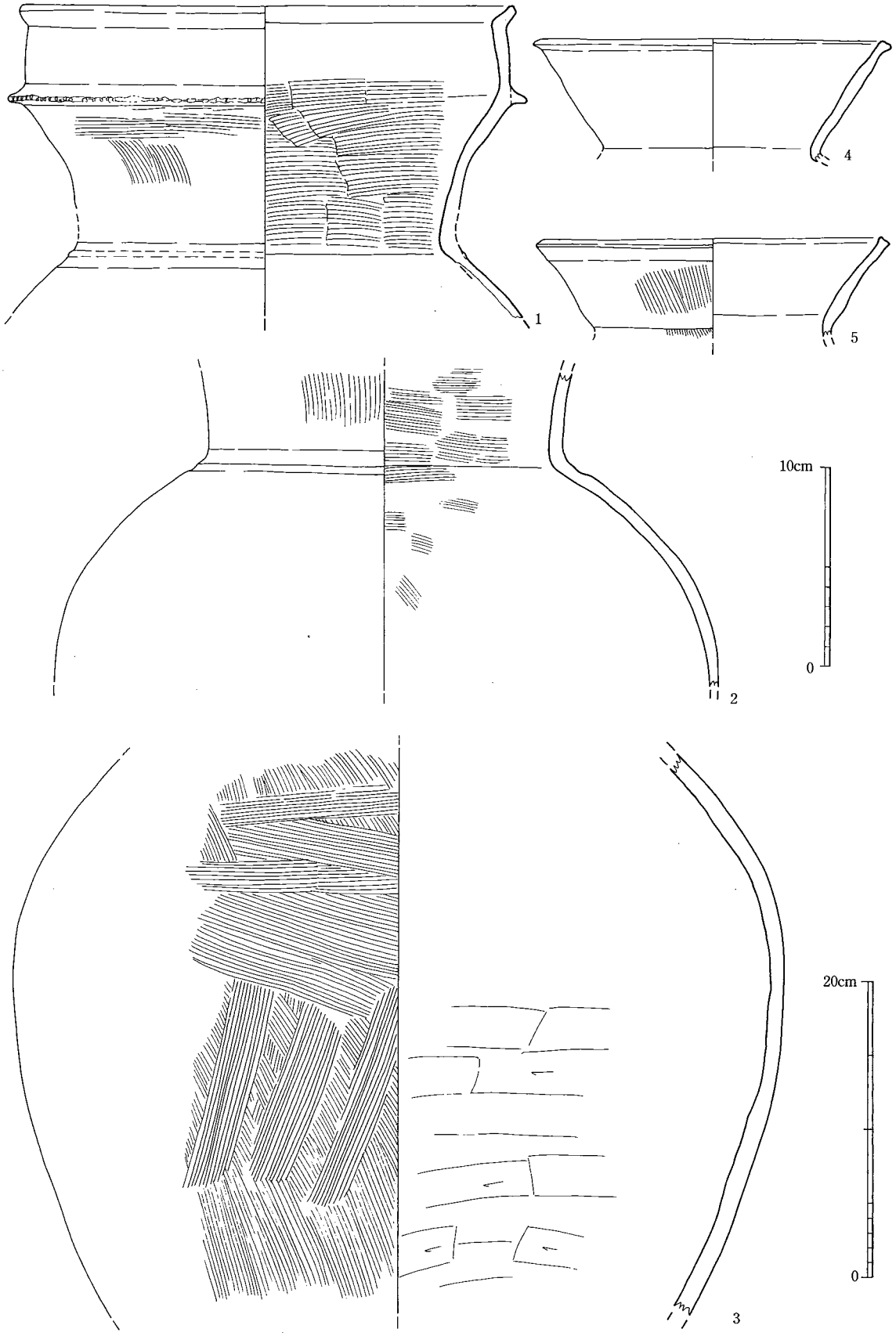
カマド（図版9、第51図）

住居の北東隅に位置し、そこから対面の南壁中央部付近を向く主軸をなす。煙道部付近は残

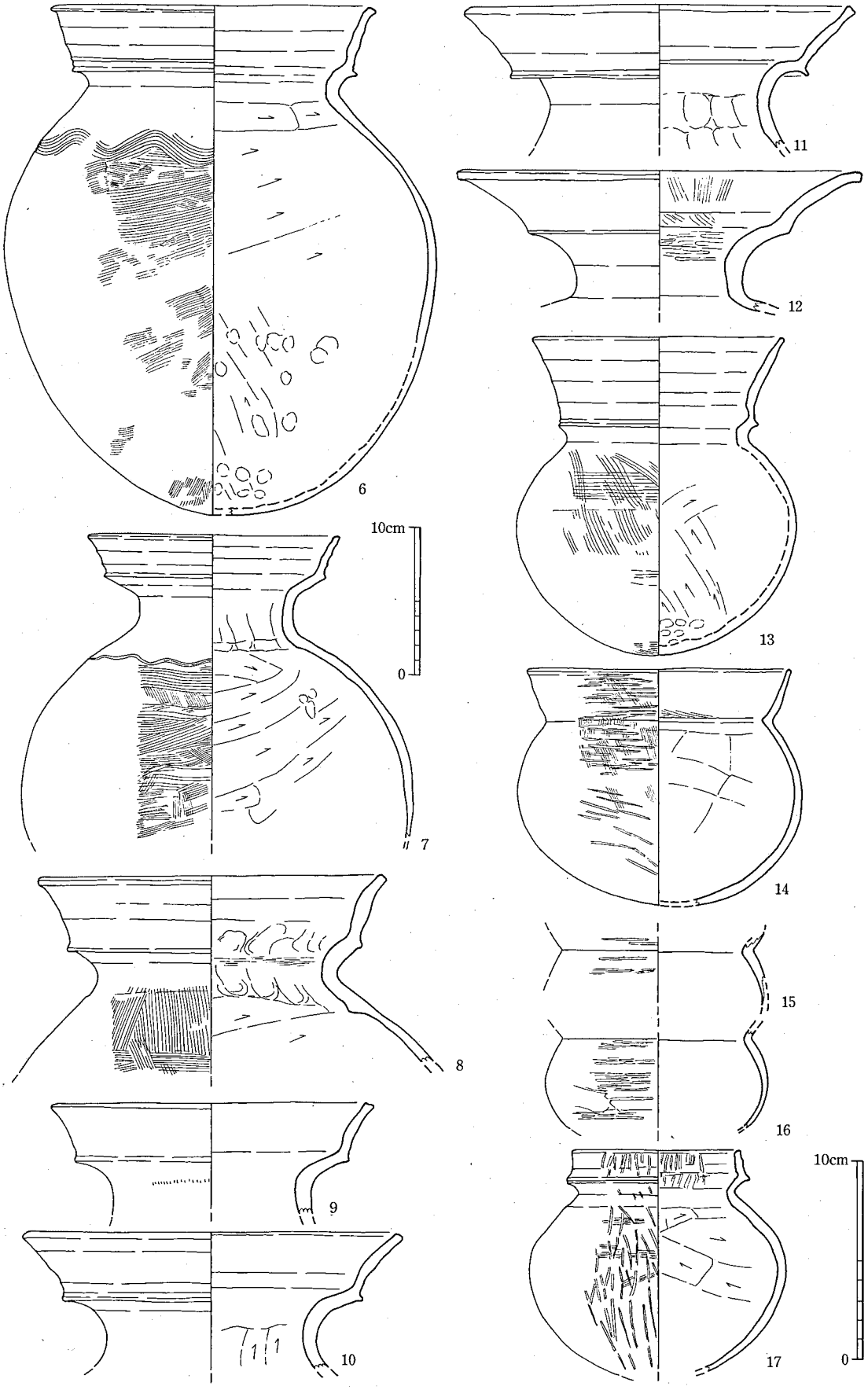


層位	主体土土色		しまり	その他
1	10YR3/1	黒褐	△	炭を多量に含み均質
2	10YR8/3	浅黄橙	×	均質で地山に類似
3	10YR4/1	褐灰	△	1層に類似し、焼土・灰を含む
4	10YR5/1	褐灰	△	灰が非常に多く、焼土を含む
5	5YR5/3	にぶい赤褐	△	濃い焼土と白色砂が混ざる　下面は焼き締まる
6	5YR4/2	褐灰	△	炭は少ないが、焼土をやや多く含む
7	7.5YR5/3	にぶい褐	○	粘土が多く、焼土を含む
8	5YR6/3	にぶい橙	×	5層に近いが、焼土は薄い
9	10YR5/3	にぶい黄褐	×	住居覆土
10	10YR6/4	にぶい黄橙	○	粘土やや多い
11	5YR5/3	にぶい赤褐	△	焼土濃い
12	5YR6/4	にぶい橙	△	11層よりやや焼土薄い
13	5YR7/6	橙	◎	ブロック状の粘土主体
14	5YR6/3	にぶい橙	△	粗砂主体
15	2.5YR4/3	にぶい赤褐	△	14層が被熱したもの

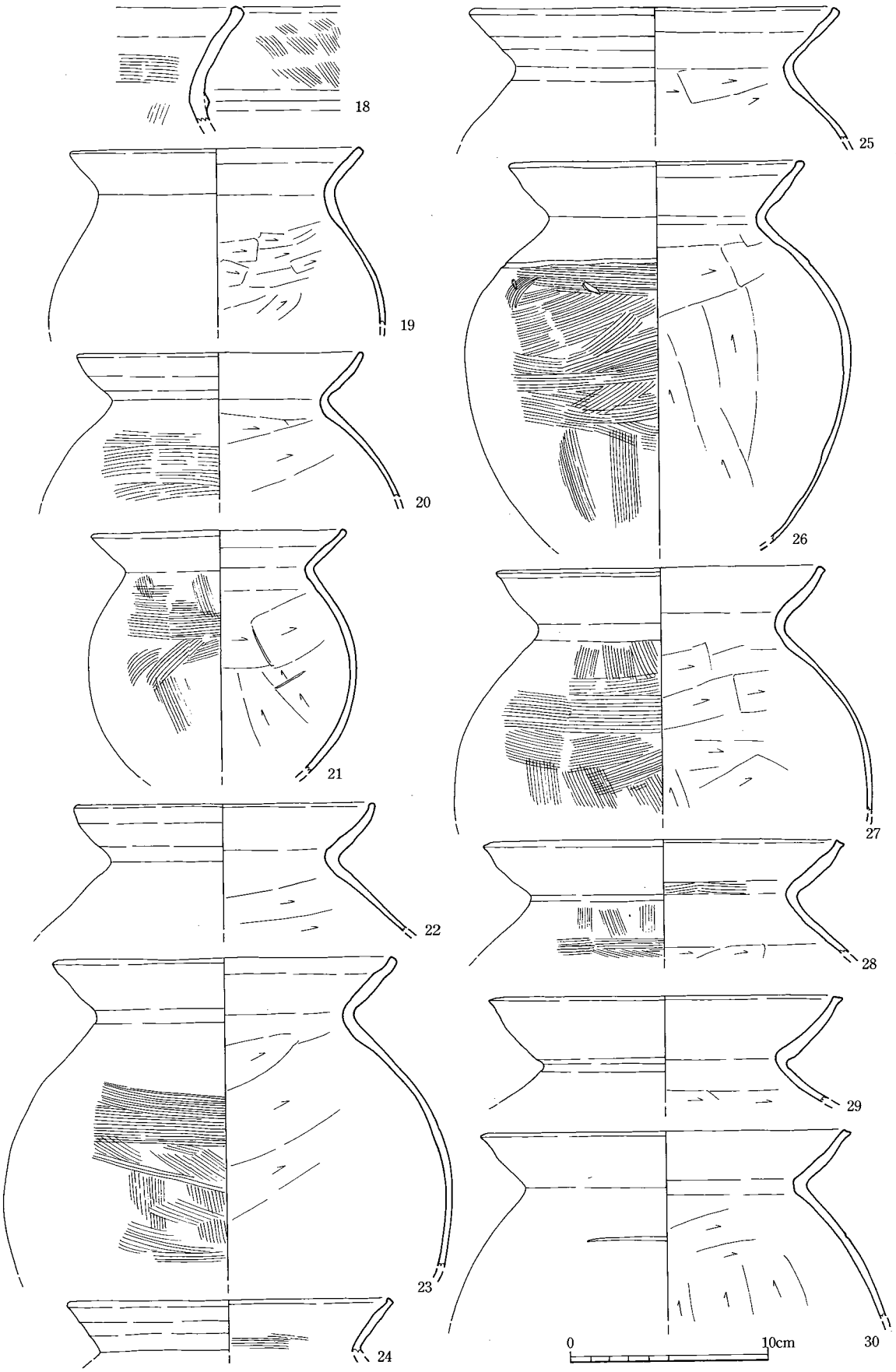
第51図　19号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）



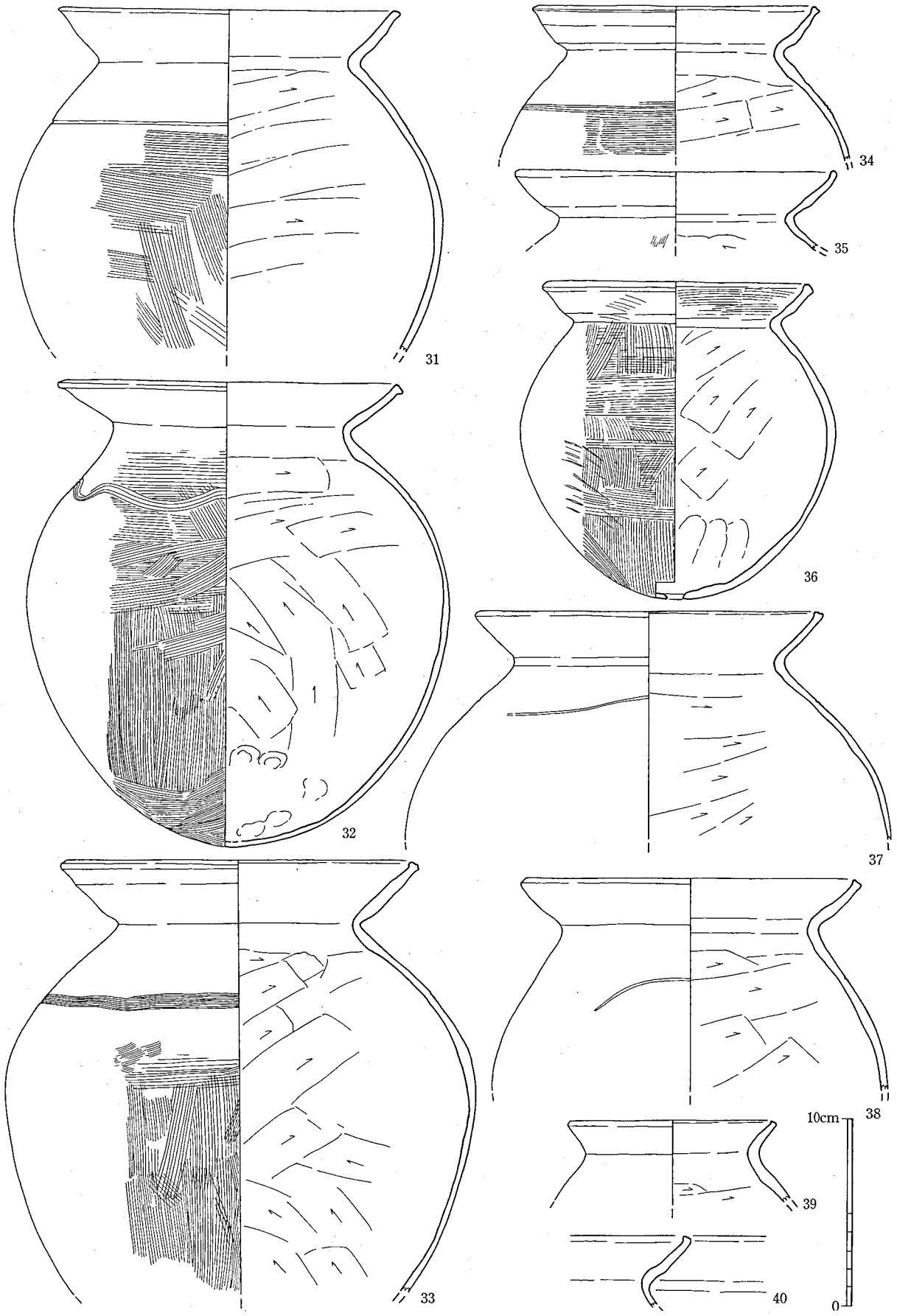
第52図　19号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



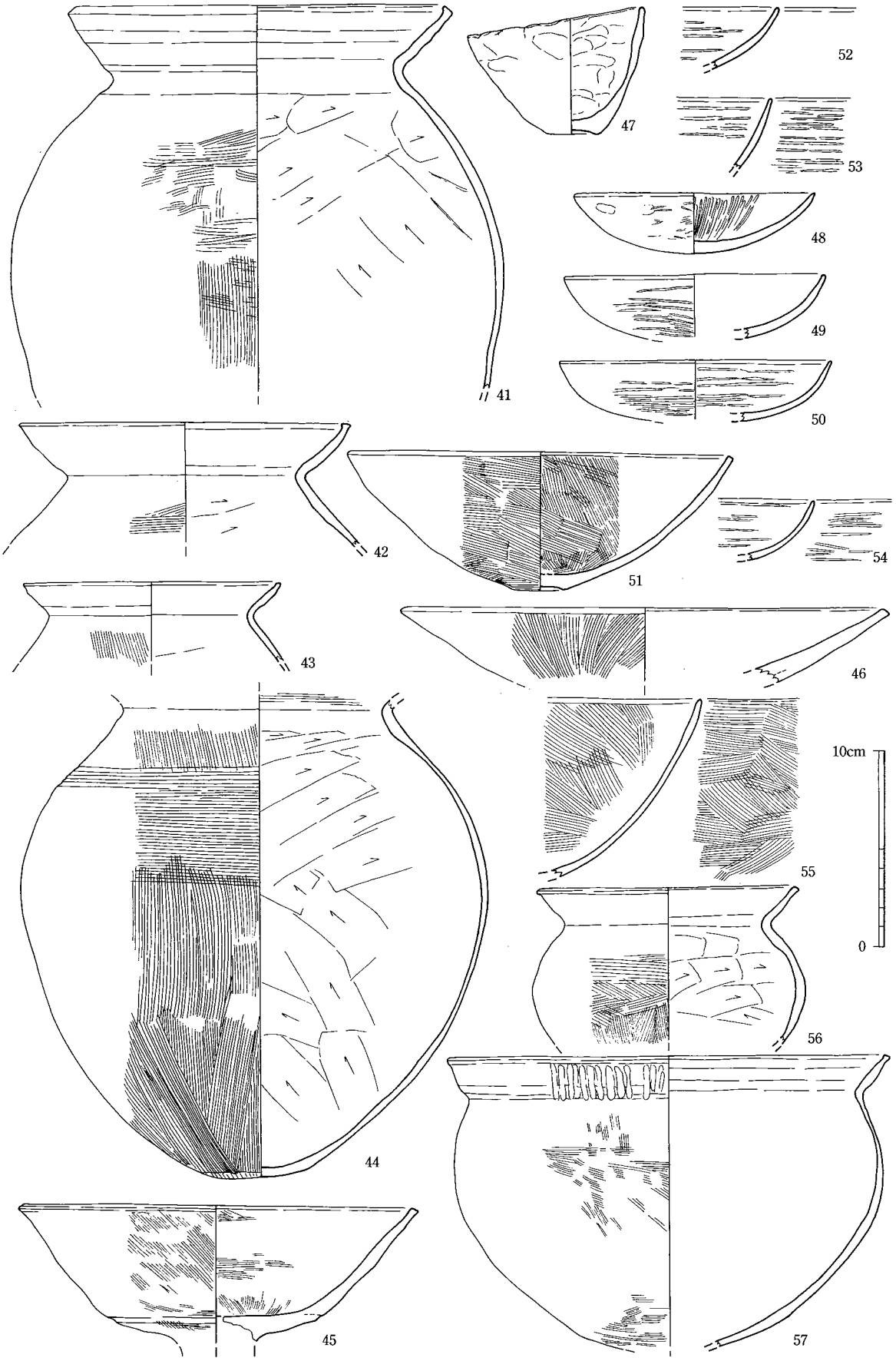
第53図　19号竪穴住居跡出土土器実測図②（7は1/4、他は1/3）



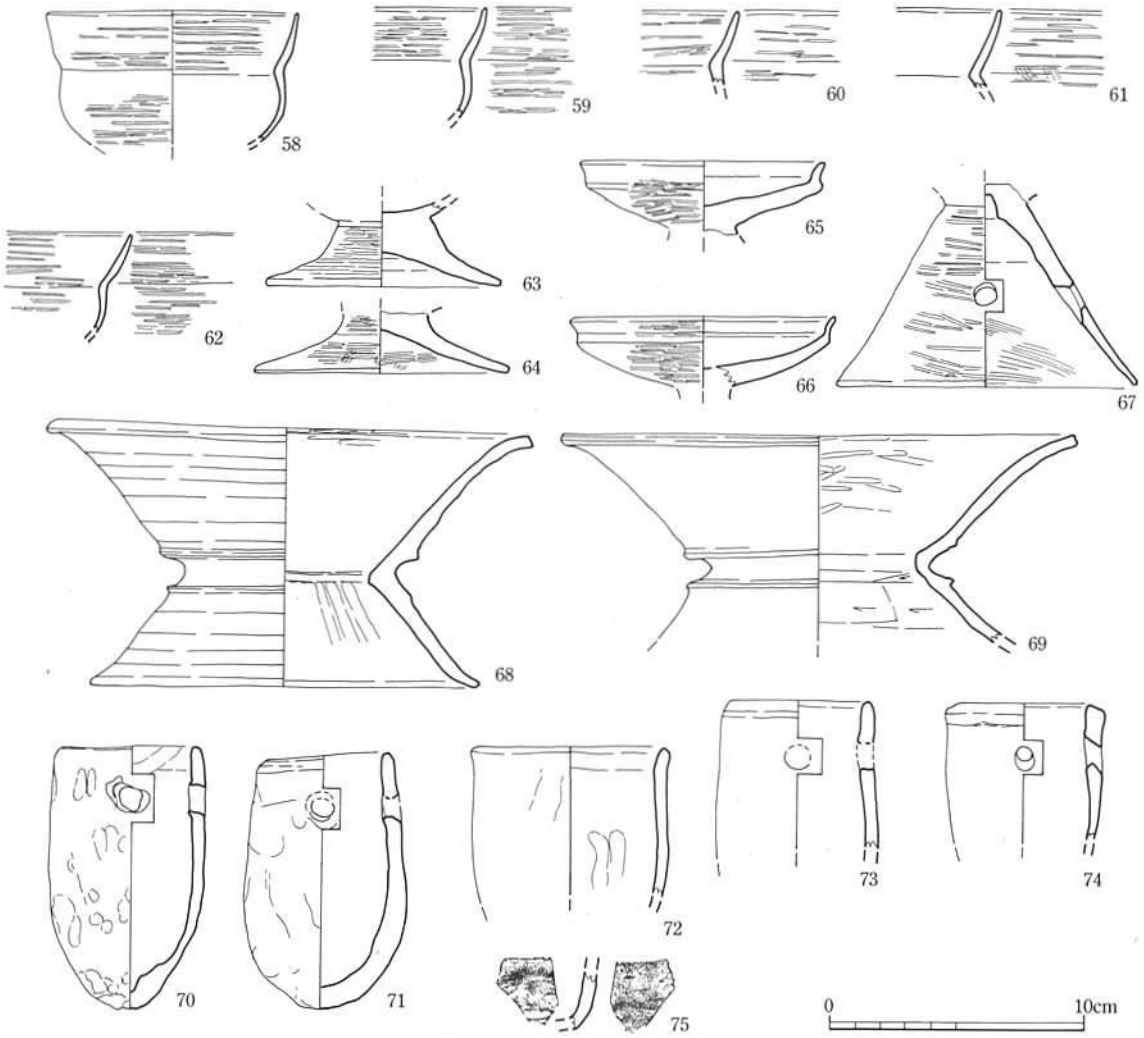
第54図　19号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）



第55図　19号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）



第56図　19号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（1/3）



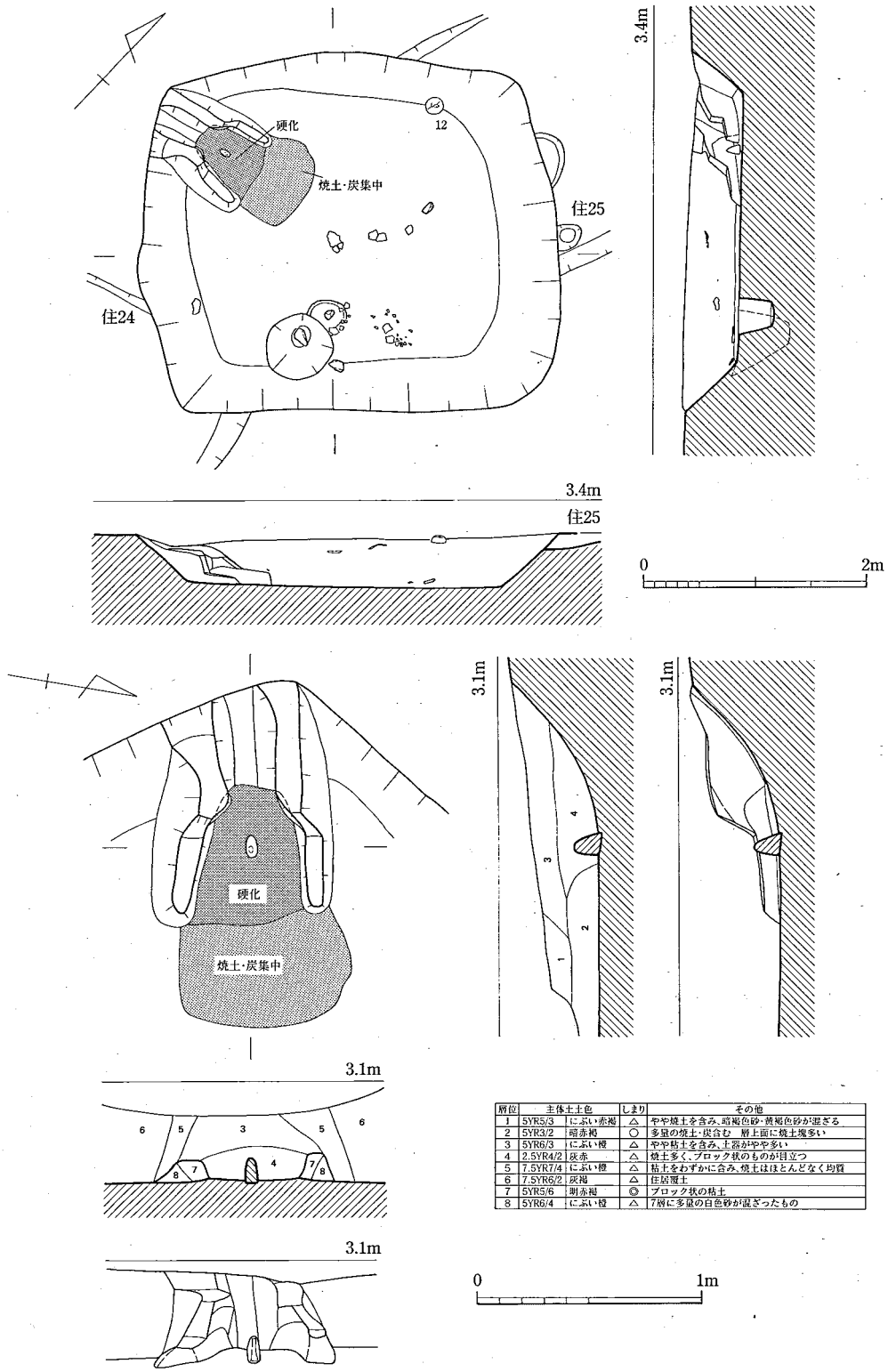
第57図　19号竪穴住居跡出土土器実測図⑥（1/3）

りがよく、燃焼部付近で右袖は消失し、左袖は西側へやや屈曲している。消失した右袖も外側に屈曲し、燃焼部が両側に広がる可能性もあるが、右袖はほぼ直線的に連続していたと思われる。燃焼部は周辺の住居床面よりも10㎝程度高く、非常に焼き締まっており、この燃焼部において残留磁化測定を行っている（分析結果は141頁参照）。燃焼部から煙道部に向け一定程度高くなり、再び傾斜は非常に緩やかとなる。なお、煙道の先端付近は溝4で削られているが、溝底面に若干粘土を含む壁体の連続部分の範囲が認められる。壁体の上部は、ブロック状の粘土主体で非常に強固に構築されており、下部は粗砂主体で脆い。（坂元）

19号竪穴住居跡熱残留磁化測定資料採取状況

出土土器（図版25～27、第52～57図）

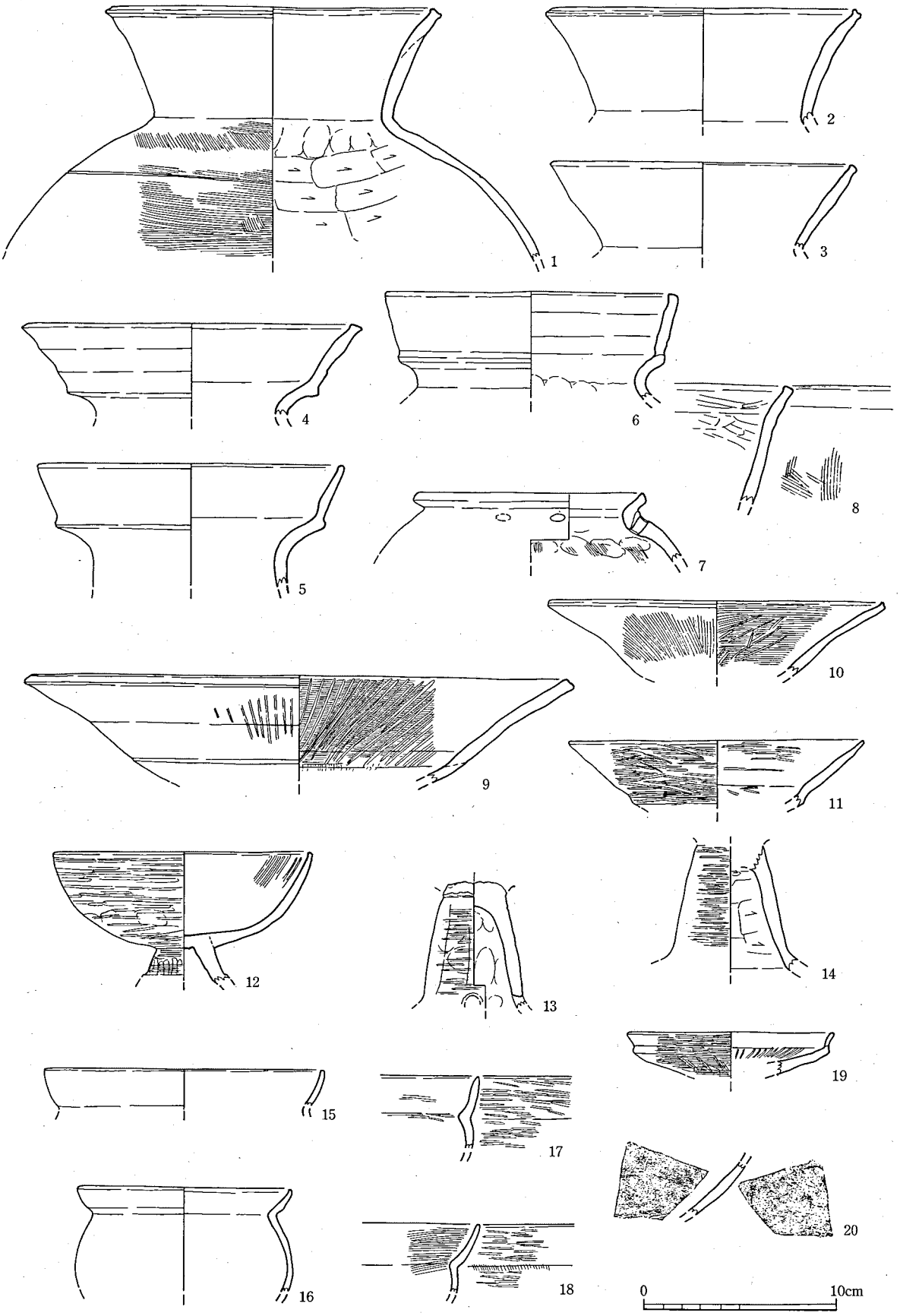
1は在地系複合口縁壷口縁～肩部破片。一次口縁に刻目を施し、肩部に突帯を貼付ける。2は在地系壷の頸部～肩部破片か。3は壷胴部。



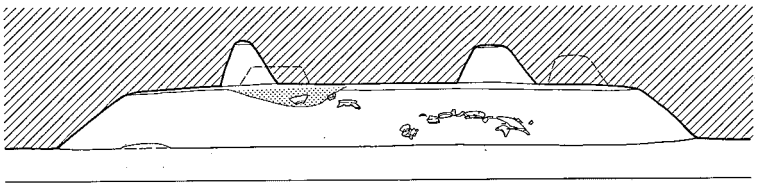
層位	主体土土色	しまり	その他
1	5YR5/3	にぶい赤褐	△	やや焼土を含み、暗褐色砂・黄褐色砂が混ざる
2	5YR3/2	暗赤褐	○	多量の焼土・炭含む　層上面に焼土塊多い
3	5YR6/3	にぶい橙	△	やや粘土を含み、土器がやや多い
4	2.5YR4/2	灰赤	△	焼土多く、ブロック状のものが目立つ
5	7.5YR7/4	にぶい橙	△	粘土をわずかに含み、焼土はほとんどなく均質
6	7.5YR6/2	灰褐	△	住居覆土
7	5YR5/6	明赤褐	◎	ブロック状の粘土
8	5YR6/4	にぶい橙	△	7層に多量の白色砂が混ざったもの

第58図　20号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）

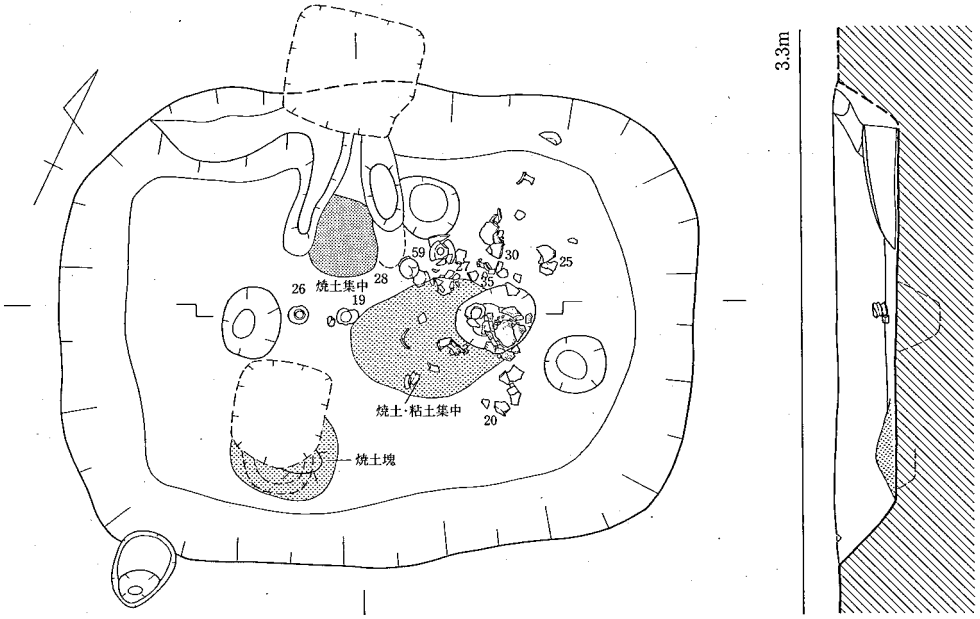
4・5は短頸壷。6～12は二重口縁壷。6～11は山陰系。6は櫛描状の波状文を、7は波状文を施す。6は押し出しによる丸底。13は小型の山陰系二重口縁壷。外面に煤が付着。14～16は小型精製器種の短頸壷。17は吉備系の短頸壷。18は在地系甕の口縁。19～44布留系の甕。26・



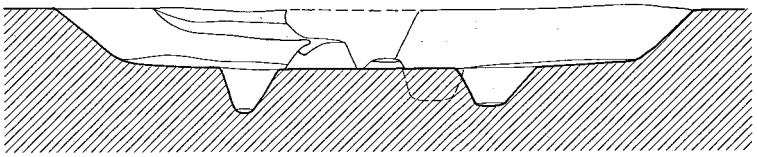
第59図　20号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

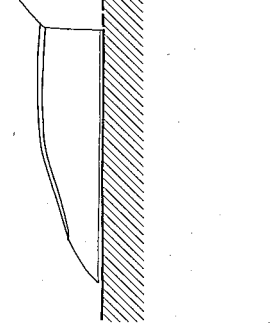


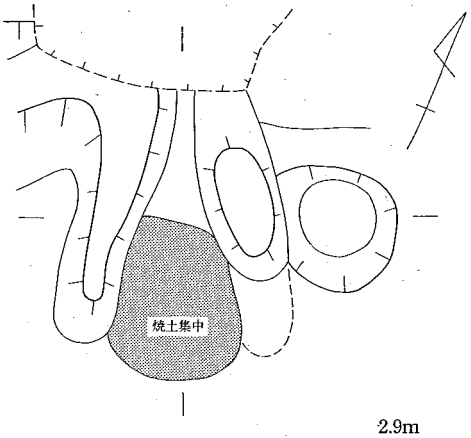
3.3m

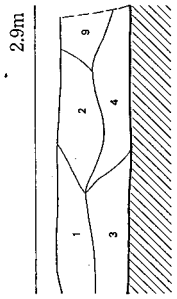


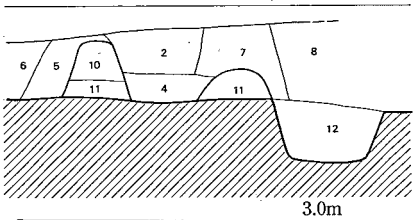
3.3m



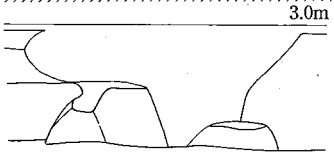


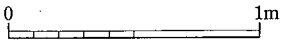




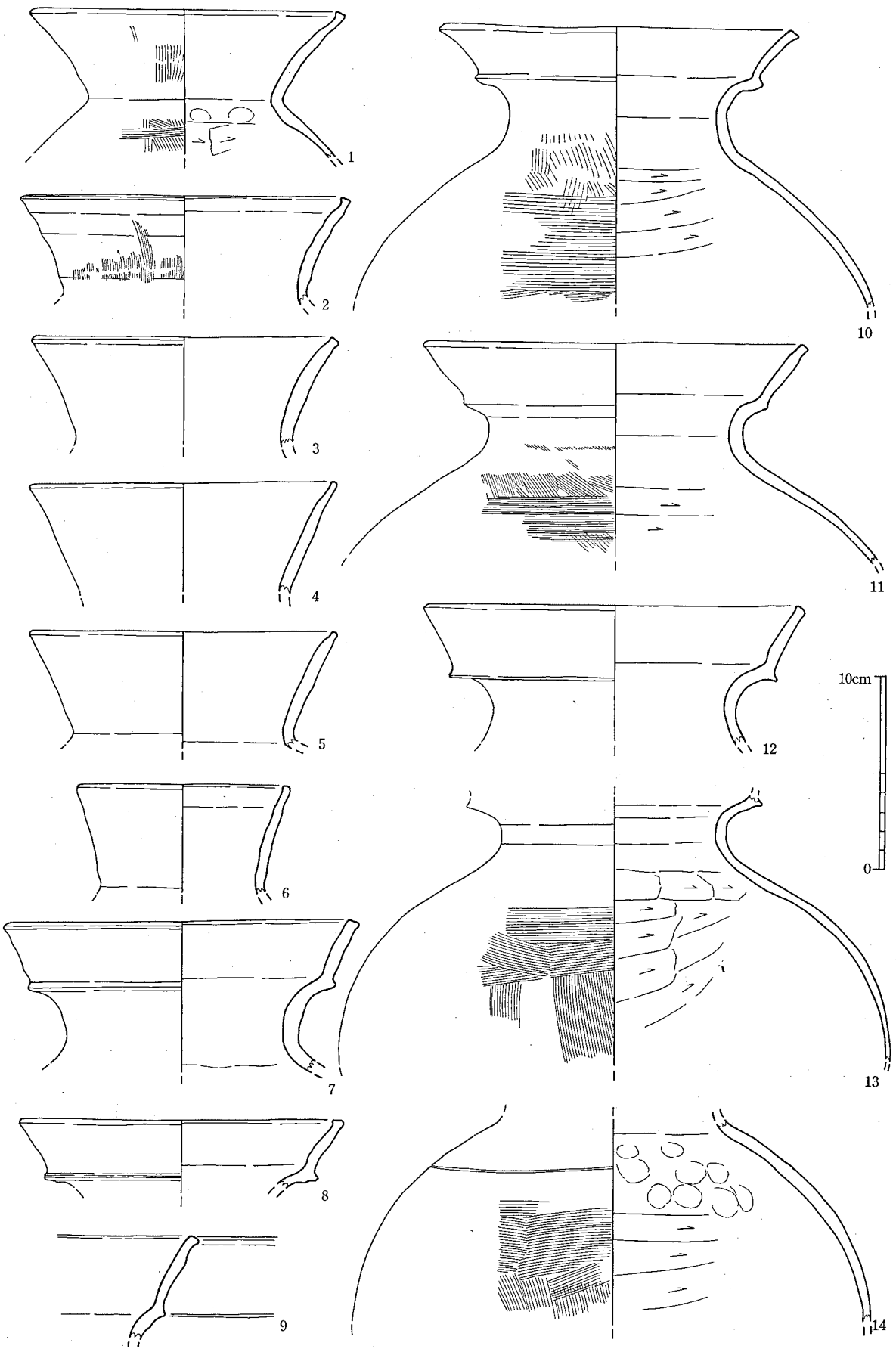


層位	主体土土色		しまり	その他
1	5YR5/2	灰褐	×	住居覆土に焼土が混ざったもの
2	7.5YR6/2	灰褐	×	やや粘土を含む
3	2.5YR6/6	橙	△	焼土主体で全体に均質
4	5YR5/3	にぶい赤褐	×	炭・濃い焼土をわずかに含む
5	5YR6/1	褐灰	×	住居覆土にわずかに粘土が混ざったもの
6	7.5YR5/2	灰褐	×	住居覆土　粘土・焼土は極めて少ない
7	7.5YR5/3	にぶい褐	△	粘土やや多く、焼土・炭をわずかに含む
8	7.5YR7/2	明褐灰	×	住居覆土
9	5YR7/3	にぶい橙	×	全体にやや黄色味がかり、粘土をわずかに含む
10	5YR7/2	にぶい黄橙	△	粘土は他層よりも多いが、少なく粘性も弱い
11	10YR6/4	灰黄褐	×	10層よりさらに粘土少なく、白色砂を多く含む
12	10YR5/1	褐灰	×	住居内ピット覆土　粘土をほとんど含まない

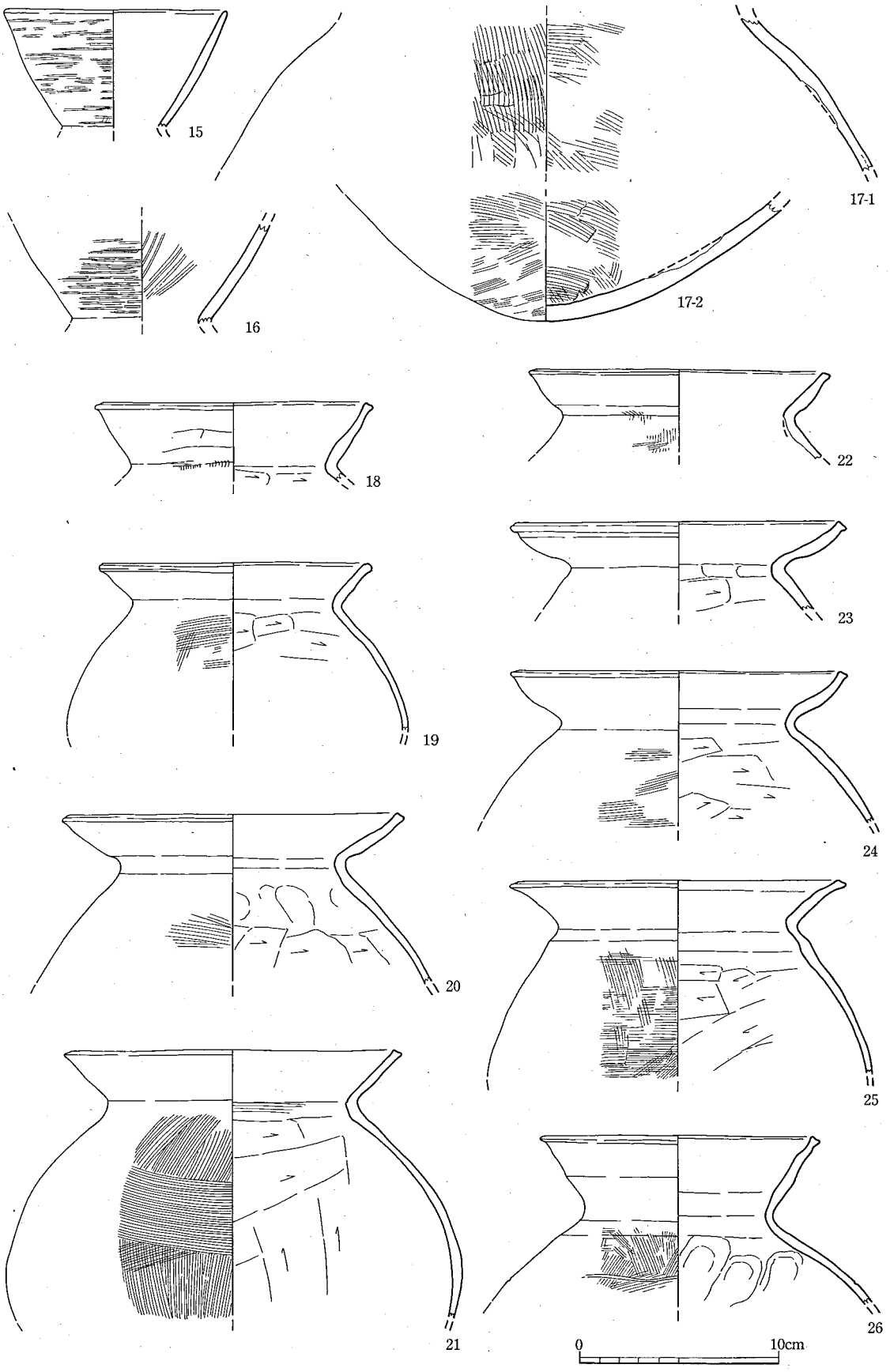




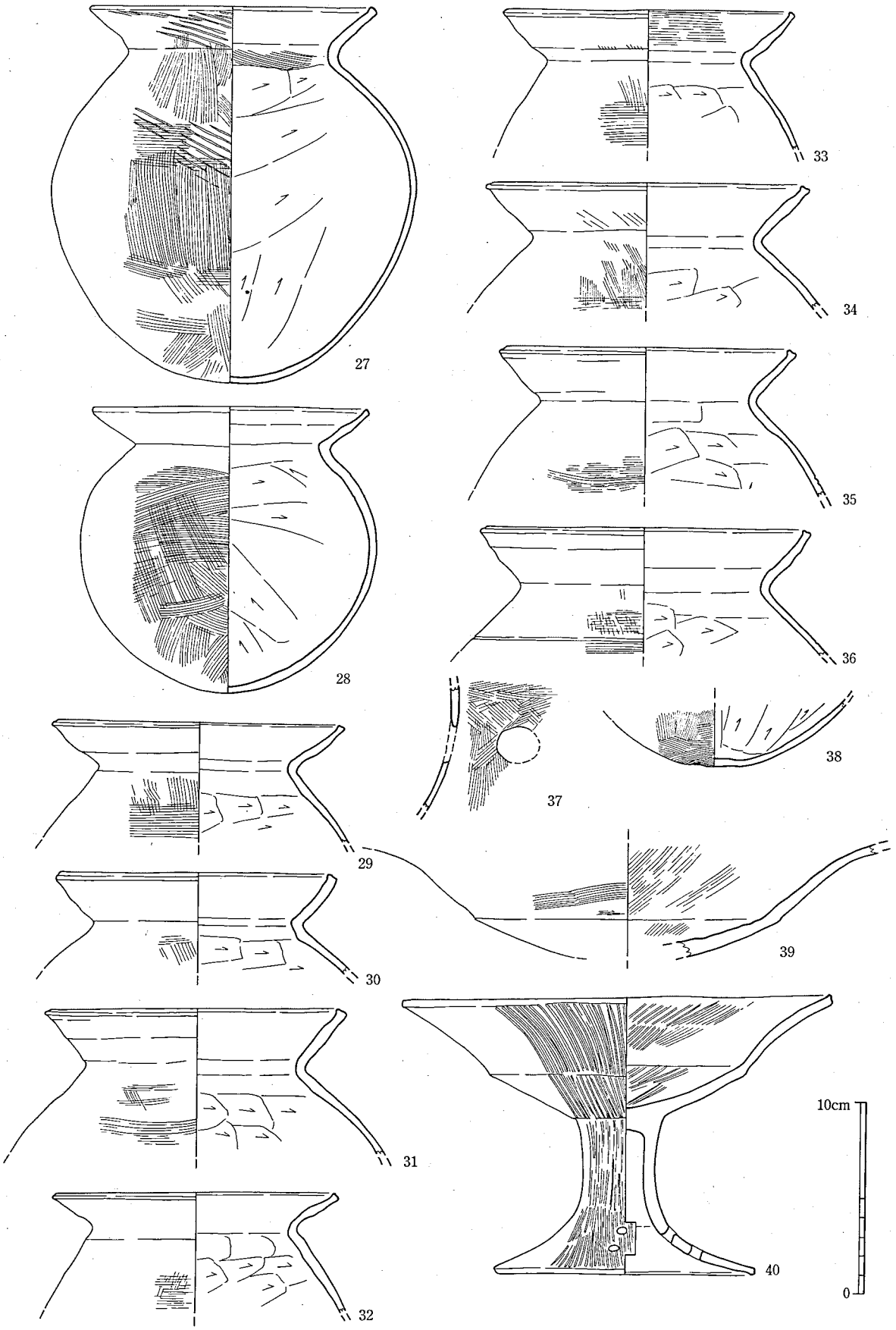
第60図　21号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）



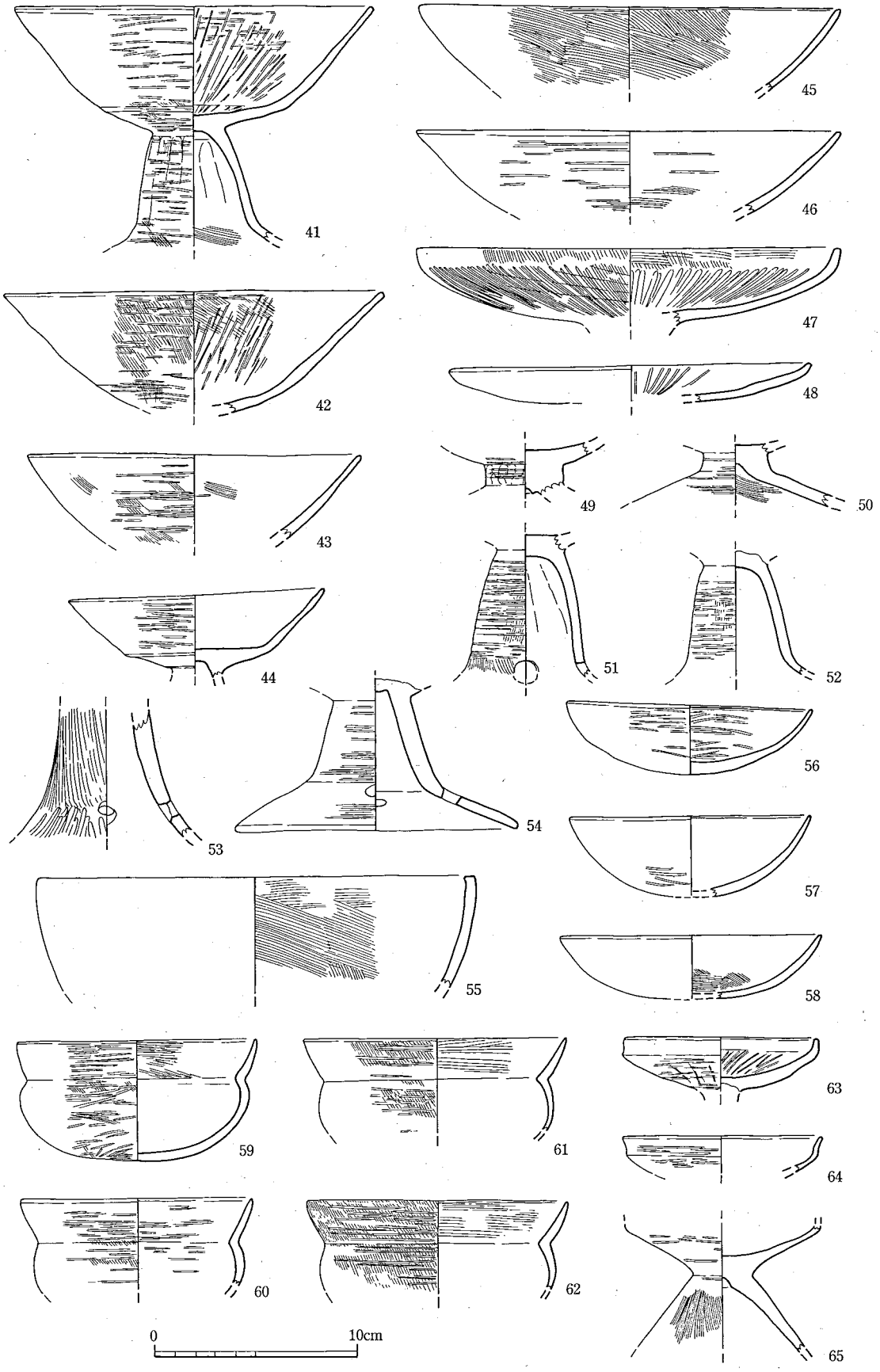
第61図　21号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



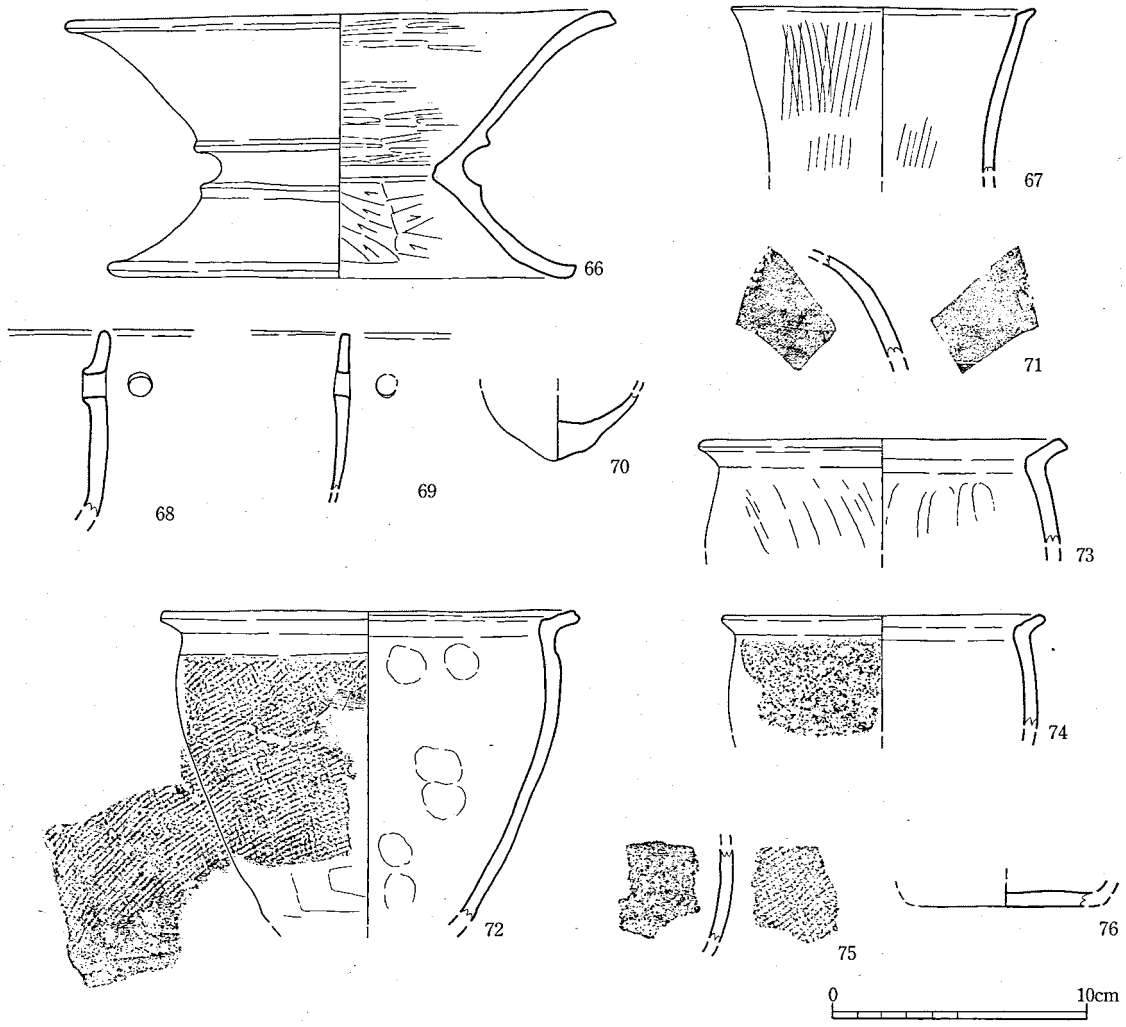
第62図　21号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）



第63図　21号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）



第64図　21号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）



第65図　21号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（1/3）

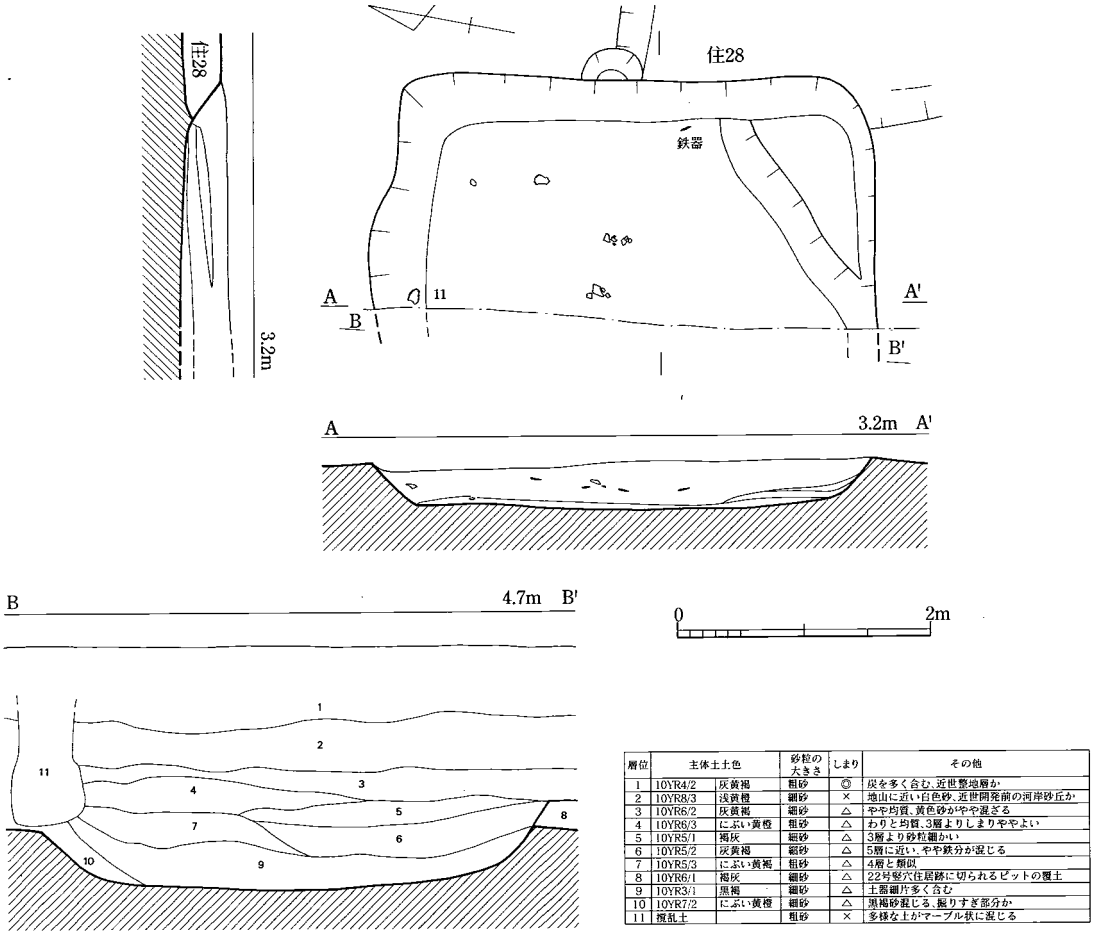
30・31・37・38に1条の沈線が、34・44に3条の沈線が、32・33に櫛描波状文が施される。26は沈線以外にも刺突で装飾を行う。36は焼成後外面よりの底部穿孔。44は二次被熱により赤変。45・46は高坏坏部。45には脚部との接合部が残る。47～55は 埦。47は手づくねで全体に歪む。51は内外面ハケ調整で、底部に径2 cmの凹みを作る。56・57は鉢。57は口縁部外面にヨコハケ後縦方向のミガキを施す。58～62は小型丸底鉢。63・64は脚付鉢の脚部。65～67は小型器台。65・66は受部。67は脚部を残す。68・69は鼓形器台。69は内外面とも煤付着。70～74は蛸壺。70は内面中央に刺突による凹み。72は穿孔部残らず。75は半島系陶質土器。壺の底部破片か。外面は黒灰褐色、内面は暗灰褐色。調整は内外面ともナデ。

20号竪穴住居跡（図版10、第58図）

調査区南西に位置し、24・25号竪穴住居跡を切る。プランは長方形で、主軸方向はN 41°Wである。規模は長軸3.72 m、短軸3.20 mと小型である。遺構面からの深さは48 cmを測る。住居北西隅にカマドを設ける。土器の出土は住居東側に集中する。

カマド（図版10、第58図）

住居の西隅に位置し、東隅とのほぼ対角線軸に近い主軸をなす。燃焼部は周辺の住居床面と



層位	主体土土色		砂粒の大きさ	しまり	その他
1	10YR4/2	灰黄褐	粗砂	◎	炭を多く含む.近世整地層か
2	10YR8/3	浅黄橙	細砂	×	地山に近い白色砂.近世開発前の河岸砂丘か
3	10YR6/2	灰黄褐	細砂	△	やや均質.黄色砂がやや混ざる
4	10YR6/3	にぶい黄橙	粗砂	△	わりと均質.3層よりしまりややよい
5	10YR5/1	褐灰	細砂	△	3層より砂粒細かい
6	10YR5/2	灰黄褐	細砂	△	5層に近い.やや鉄分が混じる
7	10YR5/3	にぶい黄褐	粗砂	△	4層と類似
8	10YR6/1	褐灰	細砂	△	22号竪穴住居跡に切られるピットの覆土
9	10YR3/1	黒褐	細砂	△	土器細片多く含む
10	10YR7/2	にぶい黄橙	細砂	△	黒褐砂混じる.掘りすぎ部分か
11	撹乱土		粗砂	×	多様な土がマーブル状に混じる

第66図　22号竪穴住居跡・同西壁土層断面実測図（1/60）

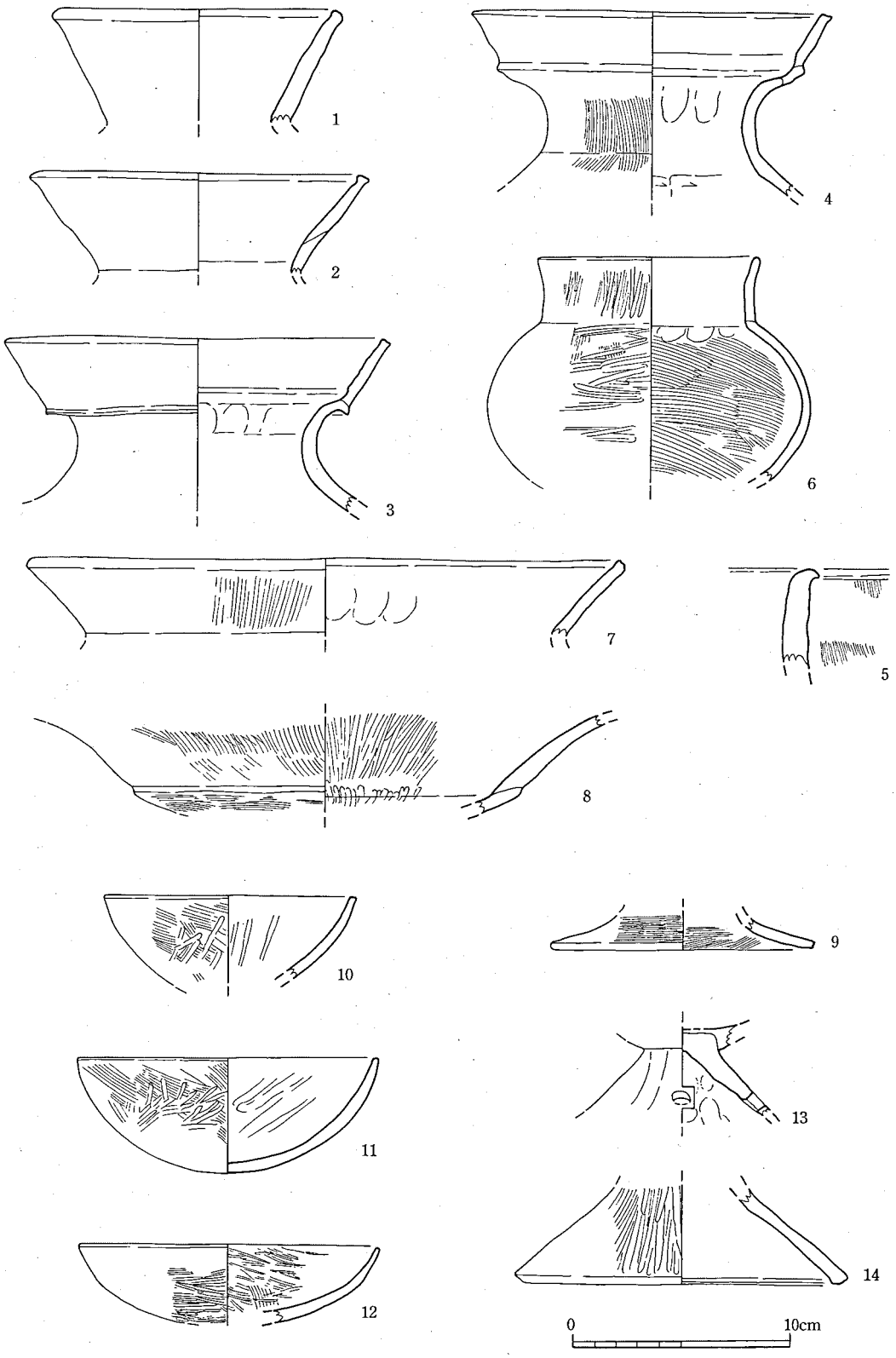
高さはあまり変わらず、非常に強く赤変しやや硬化している。その燃焼部は住居壁面に非常に近く、煙道部は短い。また、燃焼部前面には焼土と炭が著しく集中する範囲が認められる。本調査区中唯一の明確な石製の支脚が検出され、ほぼ元位置のままと考えられる。壁体は、ブロック状の粘土主体で強固に構築され、下部外側は細砂を多量に含みやや脆い。　（坂元）

出土土器（図版27、第59図）

1～3は直口壷。1は外面肩部以下ハケ。肩部に一条沈線。4～6は二重口縁壷。5・6は山陰系。7は山陰系の無頸壷。肩部に二箇所の穿孔を行う。8は小型の鉢口縁破片。外面ハケ、内面ケズリ。9～14は高坏。9～11は坏部。13・14は脚部のみ残る。12は椀形の坏部をもつ。13は接合部に工具痕が残る。15・16は鉢。15は鉢口縁部破片。16は外面に煤が付着する。17・18は小型丸底鉢。19は小型器台受部。20は半島系陶質土器。壷胴下部か。焼成は堅緻で、暗灰褐色を呈する。混和材は少なく、胎土は非常に密である。

21号竪穴住居跡（図版10、第60図）

調査区南中央よりに位置する。二箇所を4号石組遺構に壊されるものの残りの良い住居である。プランは長方形で、主軸方向はN 27° Wである。規模は長軸50.5 m、短軸3.82 m、遺構面か



第67図　22号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

らの深さは48 cmを測る。カマドは北壁中央に作られる。住居南東には、焼土塊があり、住居中央西では焼土と粘土が集中して分布する。また住居西側では、完形の土器が数多く出土している。

カマド（図版10、第60図）

長方形プランに近い住居で長辺となる北壁の中央部付近に位置し、住居の南北の軸線方向に近い主軸をなす。燃焼部は周辺の住居床面とほぼ同じ高さで、若干赤変する程度で被熱はさほど顕著ではない。煙道部の内部は、燃焼部分よりも急激に狭くなり、また4号石組遺構により住居壁面近くは大きく削られている。右袖は、左袖に比べ非常に残りが悪く、下部が部分的にしか残存していない。壁体は左袖の上部でも粘土が少なく、その下部や右袖はさらに粘土が少なくなり、全体的にさほど強固に構築されてはいない。右袖のすぐ外側にピットが掘り込まれるが、覆土に焼土は非常に少なく、カマドに付随するものかは判然としない。（坂元）

出土土器（図版27・28、第61～65図）

1～6は直口壷。7～14は山陰系二重口縁壷。14は肩部に一条沈線を施す。10・11・13・14は肩部の張らないタイプ。15・16は小型精製器種の直口壷。17－1と17－2は同一個体。壷の胴部か。調整は粗く、内外面ともハケ目を施す。18～38は布留系の甕。26・36は一条沈線を、31・35は波状沈線を肩部に施す。27は外面タタキ痕が残る。37は胴部破片に穿孔されたもの。38は甕底部。39～54は高坏。39～48は坏部が残るもの、49～54は脚部の残るもの。40は脚部に縦に並んで二箇所穿孔。41～43は坏部の外面はハケ後ミガキであるが、ハケが残る。54は脚部穿孔が二箇所残存、元来は4箇所か。55～58は椀。59～62は小型丸底鉢。59は外面に煤が付着。63～65は小型器台。63・64は受部。66は鼓形器台。67は器台上半部。68～70は蛸壺。71は半島系陶質土器。器種不明。黒灰褐色、断面黒赤褐色。内外とも横ナデ。外面灰かぶり。72は半島系軟質土器の深鉢。にぶい暗赤褐色。外面格子目タタキ。内面ナデ。部分的に指圧痕残る。類例は第13次撹乱-262。73～76は半島系軟質土器鉢。茶褐色。73は外面右下方へのナデ、内面縦方向のナデ。74は外面格子目タタキ、内面ヨコナデ、部分的にタテナデ。75は外面格子目タタキ、内面ヨコナデ。76は鉢底部。調整はヨコナデ。長石を含む。

22号竪穴住居跡（図版11、第66図）

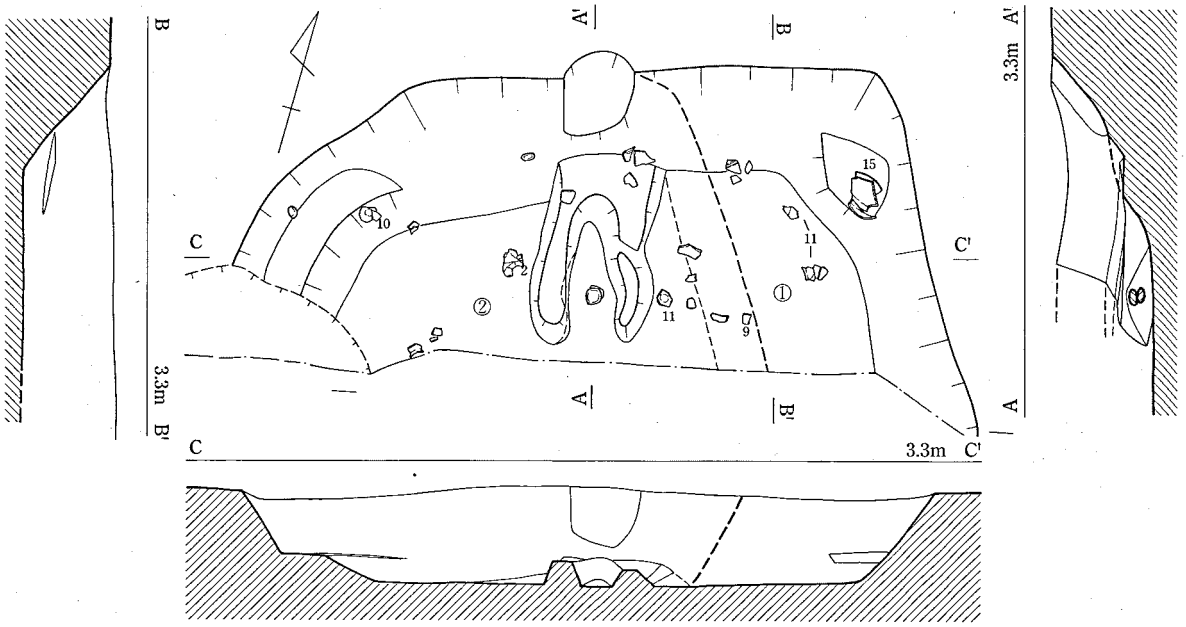
調査区西壁中央やや南よりに位置し、28号竪穴住居跡を切る。住居の西側半分は調査区外にある。プランは長方形か、主軸方向はN 12°Wである。規模は長軸3.98 m、短軸残存長1.92 m、遺構面からの深さは40 cmを測る。住居南東に段が設けられる。住居東壁付近からは、鉄器が出土している。

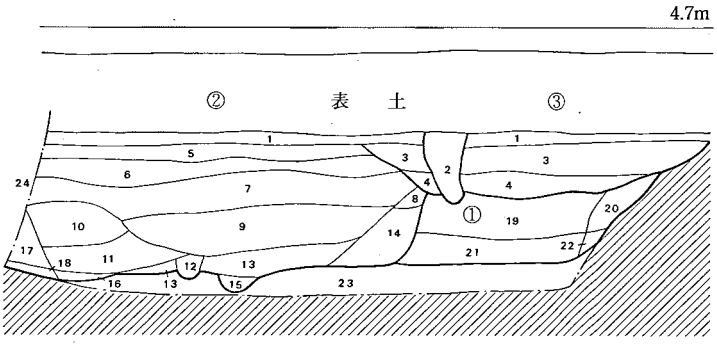
出土土器（図版23、第67図）

1～2は直口壷口縁部破片。3～5は山陰系二重口縁壷の口縁～頸部。5は大型品の口縁部破片。6は小型精製器種の短頸壷。7は在地系甕の口縁。8・9は高坏、8は坏部、9は脚部。10～12は椀。10・11は磨きの方向がランダム。13～14は小型器台の脚部。13は接合部が残る。

23号竪穴住居跡（図版11、第68図）

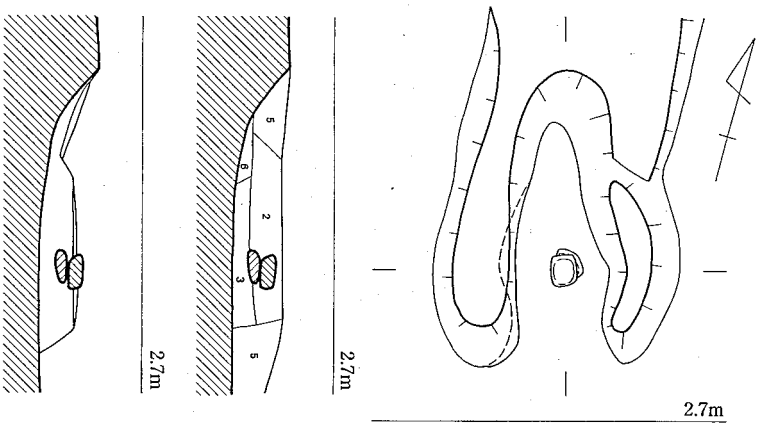
調査区南壁中央やや西よりに位置する。南半分は調査区外にある。この遺構は二軒の住居と





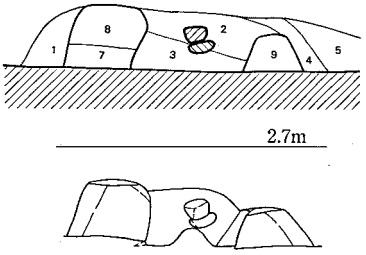
層位	主体土土色		砂粒の大きさ	しまり	粘性	焼土	炭	土器	備考
1	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△	×				
2	2.5Y4/4	オリーブ褐	細砂	×	×				撹乱
3	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△	×				③
4	2.5Y5/4	黄褐	細砂	△	×			○	
5	2.5Y4/3	オリーブ褐	細砂	×	×		△		
6	2.5Y5/4	黄褐	細砂	△	×		△		
7	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△	×		△	○	
8	2.5Y4/3	オリーブ褐	細砂	△	×				
9	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△	×				
10	10YR5/6	黄褐	細砂	△	△	◎		○	
11	10YR6/6	明黄褐	細砂	△	△	○		○	②
12	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	細砂	×	×		△		
13	2.5Y4/4	オリーブ褐	細砂	×	×		△		
14	2.5Y4/4	オリーブ褐	細砂	×	×				
15	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	細砂	×	×		△		
16	10YR6/6	明黄褐	細砂	×	×				
17	2.5Y5/3	黄褐	細砂	×	×				
18	2.5Y5/4	黄褐	細砂	△	×				
19	2.5Y4/4	オリーブ褐	細砂	△	×			○	
20	2.5Y4/4	オリーブ褐	細砂	△	×				
21	2.5Y5/4	黄褐	細砂	△	×				①
22	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△	×				
23	2.5Y7/4	浅黄	やや粗砂	×	×				地山
24	5Y3/1	オリーブ黄	細砂	×	○			○	井戸

①→②→③の順に古い

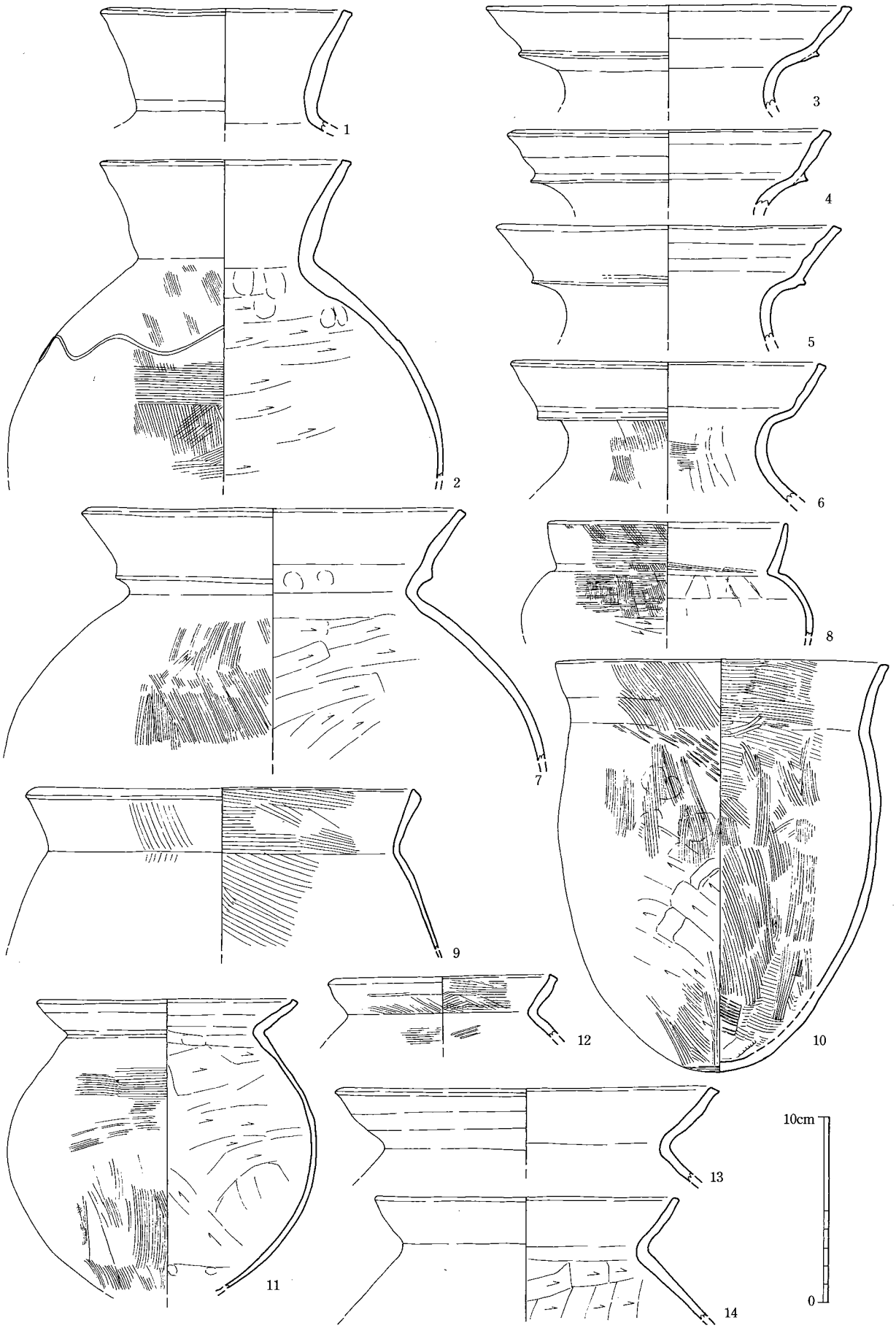


住居23

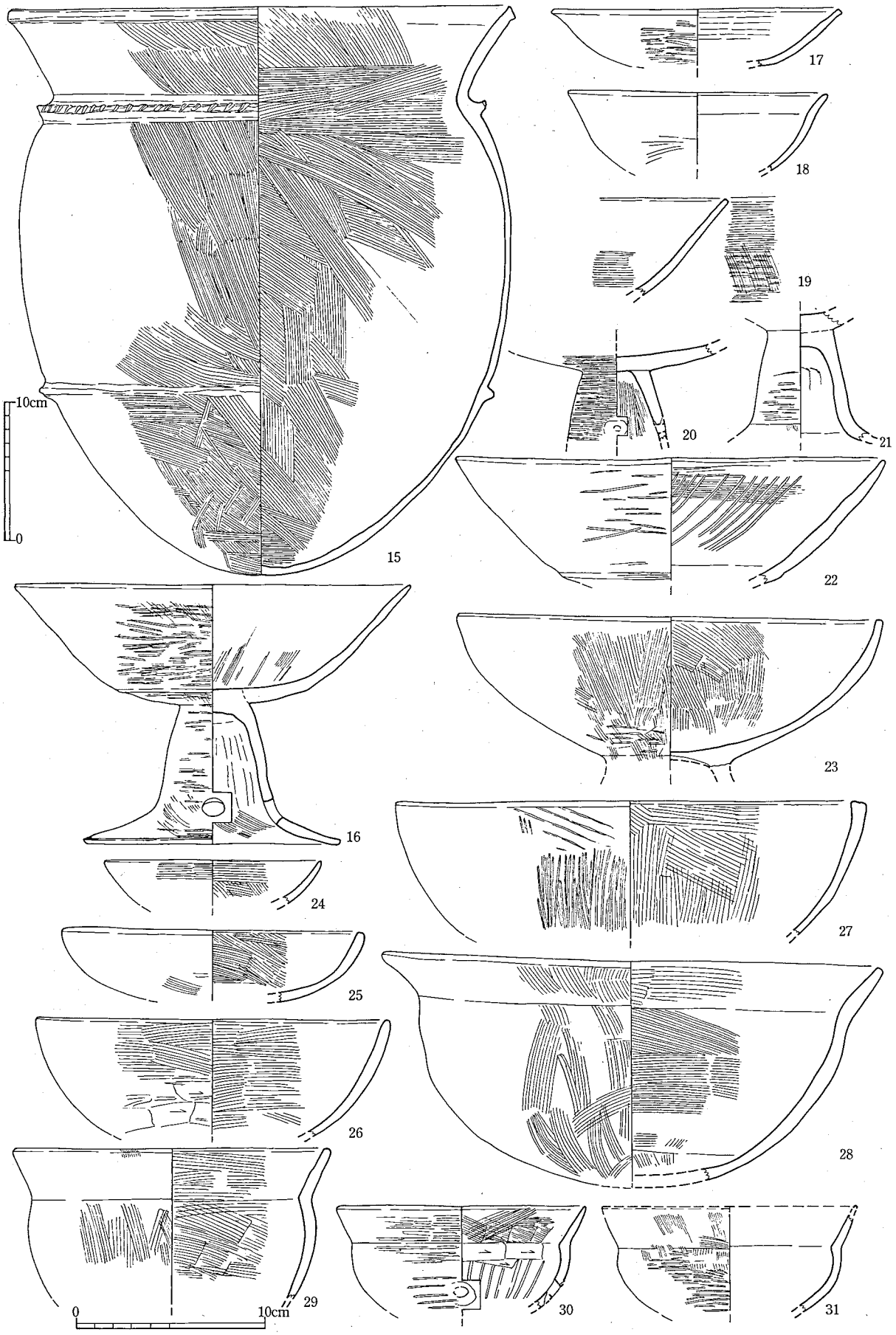
層位	主体土土色		しまり	その他
1	10YR5/4	にぶい黄褐	×	住居覆土
2	10YR4/4	褐	○	やや粘土を含む
3	5YR4/4	にぶい赤褐	◎	焼土主体で粘土をやや含む
4	10YR6/4	にぶい黄橙	○	やや粘土を含む
5	10YR3/4	暗褐	△	やや焼土が混ざる
6	10YR6/6	明黄褐	△	焼土主体
7	10YR6/4	にぶい黄橙	○	粘土を少量含む
8	7.5YR5/6	明褐	◎	粘土を多量に含む
9	7.5YR4/4	褐	○	粘土を多量に含む



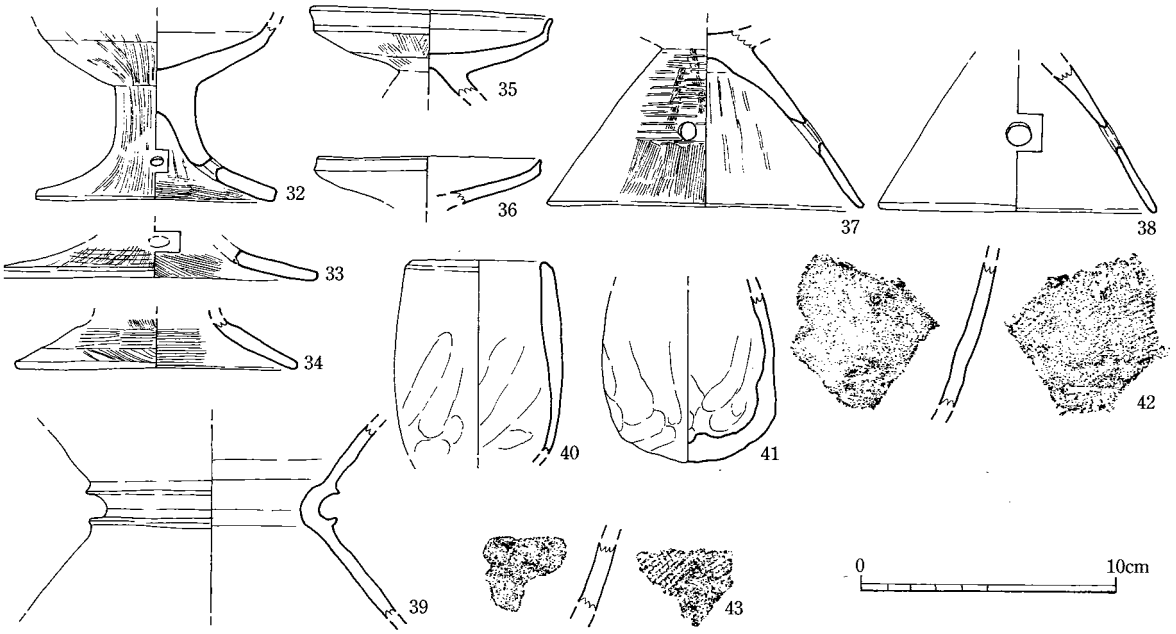
第68図　23号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）



第69図　23号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



第70図　23号竪穴住居跡出土土器実測図②（15は1/4、他は1/3）



第71図　23号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）

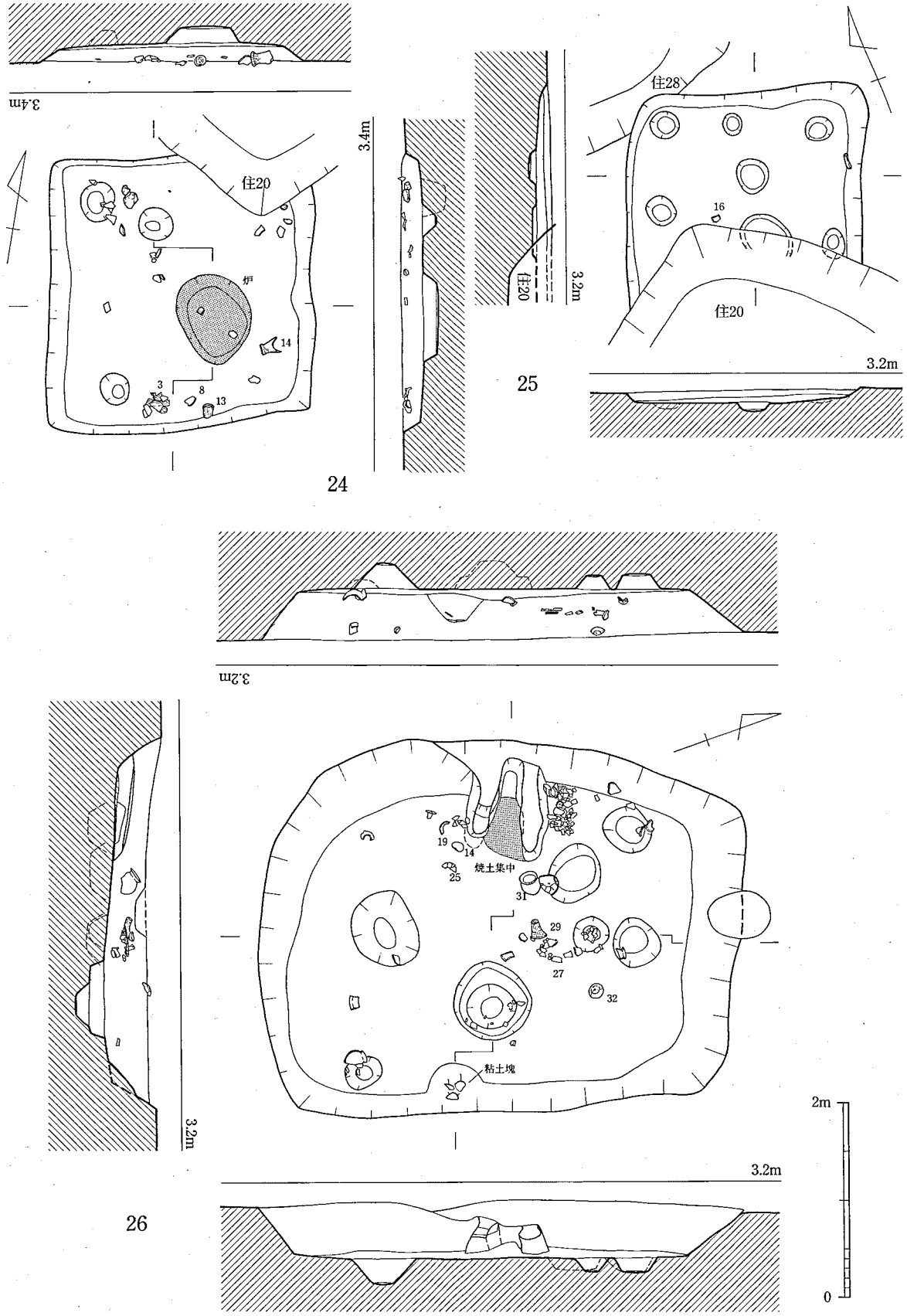
土坑が切りあっている。土層断面より、最初に東側の住居①が作られ、次に西側の住居②が作られ、最後に土層断面のみで確認される土坑③が作られていることがわかる。住居①は長軸残存長2.40 m、短軸残存長1.49 m、深さ70cm。住居②は西側を近世井戸に壊され、長軸残存長3.49 m、短軸残存長2.22m深さ77cmである。プランはいずれも方形か。主軸方向はともにN 18°Wである。住居②は住居北隅から東壁に沿って南北に伸びるカマドを設けている。また第10・11層には、焼土が多く含まれる。

カマド（図版11、第68図）

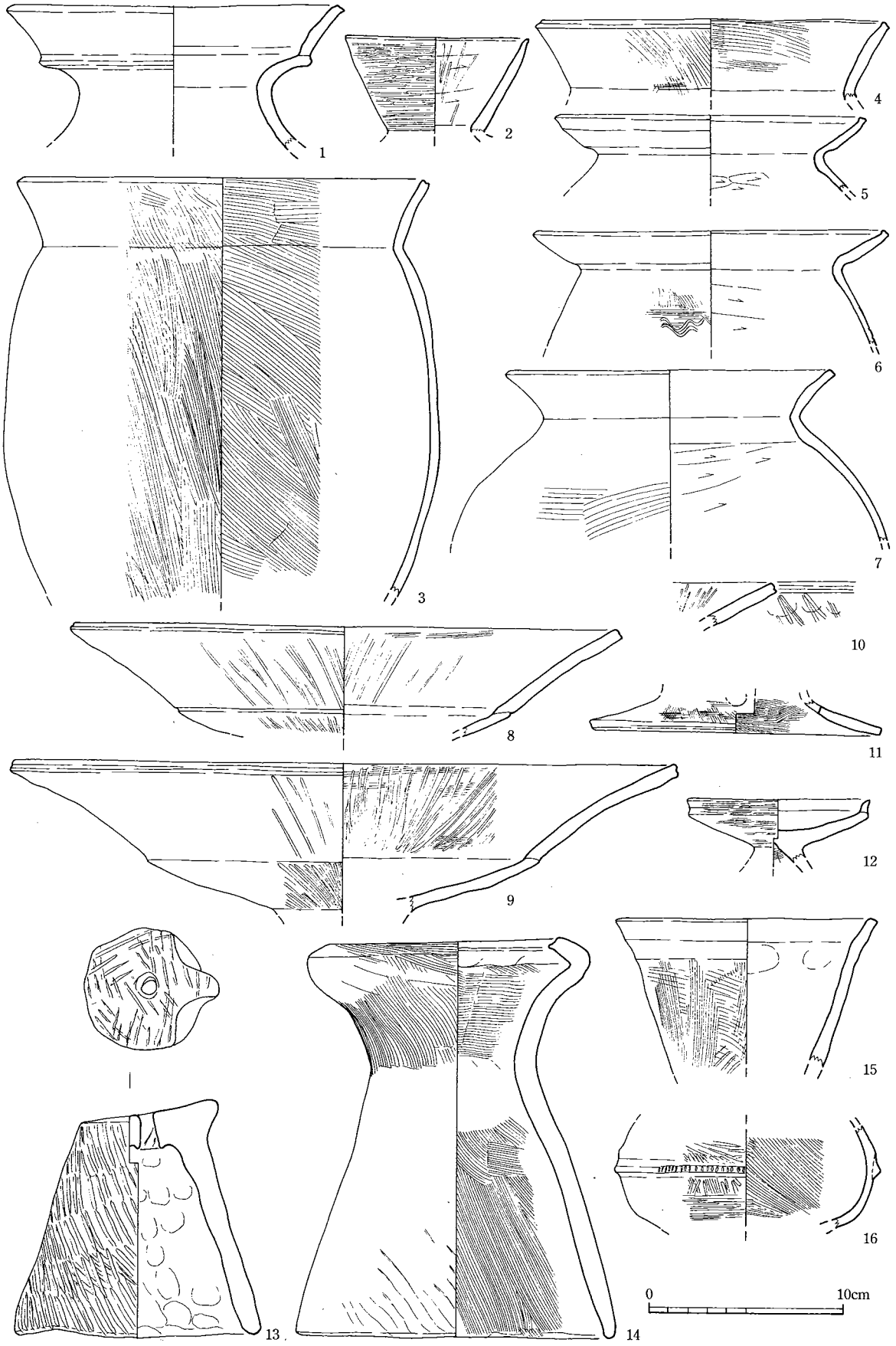
当初住居の北壁のほぼ中央に位置するカマドと思われたが、23号竪穴住居跡は2軒が切り合う結果となることから、カマドは東側の住居①に帰属することとなる。よって、本来はこの住居の東壁に沿って北東隅へ長くのびるカマドであったと思われる。また、その北東隅にあたる部分の壁面上部がやや抉れており、煙道の延長部分となる可能性もある。壁体は、粘土を多量に含む細砂との混合土で強固に構築され、煙道部は粗砂主体でやや脆い。燃焼部は周辺の住居床面とさほど変わらない高さだが、被熱は少なくさほど赤変していない。内部から角礫を検出しており、支脚に使用した可能性もあるが定かではない。（坂元）

出土土器（図版28、第69～71図）

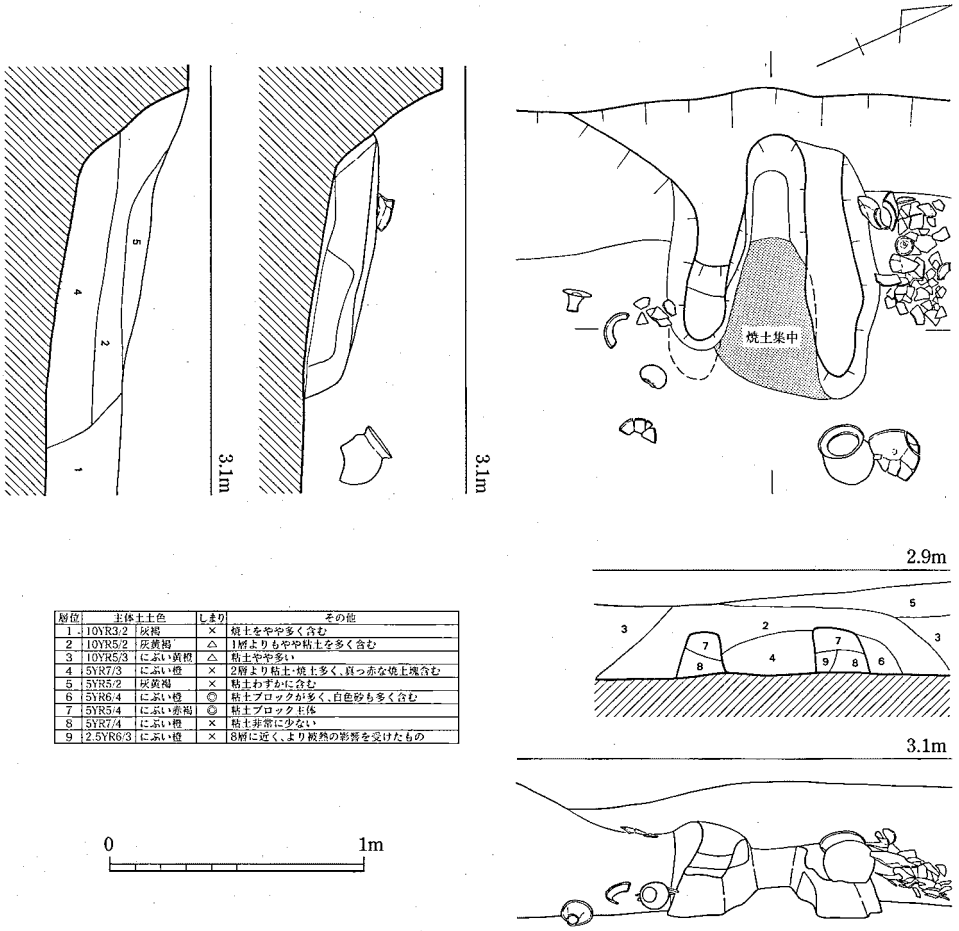
1・2は直口壷。2は肩部に波状沈線を施す。3～7は山陰系二重口縁壷。7は外面に煤が付着。8は小型精製器種の短頸壷。9・10は在地系甕。9は外面に頸部付近にタタキ痕が残る。11～14は布留系の甕。11は全体に被熱、煤が付着するが、一部の破片は破砕後更に被熱を受ける。15は在地系甕。頸部と胴下半部に突帯。頸部突帯に刻目。16～23は高坏。16は脚部の頂部に粘土紐を巻きつけながら坏部を作りだす。24～27は椀。28～31は鉢。28は外面二次被熱を受け黒くなる。30・31は小型精製器種。30は底部穿孔。32～34は脚付鉢。33・34は脚部破片。35～38は小型器台。35・36は受部。37・38は脚部破片。39は鼓形器台。40・41は蛸壷。42は半島系軟質土器鉢の破片。焼成良好、色調は明茶褐色。外面は格子目タタキ、ヨコ方向のケズリ



第72図　24～26号竪穴住居跡実測図（1/60）



第73図　24・25号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



層位	主体土土色		しまり	その他
1	10YR3/2	灰褐	×	焼土をやや多く含む
2	10YR5/2	灰黄褐	△	1層よりもやや粘土を多く含む
3	10YR5/3	にぶい黄褐	△	粘土やや多い
4	5YR7/3	にぶい橙	×	2層より粘土・焼土多く、真っ赤な焼土塊含む
5	5YR5/2	灰黄褐	×	粘土わずかに含む
6	5YR6/4	にぶい橙	◎	粘土ブロックが多く、白色砂も多く含む
7	5YR5/4	にぶい赤褐	◎	粘土ブロック主体
8	5YR7/4	にぶい橙	×	粘土非常に少ない
9	2.5YR6/3	にぶい橙	×	8層に近く、より被熱の影響を受けたもの

第74図　26号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

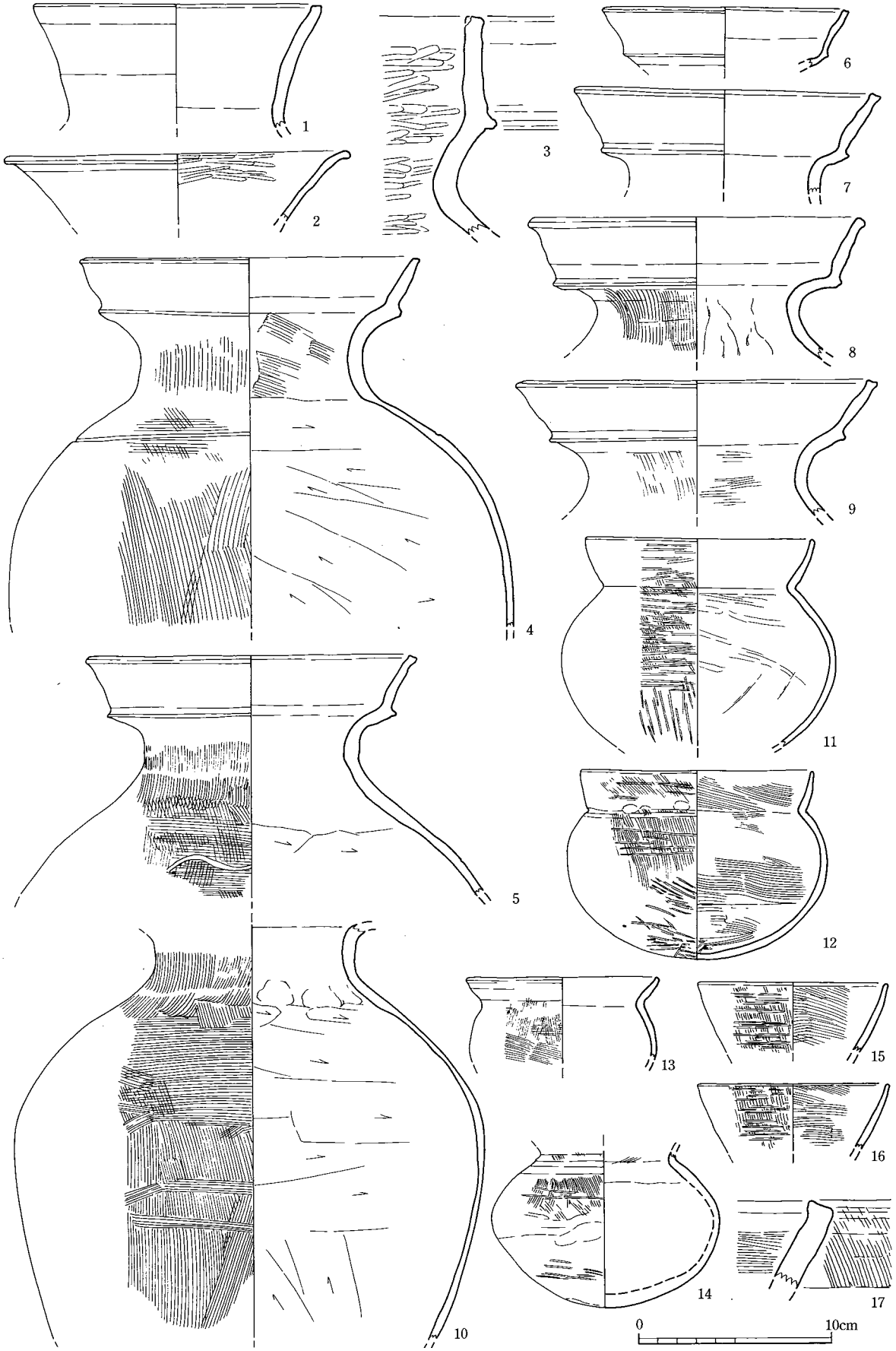
後ナデ。内面はナデ。43は半島系軟質土器。鉢の一部。色調は暗茶褐色。外面は格子目タタキおよびナデ。内面はナデ。

24号竪穴住居跡（図版11、第72図24）

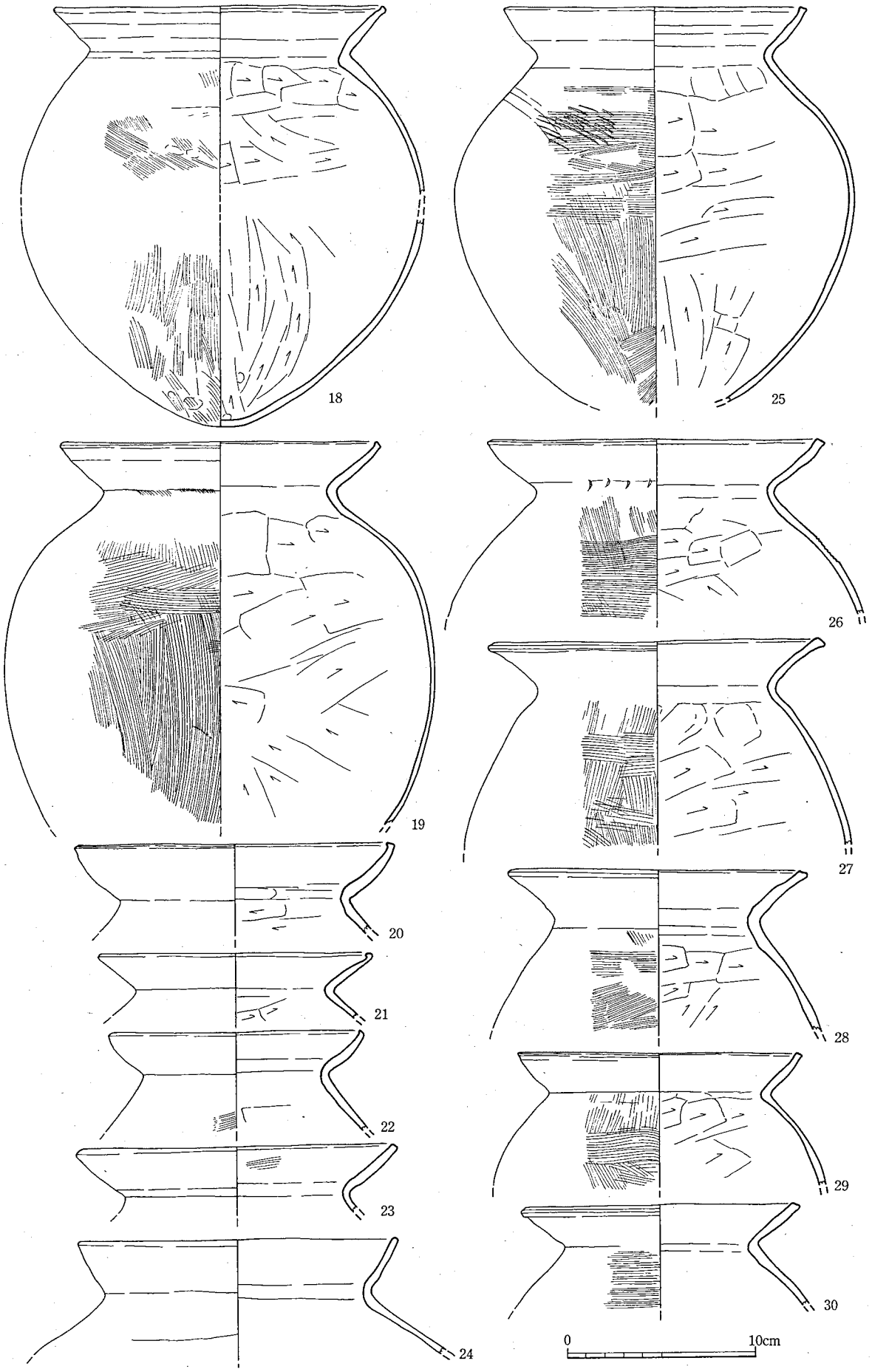
調査区南西に位置し、20号竪穴住居跡の南側に位置する。プランは正方形で、主軸方向はN15°Wである。規模は長軸2.82 m、短軸2.69 mと小型である。遺構面からの深さは22 cmを測る。住居覆土上層より、土器片が多く出土する。住居中央に炉があり、住居覆土は上層が明褐色砂、下層が灰白色砂である。

出土土器（第73図1～15）

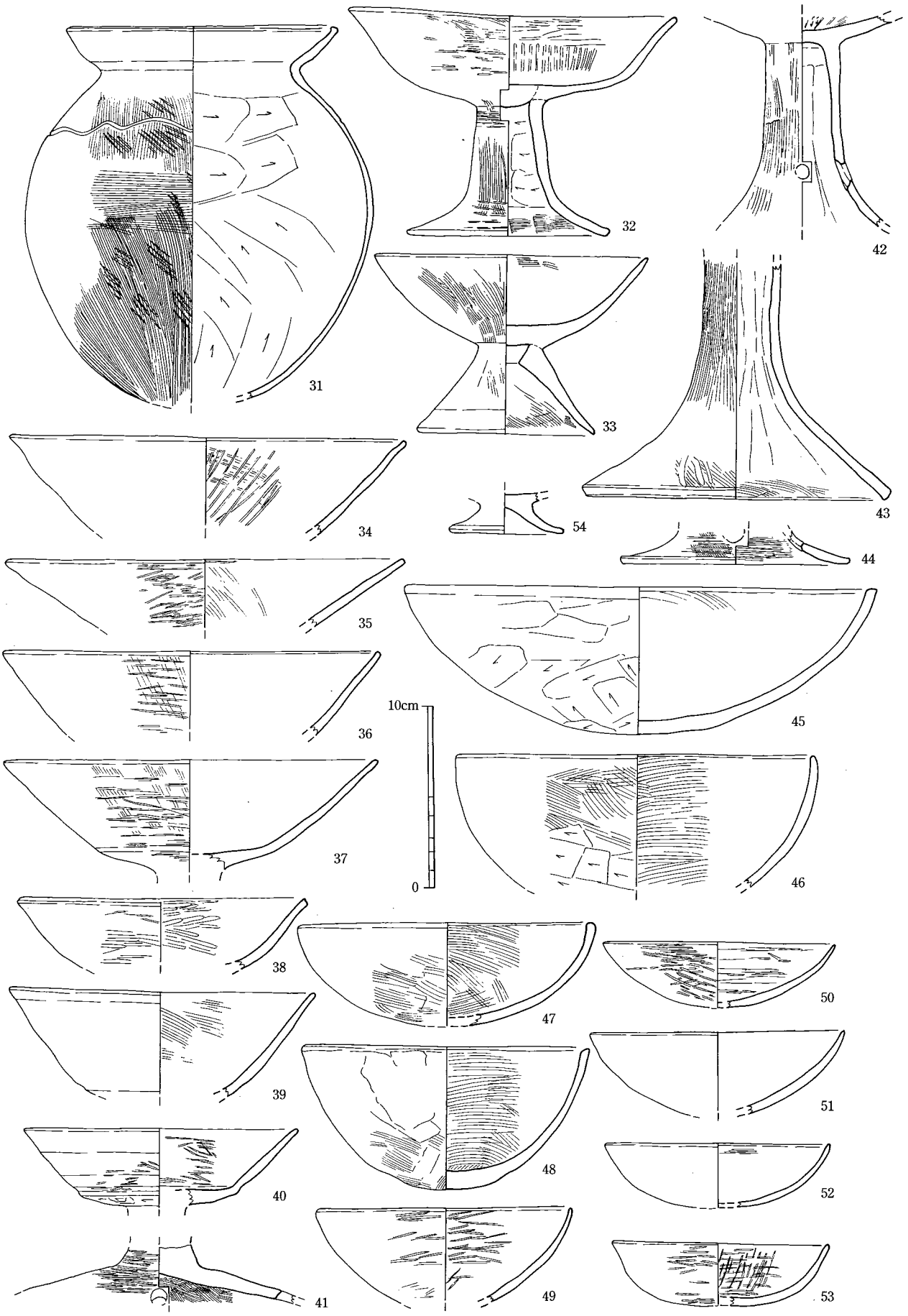
1は山陰系二重口縁壷。2は小型精製器種直口壷。3・4は在地系甕。3は胴下半に煤付着。5～7は布留系の甕。6は肩部櫛描波状文、外面煤付着。8～10は高坏坏部破片、11は高坏脚部破片。12は小型器台受部。13は在地系支脚。円錐台形で上面に円孔と突起、外面はタタキ、内面はナデ、当て具痕が残る。14は在地系器台。外面タタキ後ナデ、頸部より上タテハケ。内面はハケ後ナデ、屈曲部より上ヨコハケ。口縁部分はナデ。15は小型鉢。底部を欠く。外面粗いハケ後目の細かいタテハケを施す。内面はケズリ後ナデ。



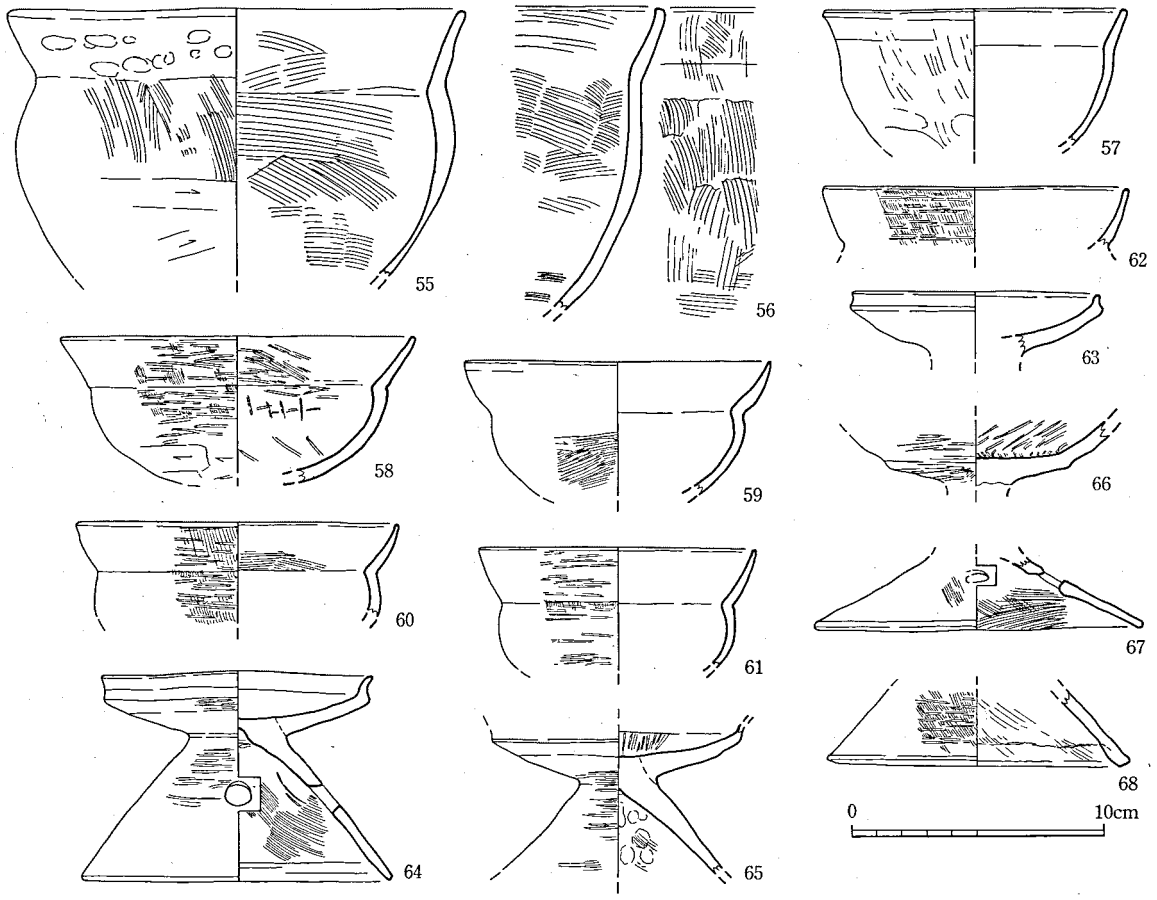
第75図　26号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



第76図　26号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）



第77図　26号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）



第78図　26号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）

25号竪穴住居跡（図版12、第72図25）

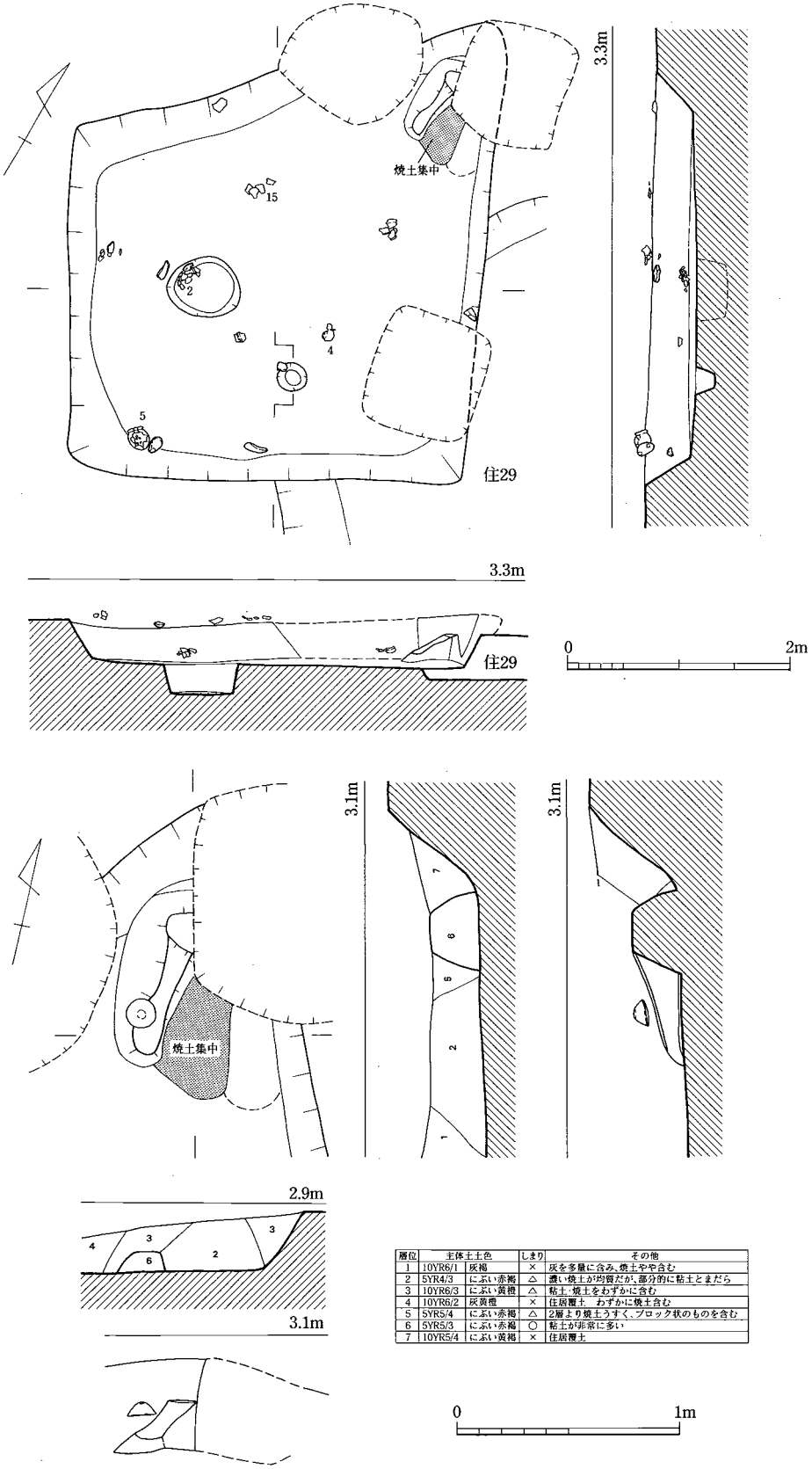
調査区南西に位置し、南3分の1は20号竪穴住居跡に切られ、28号竪穴住居跡を切る。プランは正方形で、主軸方向はN 24°Eである。規模は長軸2.43 m、短軸残存長2.03 mと小型である。遺構面からの深さは15 cmを測る。住居北側に3つ並ぶピットおよび住居西中央のピットは柱穴の可能性が高いが、東中央に対応する柱穴を見つけることができなかった。

出土土器（第73図16）

16は在地系長頸壺の胴部。器形は偏球形で、突帯に刻目を施す。外面は横ミガキ。突帯付近は縦方向のミガキ。内面はハケ。類例は西新町遺跡第2次D地区第14号住居跡がある。

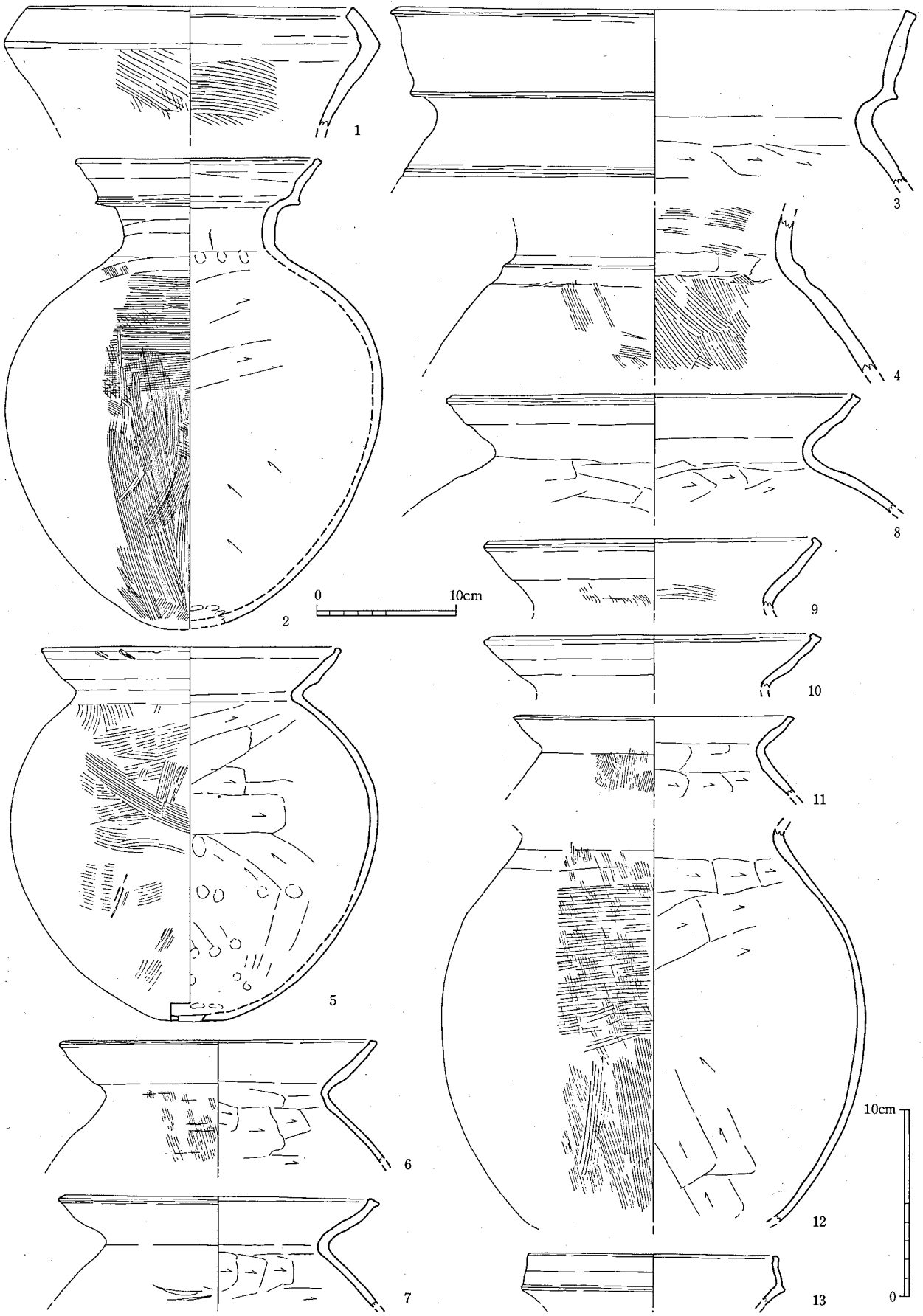
26号竪穴住居跡（図版12、第72図26）

調査区南に位置する。プランは長方形で、主軸方向はN 65°Wである。規模は長軸4.86 m、短軸3.80 m、遺構面からの深さは59 cmを測る。カマドは西壁中央に作られ、カマドと対峙する位置の東壁に被熱した粘土塊がある。カマド程しまりがなく、形態を明確に捉えることができなかったが、第12次調査でも住居内で同様な遺構が確認されており、今後注意が必要な遺構と考える。住居覆土は壁際に黄褐色砂の流れ込みがあり、それを埋めるようにオリーブ褐色砂が堆積する。床面よりやや上層に鉄分が多く含まれる層がある。上層に土器が多く含まれ、カマド周辺と住居中央に集中する。

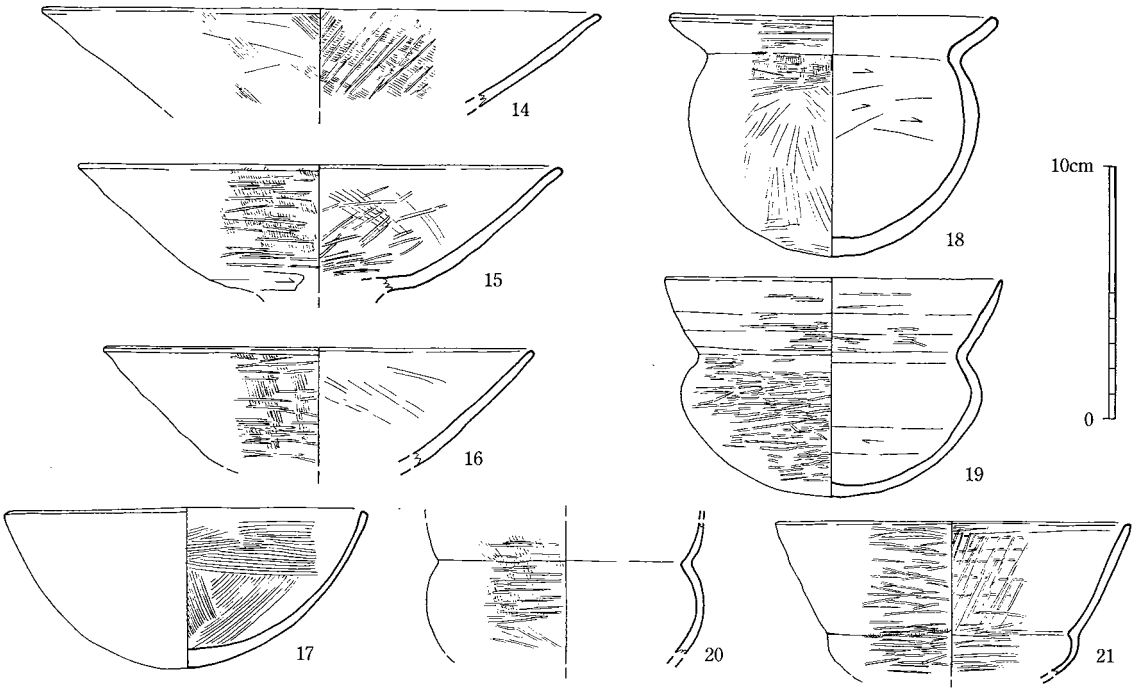


層位	主体土土色		しまり	その他
1	10YR6/1	灰褐	×	灰を多量に含み、焼土やや含む
2	5YR4/3	にぶい赤褐	△	濃い焼土が均質だが、部分的に粘土とまだら
3	10YR6/3	にぶい黄橙	△	粘土・焼土をわずかに含む
4	10YR6/2	灰黄橙	×	住居覆土　わずかに焼土含む
5	5YR5/4	にぶい赤褐	△	2層より焼土うすく、ブロック状のものを含む
6	5YR5/3	にぶい赤褐	○	粘土が非常に多い
7	10YR5/4	にぶい黄褐	×	住居覆土

第79図　27号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）



第80図　27号竪穴住居跡出土土器実測図①（2は1/4、他は1/3）



第81図　27号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）

カマド（図版12、第74図）

長方形プランに近い住居で長辺となる西壁の中央部付近に位置し、住居の東西の軸線方向に近い主軸をなす。燃焼部は周辺の住居床面と高さはあまり変わらず、被熱でやや赤変が強く、住居壁面から近いため煙道部は短い。また、周辺の覆土は著しく多量の炭を含む。壁体は、上部は粘土ブロック主体で非常に強固で、下部は粗砂主体で脆い。特筆すべきは、カマドのすぐ周辺から小形精製器種をはじめ多量の土器が出土しており、特に右袖外側には破砕した土器が集積している。また、右袖前面の甕の直下からは桃の種が出土している。これらは、カマド廃棄時の祭祀的な行為による可能性も想定される。（坂元）

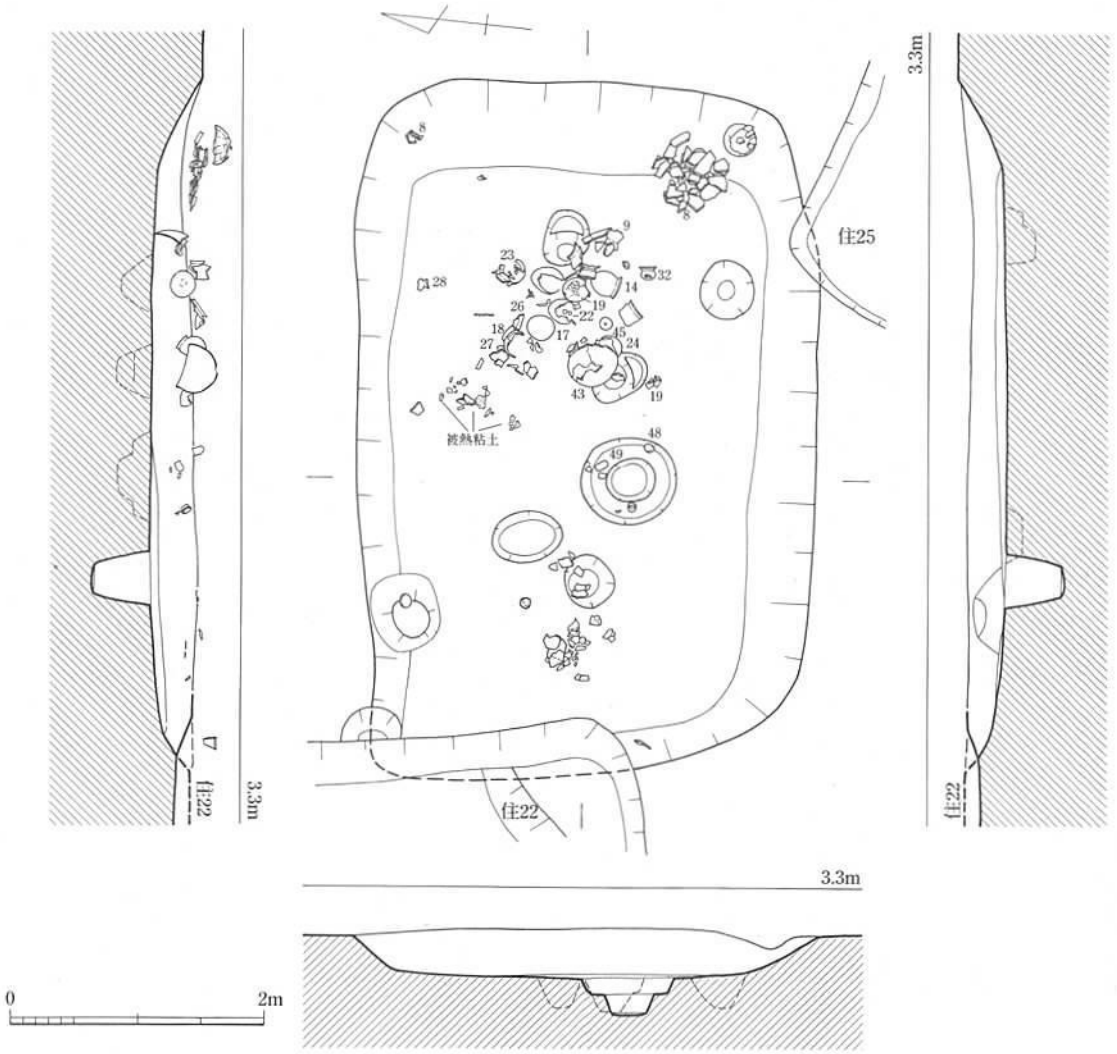
出土土器（図版29、第75～78図）

1は直口壷口縁。2は畿内系の二重口縁壷の口縁破片。薄手で胎土精良。3～10は山陰系二重口縁壷。3は大型品。4は一条沈線、5は波状沈線を施す。11～13は短頸壷。11・12は小型精製器種。14～16は小型精製器種の直口壷。17は在地系甕の口縁破片。18はV様式系の甕。19～31は布留系の甕。26は櫛描波状沈線。頸部に工具痕。31は波状沈線を施す。32～44は高坏。32の脚部接合は充填法。34～40は高坏坏部。41～44は高坏脚部。45～53は埦。54は脚付鉢脚部。55～61は鉢。62は小型丸底壷の口縁。63～68は小型器台。

27号竪穴住居跡（図版13、第79図）

調査区南東に位置する。29号竪穴住居跡を切る。プランは北西に広がる方形で、主軸方向はN 29° Wである。規模は長軸4.11 m、短軸3.67 m、遺構面からの深さは48 cmを測る。住居北隅にかまどが作られるが西側は撹乱を受ける。住居覆土は下層に南北より浅黄色砂が流れ込み、その上に暗灰黄色砂・にぶい黄色砂が堆積している。上層に炭および土器片を含む。

カマド（第79図）

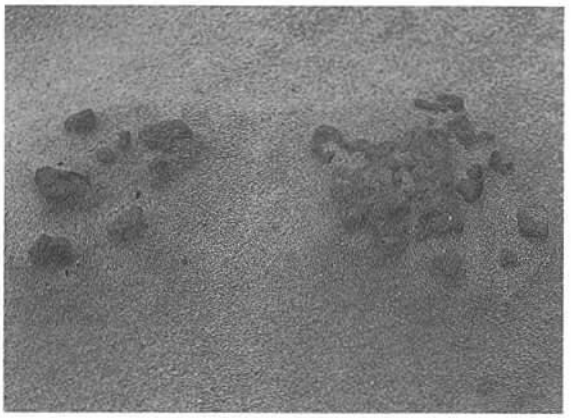


第82図　28号竪穴住居跡実測図（1/60）

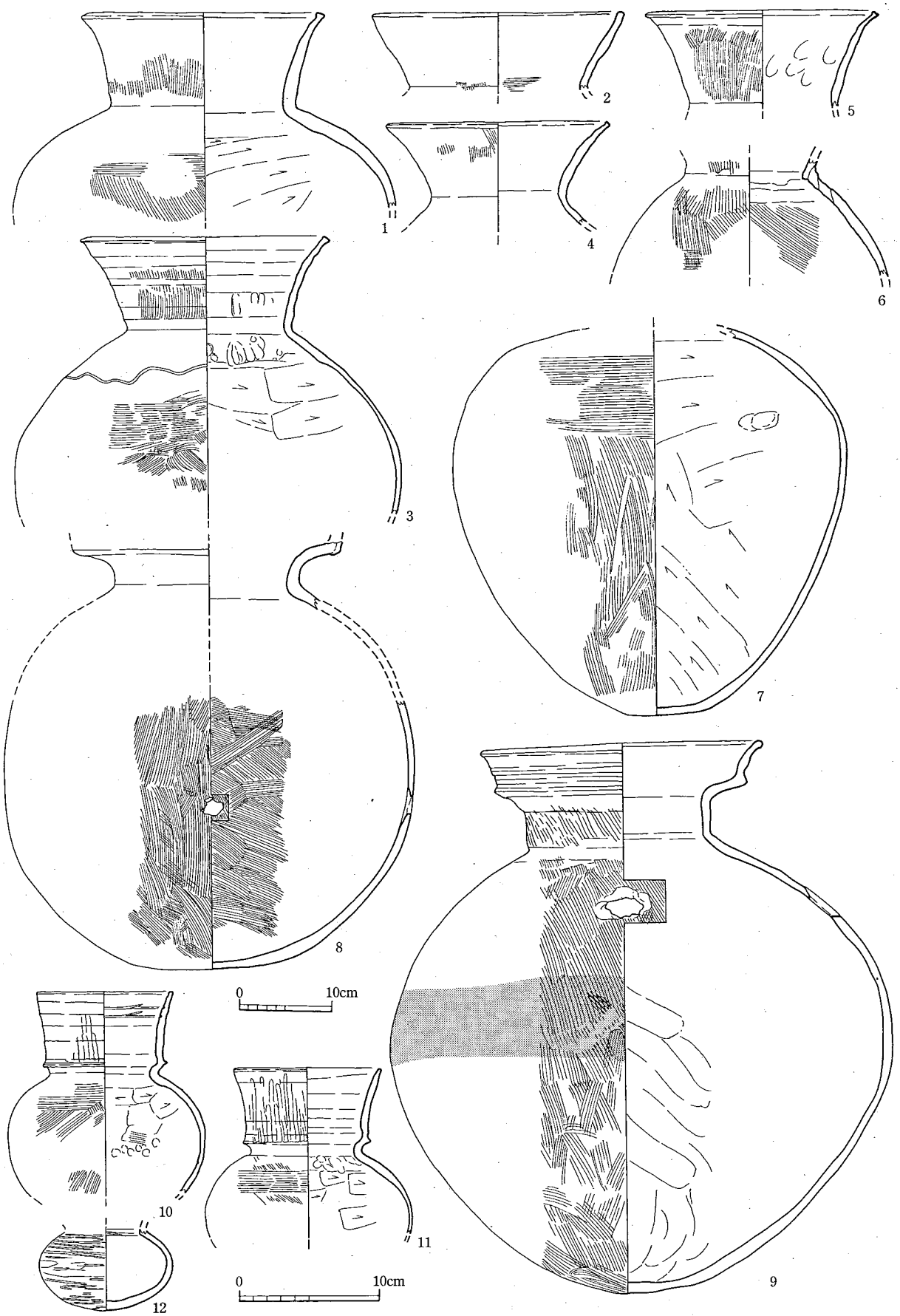
住居の北東隅に位置し、左袖のみ検出され、右袖は住居東壁に沿う形であったと思われる。よって、住居の北東隅から南壁中央部方向への主軸となる。また煙道部付近は、4号石組遺構により大きく削られている。燃焼部は、周辺の住居床面と高さはあまり変わらず、焼土の集中は顕著である。左袖の上部から完形に近い浅鉢が伏せた状態で出土しているが、カマドの廃棄に際し意図的に使用されたものかどうかは判別し難い。壁体は、粘土を非常に豊富に含んだ細砂との混合土で、強固に構築されている。　（坂元）

出土土器（図版30、第80～81図）

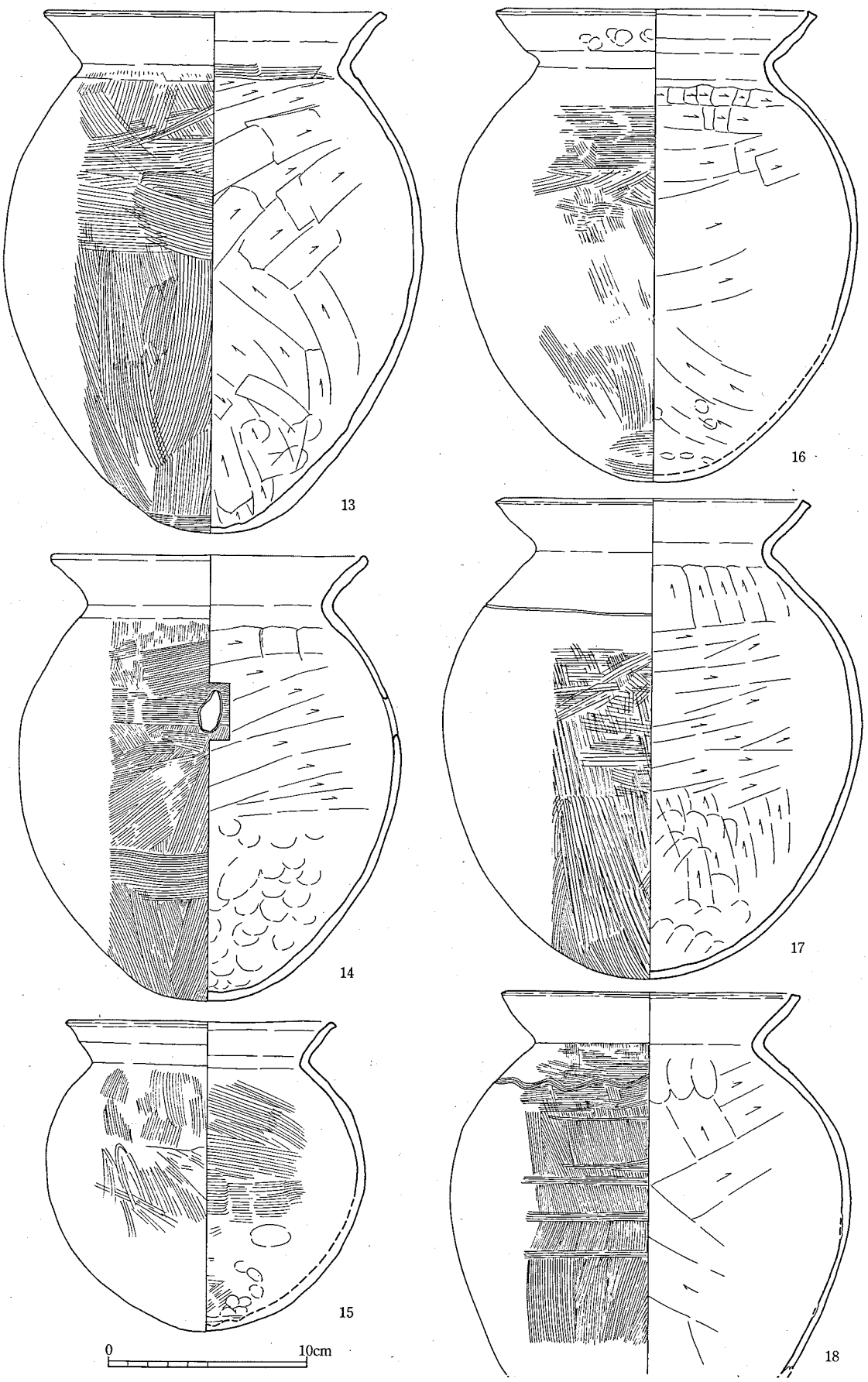
1は在地系複合口縁壷の口縁部破片。2～3は山陰系二重口縁壷。3は大型品。4は在地系壷の肩部。突帯が付く。5～12は布留系甕。5は底部を外面より穿孔。13は吉備系の甕口縁。14～16は高坏坏部破片。17は椀。外面摩滅。18は小型の鉢。19～21は小型丸底鉢。



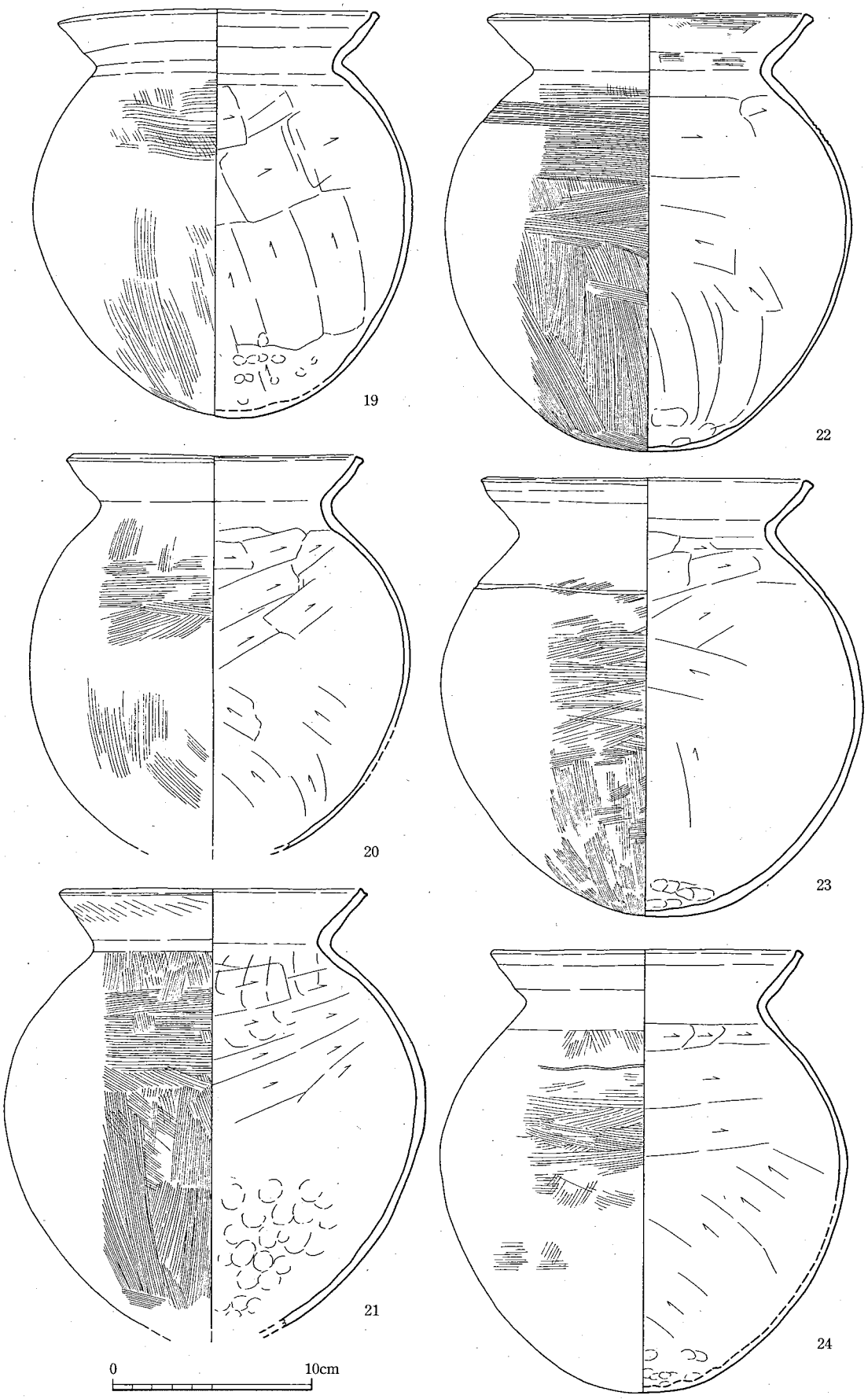
28号竪穴住居跡被熱粘土出土状況



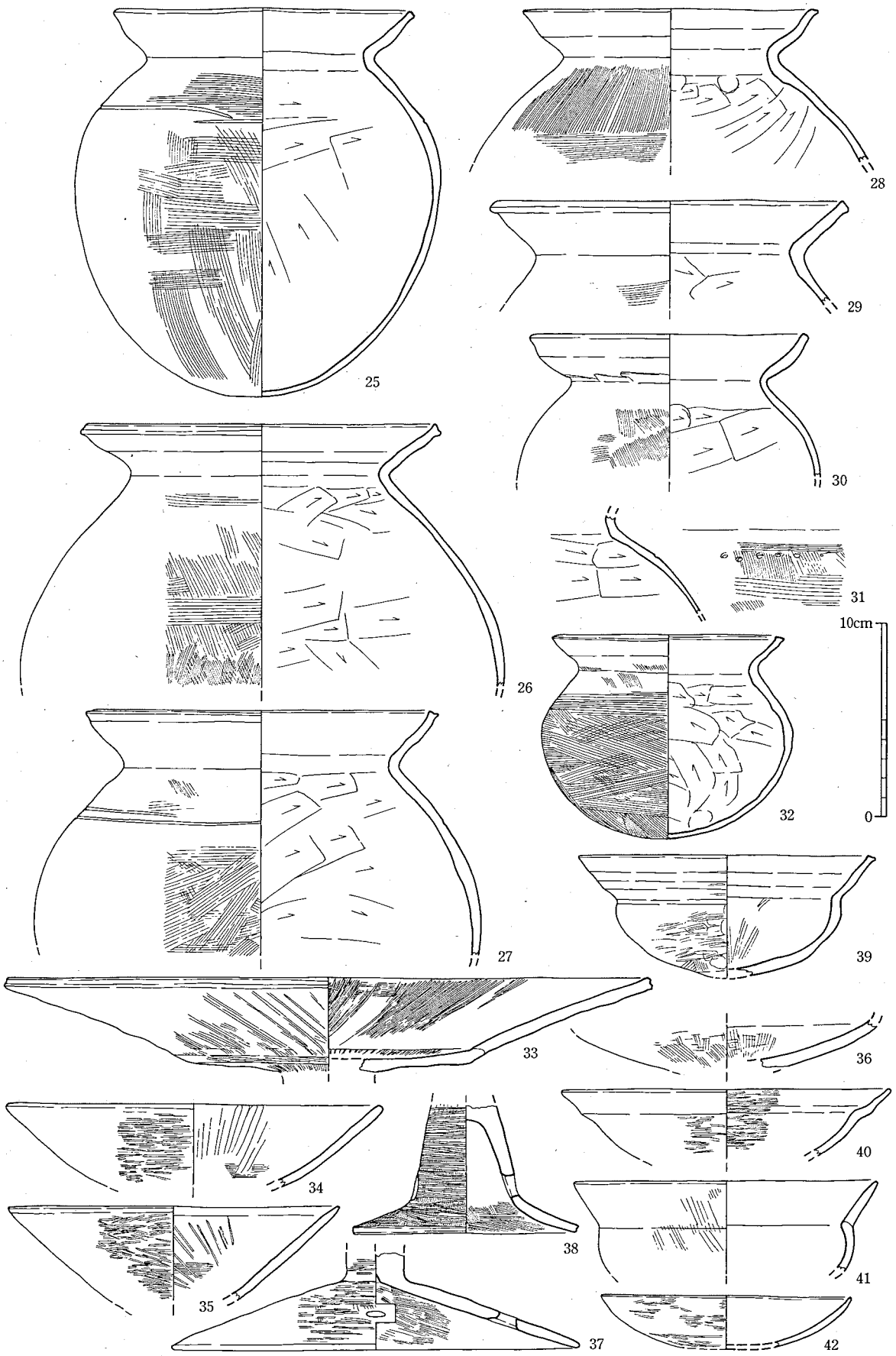
第83図　28号竪穴住居跡出土土器実測図①（8は1/6、他は1/4）



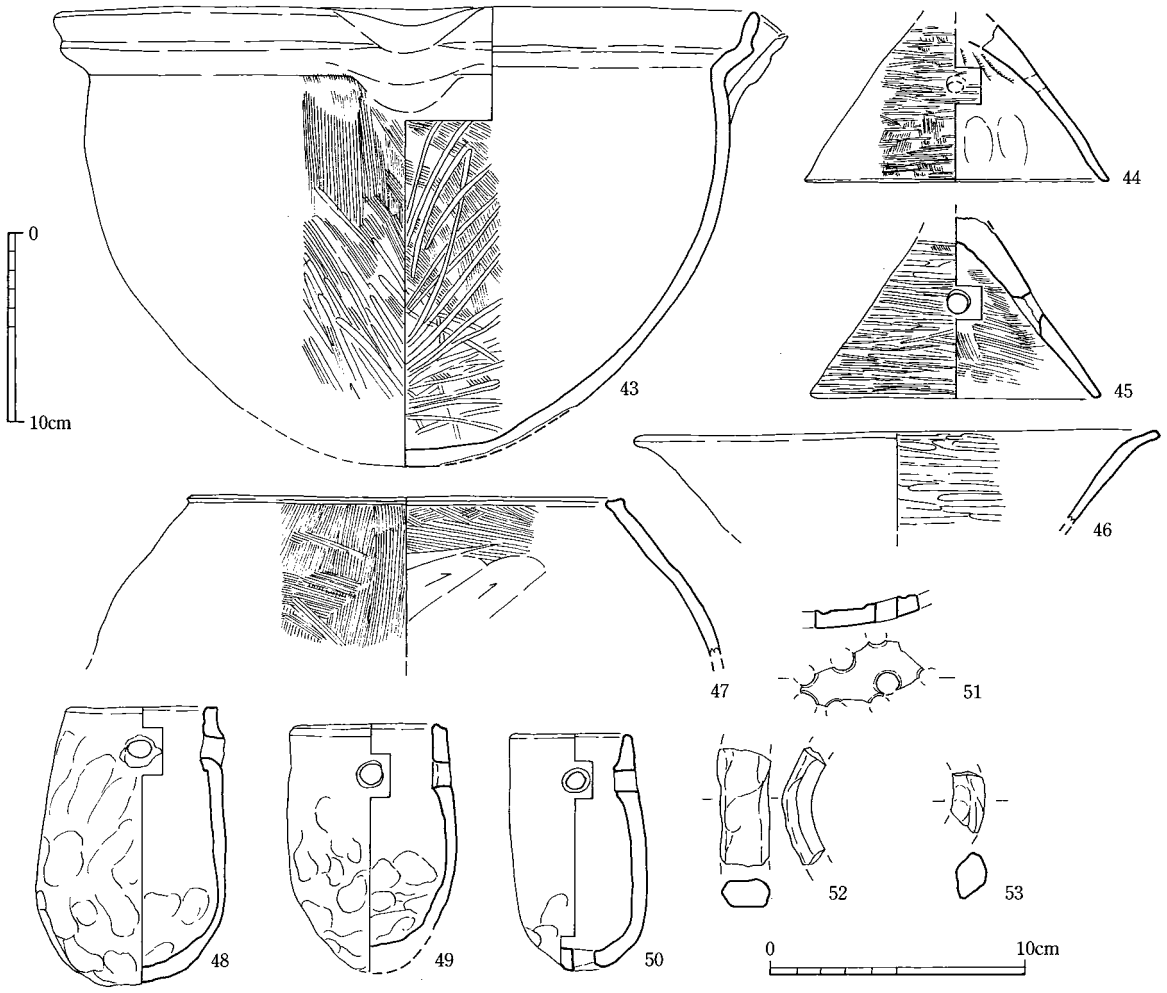
第84図　28号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）



第85図　28号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）



第86図　28号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）



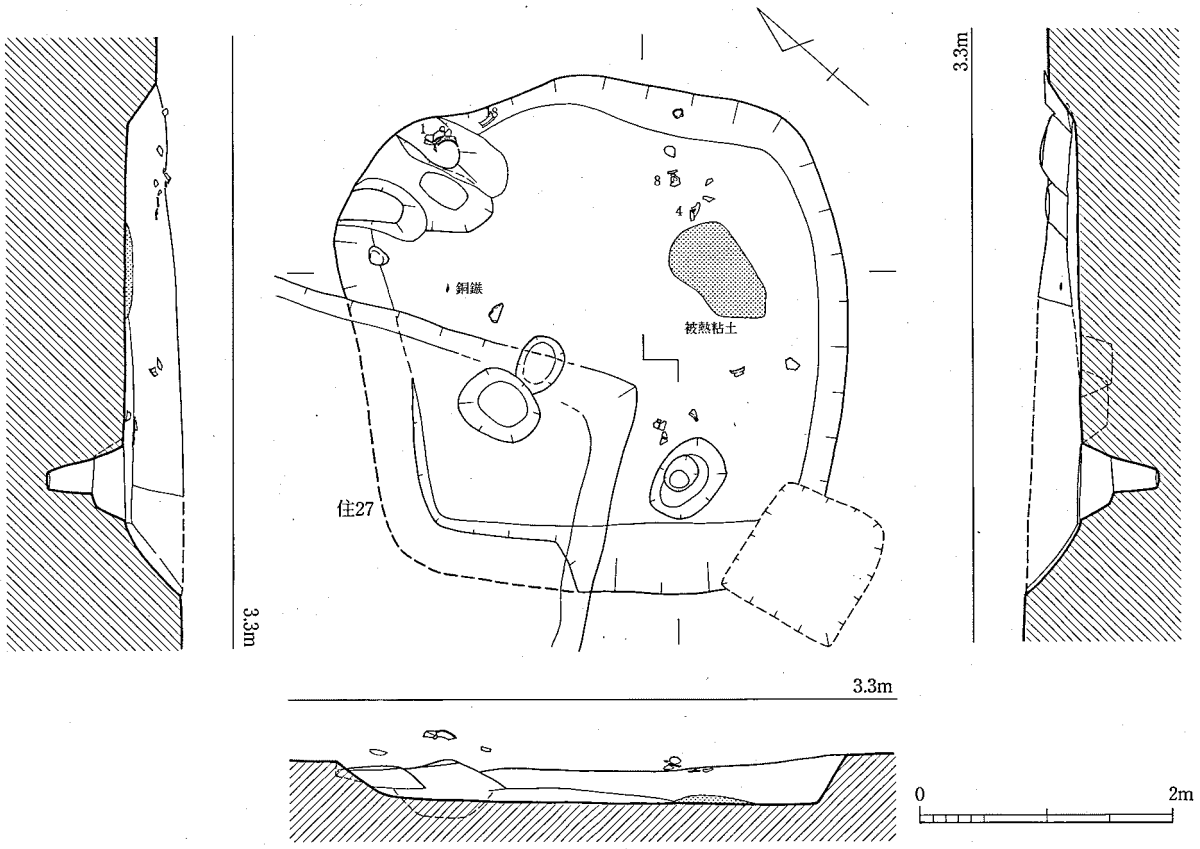
第87図　28号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（43は1/4、他は1/3）

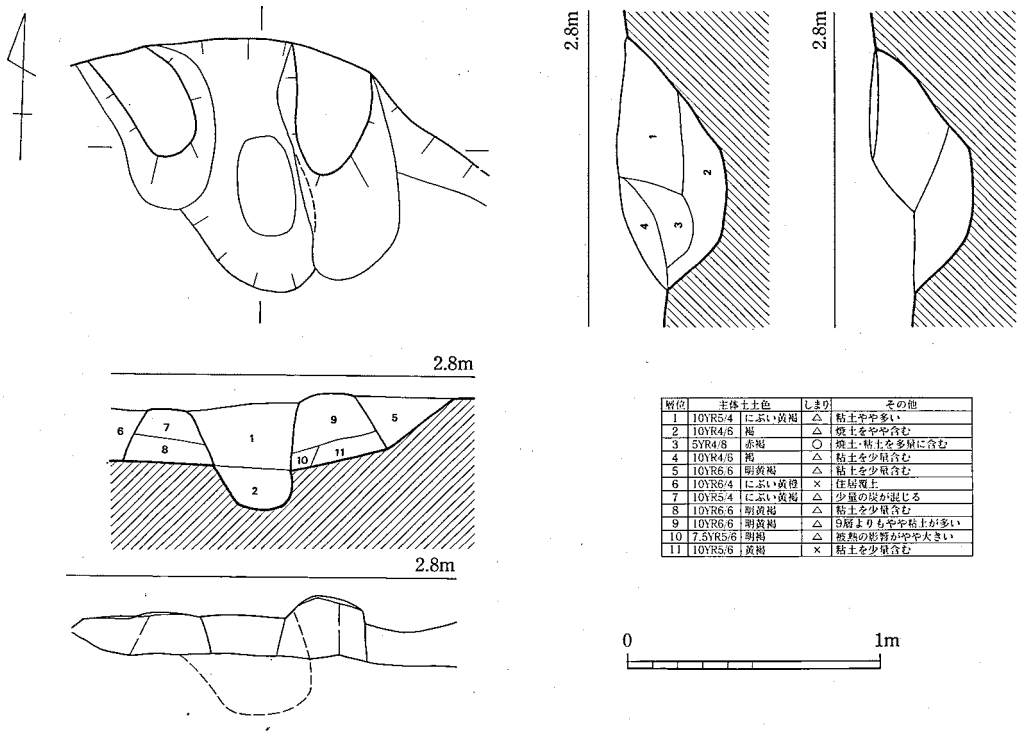
28号竪穴住居跡（図版13、第82図）

調査区西やや南よりに位置する。西壁を22号竪穴住居跡に南西を25号竪穴住居跡に切られる。プランは長方形で、主軸方向はN 6° Wである。規模は長軸5.40 m、短軸3.62 m、遺構面からの深さは40 cmを測る。住居覆土は大きく3層に分かれる。最初に南北より暗灰黄色砂が流れ込み、次にその間を埋めるように下層は黄褐色砂、上層は土器を多く含む暗灰黄色砂が堆積する。住居北側は更にオリーブ褐色砂が堆積する。土器は住居東側に集中し、完形のものが多く出土する。住居北壁西側では粘土塊が出土している。また住居北東で、高温で硬化した被熱粘土が出土している。周辺の土器片は被熱しておらず、住居廃棄時ではなく使用時に被熱したものと考えられる。住居北西では鉄鏃茎部片が出土している。

出土土器（図版30、第83～87図）

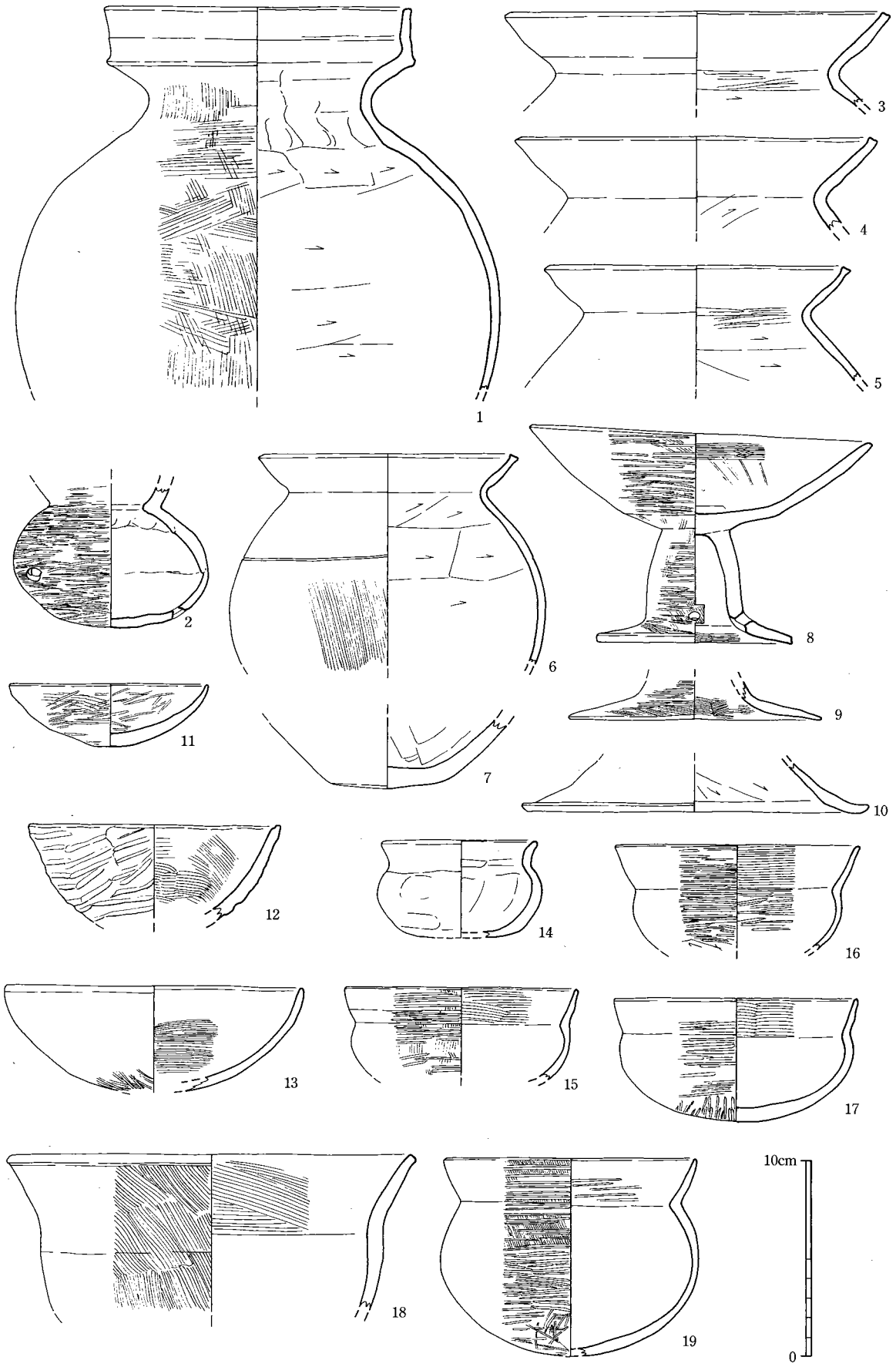
1・2は直口壷。3～7は山陰系の直口壷。3は肩部に波状文を施す。頸部内面は粗いユビナデ。7は内面上部に指頭痕。8・9は山陰系の二重口縁壷。8は胴部中央に穿孔。全体に粗雑な作り。9は肩部に穿孔、胴部に帯状に赤色顔料が塗布される。10・11は共に胴部下半を欠損する山陰系複合口縁直口壷。口縁外面にヨコナデ後、暗文風タテ方向のミガキを施す。12は小型精製器種の長頸壷胴部。外面に黒斑。13・14は在地系甕。ともに外面に厚い黒斑。14は胴





層位	主体土土色		しまり	その他
1	10YR5/4	にぶい黄褐	△	粘土やや多い
2	10YR4/6	褐	△	焼土をやや含む
3	5YR4/8	赤褐	○	焼土・粘土を多量に含む
4	10YR4/6	褐	△	粘土を少量含む
5	10YR6/6	明黄褐	△	粘土を少量含む
6	10YR5/4	にぶい黄橙	×	住居覆土
7	10YR5/4	にぶい黄褐	△	少量の炭が混じる
8	10YR6/6	明黄褐	△	粘土を少量含む
9	10YR6/6	明黄褐	△	9層よりもやや粘土が多い
10	7.5YR5/6	明褐	△	被熱の影響がやや大きい
11	10YR5/6	黄褐	×	粘土を少量含む

第88図　29号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）



第89図　29号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

上半部に穿孔を受ける。15はV様式系の甕。内面粗いヨコハケ。16～32は布留系甕。17・23・24・25・27は一条沈線を、22は4条の沈線を、18は櫛描波状文を肩部に施す。21は胴下半より指頭痕が残る。31は列点文を施す肩部破片。32は小型の甕。33～36は高坏坏部、37・38は高坏脚部。38は穿孔二箇所。39・40は小型精製器種、屈曲口縁鉢。 41は鉢。42は埦。43は大型の鉢。口縁に注口を作り出す。口縁より胴下半まで煤付着。44・45は小型器台の脚部。45は穿孔二箇所。46は高坏の坏部。内面横方向のミガキ。47は無形壺の口縁か。肩部に把手の付く可能性が考えられる。48～50は蛸壺。50は底部にも穿孔。51は甑底部。外面より穿孔。焼成は軟質。色調は淡黄褐色。52・53は把手。ともに淡黄褐色。

29号竪穴住居跡粘土集中部

29号竪穴住居跡（図版13、第88図）

調査区南東に位置する。27号竪穴住居跡に切られる。プランは整った隅丸方形で、主軸方向はN 44°Wである。規模は長軸4.02 m、短軸3.99 m、遺構面からの深さは48 cmを測る。住居北隅にカマドが設けられる。住居床面東側に被熱した粘土の塊がみられる。土器の材料となる粘土を保管していたものか。住居覆土は二層に分かれ、上層は土器を多く含む黄褐色土、下層は上層より土器が少なく、にぶい黄色土である。住居北西で銅鏃が出土している。

カマド（第88図）

住居の北隅に位置しており、南隅とのほぼ対角線軸に近い主軸をなす。カマド内部は、周辺の住居床面よりも最大で25㎝程度下がる特異な構造となっているが、構築時に掘り込まれたもので、使用の際の焼床は住居床面とほぼ同じ高さであったと思われる。ただ、焼土の集中も被熱も顕著ではないため、使用の際の実態は判然とはしない。壁体は、全体に非常に粘土が少なく脆弱である。（坂元）

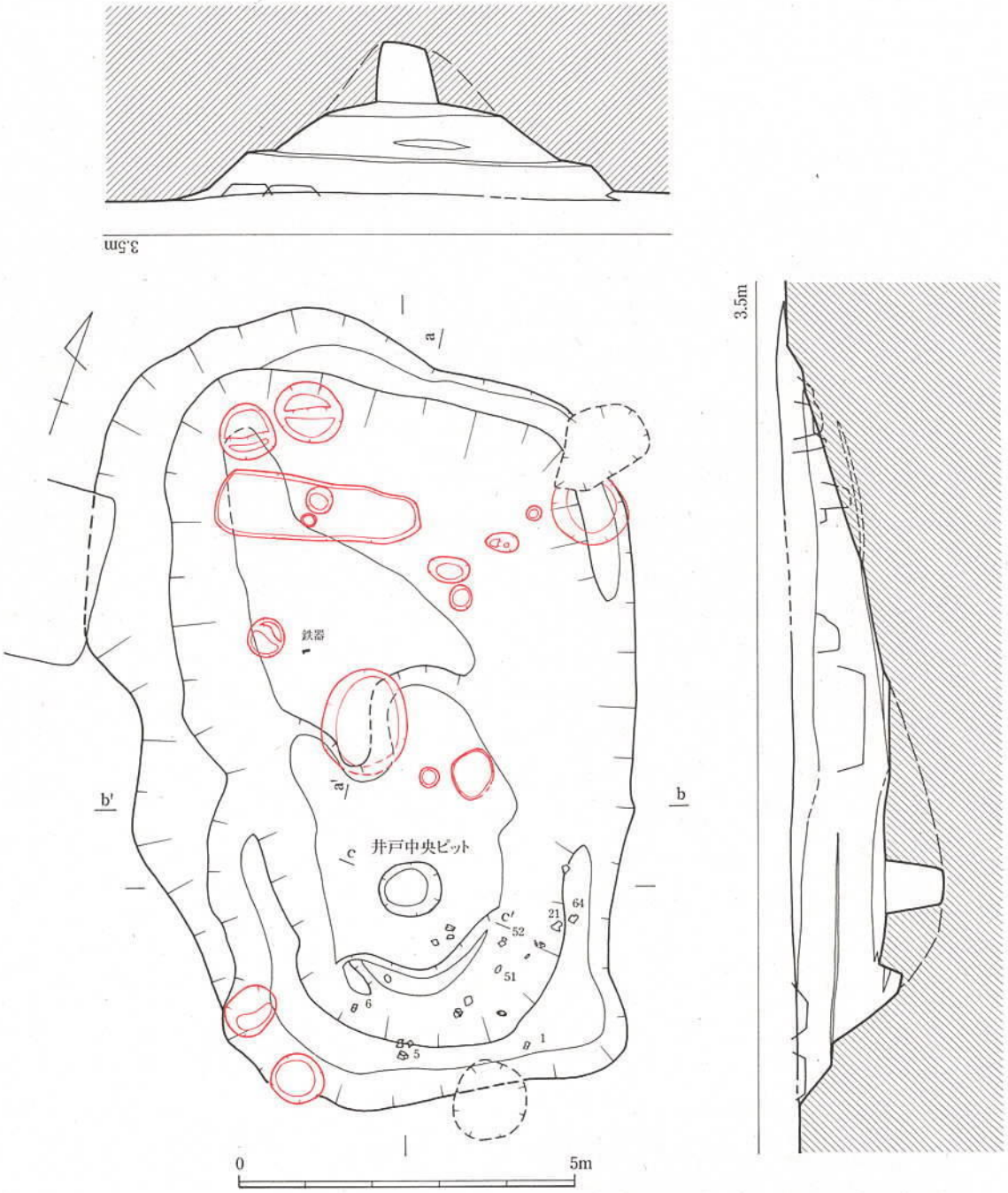
出土土器（図版32、第89図）

1は山陰系二重口縁壺。2は小型精製器種の長頸壺。胴部および底部付近の二箇所に穿孔。3～6は布留系甕。6は一条沈線を施す。7は在地系甕底部。8・9は高坏。8は脚部二箇所穿孔。10は鼓形器台台部。11～13は埦。12は脚台付製塩土器。外面にタタキ、内面にハケを施す粗雑な作り。14～19は鉢。14は手捏ね土器。15～17・19は小型精製器種。

井戸鉄器出土状況

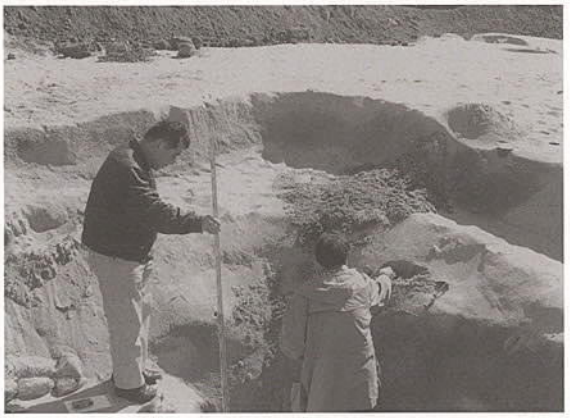
2）井戸（図版14・15、第90～92図）

調査区の中央に位置する。遺構プランは南北に長い隅丸長方形を呈する。主軸方向はN 31°Wで、規模は長軸24.0 m、短軸14.9 m、遺

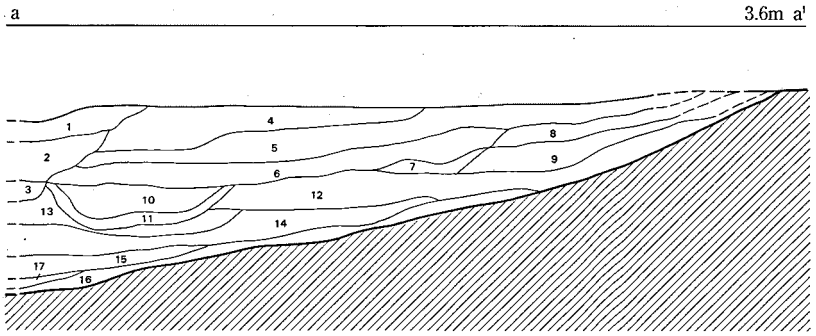


第90図　井戸実測図（1/100）

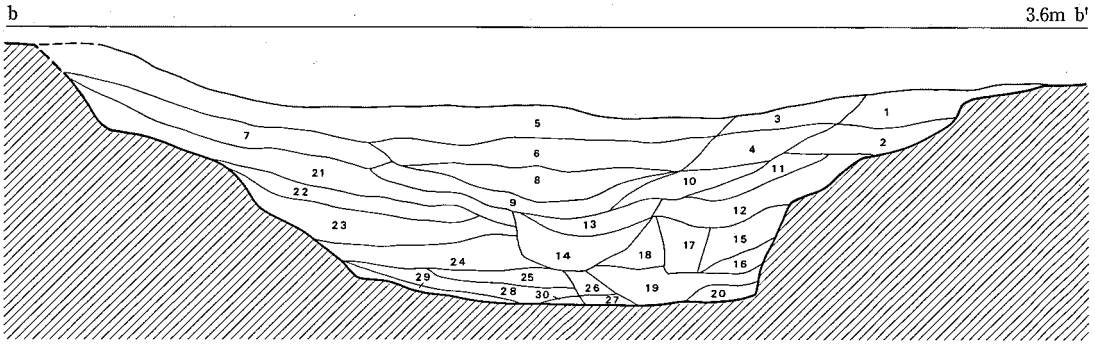
構面からの深さは4.7 mを測る。遺構南半、検出面からの深さ2．5mに、長軸5.3m短軸4.4mを測る方形の平坦面が作られ、ここに井戸の本体である井筒にあたる井戸中央ピットが作られる。平坦面からは北側はなだらかに立ち上がるが、南側の立ち上がりは急で、北側から井戸の掘削を開始したと考えられる。井戸中央ピットは長軸0.93m短軸0.84mの楕円形で、深さ1.02mであ



井戸砂礫分析資料採取状況

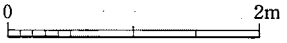


層位	主体土土色		砂粒の大きさ	しまり	土器	炭	その他	東西との対応
1	2.5Y4/4	オリーブ褐	細砂	△	△	△		
2	2.5Y4/2	暗灰黄	細砂	△	△	△		
3	2.5Y4/3	暗灰黄	細砂	△	△	△		
4	2.5Y4/4	オリーブ褐	細砂	△				5
5	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	細砂	△				6
6	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△				8
7	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△				
8	2.5Y5/2	暗灰黄	細砂	△				
9	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△				
10	2.5Y2/1	黒	極細砂	△			Pit34	
11	2.5Y5/2	暗灰黄	極細砂	△			Pit34	
12	2.5Y6/4	にぶい黄	細砂	△				
13	2.5Y6/3	にぶい黄	細砂	△				
14	2.5Y6/3	にぶい黄	細砂	△	○			24
15	2.5Y7/4	浅黄	やや粗砂	△	○			25
16	2.5Y7/3	浅黄	粗砂	△				30
17	2.5Y6/3	にぶい黄	粗砂	△				28

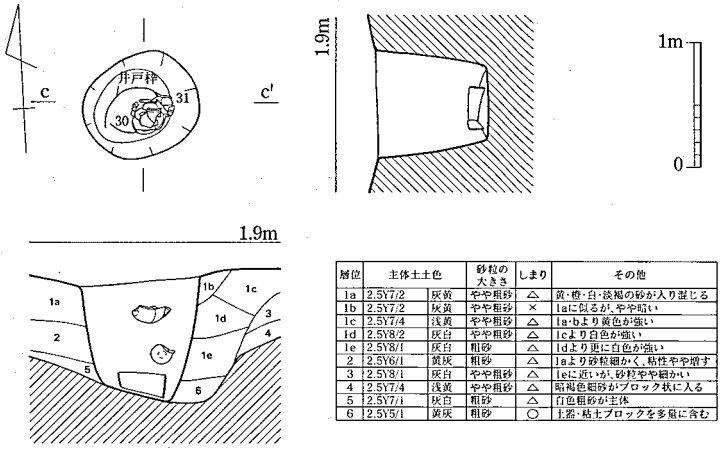


層位	主体土土色		砂粒の大きさ	しまり	土器	炭	その他	南北との対応
1	2.5Y6/4	にぶい黄	細砂	△	△			
2	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△	△			
3	2.5Y5/4	黄褐	細砂	△	△			
4	2.5Y4/4	オリーブ褐	細砂	△	△			5
5	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	細砂	△	△			6
6	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△	△			8
7	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△	△			
8	2.5Y3/1	黒褐	細砂	△	○			
9	2.5Y4/1	黄灰	細砂	△	○			
10	2.5Y4/3	オリーブ褐	細砂	△	△			
11	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△	△			
12	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△	○			
13	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△	○			
14	2.5Y5/2	暗灰黄	細砂	△	△			
15	2.5Y7/3	浅黄	細砂	△	△			

層位	主体土土色		砂粒の大きさ	しまり	土器	炭	その他	南北との対応
16	2.5Y7/3	浅黄	細砂	△	△			
17	2.5Y6/2	灰黄	細砂	△	△			
18	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△	△			
19	2.5Y6/4	にぶい黄	やや粗砂	×	×			
20	2.5Y7/4	浅黄	やや粗砂	×	×			
21	2.5Y5/4	黄褐	細砂	△	○		12層と類似	
22	2.5Y6/4	にぶい黄	細砂	△	○		12層と類似	
23	2.5Y5/3	黄褐	細砂	△	○			13
24	2.5Y6/3	にぶい黄	やや粗砂	△	△			14
25	2.5Y7/4	浅黄	やや粗砂	△				15
26	2.5Y6/3	にぶい黄	やや粗砂	×	×			
27	2.5Y8/2	灰白		×	×			
28	2.5Y6/3	にぶい黄	粗砂	△	×			17
29	2.5Y8/3	にぶい黄	粗砂	×	×			
30	2.5Y7/3	浅黄	粗砂	○	×			16



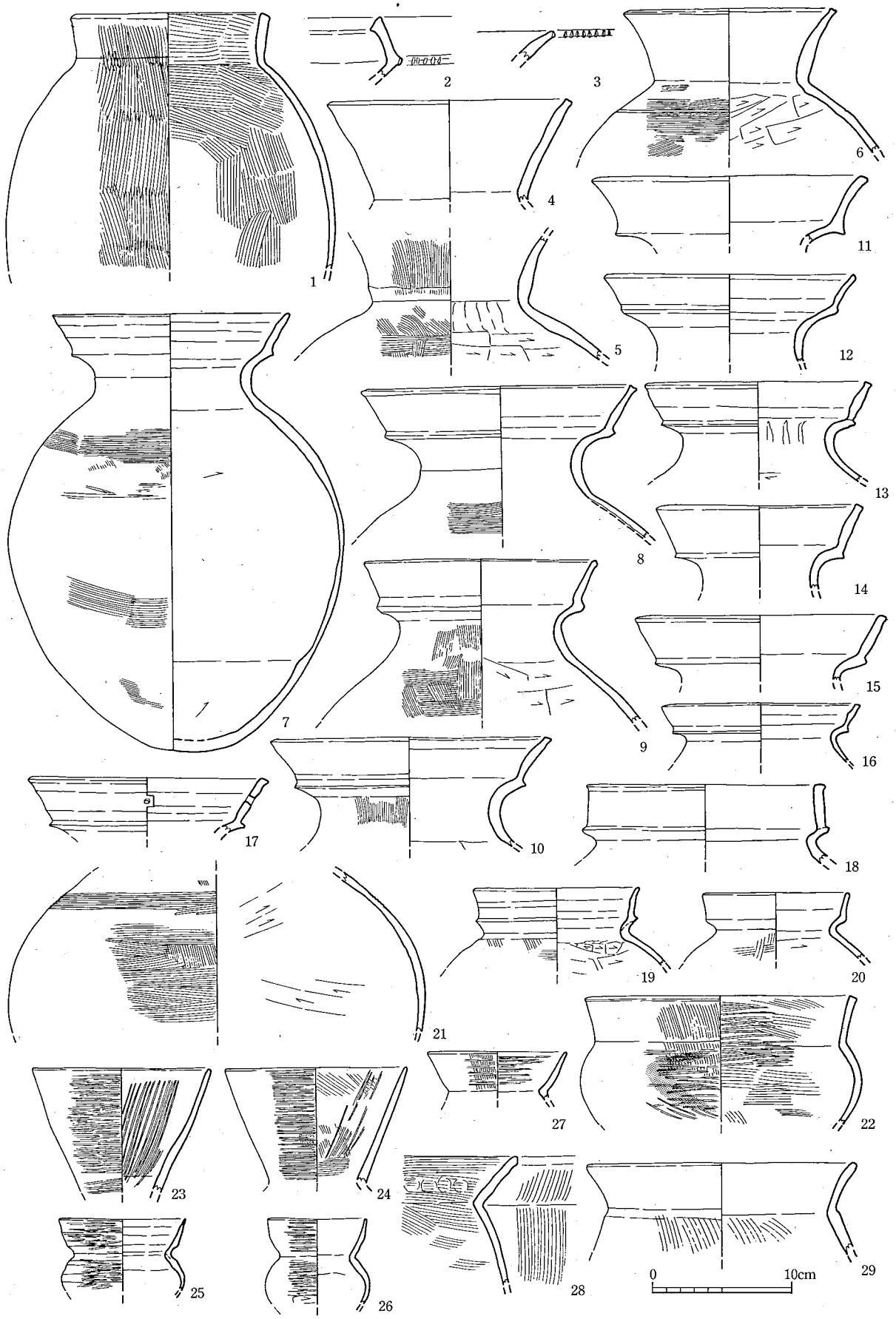
第91図　井戸土層断面実測図（1/60）



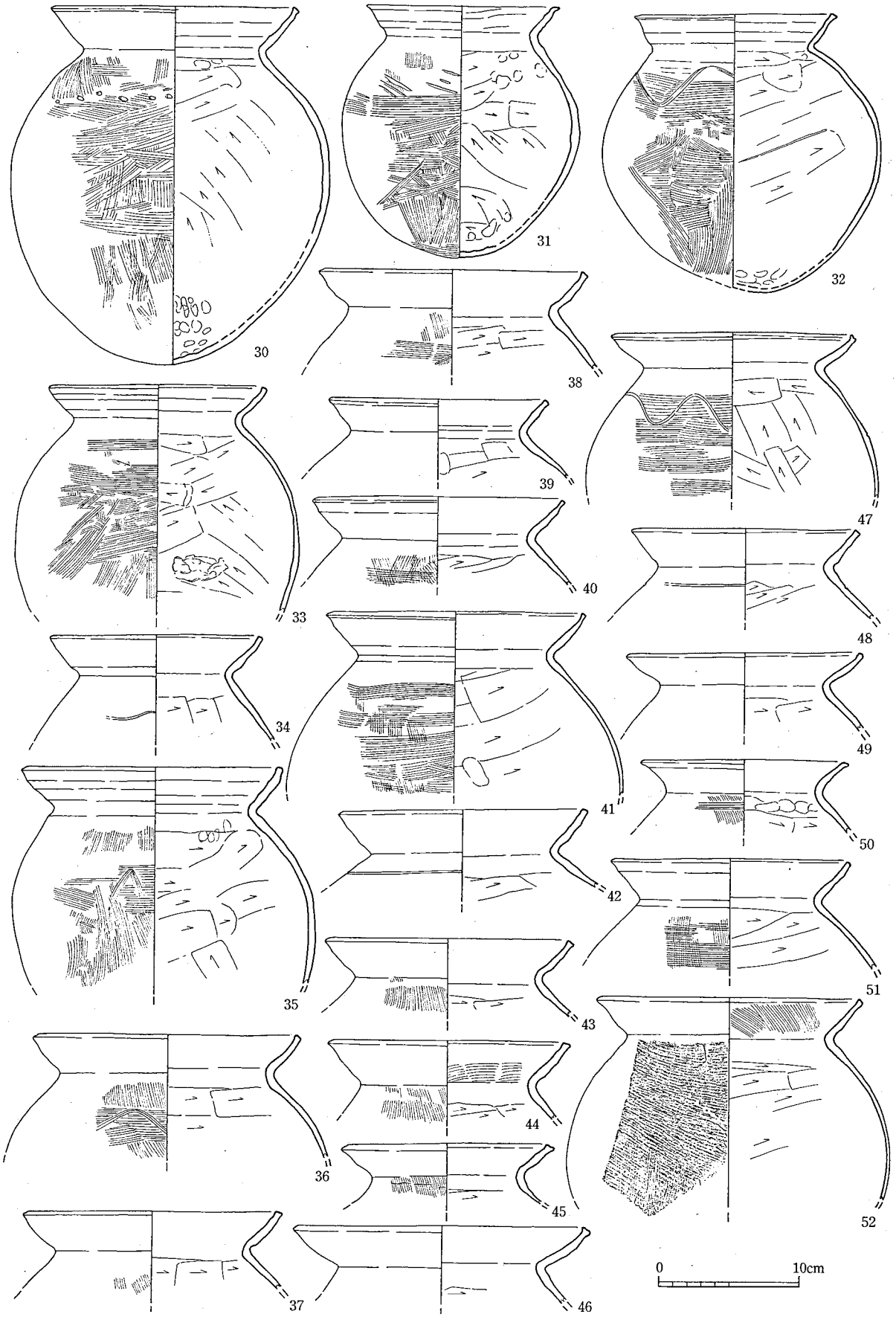
層位	主体土土色		砂粒の大きさ	しまり	その他
1a	2.5Y7/2	灰黄	やや粗砂	△	黄・橙・白・淡褐の砂が入り混じる
1b	2.5Y7/2	灰黄	やや粗砂	×	1aに似るが、やや暗い
1c	2.5Y7/4	浅黄	やや粗砂	△	1a・bより黄色が強い
1d	2.5Y8/2	灰白	やや粗砂	△	1cより白色が強い
1e	2.5Y8/1	灰白	粗砂	△	1dより更に白色が強い
2	2.5Y6/1	黄灰	粗砂	△	1aより砂粒細かく、粘性やや増す
3	2.5Y8/1	灰白	やや粗砂	△	1eに近いが、砂粒やや細かい
4	2.5Y7/4	浅黄	やや粗砂	△	暗褐色細砂がブロック状に入る
5	2.5Y7/1	灰白	粗砂	△	白色粗砂が主体
6	2.5Y5/1	黄灰	粗砂	○	土器・粘土ブロックを多量に含む

第92図　井戸中央ピット実測図（1/60）

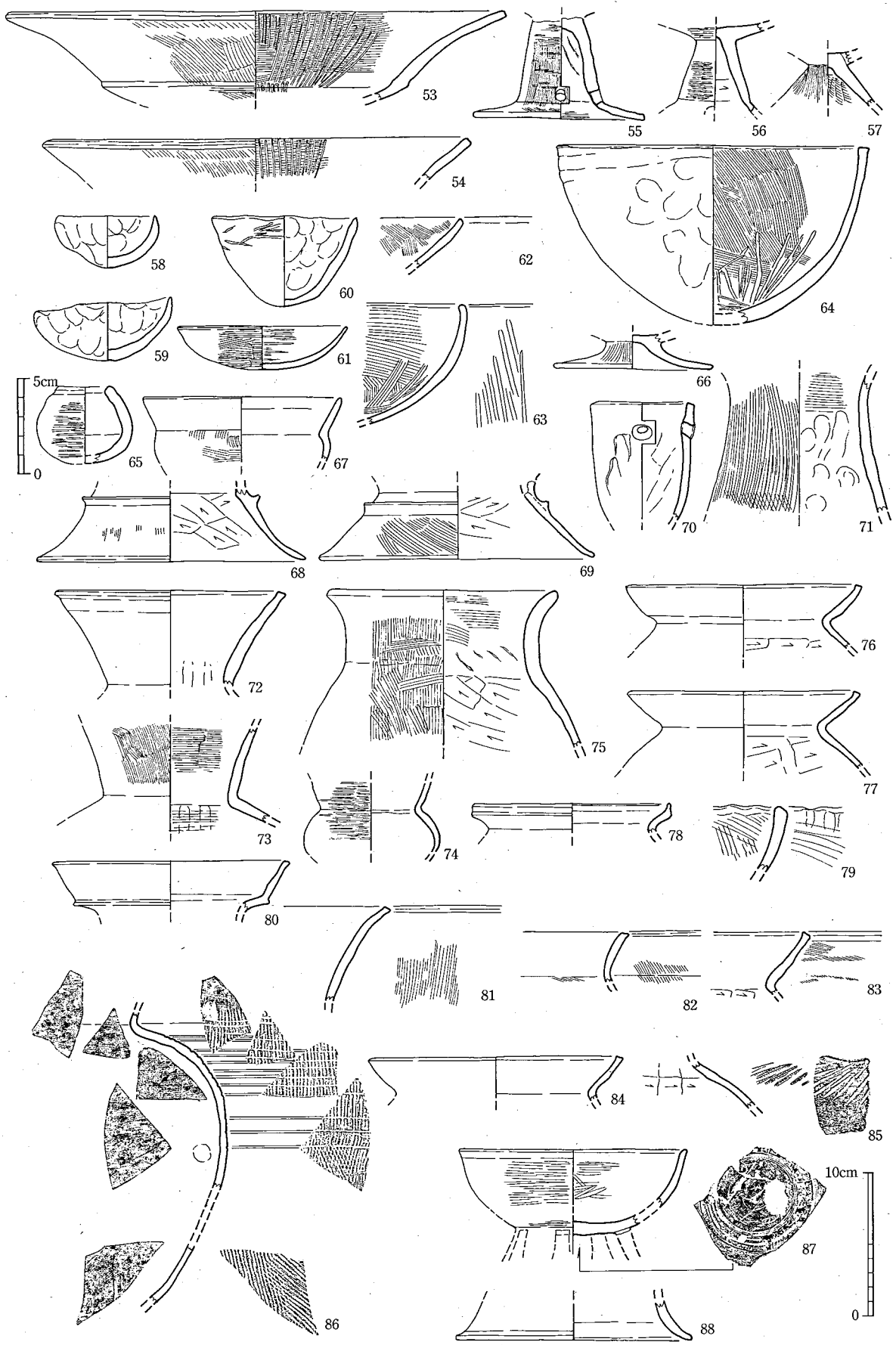
る。ピット床面より高さ20cmのところで、井戸枠の痕跡が確認できた。また、床面より30cmと60cmの高さで甕が1点ずつ出土している。また井戸の土層断面から井戸廃棄時の埋め戻しで、平坦面より1mの高さで一度埋めるのを止め、平坦にしていることが分かる。この面ではピット34が作られており、覆土に炭を含むことから、火が焚かれていたことがわかる。また覆土からの出土遺物は、遺構北側で鉄器が確認され、南側で土器がまとまって出土しており、井戸廃棄時の祭祀行為と考えられる。



第93図　井戸出土土器実測図①（1/4）



第94図　井戸出土土器実測図②（1/4）



第95図　井戸出土土器実測図③（65は1/3、他は1/4）

出土土器（図版32・33、第93～95図）

1は在地系の直口壷。2は在地系複合口縁壷の口縁。刻目が施される。3は在地系複合口縁壷の口縁端部か。4～6は直口壷。8～20は山陰系二重口縁壷。17は口縁部に穿孔。21は壷胴部。肩部に沈線が施される。22は偏球形の短頸壷。在地系か。23～27は小型精製器種。23・24は長頸壷。25～27は小型丸底壷。28・29は在地系甕の口縁部。30～51は布留系の甕の口縁。30は井戸中央ピット上層で確認された。肩部には部分的に粒状刺突文が施される。外面に煤付着。31は井戸中央ピット内、井筒の直上で確認された。胴上半に煤の付着。33は土器内面に粘土の塊を貼付。48は沈線を、32・34・36・47は波線を肩部に施す。52は庄内系の甕。外面にタタキ痕が残る。53・54は高坏坏部。55～57は高坏脚部。55は穿孔二箇所。58～64は埦。58・59は手捏土器。65は小型精製品、無形壷。66は脚付鉢、脚部。67は小型丸底鉢。68・69は山陰系鼓形器台。70は蛸壺。71は在地系の器台。72～79は井戸に南北に入れたトレンチより出土。72・73は直口壷。74は小型丸底壷。75は在地系甕。76・77は布留系の甕口縁。78は吉備系の甕口縁。79は口縁波状の鉢。80は井戸貼土内より出土した山陰系二重口縁壷口縁。81～84は井戸平坦面出土のもの。81は短頸壷。82～84は布留系の甕。84は肩部に板状工具で綾杉状の刺突を行う。85～88は半島系陶質土器。85はタタキ文短頸壷か。8・12・18・19号竪穴住居跡出土破片と同一のものと考え復元したが、小片なので、傾きには不安が残る。色調は黒灰色で、胎土は砂粒が微量混じる、焼成は堅緻。全体に外面は粗い平行タタキ、胴上半には螺旋沈線を施す。内面はナデ。87は高坏坏部破片。内外面ともミガキ、底部付近は外面回転ナデ、内面ナデ。色調は黒褐色で、胎土は緻密である。焼成は軟質で黒色磨研土器と似る。坏部底面に「×」が刻まれる。88は高坏器台脚部。色調は黒褐色断面は淡黄褐色で、胎土はやや細かい砂粒が混じる。調整は外面回転ナデ、内面ナデ。

3）土坑

1～5号土坑は近世以降の遺構であり、詳細は第5節で後述する。9号土坑は欠番である。

6号土坑（第96図6）

調査区中央西に位置し、18号竪穴住居跡と8号土坑を切る。プランは長方形で、主軸方向はN53°Eである。規模は長軸2.52m、短軸1.52m、遺構面からの深さは20cmを測る。

出土土器（図版33、第97図1～6）

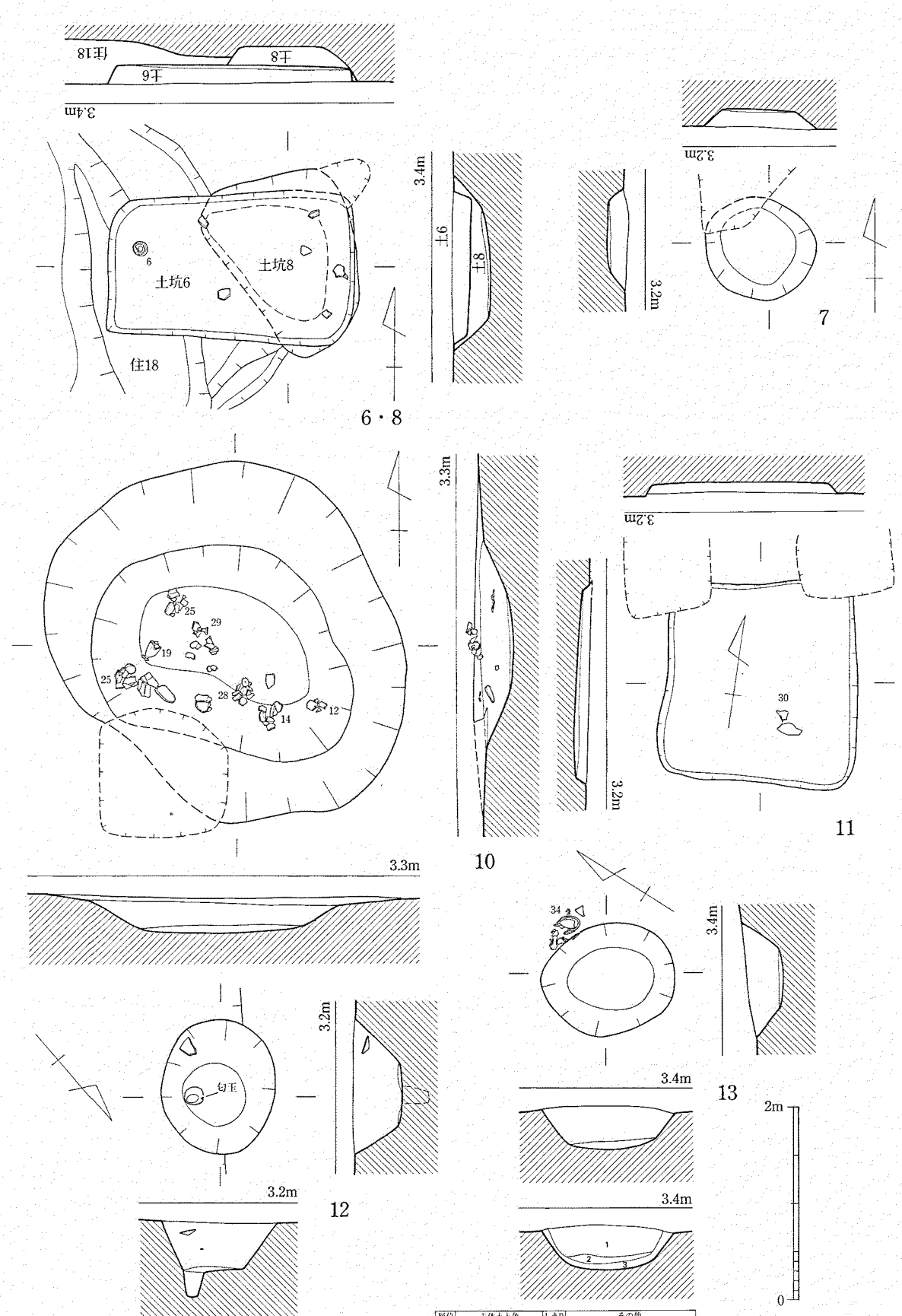
1・2は山陰系二重口縁壷。3は布留系の甕。肩部に沈線を施す。4は高坏脚部。接合部で剥離。工具痕が残る。5は脚付鉢。脚部。中央に刺突、接合のためのものか。6は鼓形器台。口縁部に煤が付着する。

7号土坑（第96図7）

調査区中央やや北寄りに位置し、井戸を切る。プランは円形で、主軸方向はN47°Wである。規模は長軸1.15m、短軸1.02m、遺構面からの深さは22cmを測る。

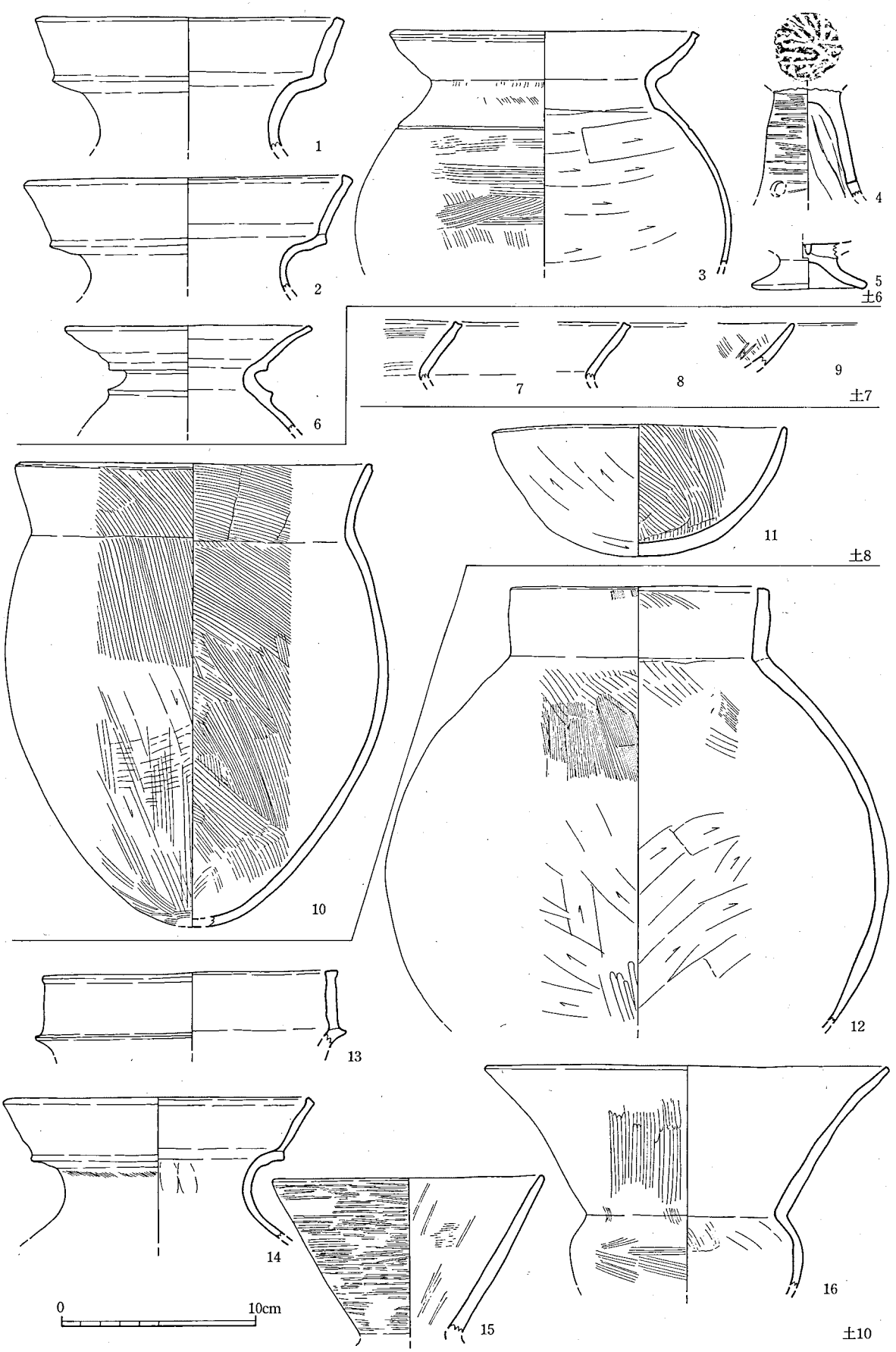
出土土器（第97図7～9）

7・8は布留系の甕口縁部破片。7は内面にヨコナデがくっきり残る。9は小型精製器種の埦。

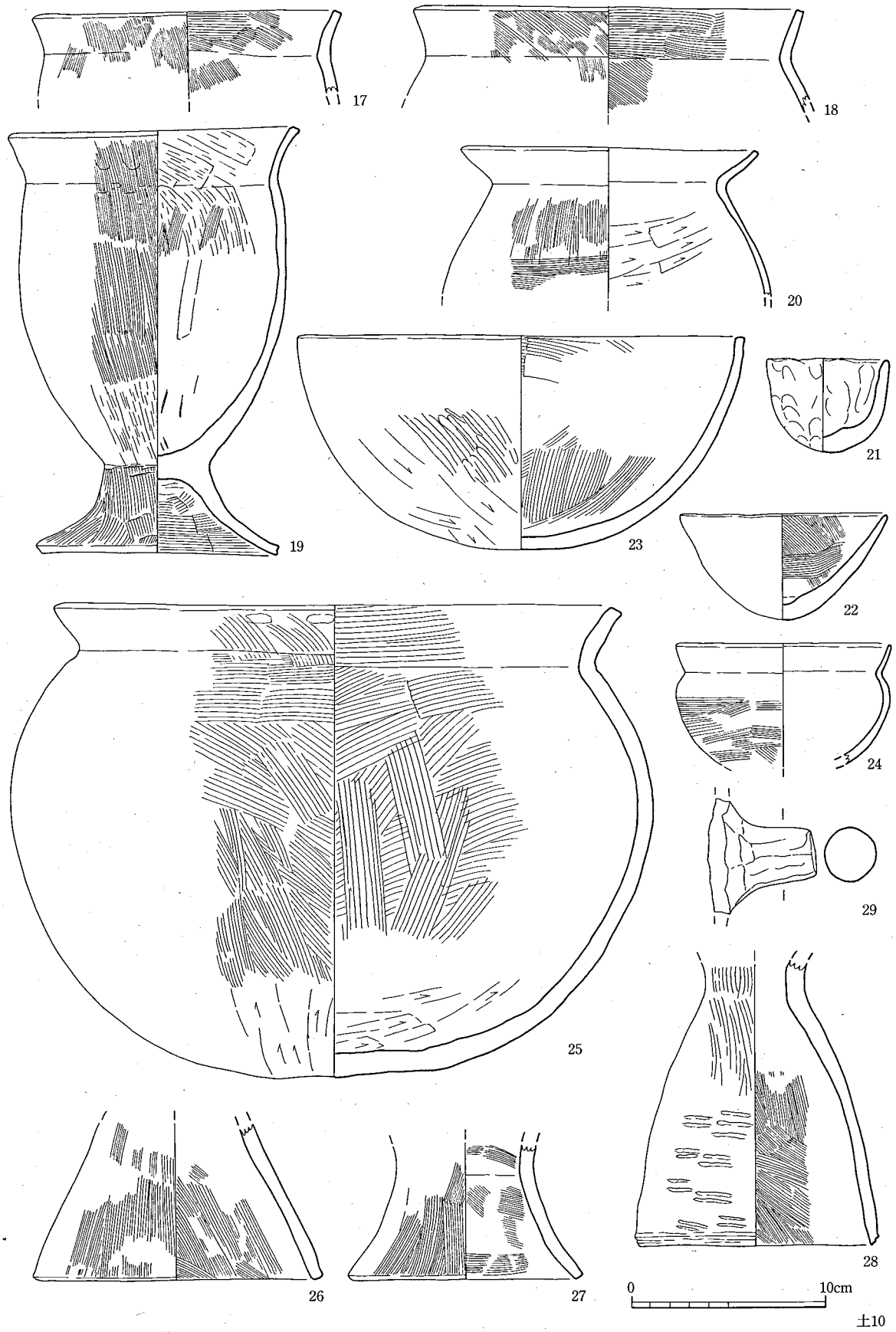


層位	主体土土色		しまり	その他
1	N1.5/	黒	△	炭の層　土器片・炭が少量混ざる
2	5Y3/1	オリーブ黒	△	1層と3層の中間層
3	5Y4/2	灰オリーブ	△	黒褐色土がまだらに入る

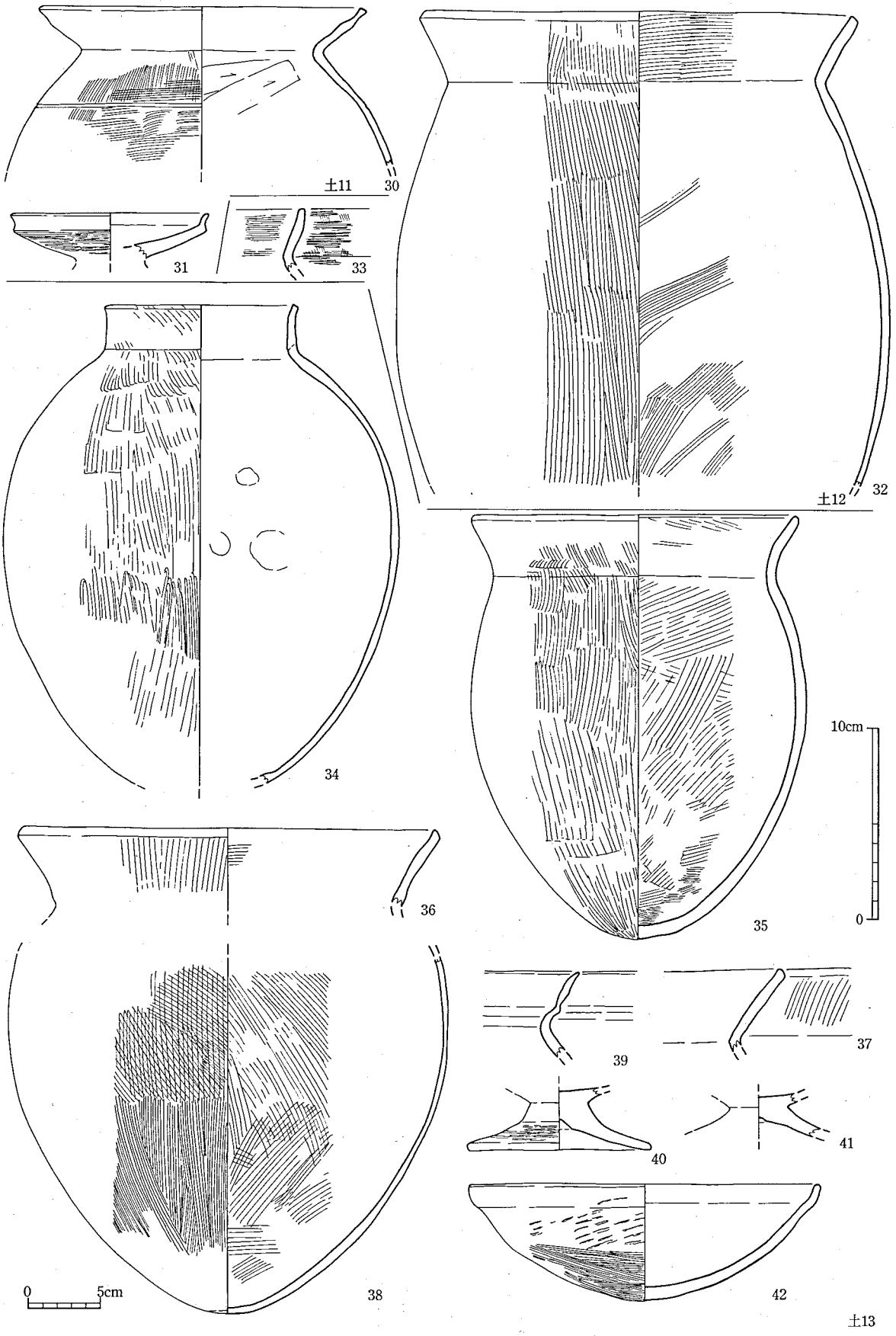
第96図　土坑実測図（1/60）



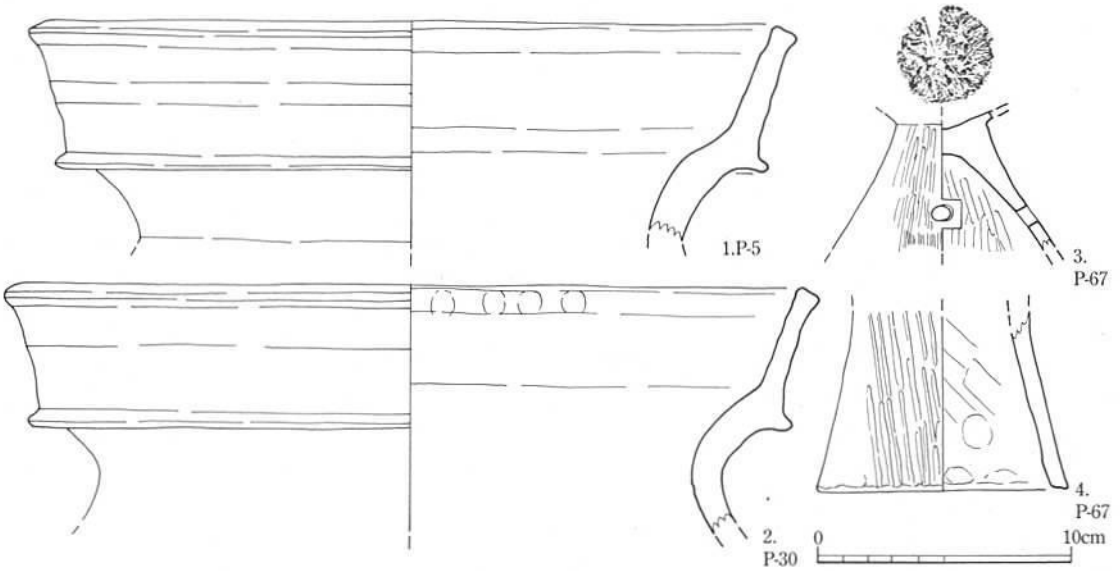
第97図　土坑出土土器実測図①（1/3）



第98図　土坑出土土器実測図②（1/3）



第99図　土坑出土土器実測図③（34・38は1/4、他は1/3）



第100図　ピット出土土器実測図（1/3）

内面にミガキが残る。

8号土坑（図版16、第96図8）

調査区西に位置し、6号土坑に切られ、18号竪穴住居跡を切る。プランは隅の丸い三角形で主軸方向はN 90° Eをさす。規模は長軸1.92 m、短軸1.53 m、遺構面からの深さは39cmを測る。

出土土器（図版33、第97図10・11）

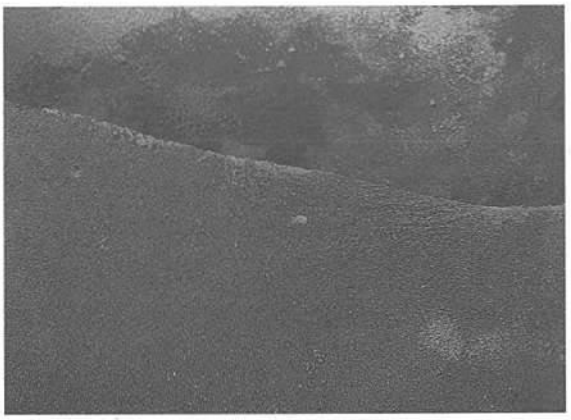
10は在地系の甕。全体に煤が付く。底部を欠く。11は椀。外面にひびが入る。

10号土坑（図版16、第96図10）

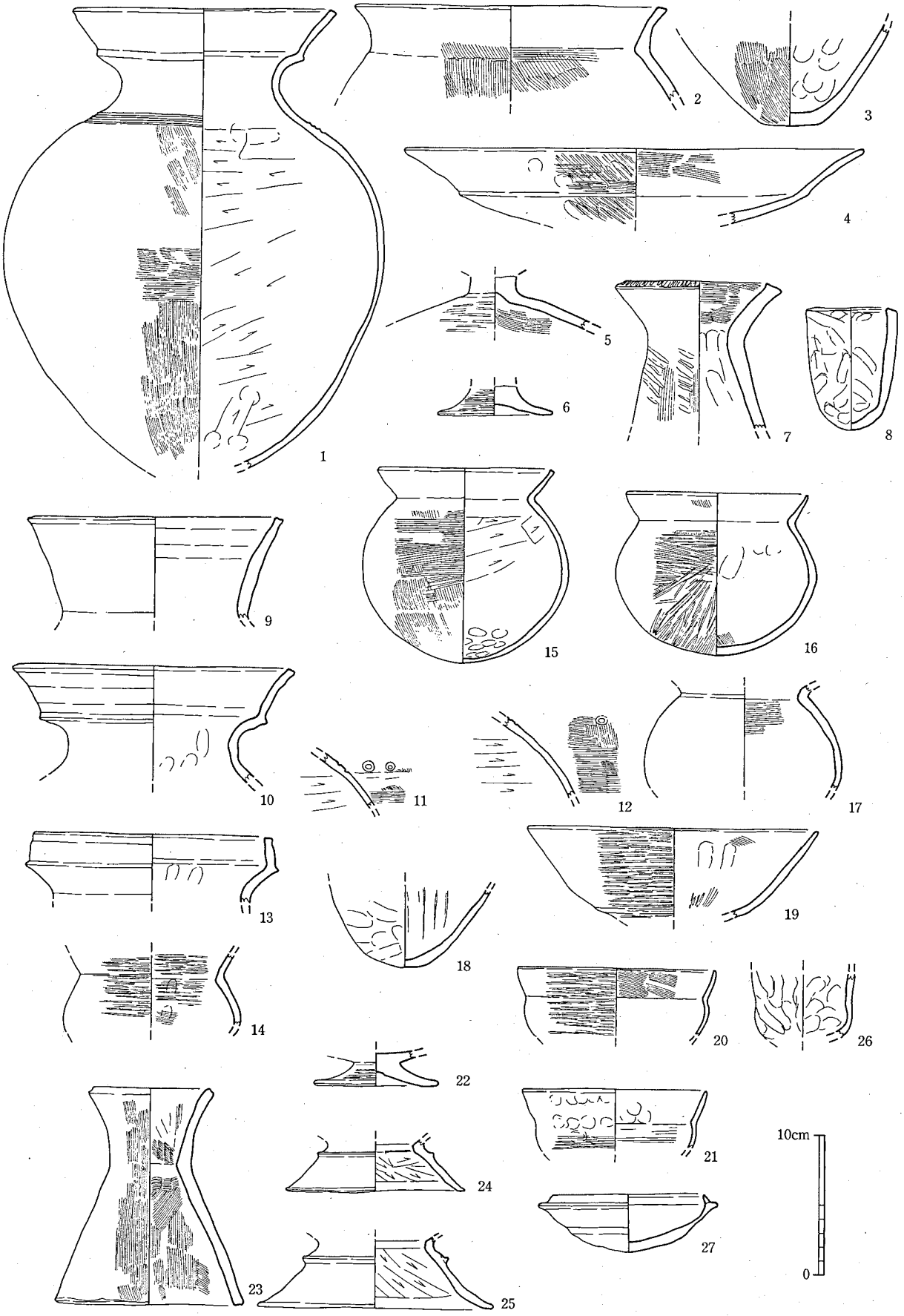
調査区南東に位置する。プランは不整楕円形を呈する。主軸方向はN27° Wである。規模は長軸4.00 m、短軸3.23 m、遺構面からの深さは41cmを測る。遺構プランは明瞭でなく、掘削後すぐに埋められたものと考える。土器は覆土上層に集中する。

出土土器（図版33、第97・98図12～29）

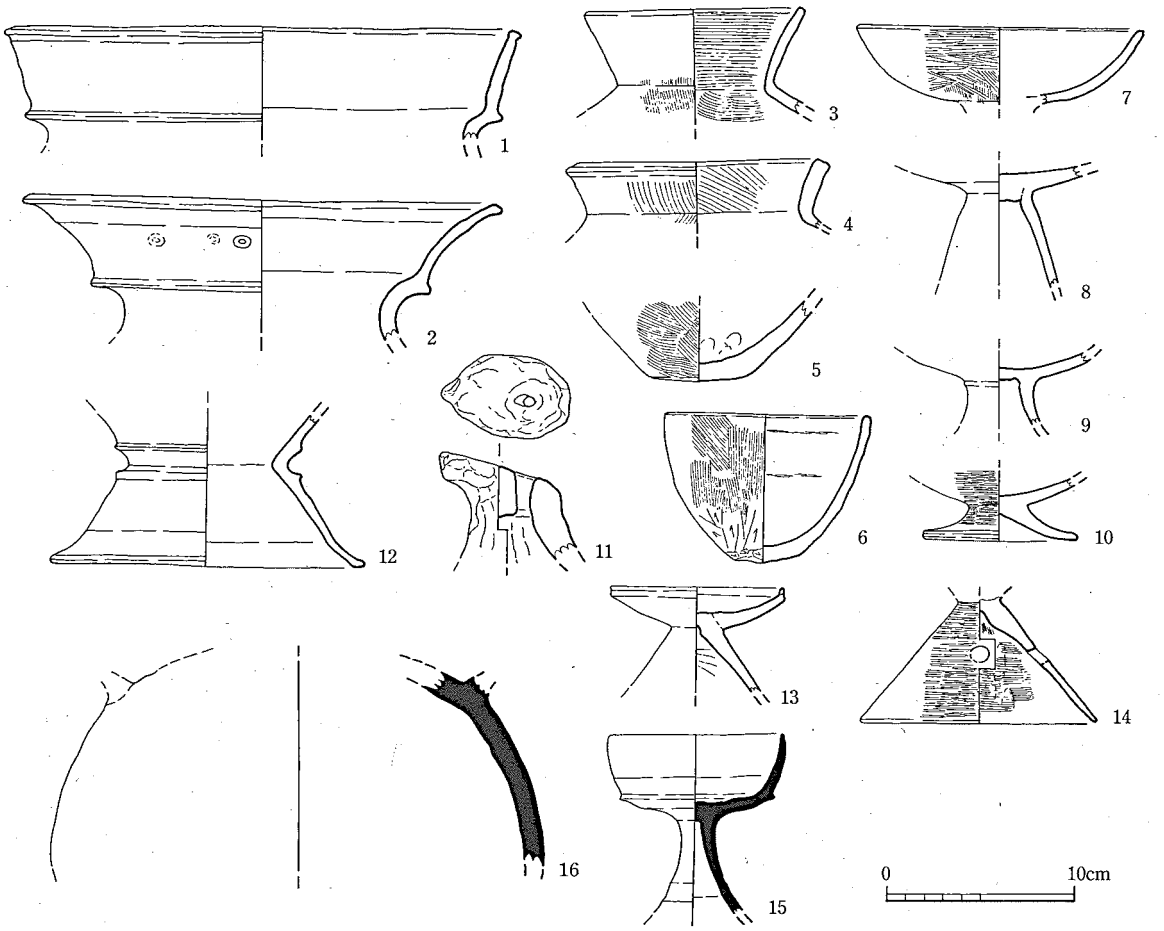
12は在地系の直口壷。胴下部以下は煤が付着。13・14は山陰系二重口縁壷の口縁破片。15は小型精製器種の直口壷口縁。16は直口壷。17～18は在地系甕の口縁。19は肥後地方の野辺田式の甕と類似し、熊本県鹿本町津袋大塚遺跡に類例がある。しかし脚がつくことを除けば、在地系甕と変わらず、また西新町遺跡第6次SC01にも台付甕の資料があることから、搬入品・在地系、両者の可能性を考えておきたい。20はなで肩の布留系の甕。21～23は椀。21は手捏ね土器。22は内面底部に凹みを作る。23は外面一部ミガキ。24・25は鉢。25は大型品。26～28は在地系器台。28は外面にタタキを残す。29は半島系の甑把手。調整はナデ。白黄褐色。胎土に長石・雲母を含む。



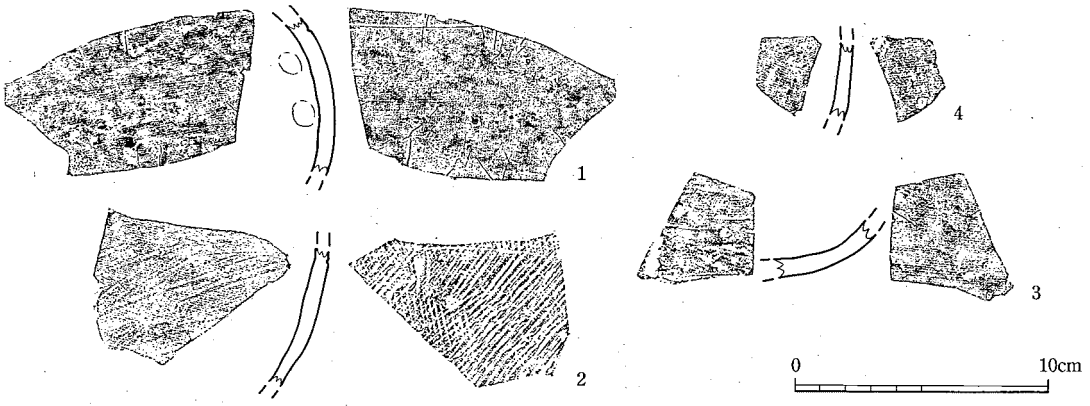
12号土坑勾玉出土状況



第101図　表土・検出面出土の土器実測図（1/4）



第102図　撹乱等出土の土器実測図（1/4）



第103図　検出面出土の半島系土器実測図（1/3）

11号土坑（図版16、第96図11）

調査区南東に位置する。プランは整った正方形で、主軸方向はN6°Eである。規模は長軸2.04ｍ、短軸1.98ｍ、遺構面からの深さは14cmと浅い。

出土土器（第99図30・31）

30は布留系の甕。肩部に一条沈線を施す。31は小型器台受部。端部は短く直立する。

12号土坑（図版17、第96図12）

調査区南東に位置する。長楕円形の土坑である。主軸方向はWE 33°N。規模は長軸1.39 m、短軸1.17 m、遺構面からの深さは78cmを測る。床面にピットが作られる。覆土より勾玉が出土する。

出土土器（図版33、第99図32・33）

32は在地系甕。内面はハケ後ナデ。外面全体に薄く煤が付着。33は小型丸底鉢の口縁。外面にヨコミガキ。

13号土坑（図版17、第96図13）

調査区中央東に位置する。整った長楕円形の土坑である。主軸方向はN 45°W。規模は長軸1.38 m、短軸1.16 m、遺構面からの深さは45cmを測る。覆土は炭を多く含む。

出土土器（図版33・34、第99図34～42）

34・35・42は土坑覆土ではなく、土坑北側検出面で出土している。34は在地系の甕か。口縁が直立する。調整時の乾燥具合の差か、胴下半部はハケが粗い。35～38は在地系甕。35は完形。外面に煤が付着。36・37は口縁部破片。38は胴部～底部。39は二重口縁壺口縁。40・41は脚付鉢。脚部破片。42は埦。外面上半にタタキ痕が残る。

4）ピット出土土器（第100図）

1はピット5出土二重口縁壺口縁。2はピット30出土山陰系二重口縁壺口縁。口縁端部に指頭痕残る。3はピット67出土小型器台の脚部。接合部が残る。4はピット67出土。在地系支脚。

5）表土・検出面出土の土器（図版34、第101図）

1～8は表採品。9～27は検出面出土の土器。1は山陰系二重口縁壺。肩部に平行櫛描文が入る。2・3は在地系甕。2は口縁部破片。3はやや平底の残る底部。4・5は高坏。4は坏部。外面に赤彩がすこし残る。5は高坏脚部破片。6は脚付鉢の脚部。7は器台。口縁端部に刻目を施す。8は蛸壺。全体に煤が付着。9は直口壺。10～13は二重口縁壺。10は山陰系。11・12は山陰系二重口縁壺の肩部か。竹管文を施す。13は吉備系。14は小型精製品直口壺。15～18は甕。16は内面底部にハケ。外面はタテハケ後、横方向のミガキ。18は在地系。丸底に近いレンズ底。19は高坏坏部。20・21は小型精製鉢。22は脚付鉢の脚部。23は器台。24・25は鼓形器台。26は蛸壺底部破片。27は土師器、模倣坏。

6）撹乱等出土の土器（図版34、第102図）

1は山陰系二重口縁壺口縁部。2は加飾二重口縁壺口縁部。畿内系。外面に竹管文。3は直口壺。4・5は在地系甕、4は口縁、5は底部、平底の名残の残るレンズ底。6は埦。器高が高く、甕の製作途中のように感じる。7は高坏坏部、8・9は高坏脚部破片。10は脚付鉢脚部。11は在地系の器台。12は山陰系鼓形器台。13・14は小型器台脚部。15は須恵器高坏。色調は暗青灰色。細砂粒を多く含む。調整は内外面とも回転ナデ調整。坏部と脚部は接合部で剥離。16は須恵器提瓶破片。井戸出土であるが、混入と考え、ここで報告する。色調は青灰色。耳が退化している。

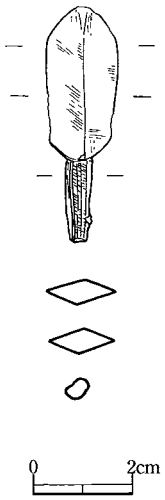
7）検出面等出土の半島系陶質土器（図版35、第103図）

1は排土中出土、壷肩部破片か。色調は暗灰褐色、断面暗赤褐色。内外面ともヨコナデ、内面一部指押え。2は検出面出土、壷胴部破片。淡灰褐色。外面は平行タタキ、内面はナデ。焼成は堅緻。砂粒は非常に少ない。3は壷胴下部破片か。焼成堅緻。外面黒灰色、内面青灰色。砂粒は少ない。4は検出面出土、器種不明破片。焼成は堅緻。暗灰褐色。砂粒。非常に少ない。

2．　古墳時代の金属製品

1）銅鏃（図版35、第104図）

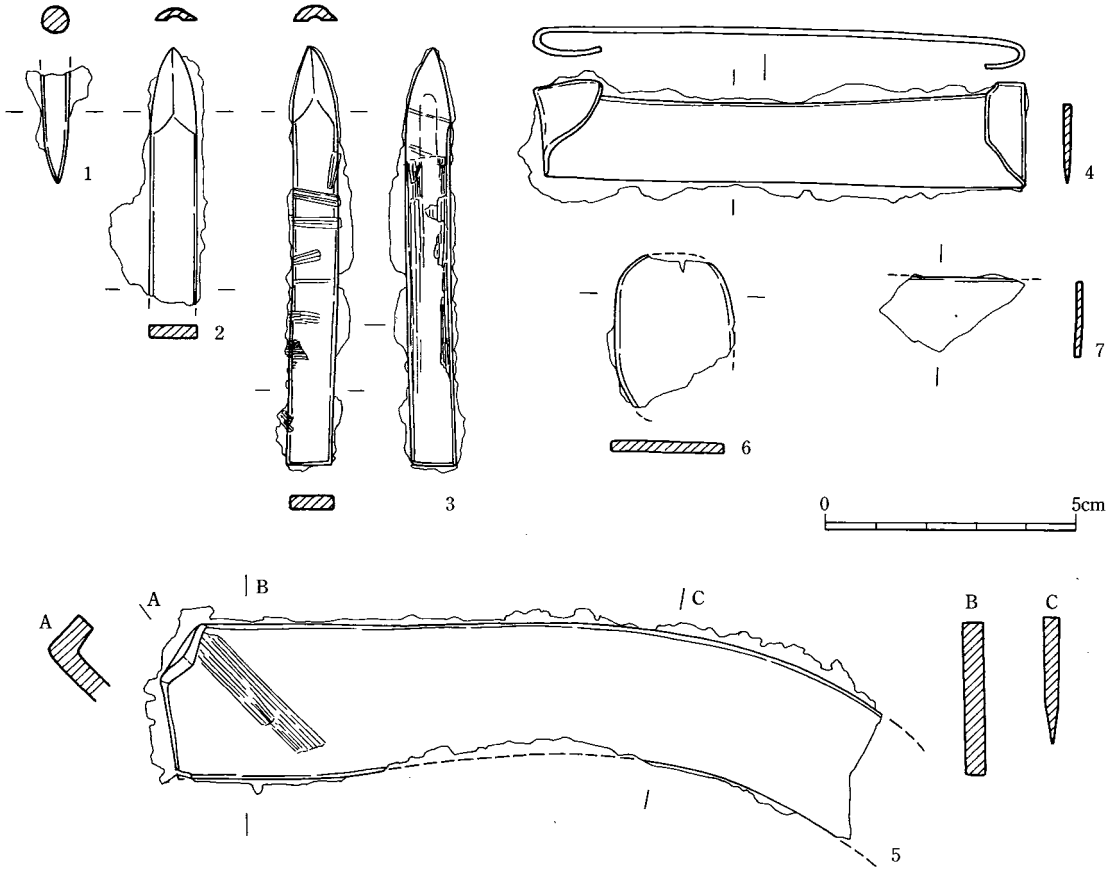
29号竪穴住居跡の覆土内から出土した。形状はややカーブの甘い柳葉形で、小型である。鋳造時に鋳型が上下左右ともずれており、特に茎部との境で顕著に観察される。鋳造後よく研磨され、先端部のズレは研磨により解消される。銹化はなく、銅質も非常に良い。寸法は長さ4.7cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm、重量は8.5ｇ。



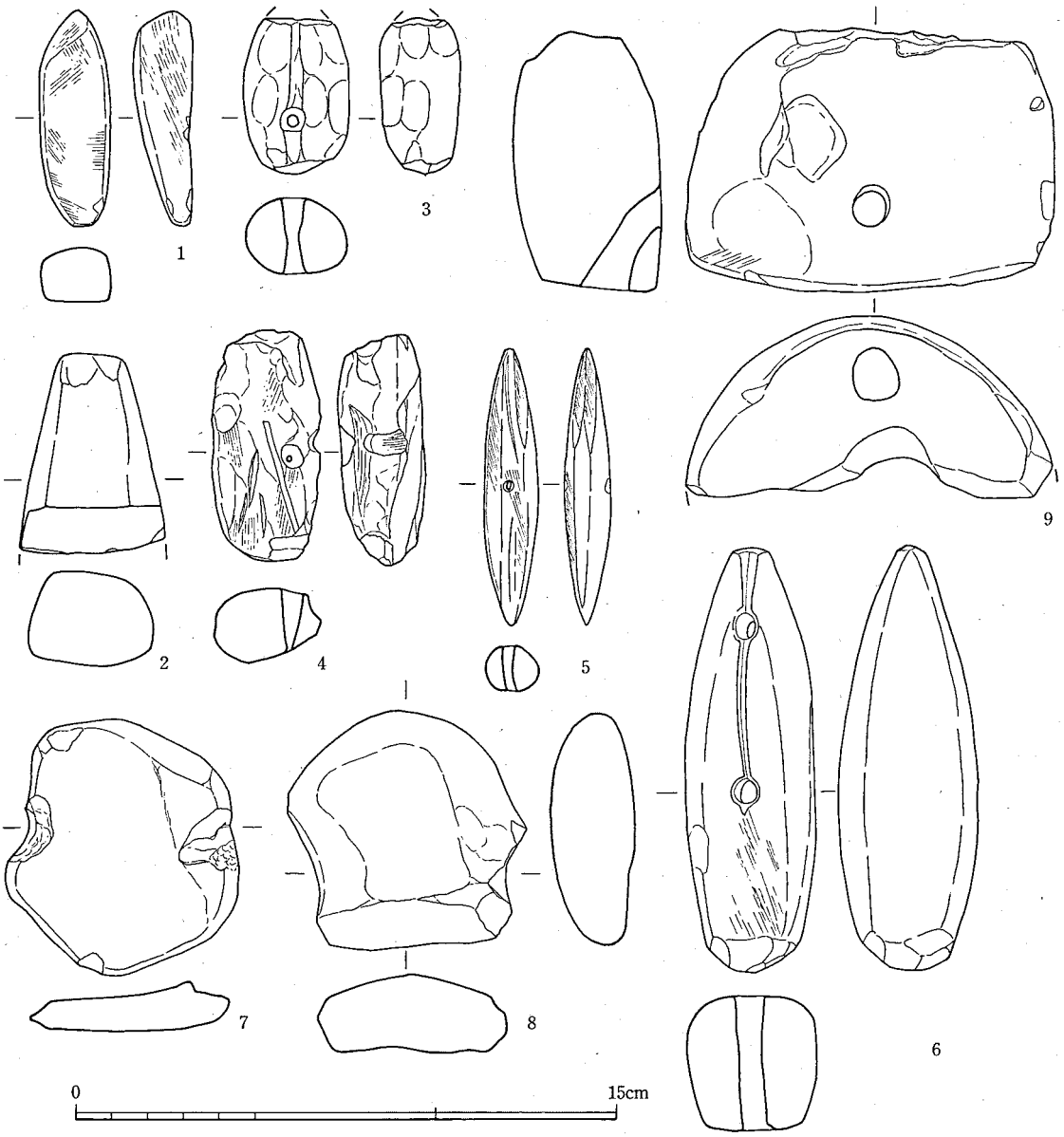
第104図
銅鏃実測図
(2/3)

2）鉄製品（図版37、第105図１～７）

古墳時代のものと考えられる鉄製品は7点出土している。1は鉄鏃の茎の端部と考えられる。28号竪穴住居跡から出土した。2、3はヤリガンナ。2はほぼ中央部分で折損し、先端部のみ残る一方で、3は完形を呈する。ともに先端両側部に刃を持ち、裏側には中央に一本の樋が入る。3の表側には蔓巻きの痕跡が残ると



第105図　鉄器実測図（2/3）



第106図　石製品実測図①（1/2）

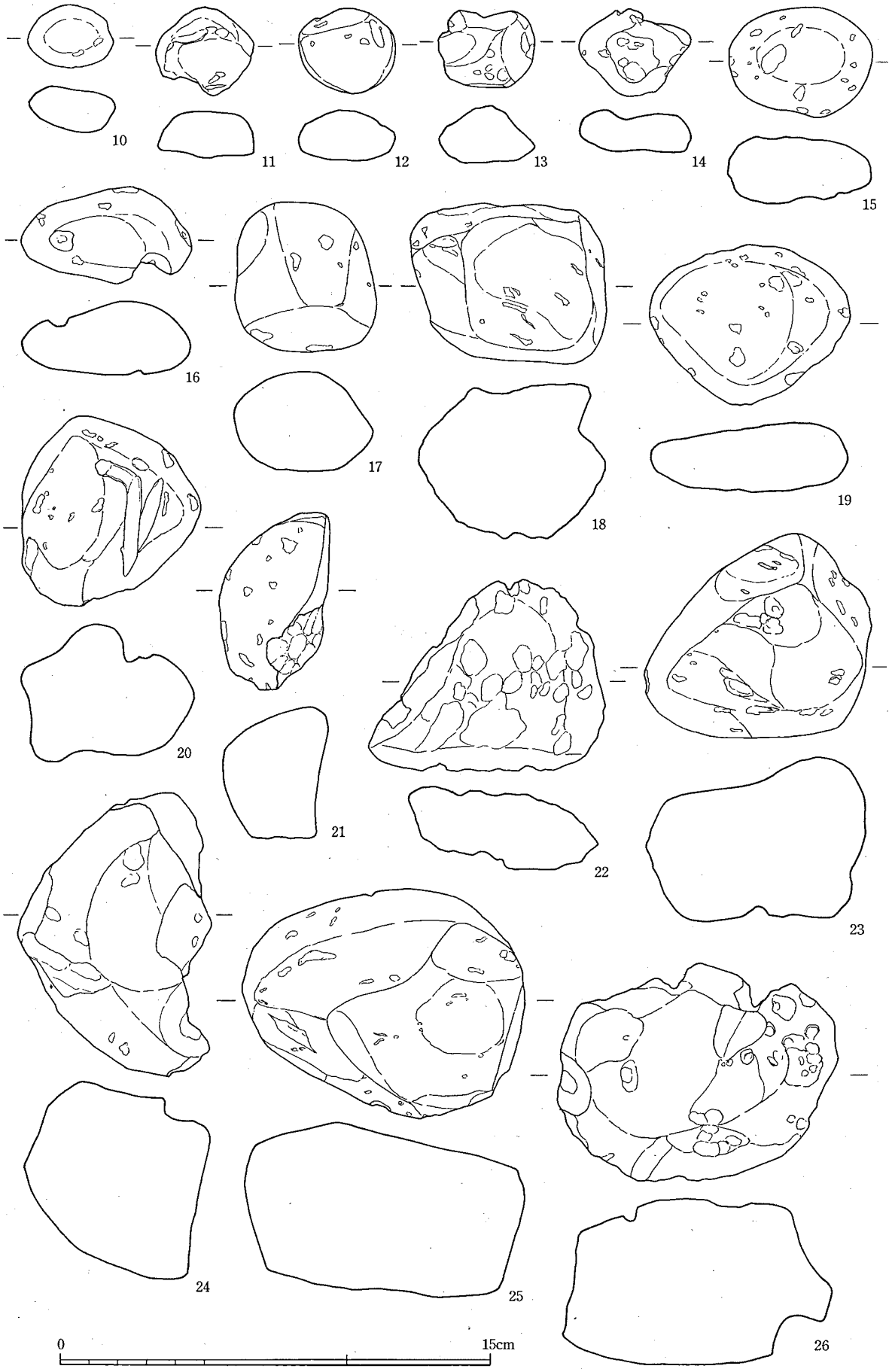
共に、裏側にはヤリガンナ本体に添えられた添え木が残る。2は20号竪穴住居跡、3は22号竪穴住居跡から出土した。4は完形の手鎌。両側部を折り返す形態を呈し、最大幅9.7cmを測る。木質等の痕跡は認められない。5は曲刃鎌で、先端部を欠損する。柄を固定するために、基部の左上側をやや折り返している。木質も一部残存するが、柄であるかどうかは不明。4、5はともに井戸から出土した。6、7は不明鉄製品。6は楕円形の平面を呈していると考えられる。ピット10から出土しており、近世のものである可能性もある。7は鉄片で、15号竪穴住居跡から出土。一部のみ端部が残存か。　（岡寺　良）

3．古墳時代の石製品（図版36・37、第106～111図）

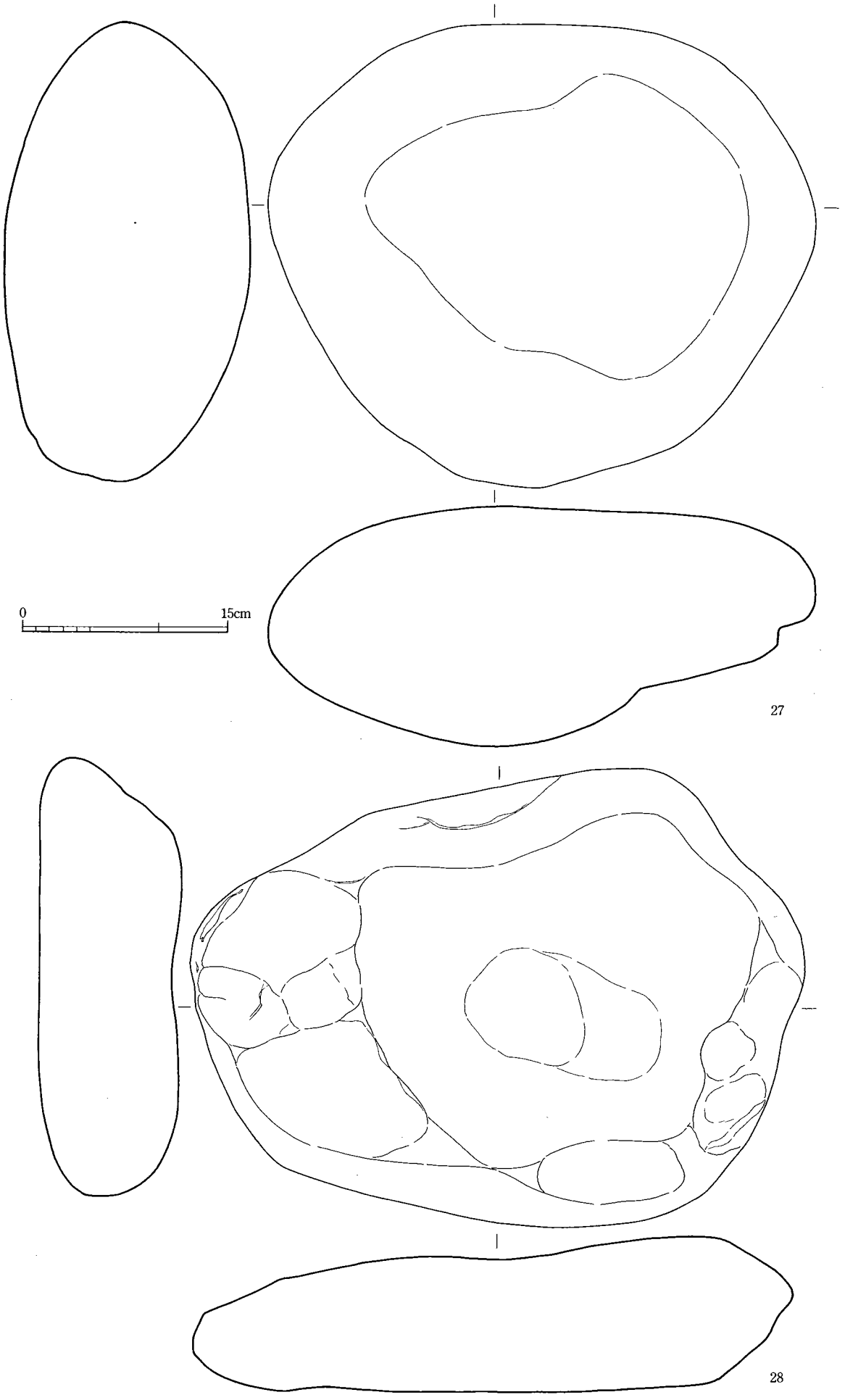
古墳時代の石製漁労具として、その可能性があるものや未成品と考えられるものを合わせて、9点出土した。1は小型の石錘の未成品と思われ、18号竪穴住居跡出土である。研磨痕をはじ

め全体に明瞭に整形の痕が認められる。長さ6.0㎝、幅2.0㎝、厚さ1.5㎝、重さ30.0ｇで滑石製。2は13号竪穴住居跡出土で、欠損する。整形の痕跡はわずかで石材からも疑問は残るが、石錘の未成品としておく。長さ5.5㎝、幅4.0㎝、厚さ2.7㎝、重さ73.3ｇで、硬質砂岩製。3～6は有孔石錘である。3は排土中の出土で、欠損する。穿孔は両面から施され、また表裏ともに縦軸に断面Ｖ字の溝を有す。長さ4.3㎝、幅2.9㎝、厚さ2.1㎝、重さ30.0ｇで滑石製。4は23号竪穴住居跡出土で、全体的に研磨や整形の痕跡が見られるが、非常に粗雑な作りである。穿孔は一箇所に片側から斜めに施され、側面にも一部穿孔の痕跡らしきものが残存する。長さ6.5㎝、幅3.0㎝、厚さ2.0㎝、重さ57.9ｇで滑石製。5は4号竪穴住居跡出土で、研磨痕が非常に残るが丁寧に整形され、整美な小型の完形品である。穿孔は両側から施される。長さ7.7㎝、幅1.0㎝、厚さ1.8㎝、重さ17.9ｇで細粒砂岩製。6は8号竪穴住居跡出土で、二片に欠損するが断面方形の完形となる。表面は風化がやや激しく、表裏ともに断面Ｖ字の溝を有す。また、穿孔は2ヶ所ともに両面から施される。長さ11.9㎝、幅3.7㎝、厚さ3.7㎝、重さ207.5ｇで砂岩製。7・8は打欠石錘である。7は16号竪穴住居跡出土で、両側を対にして打ち欠いている。長さ7.2㎝、幅6.4㎝、厚さ1.4㎝、重さ82.8ｇで細粒砂岩製。8はピット出土で、両側を打ち欠いた部分を更に若干研磨しているようである。長さ6.6㎝、幅6.4㎝、厚さ2.3㎝、重さ111.8㎝で滑石製。9は、大型の有孔石錘で包含層出土である。半分に欠損しており、完形であれば中央に孔を有し断面はやや細長い半球形に近い形態となる。欠損面に部分的に二次的な研磨を施しており、完存する小孔は残存部分の中央に位置することから再利用のために施された可能性もある。しかし、福岡市西区今宿五郎江遺跡第4次調査出土（福岡市埋蔵文化財調査報告書第479集）の完形の類例もこの小孔を有し、欠損前からの加工とも考えられる。長さ7.3㎝、幅10.3㎝、厚さ4.2㎝、重さ556.5ｇで滑石製。

10～26は軽石で、浮子等をはじめ漁労具として使用したことが想定されるが、はっきりとその用途を認識できる加工を施したものはない。ただ、多くが表面を研磨等で整形されており、10・12・13・15～21、23は全体的に整形され大きな凹凸は少なく、24も大部分は整形され、11は部分的に整形されている。10は井戸出土で、長さ2.3㎝、幅3.0㎝、厚さ1.4㎝で重さ2.3ｇ。11は18号竪穴住居跡出土で、長さ3.4㎝、幅3.1㎝、厚さ1.8㎝で重さ3.1ｇ。12は7号竪穴住居跡上層出土で、長さ3.0㎝、幅3.4㎝、厚さ1.8㎝で重さ3.1ｇ。13は11・12号竪穴住居周辺の遺構面出土で、長さ2.7㎝、幅3.5㎝、厚さ2.0㎝で重さ3.2ｇ。14は19号竪穴住居跡出土で、長さ3.0ｇ、幅3.9㎝、厚さ1.5㎝で重さ1.9ｇ。15は井戸出土で、長さ3.9㎝、幅5.0㎝、厚さ2.4㎝で重さ7.8ｇ。16は4号竪穴住居跡出土で、長さ3.4㎝、幅6.0㎝、厚さ2.5㎝で重さ13.4ｇ。17はピット出土で、長さ5.2㎝、幅5.0㎝、厚さ3.7㎝で重さ20.0ｇ。18は19号竪穴住居跡出土で、長さ5.6㎝、幅6.8㎝、厚さ5.6㎝で重さ77.4ｇ。19は9号竪穴住居跡出土で、長さ5.7㎝、幅7.1㎝、厚さ2.4㎝で重さ21.1ｇ。20は19号竪穴住居跡出土で、長さ6.7㎝、幅6.2㎝、厚さ4.6㎝で重さ29.6ｇ。21は18号竪穴住居跡出土で、長さ6.2㎝、幅3.8㎝、厚さ4.7㎝で重さ14.5ｇ。22は井戸検出面出土で、長さ6.7㎝、幅8.2㎝、厚さ2.2㎝で重さ30.0ｇ。23は井戸南半出土で、長さ7.2㎝、幅8.0㎝、厚さ5.7㎝で重さ52.8ｇ。24は8号竪穴住居跡最下層出土で、長さ9.9㎝、幅6.8㎝、厚さ6.9㎝で重さ73.9ｇ。25は19号竪穴住居跡出土で、長さ8.0㎝、幅9.9㎝、厚さ6.0㎝で



第107図　石製品実測図②（1/2）



第108図　石製品実測図③（1/4）

第109図　石製品実測図④（1/2）

第110図　石製品実測図⑤（1/2）

重さ114.8ｇ。26はピット出土で、長さ7.7㎝、幅9.9㎝、厚さ6.4㎝で重さ78.0ｇ。また、図示していないが排土中から全体的に整形されたものが1点出土している(図版36)。

27・28は台石である。27は23号竪穴住居跡の調査区南壁にかかる部分を掘り込んだ際に、床面直上から出土した。明確な使用痕等は認められないが、表面はやや赤みがかり、顔料の残存したものか鉄分が沈着したものと思われる。長さ33.8㎝、幅39.7㎝、厚さ18.0㎝、重さ約32㎏で砂岩製。28は2号竪穴住居跡出土で、明確な擦痕等は認められないが、上面の中央部がやや凹んでいる。長さ33.3㎝、幅45.0㎝、厚さ11.6㎝、重さ約27.5㎏で砂岩製。

29・30は用途不明の石製品で、研磨痕が認められるが砥石の用途のためではなく、整形によるものと思われる。29は18号竪穴住居跡出土で、側面のみを加工している。長さ6.7㎝、幅3.5㎝、厚さ2.8㎝、重さ90.0ｇで花崗岩製。30は1号竪穴住居跡出土で、欠損面以外をほぼ全面的に研磨して、欠損面も一部研磨する。長さ5.6㎝、幅4.3㎝、厚さ1.8㎝、重さ33.3ｇで砂岩製。

31～35は叩石である。31は28号竪穴住居跡出土で、表裏ともに中央部が凹み、側縁はほぼ全面的に使用しているが、短軸の両端の使用が特に著しい。長さ10.1㎝、幅7.2㎝、厚さ3.3㎝、重さ380.9ｇで砂岩製。32は18号竪穴住居跡出土で、側縁を広い範囲で使用し、特に長軸の一端が強い打撃に使用される。長さ8.2㎝、幅6.7㎝、厚さ3.3㎝、重さ272.9ｇで砂岩製。33は4号竪穴住居跡出土で、一部欠損する。使用は部分的で、短軸方向の擦痕も見られる。また、その反対側の面で使用痕は明確ではないが、非常に平滑で研磨に使用した可能性がある。長さ8.8㎝、幅3.3㎝、厚さ3.4㎝、重さ141.4ｇで砂岩製。34は11号竪穴住居跡出土で、著しく使用し表裏ともに中央部分が大きく凹み、側面も大きく三箇所が集中的に使用されている。長さ8.9㎝、幅5.5㎝、厚さ3.2㎝、重さ196.6ｇで砂岩製。35は15号竪穴住居跡出土で、数箇所の使用が認められる。長軸端部の片側は平坦で擂り粉木状に使用によるものと思われる。長さ9.4㎝、幅5.1㎝、厚さ4.1㎝、重さ319.5ｇで硬質砂岩製。

36は磨石で、13号竪穴住居跡出土である。大きく欠損し、残った側縁部分を広い範囲で使用し擦痕が多く残る。長さ7.0㎝、幅13.8㎝、厚さ5.0㎝、重さ633.7ｇで硬質砂岩製。

37は20号竪穴住居跡カマド内出土のカマド支脚である。平らな欠損面を接地面として据えられており、強く被熱する。長さ13.6㎝、幅10.0㎝、厚さ5.1㎝、重さ1058.5ｇで砂岩製。

38～52は砥石である。38は14号竪穴住居跡出土で、小片で砥面が一面のみ残存する。長さ6.6㎝、幅2.0㎝、厚さ0.9㎝、重さ16.7ｇで細粒砂岩製。39は28号竪穴住居跡出土で、小片で砥面はごく一部のみ残存する。長さ6.6㎝、幅2.0㎝、厚さ1.6㎝、重さ24.8ｇで細粒砂岩製。40は井戸下層の出土で、表裏面ともによく使用され非常に平滑となる。また、側面も部分的ながら使用される。長さ10.8㎝、幅5.4㎝、厚さ1.6㎝、重さ199.4ｇで砂粒砂岩製。41は19号竪穴住居跡出土で、欠損する。長さ9.7㎝、幅3.9㎝、厚さ3.2㎝、重さ188.1ｇで硬質砂岩製。42は4号竪穴住居跡出土で、使用の痕跡はさほど顕著ではなく、一面のみの使用である。長さ9.5㎝、幅3.4㎝、厚さ2.5㎝、重さ149.1ｇで硬質砂岩製。43は21号竪穴住居跡出土で、大きく欠損するが残存する砥面は非常に平滑である。長さ10.7㎝、幅4.2㎝、厚さ1.7㎝、重さ58.9ｇで細粒砂岩製。44は8号竪穴住居跡出土で、二面の使用が特に著しく非常に平滑で、もう一面も若干の使用が認められる。長さ11.9㎝、幅4.2㎝、厚さ3.5㎝、重さ169.0ｇで細粒砂岩製。45は14号竪穴住居

第111図　石製品及び土製品実測図（47～52、55・56は1/2、53・54は2/3）

跡出土で、砥面は三面認められるが、内一面の使用が特に著しく非常に平滑である。長さ16.5㎝、幅6.7㎝、厚さ4.2㎝、重さ617.4ｇで硬質砂岩製。46は完形であるが、8号竪穴住居跡下層と29号竪穴住居跡床面上から二片に分かれて出土した。上面と両側面の三面を使用し平滑である。長さ36.4㎝、幅4.8㎝、厚さ3.3㎝、重さ706.5ｇで細粒砂岩製。47は6号竪穴住居跡出土で、一側面をよく使用し平滑となっており、もう一側面も使用した可能性が強い。長さ8.0㎝、幅10.0㎝、厚さ4.2㎝、重さ412.9ｇで硬質砂岩製。48は7号竪穴住居跡出土で、表面のみを使用し平滑となり光沢を帯びている。長さ9.2㎝、幅10.2㎝、厚さ4.6㎝、重さ631.7ｇで玄武岩製。49は6号竪穴住居跡出土で、表面は平滑で使用は明瞭であり、裏面も使用した可能性が強い。長さ13.6㎝、幅8.4㎝、厚さ4.0㎝、重さ732.5ｇで硬質砂岩製。50は4号竪穴住居跡出土で、使用の痕跡はさほど明瞭ではないが表面のみを使用していると思われる。長さ13.5㎝、幅6.1㎝、厚さ3.7㎝、重さ489.3ｇで硬質砂岩製。51は井戸出土で、残存する砥面は平滑となっており粗い擦痕が部分的に目立つ。長さ15.0㎝、幅9.2㎝、厚さ4.7㎝、重さ791.1ｇで細粒砂岩製。52は25号竪穴住居跡出土で、表裏両面ともに使用され平滑となる。また、四隅の内一箇所の側縁を特に使用する。長さ6.7㎝、幅6.7㎝、厚さ1.8㎝、重さ145.0ｇで硬質砂岩製。

53は玉類の原材と思われ、13号竪穴住居跡出土で、全体に剥離を施し整形される。長さ2.5㎝、幅1.9㎝、厚さ1.4㎝、重さ7.9ｇで碧玉製。54は勾玉で、12号土坑出土である。表面は非常に丁寧に研磨され、光沢を帯びている。穿孔は表裏両側から施される。長さ1.7㎝、幅1.0㎝、厚さ0.5㎝、重さ1.0ｇで碧玉製。ともに色調は淡緑白色。（坂元）

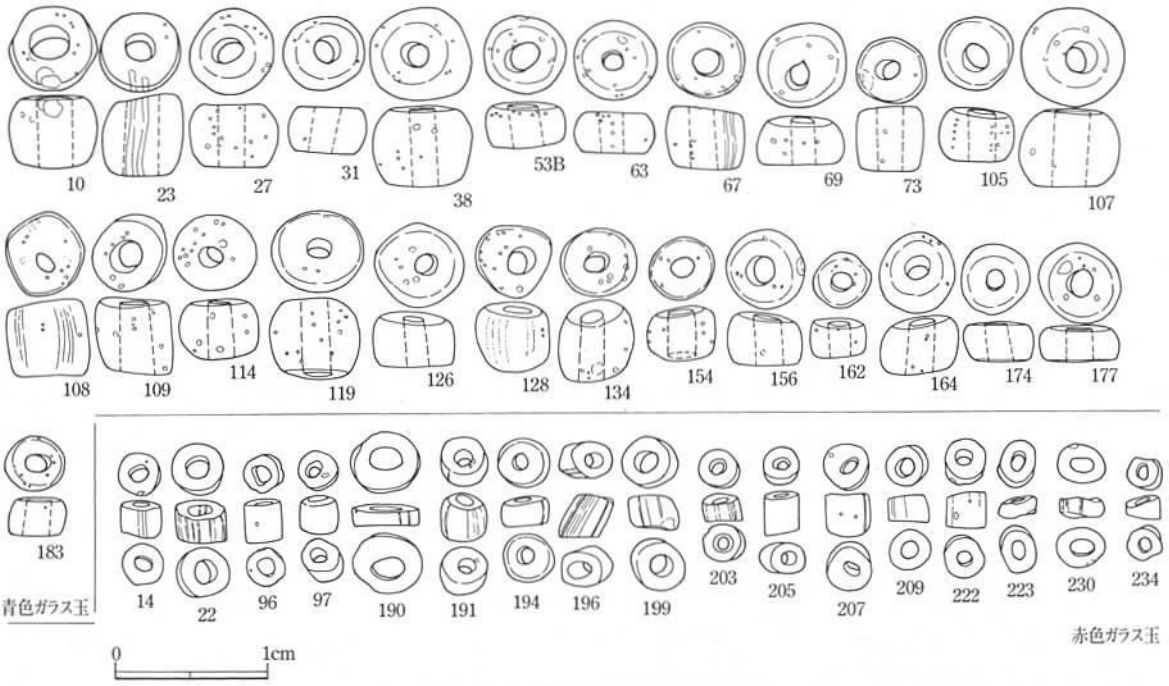
4．古墳時代の土製品（図版40、第111図55、56）

古墳時代に属することが認識できる土製品は、わずか2点である。55は土板で、4号竪穴住居跡出土である。平面形は不整な四角形に近いが、側面に還元焔焼成部分が見られ、ある程度摩耗した結果であると思われる。よって、側面部分に強い稜が残るが、焼成前の整形ではなく、焼成後の二次的な研磨等の使用、もしくは整形によるものであろう。長さ5.6㎝、幅6.3㎝、厚さ1.5㎝で重さ56.3ｇ。56は土錘で、6号竪穴住居跡出土である。中央部よりややずれた位置に一箇所穿孔される。穿孔自体は円形に施されるが、端部は他の工具で彫り込まれたようで、角がつき四角形に近い。また、表裏面ともに中央の軸に沿って、幅の狭いＶ字の溝が廻らされ、細かく丁寧なミガキが全面に施される。長さ6.6㎝、幅1.3㎝、厚さ1.0㎝で重さ12.9ｇ。（坂元）

5．古墳時代のガラス製品（カラー図版、第112図）

18号竪穴住居跡からは、ガラス小玉が282点出土した。肉眼観察により色調を分類すると、コバルトブルー（青紺色）が196点、ライトブルー（淡青色）が1点、赤褐色が85点である。ただし、破片資料も1点として数えているために、同一固体を複数個として扱っている可能性は高く、実際はこれよりも若干少ないと考えられる。

寸法は、詳細は計測表（P.155～160）に譲るが、コバルトブルーの小玉の直径は約5～6mm、最大高はまちまちで約2～6mm、赤褐色の小玉の直径は約4.2mmのものもあるが、大半は約2～3mm、最大径は、まちまちで約1～3mmを測る。



第112図　ガラス玉実測図（2/1）

製作方法は、ブルー系統のガラス小玉に気泡の流れが長軸方向に連続して認められるものが見受けられることや、外面の滑らかさ・形状等から考えて、ほとんど全てが引き伸ばし法〔大賀2002〕で製作されたものである。赤褐色のものの製作技法についても、黒色の筋が長軸方向に入っているものも多く、ブルー系統のガラス小玉と同様である。過去の調査事例において、ガラス小玉の土製鋳型がいくつか出土しているが、今回出土したガラス玉は、それらで鋳型製作されたものではなく、中国大陸か朝鮮半島からもたらされたものであることがわかる。

また、ガラスの成分については、科学的分析(P.151～162)を参考にすると、コバルトブルー以外は全てソーダガラス、コバルトブルーは多くがソーダガラスだが、一部についてはカリガラス(1点のみ鉛ガラス)という結果が出ている。
詳細は分析の項を参照願いたい。（岡寺　良）

調査風景

現場での出土遺物展示会

第４節　近世・近代の遺構と遺物

１．近世・近代の遺構と出土陶磁器

１）石組遺構

１号石組遺構（図版18、第113図１）

調査区西壁北側に位置する。掘り方の西側上端は調査区外に当たるが、石組み自体は全貌を捉えることができた。掘り方のプランは長方形で、主軸方向はN12°Ｗである。掘り方の規模は長軸2.80ｍ、短軸残存長1.98ｍ、検出面からの深さ72cmである。打ち欠いた礫を1.80ｍ×1.20ｍの長方形の範囲に径30cm以上の大き目の石を中心にしっかりと組み、それを３段重ねる。

出土陶磁器（図版38、第115図１・２）

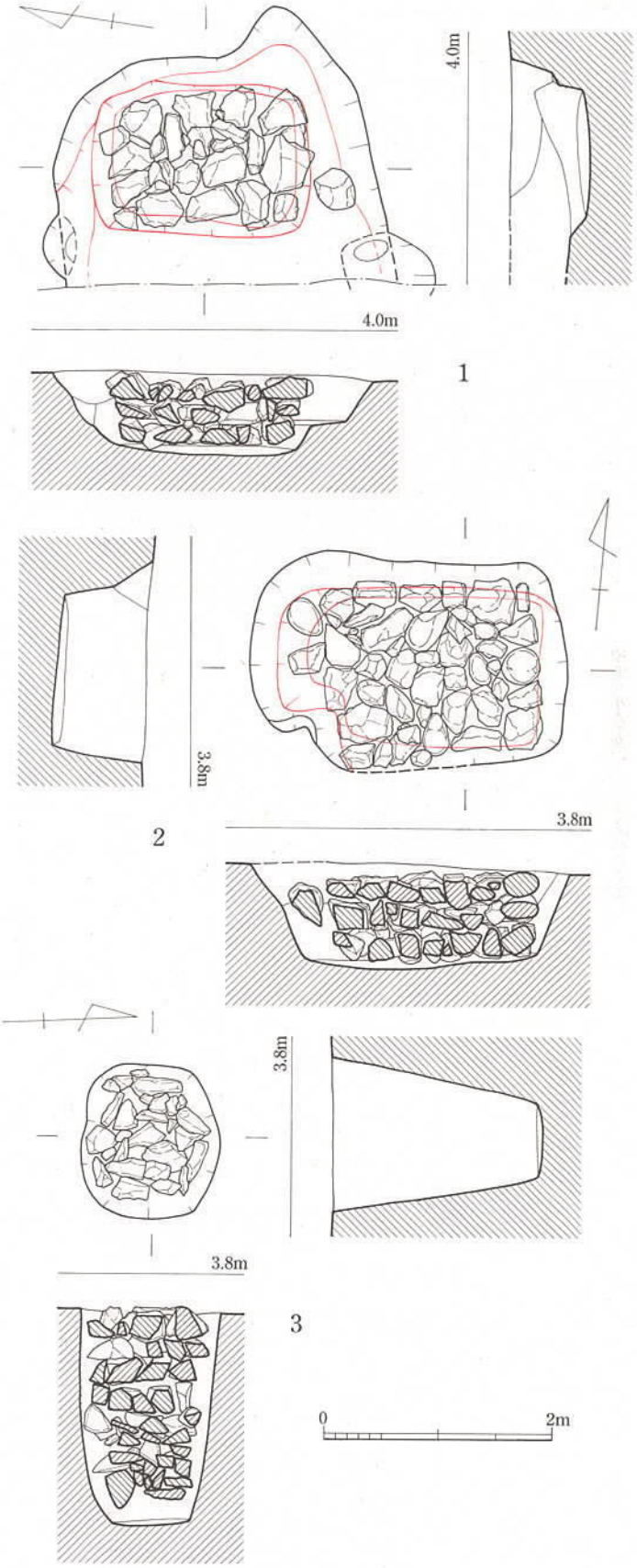
１は磁器碗、染付。外面に松葉文。内外面とも発泡しており、焼成失敗品と考えられる。内面には釉垂れがみられる。２は須恵質の蓋。外面に灰釉がかかる。

２号石組遺構（図版18、第113図２）

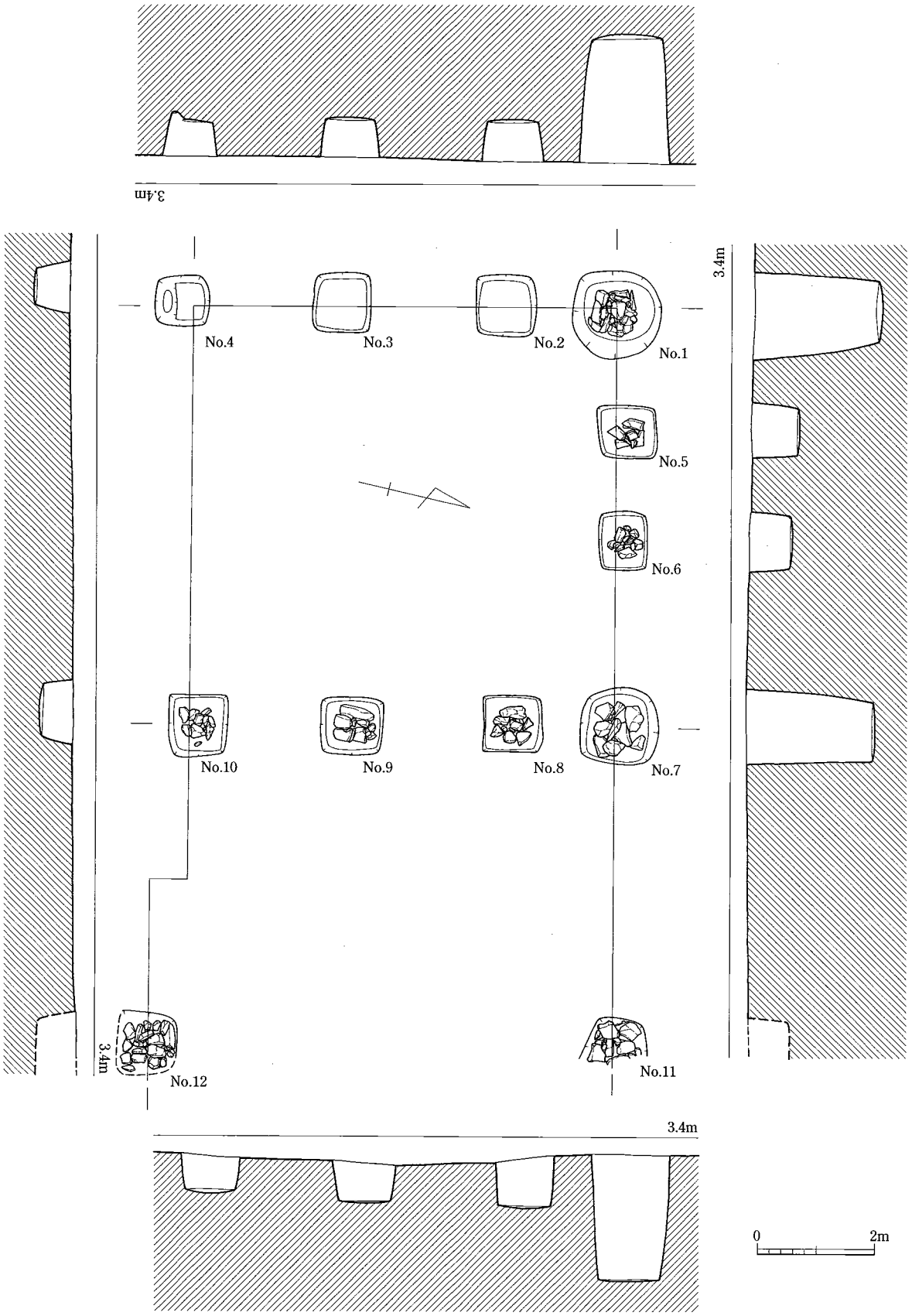
調査区北西に位置し、２号土坑・溝２を切る。掘り方のプランは長方形で主軸方向はN102°Ｗである。掘り方の規模は長軸2.78ｍ、短軸1.92ｍ、検出面からの深さ93cmである。石組みは2.20ｍ×1.60ｍの長方形の範囲に３段組まれる。大小の礫を取混ぜて用い、密に組まれている。１号石組遺構とは主軸方向が直交し、また割り石の積み方も類似することから、一連の遺構と考えられる。

出土陶磁器（第115図３～11）

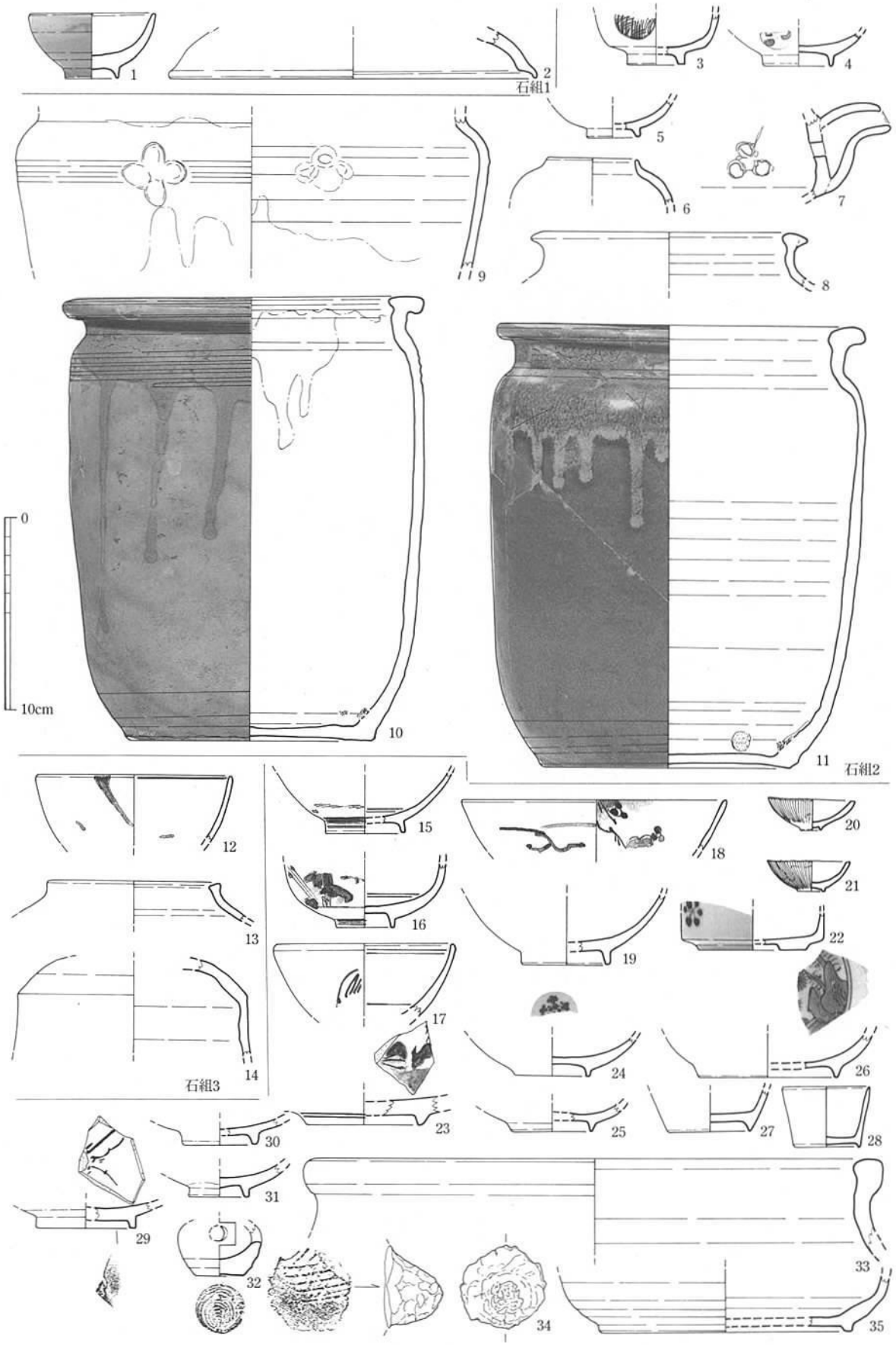
３～５は磁器染付碗。３・４は外面



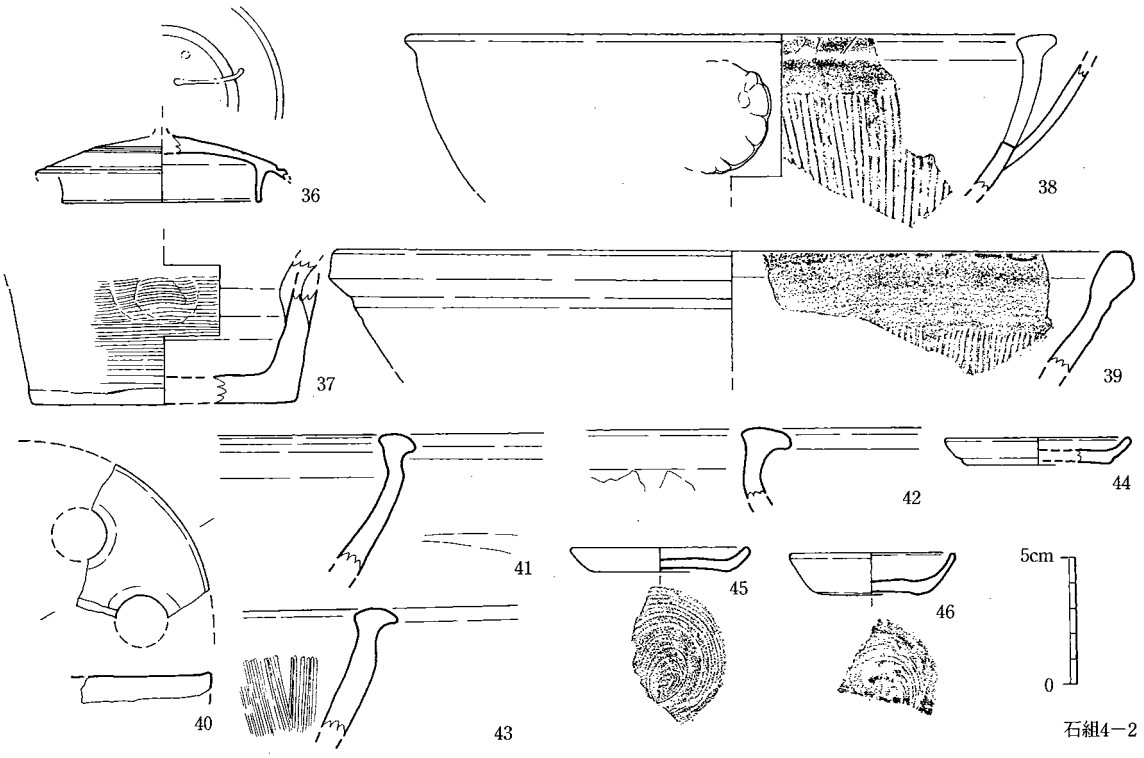
第113図　石組遺構実測図①（1/60）



第114図　石組遺構実測図②（1/100）



第115図　石組遺構出土陶磁器実測図①（1/3）



第116図　石組遺構出土陶磁器実測図②（1/3）

に円文。6は陶器茶入。鉄釉がかかる。7は土瓶注口。外面は緑色釉がかかる。8～11は甕。8は鉄釉。9は肩部。外面に花弁を貼付。白色釉に黄色透明釉の二重掛け。10は完形の甕。外面はにぶい黄色釉に灰緑色釉を二重掛け。内面底に目土痕。11も完形の甕。外面は暗緑色釉に灰白色釉を掛ける。灰白色釉は耀変。内面底に円形の緑青の付着、銅銭か。

3号石組遺構（図版19、第113図3）

調査区北西やや中央よりに位置する。掘り方のプランは隅丸方形で、長軸1.32m、短軸1.19ｍ、深さ1.86ｍである。主軸方向はN12°W。石組みは1.10ｍ×1.00ｍの長方形に組まれ、8段積まれているが、下へ行くほどランダムな組み方になる。径30cm以下のやや小ぶりな礫を用いる。

出土陶磁器（第115図12～14）

12は磁器染付碗。外面に雨降文。13は陶器茶入。釉調は橙色。14は陶器瓶。鉄釉。

4号石組遺構（第114図）

12基の石組みからなる礎石列である。石組みは長方形に並び、礎石列の規模は、東西9.4ｍ、南北13.6ｍを測る。主軸方向はN12°W。石組みは全部で12基検出され、東西に5基、南北に5基が並ぶ。各石組み遺構はおよそ1m四方の正方形の掘り方をもつが、No.1・7は他に比べ大きい隅丸方形の掘り方をもつ。大きな割石により3段しっかりと石積みされ、建物の中心となる柱であったと考えられる。No.11は調査区外にかかり、十分に調査できなかったが、No.1・7と近いものと考える。No.5～6、8～10・12は石組みが残るが、用いられる礫がNo.1・7より小さい。残りの悪いものもあるが、本来は3段積まれていたと考える。No.2・3・4は石が抜かれている。

出土陶磁器（第115・116図）

15～18は磁器碗。15～17は染付。内外面に文様を施す。18は磁器皿か。外面唐草文。内面梅樹文を施す。19は印判転写。刻み唐草文。20・21は紅猪口。貝殻状、型押成形。22は磁器段重。外面に梅花文の染付。23・24は磁器皿。23は見込・高台に染付。24は見込に五弁花文を施す。25は陶器皿。27・28はそば猪口。27は染付。29～31は陶器皿。29は黄白色釉。見込に文様。高台内に寿の文字を陰刻。30は鉄釉。31は灰黄色釉。32は土器、褐色。窯道具。底部回転糸切右回転。33は炻器甕口縁。暗褐色。34は陶器、把手もしくは貼付文。二次被熱により、発泡する。35は皿の底部。釉調は黄緑色。36は土瓶蓋。緑色釉に白色釉のイッチン掛け。37は徳利底部。38・39は炻器擂鉢。38はやや摺目が粗く、外面に花弁を貼付。40は土器、目皿。焜炉の部品と考えられる。41・42は鉢口縁。43は炻器擂鉢口縁。暗褐色。44～46は土師皿、灯明皿。底部回転糸切。45・46は右回転。

2）井戸（図版19、第117図1）

調査区南壁西よりに位置する。南側は調査区外で、北半分しか検出できなかった。掘り方のプランは円形で、主軸方向はN17°Wである。規模は長軸残存長2.15 m、短軸残存長0.75 m、遺構面からの深さは1.72 mを測る。木枠が良好に残っており、木枠の復元径は内法70cm。

出土陶磁器（図版38・39、第118～120図）

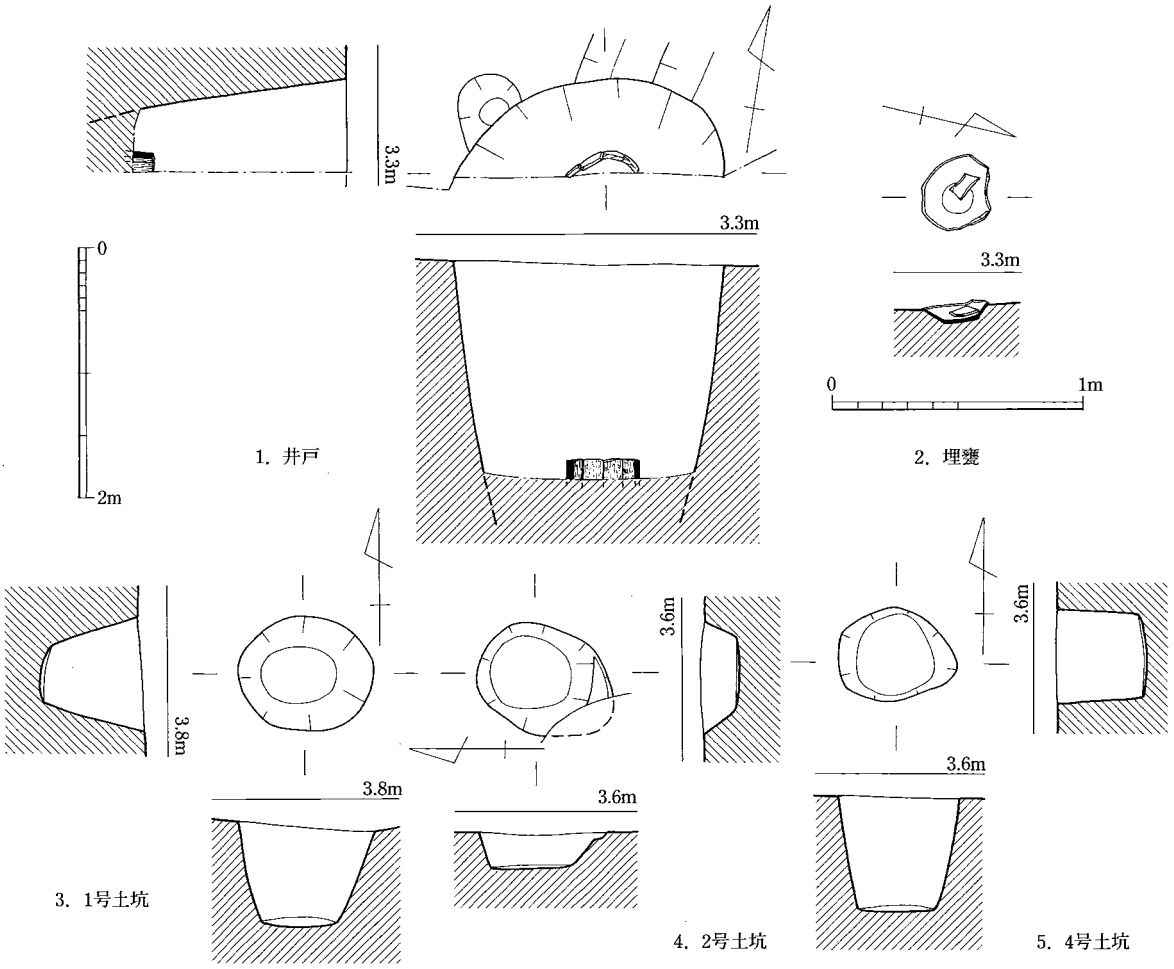
1～3は磁器碗。染付。1は腰張形の碗。外面および内面に雷文の染付。2は小杯。外面に瓢箪の文様。3はやや青みがかる。外面に寿字文を施す。4は磁器染付仏飯器。蛸唐草文を施す。5・6は磁器皿。5は内面一重圏線、見込み寿字文、高台内に○化年製と記す。6は蛇ノ目凹形高台。見込みに帆船を描く。7は染付の水滴、形押し成形。方形で上面は注口を中心に四角錐になる。浮文と染付で装飾。8・9は磁器徳利。8は鳥文を、9は花文を染付。10～13は陶器仏花生。10～12の釉調はやや緑がかる黄土色に白色釉の二重掛け。13は黄緑褐色。14は陶器徳利。褐色釉。白色釉で屋号を書く。底部回転糸切り。16・17は灯明受け皿。暗黄緑褐色釉がかかる。底部回転糸切。右回転。15は陶器瓶か。青緑色釉。高取焼か。18～22は甕。18は炻器。暗赤褐色。19～21は貼付文。19は黄褐色。20・21は暗褐色。22は鉄釉。23・24は捏鉢。23は陶器、緑色釉。24は土製、灰黄色。25～28は炻器擂鉢。色調は暗褐色を呈す。29・30は陶器蓋。29は暗褐色。30は暗灰緑色。31・32は陶器土瓶。31は白黄褐色。把手を欠く。底部に穿孔。32は灰黄緑色。注口を欠く。胴下半に煤付着。33は土師質の瓶。白橙褐色。34は陶器土鍋か。緑色釉。35は土器鉢。内外面に煤が付着。36は土器火鉢。黒色。馬の陰刻。37・38・40は焜炉。37・38は獣文を貼付。37は土師質。暗褐色。外面口縁・底部付近に陰刻。38は陶器。釉調は緑白色。底部に2ヶ所の穿孔。39・40は瓦質、火消し壷。黄褐色。胴部に穿孔4ヶ所。40は灰褐色。41は土器、十能。把手部分のみ残る。橙褐色。

3）埋甕（第117図2）

調査区北西に位置する。甕の底部のみ確認できた。覆土はオリーブ褐色砂の単層。

出土陶磁器（図版39、第120図42）

42は大甕。口縁部と底部のみ残る。焼きは須恵質で黒灰色を呈す。口縁部付近の調整は内面はケズリ。外面は粗いハケ。底部は内面は粗いハケ、外面は丁寧なナデを行う。



第117図　近世井戸・埋甕・土坑実測図（2は1/30、他は1/60）

4）土坑

1号土坑（第117図3）

調査区北西に位置する。プランは整った楕円形を呈し、主軸方向はN88°Eをさす。規模は長軸1.08 m、短軸0.90 m、遺構面からの深さは85cmを測る。

出土陶磁器（第121図1～5）

1は染付碗。外面に草花文。2は磁器碗焼成失敗品。3・4は炻器鉢。5は炻器擂鉢。

2号土坑（第117図4）

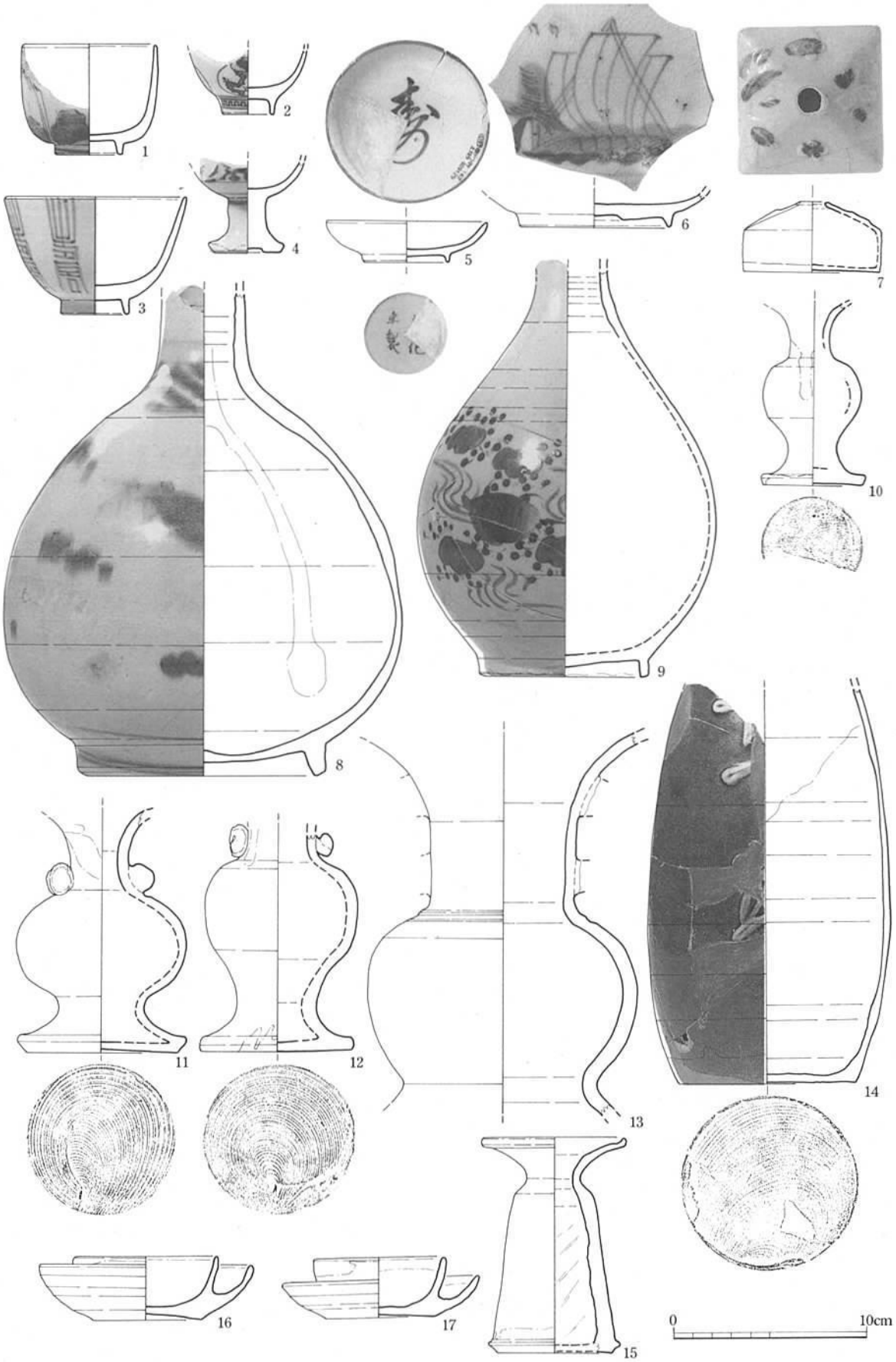
調査区北西に位置し、2号石組遺構に切られる。プランは不整楕円形を呈し、主軸方向はN10°Eをさす。規模は長軸1.01 m、短軸0.88 m、遺構面からの深さは30cmを測る。

出土陶磁器（第121図6～8）

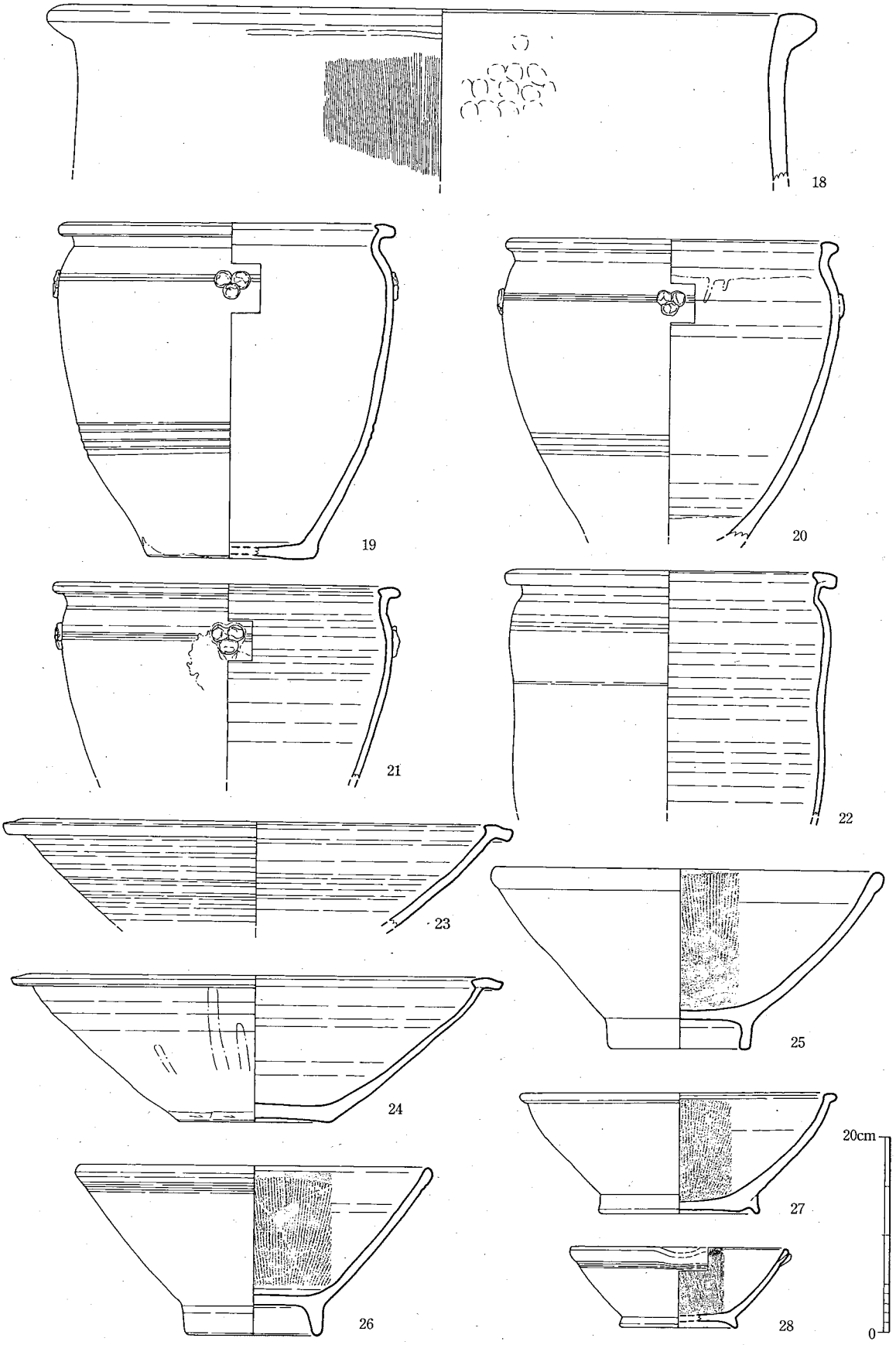
6は磁器染付小皿、見込みに蝶文。7は陶器把手。暗褐色。8は目皿。瓦質、灰黄褐色。

3号土坑（第117図5）

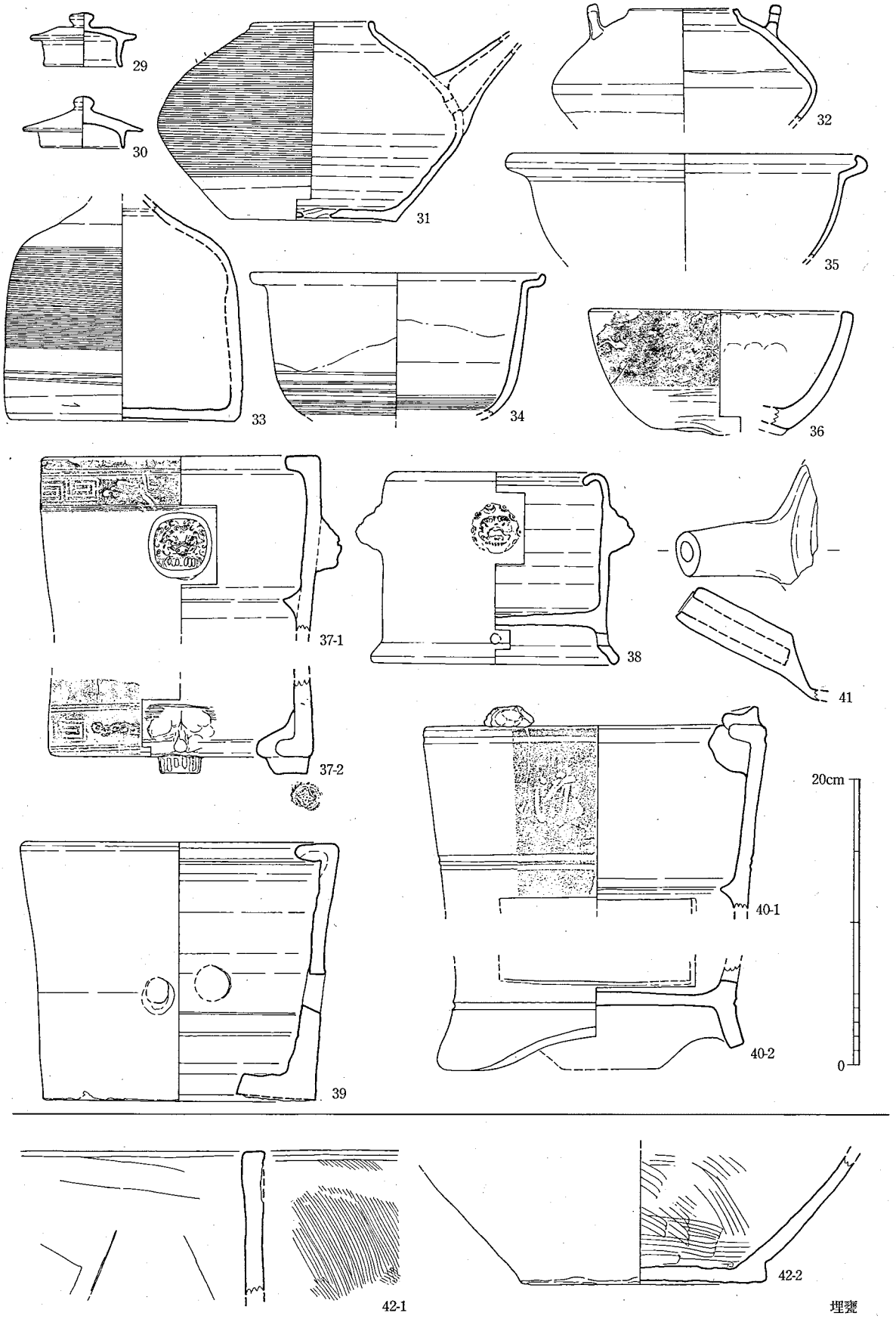
調査区中央西に位置する。プランは正方形で、主軸方向はN10°Wをさす。規模は長軸1.8 m、



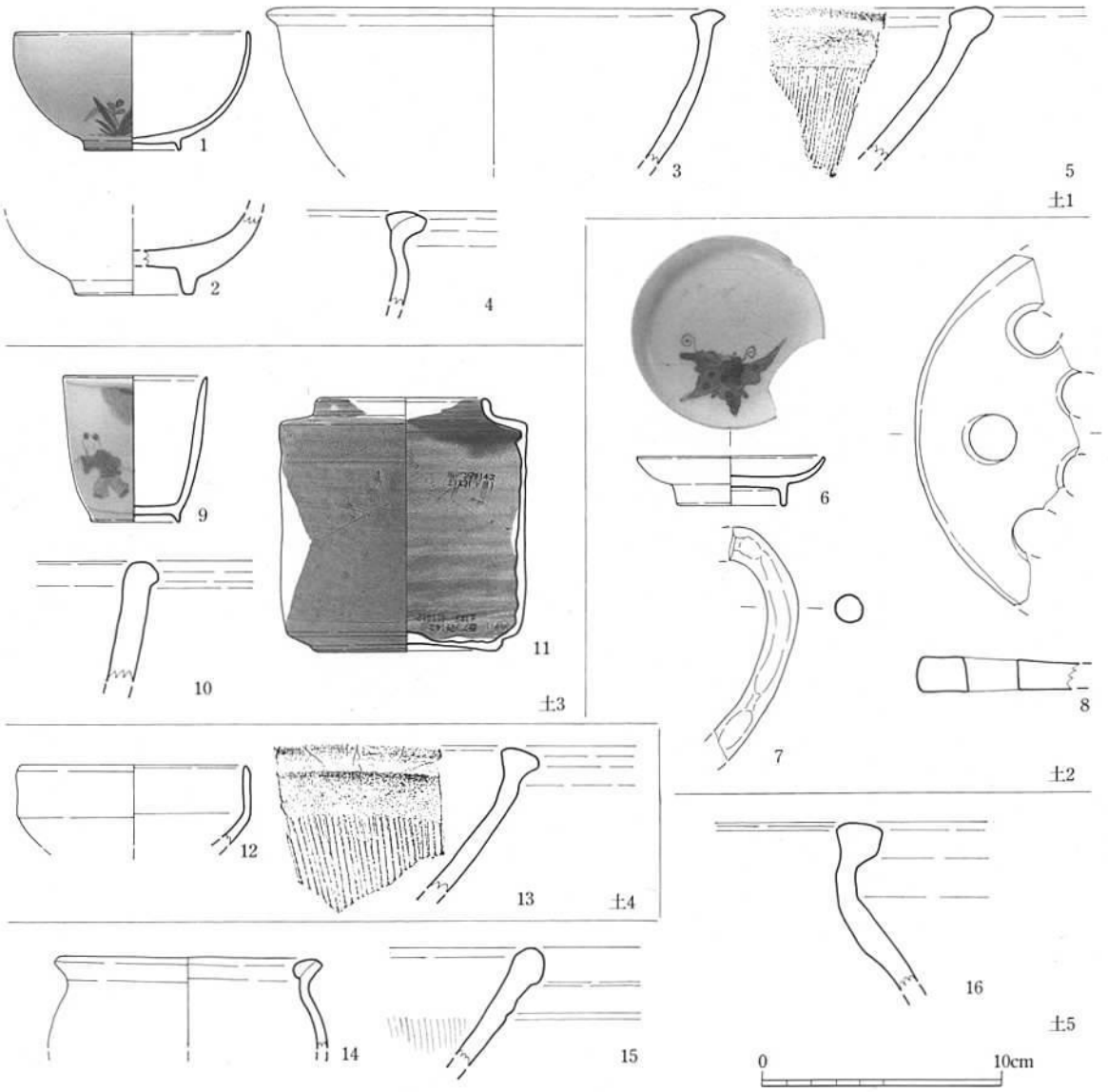
第118図　近世井戸出土陶磁器実測図①（1/3）



第119図　近世井戸出土陶磁器実測図②（1/6）



第120図　近世井戸出土陶磁器実測図③（1/4）



第121図　土坑出土陶磁器実測図（1/3）

短軸1.7 mを測る。調査時には遺構としたが、覆土より飯盒の蓋が検出され、限りなく現代に近い方形の土坑である。5号土坑とよく似ており、同時に作られたものと考える。

出土陶磁器（第121図9～11）

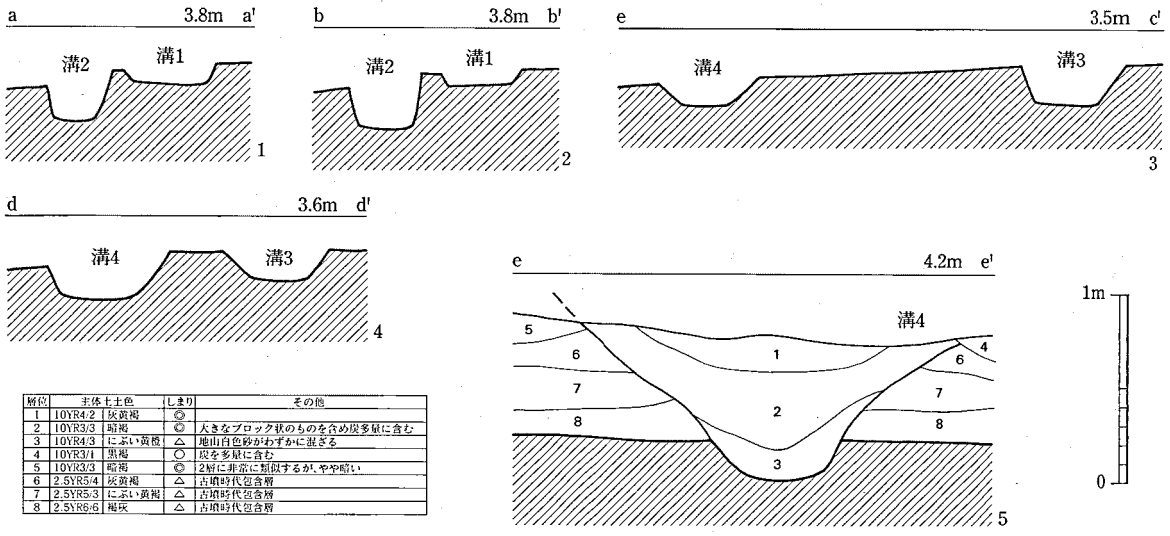
9は磁器染付、筒形の小碗。外面に童子の文様、内面口縁付近に二重圏線。10は炻器鉢。口縁部破片。色調は暗褐色。11は陶器茶入。回転ナデ調整。灰黄緑色釉。

4号土坑（第117図5）

調査区中央北寄りに位置し、溝3を切る。プランは不整円形で、主軸方向はN79°Eである。規模は長軸0.96 m、短軸0.74 m、遺構面からの深さは92cmを測る。

出土陶磁器（第121図12・13）

12は陶器碗、釉調は灰黄褐色。腰折碗。13は炻器、擂鉢。口縁破片。



層位	主体土色	しまり	その他
1	10YR4/2	灰黄褐	◎	
2	10YR3/3	暗褐	◎	大きなブロック状のものを含め炭多量に含む
3	10YR4/3	にぶい黄褐	△	地山白色砂がわずかに混ざる
4	10YR3/1	黒褐	○	炭を多量に含む
5	10YR3/3	暗褐	◎	2層に非常に類似するが、やや暗い
6	2.5YR5/4	灰黄褐	△	古墳時代包含層
7	2.5YR5/3	にぶい黄褐	△	古墳時代包含層
8	2.5YR6/6	褐灰	△	古墳時代包含層

第122図　溝断面実測図・土層断面実測図（1/40）

5号土坑（第117図）

調査区中央東に位置する。プランは正方形で、主軸方向はN16°Wをさす。規模は長軸1.75 m、短軸1.70 mを測る。3号土坑と類似し、同じ性格の遺構と考えられる。

出土陶磁器（第121図14～16）

14は陶器甕、灰黄緑色釉。15は炻器擂鉢。口縁部破片。16は炻器甕の口縁破片。暗褐色。

5）溝

溝1（第122図1・2）

調査区北西を東西に走り、溝2とほぼ平行に走る。規模は残存長6.0 m、残存幅0.45 m、遺構面からの深さは12cmを測る。

出土陶磁器（第123図1～3）

1は白磁、蓋。2は磁器染付、型押皿。印判転写。3は陶器碗。釉調は暗緑褐色。

溝2（第122図1・2）

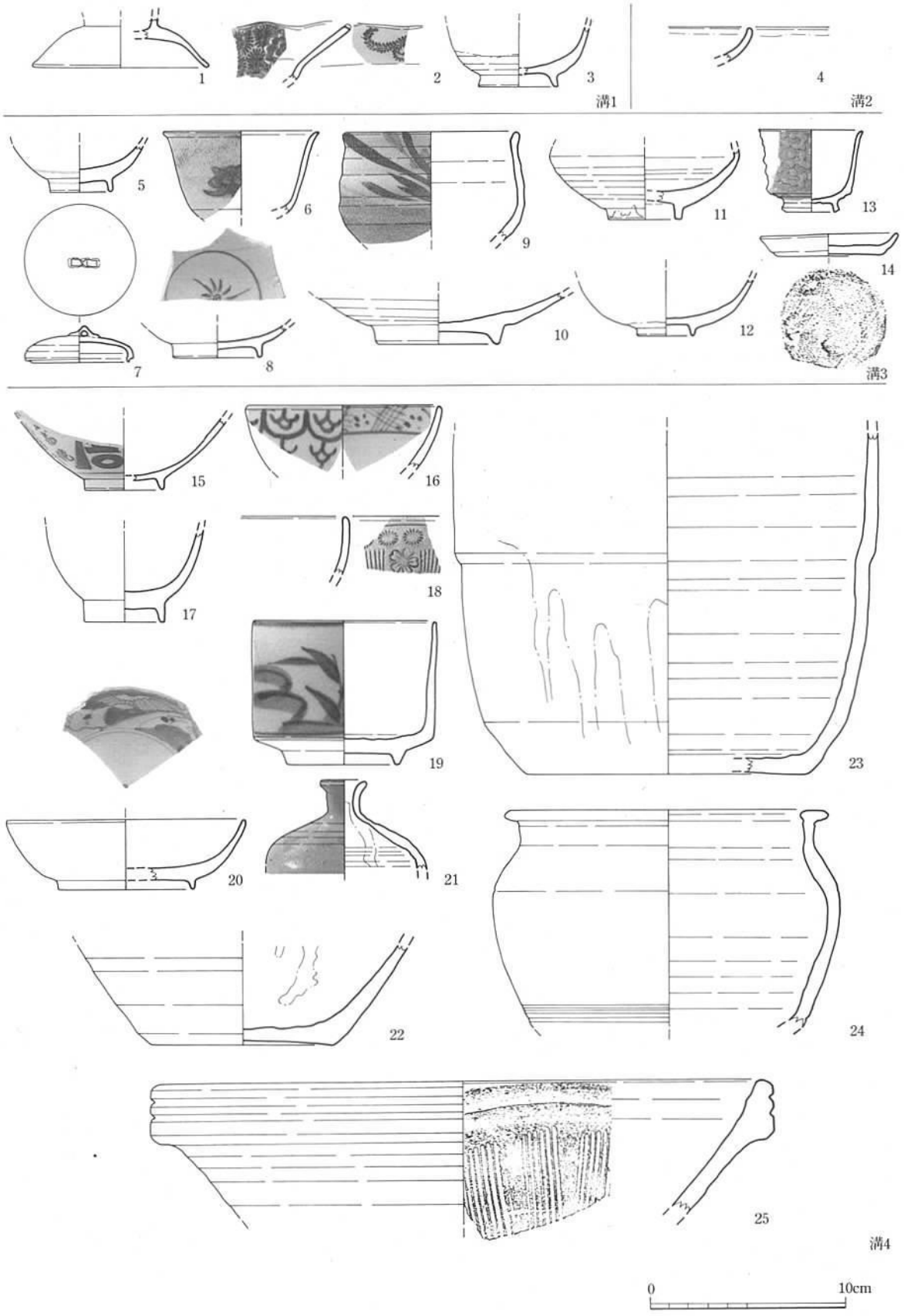
調査区北西を東西に走り、溝1のすぐ南にあり、溝1と平行に走る。西側は調査区外に続き、東側は石組遺構2に切られる。規模は残存長5.25 m、残存幅0.35 m、遺構面からの深さは30cmを測る。覆土は暗褐色砂で焼土・陶磁器を多く含む。

出土陶磁器（第123図4）

4は陶器皿の口縁破片。全体に暗褐色釉が掛かるが、口縁端部のみ灰白色釉を掛ける。

溝3（第122図3・4）

調査区北側を北東に向かってやや斜めに走る溝である。中央で土坑4に切られ、東端は撹乱を受ける。溝4に隣接するが切り合い関係はない。規模は残存長17.3 m、残存幅0.65 m、遺構



第123図　溝出土陶磁器実測図（1/3）

面からの深さは20cmを測る。

出土陶磁器（図版39、第123図5～14）

5は磁器染付碗。底部付近に外面一重圏線。6は磁器染付。外面に花。端反碗。7は磁器染付蓋。8は磁器皿染付。見込一重圏線・花文。外面、木葉文様。9は陶器碗。暗褐色、灰色、白灰色釉を順に掛ける。外面に青・黒色で草花文。白灰色釉部分に細かな貫入が入る。10は陶器皿。暗褐色釉。見込みは蛇の目釉剥ぎ、内面に黒褐色釉でイッチン掛けを行う。11は陶器碗。腰が折れる器形。釉調はやや黄緑がかる灰色。12は陶器碗。灰黄緑色釉。13は陶器小杯、内面は灰黄色釉が掛かるが、外面は淡灰色の地にイッチン掛けで装飾。14は土器、灯明皿。底部回転糸切、右回転。

溝4（第122図3～5）

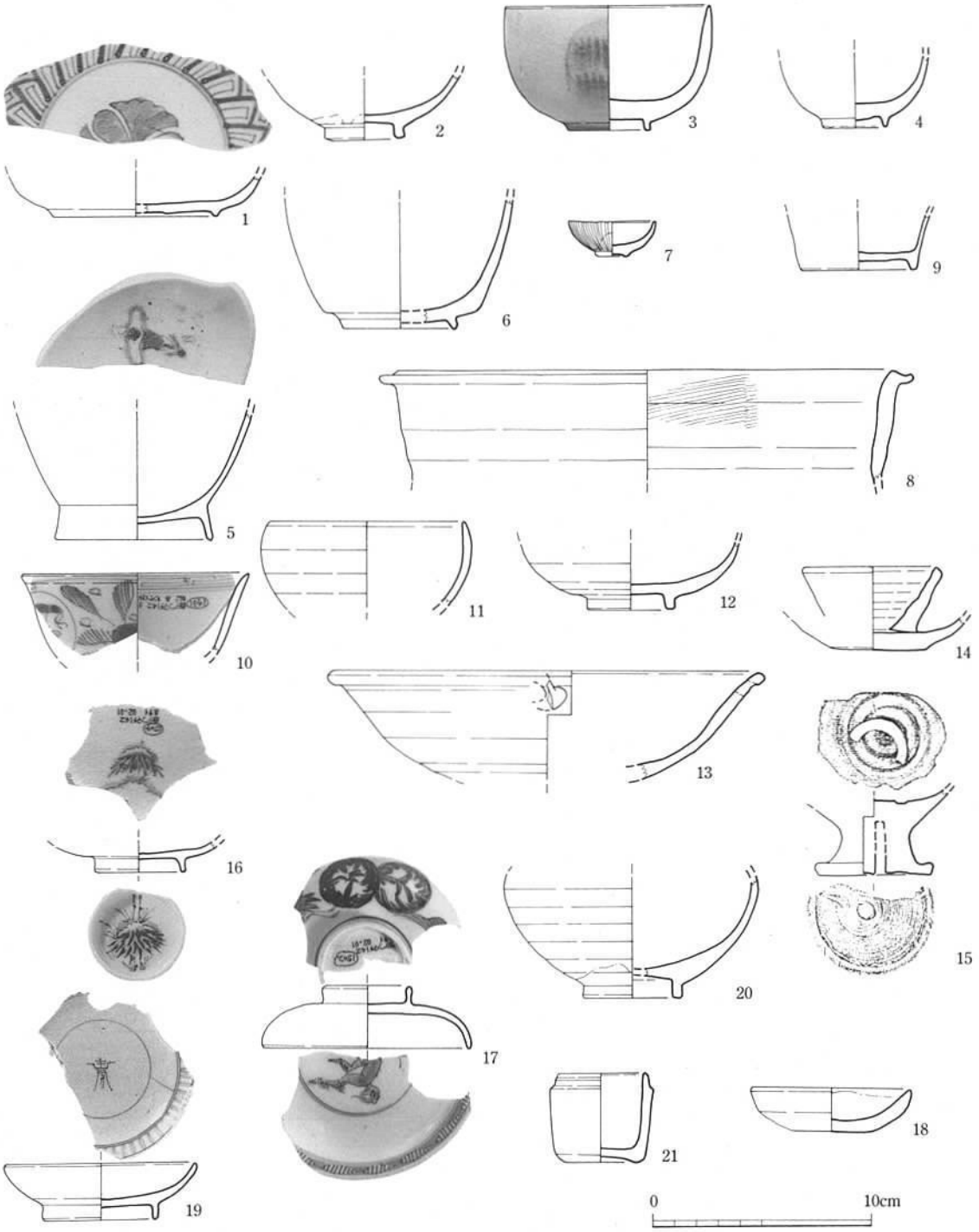
調査区北側を東西に走る溝である。規模は残存長28.8ｍ、残存幅0.70ｍ、遺構面からの深さは24cmを測る。覆土は炭の混じるにぶい黄橙色砂である。

出土土器（第123図15～25）

15～17は磁器染付碗。15は外面に染付で文字が書かれる。16は外面輪宝文、内面袈裟襷文。17は白磁であるが、青みがかる下手のものである。18は陶器碗。灰黄色の胎土にやや黄色がかる透明釉をかける。三島手のもの。19は磁器染付、筒型碗。外面折枝竹文。20磁器皿。外面、簡略化された唐草文。内面外周に二重圏線・半菊文。21は陶胎染付の油壺。肩部に梅の文様。22は陶器壷底部。暗褐色釉に黒色釉の二重掛け。23は陶器甕、もしくは瓶か。灰釉に暗緑褐色釉の二重掛け。内面は無釉。24は炻器壷。暗赤褐色。外面底部付近にカキ目。口縁に自然釉。25は炻器擂鉢。暗褐色を呈する。

6）ピット・その他の遺構・検出面出土の近世以降陶磁器（図版39、第124図）

1はピット27出土の磁器染付皿。蛇の目凹形高台。外面崩れた唐草文。見込みに銀杏。2はピット17出土の陶器碗。灰黄褐色釉。非常に細かい貫入が入る。3は古墳時代井戸出土の磁器染付碗。外面に円文、および一重圏線。4～7は11・12号竪穴住居拡張部より出土。4は磁器碗。全体に青みがかる白磁。5は磁器広東碗。見込みに花文。6は陶器碗。灰緑色で、内外面とも細かな貫入が見られる。7は紅猪口。貝殻状、型押成形。8は第14号竪穴住居跡出土の土器。鉢の口縁部か。色調は淡黄褐色。胎土は精良で緻密。調整は回転ナデ。出土状況から見ると古墳時代でもおかしくないが、半島系瓦質土器にしては焼成が良すぎるため、近世の製品にしておく。ただし近世にしては胎土が粗い感はある。9～15は検出面出土。9は瓶、もしくはそば猪口。灰黄色で、内面に透明釉。10は磁器染付、端反碗。外面花文。内面雷文。11は陶磁器碗。やや灰がかる白の地に透明釉。12は肥前系の陶器碗。暗褐色の胎土に灰白色釉がかかる。13は肥前系陶器の片口。注口部を欠く。外面、暗褐色の地に白灰色釉のハケメを施す。14は土器、灯明受け皿。暗褐色。底部回転糸きり右回転。15は土器、暗橙色。灯明受け皿。皿部にC字型の切込。底部回転糸きり左回転。16～19は表採品。16は磁器染付碗。見込み及び高台内に染付で竹の文様。釉に細かい貫入が入る。薄手で精良品。17は磁器蓋。染付で外面に円文、内面は雷文、二重圏線、馬の文様。18は土器灯明皿。焼成は良く、胎土は精良。色調は赤褐色。



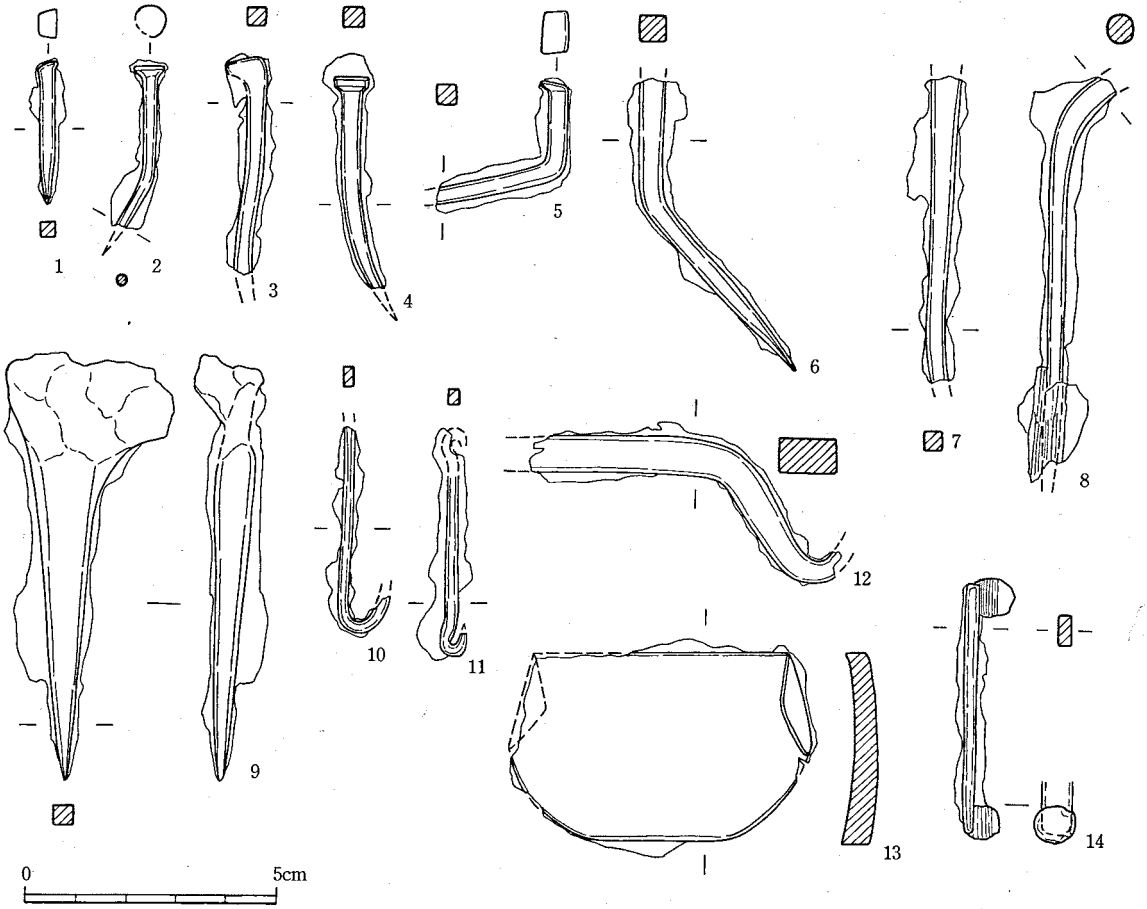
第124図　ピット・検出面出土陶磁器実測図（1/3）

19は磁器小皿。染付で壽字文。胎土はやや灰色で、染付はやや緑がかる。20・21は排土中出土。20は陶器碗。胎土は灰褐色で、釉調は灰黄色。21は白磁容器。透明釉。

2．近世・近代の金属製品

1）鉄製品（図版40、第125図1～14）

近世以降のものと考えられる鉄製品は14点出土している。1～9は鉄釘、断面形はほぼ方形



第125図　近世・近代の鉄器実測図（2/3）

ないし長方形であるが、8の断面は円形である。9は大型のもので、特殊な用途のものかもしれないが、頭部が未整形であるので、未成品である可能性も考えられる。1、7、9は2号土坑、2、3は4号土坑、4、5は3号溝、8は溝4、6はピット10から出土した。10～12は先端が鉤状を呈する鉄製品。10、11は小型であるのに対し、12は非常に大きく、用途や年代も異なる可能性がある。10は2号土坑、11は溝4、12は溝1から出土した。13、14は用途不明の鉄製品。13は両端部をやや折り曲げた形態を呈するもので、過去の調査でも出土している。古墳時代の可能性も否定できないが、出土した遺構から見て、近世のものと考えられる。4号土坑から出土した。14は細長い鉄板状の両端部に木質らしきものが付着しているもので、止め金具とも考えられるが不明である。19号竪穴住居跡から出土しているが、近世以降の混入と考えられる。

（岡寺　良）

2）近世・近代の青銅製品および貨幣（図版39、第126図）

1はピット出土で、明確ではないが形状から、小型の刃物の鞘の端部に取り付ける青銅製金具と思われる。全体的に各外面や角はやや丸みを帯びているが、開口部分の狭い端面はそれに比べシャープである。さほど錆化はしていない。長さ2.5㎝、幅1.3㎝、厚さ0.9㎝で、壁厚は開口部分反対側の端面で0.4㎝、他は0.2㎝で重さ10.1ｇ。2は3号土坑出土で、青銅製のボタンである。表面は大きく桜が鋳込まれており、縁端部は肥厚し一段高くなっている。背面は中央に向けて窪むようになっており、中央の紐通し部分はやや曲がっている。さほど錆化しておらず、花弁の中

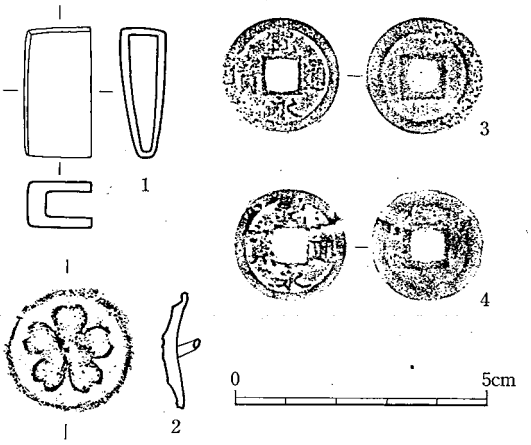
に雄蘂が表現される。径2.3㎝、厚さ0.8㎝で重さ3.0ｇ。

貨幣は2点出土しており、いずれも寛永通宝である。3は表採され、径23㎜、厚さ1.0㎜で重さ2.7ｇ。4は調査区西壁出土で、一部亀裂や折れ曲がりにより破損。径22㎜、厚さ0.8㎜で重さ1.9ｇ。ともに背面に文字等は鋳込まれてはいない。

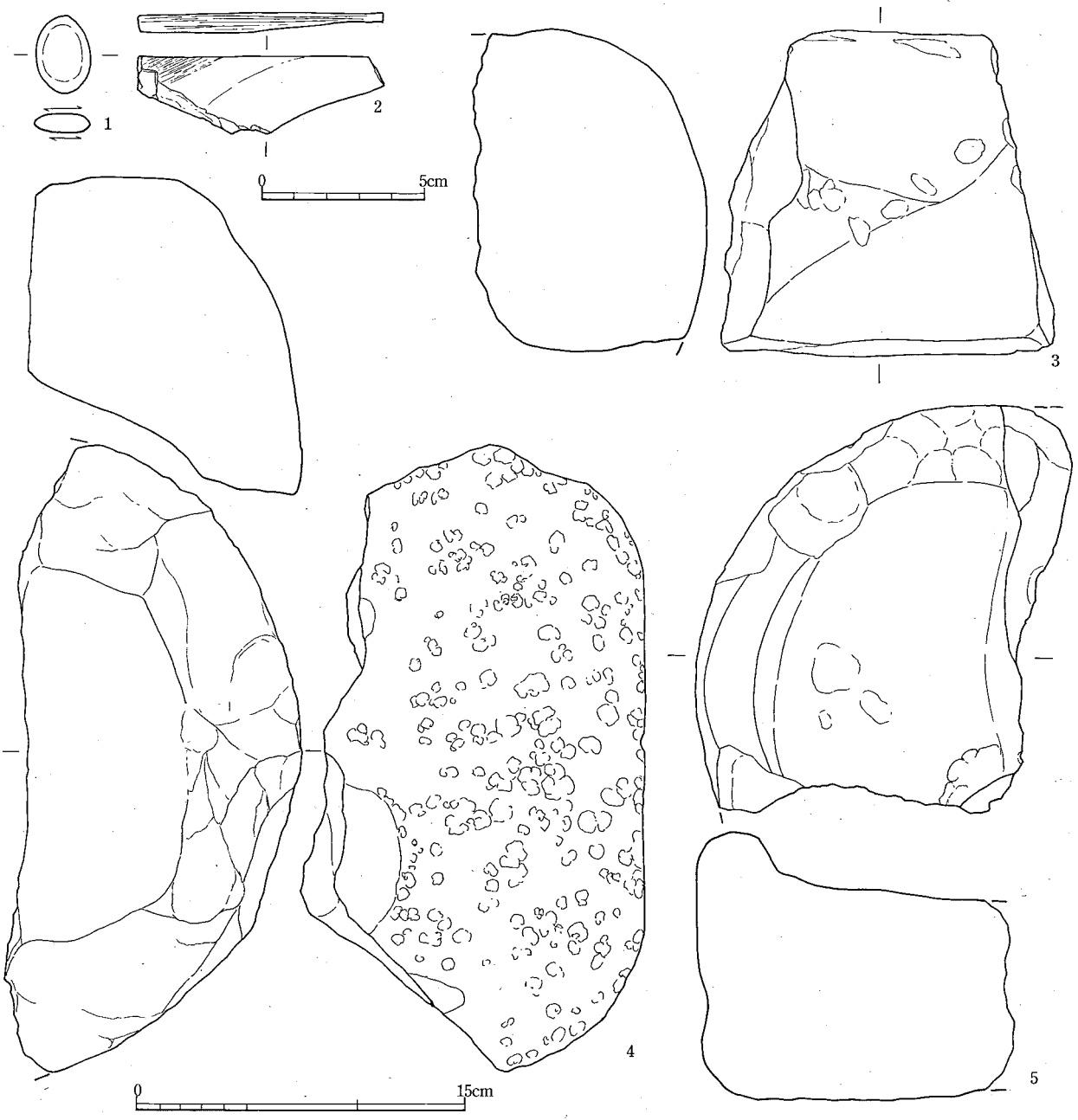
（坂元）

3．近世･近代の石製品（図版40、第127図）

1は1号土坑出土で、扁平でやや楕円をなし、碁石と思われるが、古墳時代の玉の原石の可能性も



第126図　近世･近代の青銅製品および貨幣実測図（2/3）



第127図　近世・近代の石製品実測図（1・2は1/2、3～5は1/3）

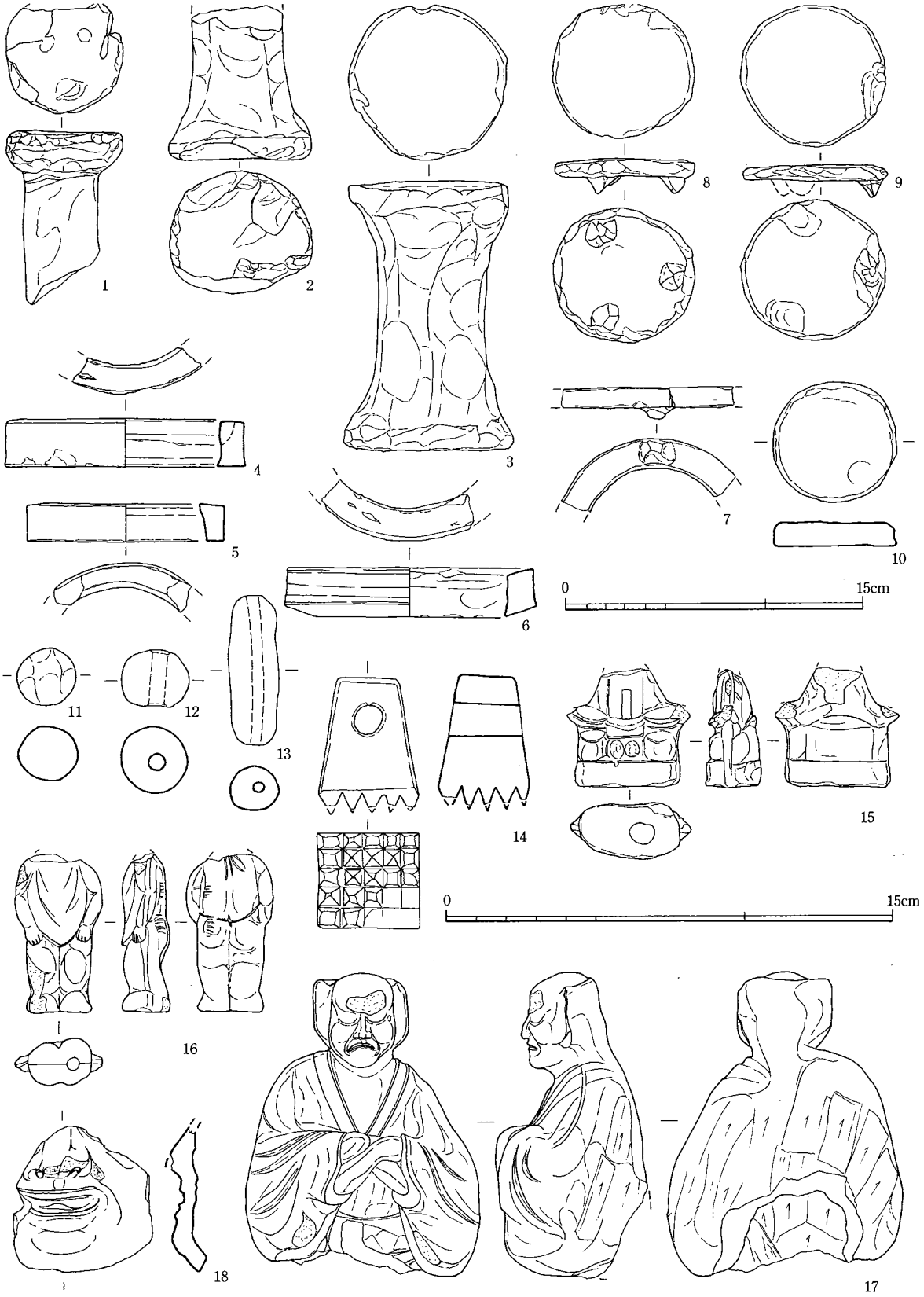
捨てられない。研磨痕等は見られず、表面は非常に平滑である。長さ2.4㎝、幅1.7㎝、厚さ0.6㎝、重さ3.5ｇで蛇紋岩製。2は砥石で、2号石組遺構出土である。もともと扁平であるようだが、使用の著しい部分は特に薄くなっている。狭い側面は直線的に整えられており、粗い擦痕が目立つ。長さ2.4㎝、幅7.5㎝、厚さ0.6㎝、重さ11.2ｇで粘板岩製。3は2号石組遺構出土で、大きく欠損するが一部が非常に平滑になっており、大型の砥石と思われる。長さ15.2㎝、幅14.9㎝、厚さ10.6㎝、重さ3467.2ｇで砂岩製。4は石捏鉢で、2号石組遺構出土である。大きく欠損しており、外面には敲打痕が著しく残る。底部径は22㎝程度に復原され、重さ5901.1ｇで砂岩製。5は挽臼で、2号石組遺構出土である。上臼で、側面に回し棒用の差込み孔が一部残存する。大きく欠損し、底部も劣化が著しく擦り目は残存していない。径25㎝程度に復原され、重さ4204.3ｇで砂岩製。（坂元）

4．窯道具（図版40、第128図1～10）

1～3はいずれも表土掘削時の出土のトチンである。1は比較的丁寧な作りをしており、上面に3ヶ所の目跡が見られ、高台痕が残る。2は外面に鉄釉を施釉し、下面は完全な円形ではなく一部直線的となる。3は完形で、整形時の指頭圧痕が多く見られる。4～6は環状の窯道具で、いずれも砂粒をやや多く含む。4は包含層出土で、茶褐色を呈す。5は1号土坑出土で、黄茶褐色を呈す。6はピット出土で、灰茶褐色を呈す。7～10はハマで、7は足付きの環状ハマ、8・9はともに三方に足の付くものである。7は近世落ち込み出土で、褐色の釉が付着する。8は4号石組遺構No.10出土で、上面にわずかに褐色の釉が付着する。9は4号石組遺構No.6出土で、3つの足のうち2つは剥落する。10は4号石組遺構No.8出土で、他のハマに比べ非常に多くの砂粒を含み、表面は粗い。（坂元）

5．近世・近代の土製品（図版40、第128図11～18）

11は土玉で、溝4の出土である。最大径2.0㎝、重さ6.6ｇで淡褐色を呈し、焼成は良好である。土鈴の玉と思われる。12・13はともに3号土坑出土の土錘である。12は球形に近く、最大径2.3㎝、重さ9.5ｇである。焼成は良好で暗茶褐色を呈し、やや粗砂を含む。13は管状土錘で、表面には若干褐色の釉が付着する。穿孔後の調整のためか、孔は曲がっている。焼成は良好で暗茶褐色を呈す。長さ5.0㎝、最大径1.7㎝で重さ17.4ｇ。14は5号土坑出土で、陶鎮と思われる。孔の内部と上面以外は土灰釉が施される。また、欠失した部分もあるが、下面には四角錐状の突起が25個並んでいたようである。15～17は土製人形、18は面型である。15は天神で、溝3出土である。型合わせにより製作されており、底部には孔を有し、頭部を欠失する。高さ4.0㎝、幅4.1㎝で厚さ1.9㎝。16は童子立像で、溝3出土である。15と同様に、型合わせによる製作で、底部に孔を有し、頭部を欠失する。高さ5.3㎝、幅2.9㎝で厚さ1.6㎝。17は男性像で、2号石組遺構出土である。中空となっており、下半は欠失する。背面には板状工具によると思われる調整痕が残る。高さ10.2㎝、幅7.8㎝で厚さ5.1㎝。18は1号石組遺構出土で、大部分が欠失するが恵比須と思われる。高さ5.0㎝で幅4.7㎝。（坂元）



第128図　窯道具および近世以降の土製品実測図（1～10は1/3、11～18は1/2）

第4章　自然科学分析

第1節　竪穴住居跡カマド焼土の焼成年代推定

パレオ・ラボ　藤根 久

1．はじめに

西新町遺跡は、早良区西新6丁目地内に所在する遺跡である。第14次調査では、古墳時代の住居跡が複数検出された。ここでは、良好な状態で検出された19号竪穴住居跡カマドについて、その焼土の熱残留磁化の測定を行い、焼成年代の推定を行った。なお、同竪穴住居跡から出土した甕外側付着炭質物について放射性炭素年代測定を行った。

2．考古地磁気年代推定の原理

地球上には地磁気が存在するために、磁石は北を指す。この地磁気は、その方向と強度（全磁力）によって表される。方向は、真北からの角度である偏角（Declination）と水平面からの角度である伏角（Inclination）によって表す。磁気コンパスが北として示す方向（磁北）は、真北からずれており、この間の角度が偏角である。また、磁針をその重心で支え磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面より下方を指す。この時の傾斜角が伏角である。現在、この付近の偏角は約6.40°、伏角は約47.28°、全磁力（水平分力）は約32054.7(nT)である（理科年表、1993；いずれも1990年値）。これら地磁気の三要素（偏角・伏角・全磁力）は、観測する地点によって異なった値になる。全世界地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似される。また、こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、ある地点で観測される偏角や伏角あるいは全磁力の値も時代とともに変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

過去の地磁気の様子は、高温に焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩あるいは堆積物などの残留磁化測定から知ることができる。大半の物質は、ある磁場中に置かれると磁気を帯びるが、強磁性鉱物（磁鉄鉱など）はこの磁場が取り除かれた後でも磁気が残る。これが残留磁化である。考古地磁気では、焼土の残留磁化（熱残留磁化）が、焼かれた当時の地磁気の方向を記録していることを利用する。こうした地磁気の化石を調べた結果、地磁気の方向は少しづつではあるが変化しており、その変化は地域によって違っていることが分かっている。過去2,000年については、西南日本の窯跡や炉跡の焼土の熱残留磁化測定から、その変化が詳しく調べられている（広岡、1977；第1図、Shibuya、1980）。最近では、地磁気に地域差が認められることから、東海地方の地磁気永年変化曲線も求められている（広岡・藤澤、1998）。

こうした年代のよく分かっている窯跡焼土や火山岩の熱残留磁化測定などから地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土などの残留磁化測定を行い、先の地磁気永年変化曲線と比較することによって、その焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている窯跡焼土などについても、土器とは違った方法で焼成時の年代を推定できることから、さらに科学的な裏付けを得ることができる。この年代推定法が考古地磁気による年代推定法である。ただし、この方法は、^{14}C年代測定法など他の絶対年代測定法のように、

測定結果単独で年代の決定を決定する方法ではない。すなわち、焼土の熱残留磁化測定から得られる偏角および伏角の値からは複数の年代値が推定されるが、いずれを採用するかは、遺物などの年代が参考となる。

3．試料採取と残留磁化測定

考古地磁気による年代推定は、a)測定用試料の採取および整形、b)残留磁化測定および統計計算を行い、c)地磁気永年変化曲線との比較を行い、焼成年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認するために、段階交流消磁も行った。

a．測定用試料の採取および整形

試料は、床焼土面において、①一辺約4cmの立方体試料を取り出すため、瓦用ハンマーなどを用いて、対象とする部分（良く焼けた部分）の周囲に溝を掘る。②薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強する。③やや固め（練りハミガキ程度）の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺5cmの正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置する。④石膏が固まった後、アルミ板を剥し、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス（考古地磁気用に改良したクリノメータ）で測定し、方位を記録すると同時に、この面に方位を示すマークと番号を記入する。⑤試料を掘り起こした後、試料の底面に石膏をつけて補強し持ち帰る。⑥持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺3.5cm・厚さ2 cm程度の立方体に切断する。この際切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強し、熱残留磁化測定用試料とする。採取した試料は、19号住居焼土の12試料である。

b．段階交流消磁、熱残留磁化測定および統計計算の結果

熱残留磁化測定は、リング・コア型スピナー磁力計（SMM-85：㈱夏原技研製）を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、任意1試料（No.10）について交流消磁装置（DEM-8601：㈱夏原技研製）を用いて段階的に消磁を行い、その都度スピナー磁力計を用いて残留磁化を測定した。その結果、試料の磁化強度は

第1表．19号竪穴住居跡カマド焼土の残留磁化測定結果（偏角補正前）

遺構名	試料No.	偏角(°E)	伏角(°)	強度(x10^{-3} emu)	備　考	統計処理項目	統計値
19号住居カマド 150 Oe消磁	1	23.4	54.0	1.348		試料数(n)	9
	2	25.7	55.3	2.249			
	3	20.2	55.6	2.354		平均偏角Im(°E)	20.00
	4	17.8	55.6	0.798			
	5	19.5	55.8	13.820		平均伏角Dm(°)	56.25
	6	18.6	56.2	7.571			
	7	18.8	56.4	14.050		誤差角δD(°)	2.75
	8	54.8	53.1	2.909	計算から除外		
	9	17.6	60.7	3.105		誤差角δI(°)	1.53
	10	11.2	59.7	4.335	計算から除外、段階交流消磁		
	11	17.8	56.4	7.579		信頼度計数(k)	1127.03
	12	4.4	57.7	4.129	計算から除外		
	13					平均磁化強度 (x10^{-3} emu)	5.87
	14						

10^{-3}emuと比較的強い。また、NRM（自然残留磁化）に対する150 Oe消磁の相対強度は約56.8％であった。

以上の理由から、150 Oeで消磁した際の残留磁化方向が焼成時の磁化方向であると判断した。そこで、これ以外の段階交流消磁を行っていない試料も、150 Oe消磁した後に残留磁化を測定した。

複数試料の測定から得た偏角（Ｄi）、伏角（Ｉi）を用いて、Fisher（1953）の統計法により平均値（Ｄm、Ｉm）を求めた。信頼度計数は、1127.03と高い値であった（第１表）。

求めた熱残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正する。偏角は、建設省国土地理院の1990.0年の磁気偏角近似式から計算した6.40°Wを使用した。その結果は、広岡（1977）による地磁気変化曲線とともにプロットした。図中測定点に示した楕円は、フッシャー（1953）の95%信頼角より算定した偏角および伏角の各誤差から作成したものである。

４．焼成年代値の推定

第２図には、広岡（1977）による地磁気永年変化曲線の一部と炉跡焼土の磁化方向を示す。カマド焼土の磁化方向は、偏角13.60°W、伏角56.25°にそれぞれプロットされ、伏角および偏角の誤差は非常に小さく、標準曲線のAD300年付近に位置する。

このカマド焼土の磁化方向を曲線上に移動して焼成年代の推定を行った。その結果、A.D.305^{+20}_{-30}年と推定された。

第2表．カマド焼土の焼成年代推定

遺構	位置	遺物年代	焼成年代
19号竪穴住居跡	カマド焼土	布留式	A. D. 305^{+20}_{-30}年

引用文献

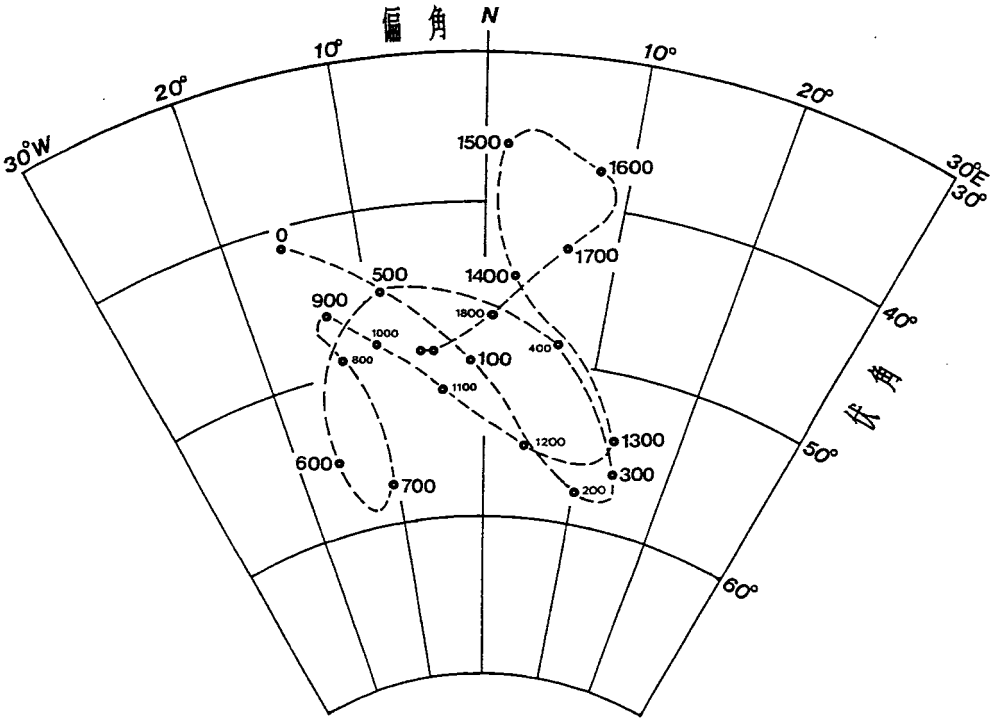
Fisher、R.A.（1953） Disparsion on a sphere.Proc.Roy.Soc.London、A、217、295-305.

広岡公夫（1977）考古学地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、15、200-203.

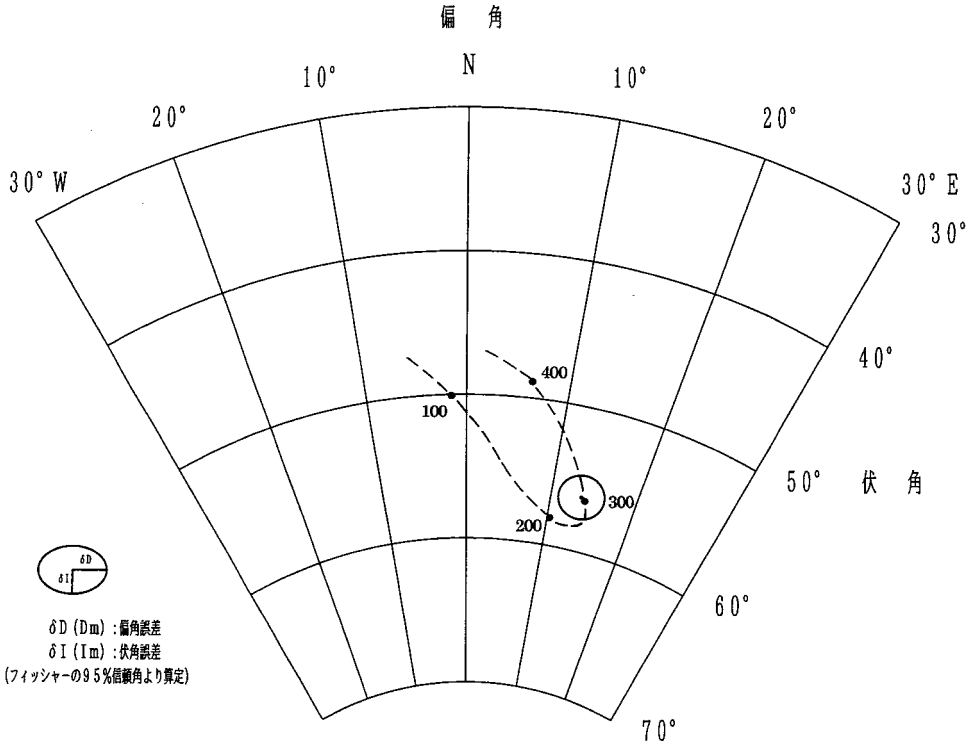
広岡公夫・藤澤良祐（1998）東海地方の地磁気永年変化．日本文化財科学会第15回大会研究発表要旨集、20-21.

理科年表（1993）国立天文台偏，丸善，952p

Shibuya、H.（1980）Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000years by means of archaeomagnetism.大阪大学基礎工学部修士論文，54p



第1図. 広岡（1977）による地磁気永年変化曲線



第2図. カマド焼土の磁化方向と広岡（1977）による地磁気永年変化曲線

第2節　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ　山形 秀樹

1. はじめに

西新町遺跡第14次調査により検出された甕の外側付着炭質物の加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、19号竪穴住居跡から出土した甕外側付着炭質物から採取した1試料である。

試料は、酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した^{14}C濃度を用いて^{14}C年代を算出した。

3. 結果

表1に、試料の同位体分別効果の補正値（基準値-25.0‰)、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C年代値(yrBP)の算出は、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差(±1σ)は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の^{14}C年代が、その^{14}C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

表1　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1260 (AMS)	19号竪穴住居跡甕 (No.9)外側付着炭質物	-25.8	1710±45	cal AD 265 cal AD 340 cal AD 375	cal AD 260 – 290 (34.1%) cal AD 325 – 395 (65.9%)

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い(^{14}Cの半減期5,730±40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と^{14}C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使

用した。なお、暦年代較正値は^{14}C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に影付け部分で示した。

4. 考察

試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、土器付着物はcal AD 325 - 395年が、より確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の^{14}C年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第3節　砂礫から見た西新町遺跡基盤の古環境

西南学院大学文学部　磯　　望・梶原忠裕

はじめに

福岡県立修猷館高等学校敷地内で発掘調査された西新町遺跡は、西新から鳥飼方面に伸びる新砂丘列のB砂丘とC砂丘（下山ほか、1991）との間の箱崎砂層の上に位置する。

箱崎砂層は、博多湾沿岸に分布する沖積世の海浜砂、三角州前置層、砂丘砂など、堆積環境を異にする砂層から構成されることが指摘されていたが、定量的分析はなされていない。

西新町遺跡では、その基盤となる箱崎砂層について粒度分析を行い、遺構の形成直前の地形地質にかかわる古環境について検討する資料を得た。ここでは粒度分析結果を中心に報告する。なお、分析試料は、平成14年3月7日に採取したものである。

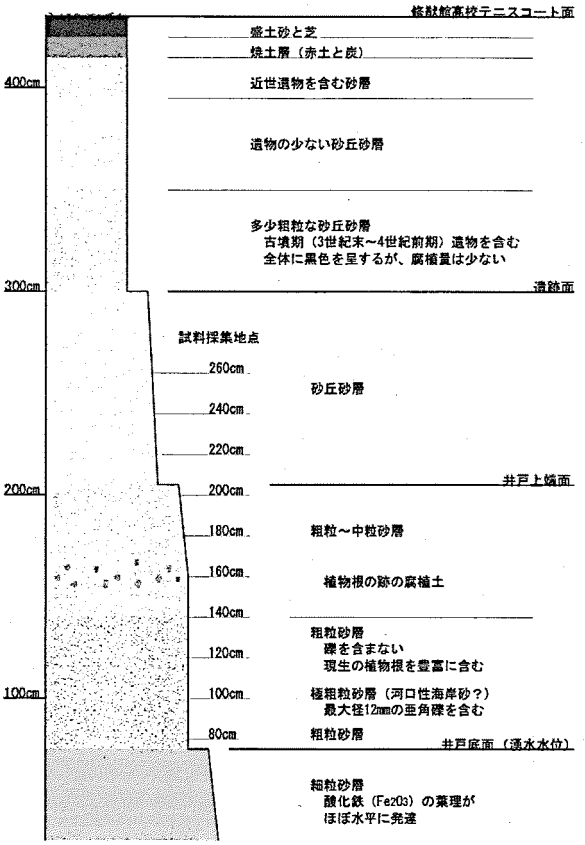


図1. 地質柱状図及び試料採集地点

試料の採集

分析試料（原試料）は、西新町遺跡の井戸遺構底面付近（標高80cm）から標高260cmまでの箱崎砂層を垂直方向20cm間隔に10層位から各1kg程度採集した。また、分析試料採集の際に、堆積物の野外層位観察を行った（図1）。

分析方法

〔粒度分析方法〕

各層位の原試料を縮分して70～130gを分析試料とした。乾燥オーブンを用いて乾燥させた分析試料を、篩振動機Endecotts社（London）製Octagon200を用いて、断続振動で30分間篩別した。篩は－1 ϕ から4 ϕ まで0.5 ϕ 間隔のものを使用した。

篩別された分析試料をクラス毎に秤量、各クラスの重量％及び累積重量％を計算した。その結果をもとに、各層位の累積粒度分布曲線を作成した（岡田,1972及び水谷・足立1987参照）。

〔礫種分析方法〕

各層位の分析試料から篩別した礫（径2mm以上）1～10gを観察試料とし（分析試料から篩別した礫が1g未満の場合は、径1.4～2mmの極粗粒砂も加えて1g以上の観察試料とした）、双眼実体顕微鏡下で観察試料の礫種（岩石または鉱物の種類）を鑑定・分別、礫種毎に礫個数を数え秤量した。その結果に基づき、各層位の礫種の重量％・各礫種の礫平均重量を計算した（礫平均重量は径2mm以上のみで計算）。

分析結果

〔粒度分析結果〕

①各層位の分析試料は細礫～細粒砂（－2～3 ϕ）を主体とし、中礫より粗いもの及び極細粒砂より細かいものは、ほとんど含まれていない。

②各層位とも、（程度の差はあれ）粗粒砂より粗い堆積物（－0.5～1 ϕ）と細粒砂（2～2.5 ϕ）が混在している。これは運搬機構の異なる2種類の堆積物が混交していることを示す。粗粒砂より粗い堆積物（－0.5～1 ϕ）は水の作用によって運搬された堆積物を示すと考えられる。細粒砂（2～2.5 ϕ）は風成砂（砂丘砂）を示すと考えられる。このような水と風の2種類の運搬機構が同時に働く堆積環境としては、海浜から河口域にかけての堆積環境が考えられる。

③各層位の累積粒度分布曲線（図2）を比較すると、全体的に上方ほど細粒化の傾向を示している。これは細粒砂の重量%が上方ほど増加し、風成砂の供給が次第に増加したことを示す。また、粗粒砂より粗い堆積物は、上方ほど小粒な傾向にあり、次第に水の作用は低下したか、または堆積物供給源からの遠隔化した可能性が認められる。

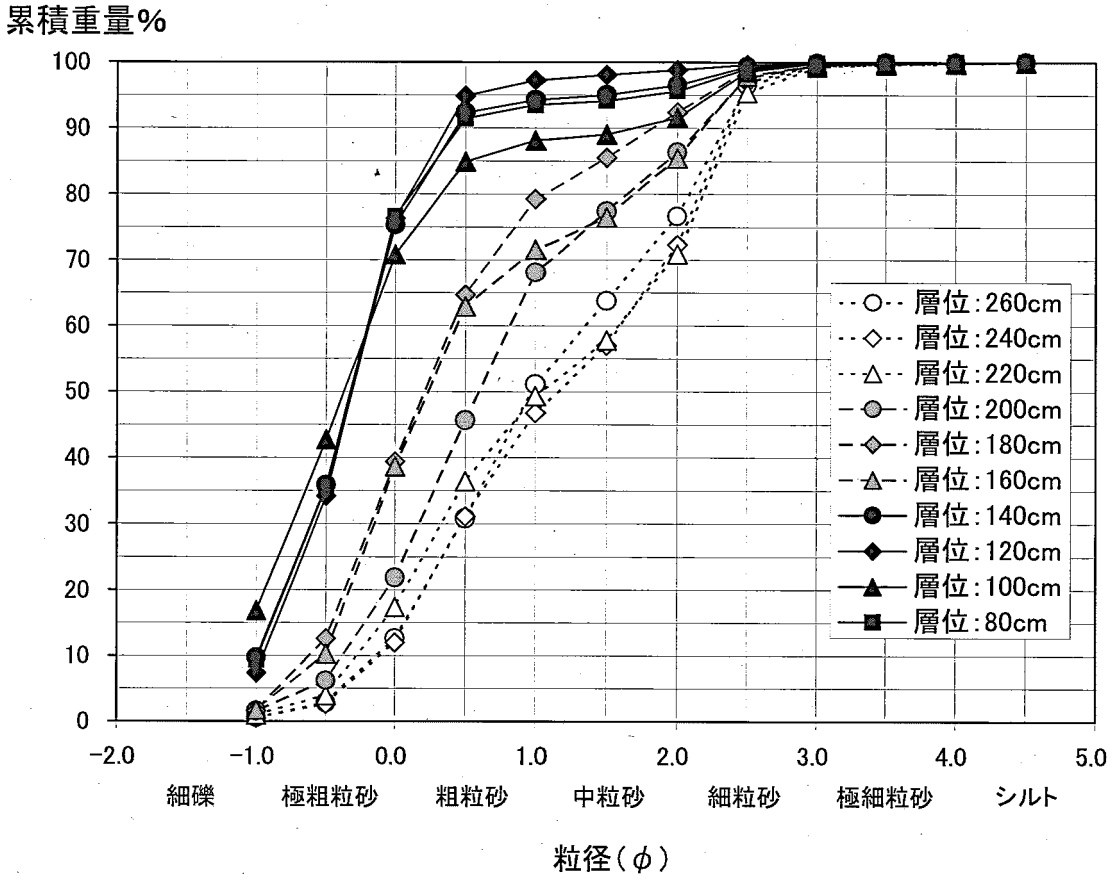


図2. 各層位の累積粒度分布曲線（通常の表記とは異なり右側ほど細粒）

④累積粒度分布曲線に見られる上方細粒化は連続的に生じてはおらず、以下の粒度分布の特徴を持つ3区間に細分することができる；

層位80cm～140cm：極粗粒砂（－0.5～0 ϕ）より粗い堆積物が70％以上を占め、細粒砂（2～2.5 ϕ）は非常に少ない。淘汰度は比較的良い。

層位160cm～200cm：細粒砂が粗粒～極粗粒砂（－0.5～0.5 ϕ）の半分程度含まれ、淘汰度は比較的良くない。

層位220cm～260cm：粗粒砂（0～1 ϕ）と細粒砂（2～2.5 ϕ）がほぼ同程度含まれる。極粗粒砂より粗い堆積物は20％以下しかないが、淘汰度は比較的良くない。

〔礫種分析結果〕

①観察試料に含まれる礫の種類は、花崗岩・ゼノリス・石英・片岩・火山岩・その他（岩石名または鉱物名不明）の6種類である（図3）。ただし、ゼノリスは花崗岩の一部であるので、花崗岩と同列に扱ってもよい。

②各層位とも花崗岩礫（ゼノリス礫を含む）の重量％が圧倒的に多い（約65～90％）。石英礫を花崗岩起源と考えると、層位120cmより上位では礫種の98％以上が花崗岩起源となる。

③層位80－100cmは上位に比べ片岩礫の重量％が大きい。これは、この層位における片岩礫個数割合が大きいこともさることながら、片岩礫1個あたりの平均重量（すなわち礫サイズ）が他種の礫に比べて大きいことが影響している。

④層位260cmにおける火山岩礫の産出は、調査地域の内陸側にある早良区小田部に見られるような阿蘇4火砕流堆積物に含まれる礫が侵食運搬されてきた可能性が考えられる。

⑤各層位の観察試料において、貝殻片などの海生生物の痕跡が全く見られない。粒度分析結果ともあわせて考えると、今回の調査対象の砂層は河口域に堆積した可能性が高い。

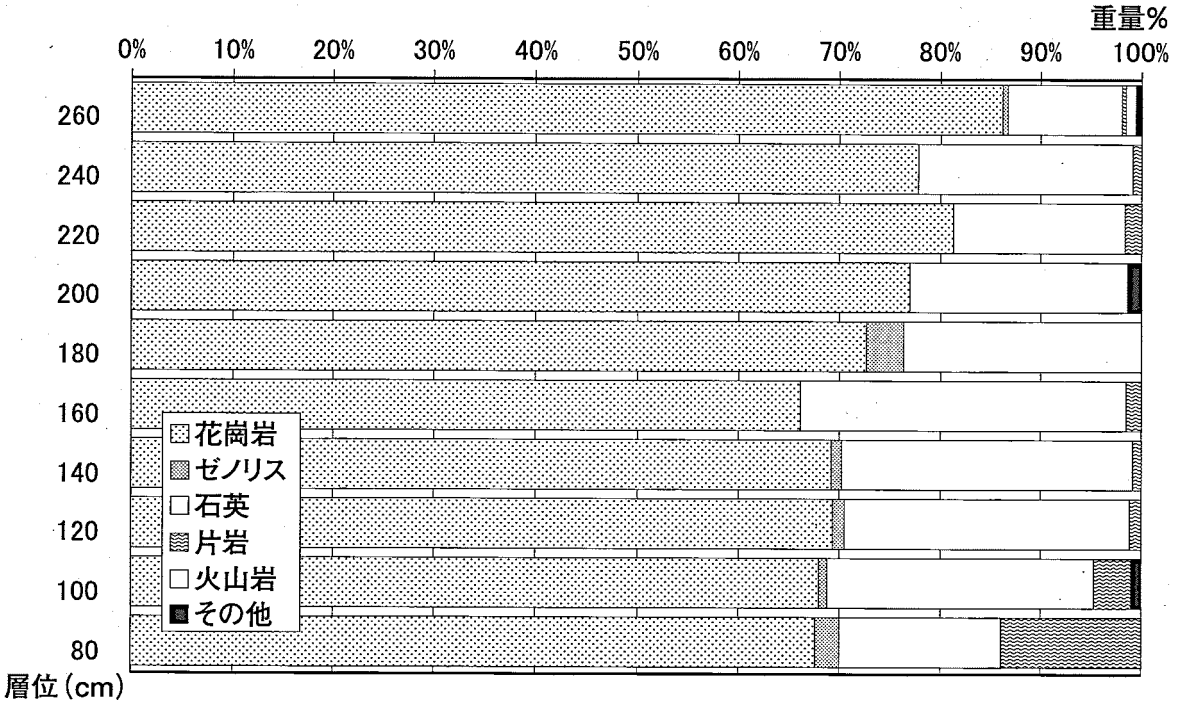


図3. 礫種の垂直変化

堆積環境の考察

西新町遺跡の基盤となる砂層は、河口域の環境に堆積したものと考えられる。しかも、時代とともに陸化・砂丘化しており、その変化は断続的であったことが明らかとなった。三区間に区分した層位別の環境は次のように判断できる。

層位80cm～140cm：たえず水の営力を受けていた河口域の環境(例えば砂洲)で堆積した砂層(地下水による細粒堆積物の選択的除去の可能性も否定できないが、少なくともそれだけでは粗粒堆積物の上方細粒化を説明できない)。堆積物の供給源には片岩分布地域が含まれており、他地域における分析事例を増やすことで、当時の河川経路を推定することが可能となる。

層位160cm～200cm：この地域の陸化が始まった時期の堆積物。植物根に由来する腐植質の斑紋が散在し、特に層位160cm付近に腐植質斑紋の密集が認められることから、この区間は堆積速度が遅かったか、堆積の中断した時期があったかもしれない。片岩礫はほとんど見られなくなり、室見川からの流入が途絶えるなど、河川経路の変更が起こった可能性を示唆している。

層位220cm～260cm：腐植土などが見られず、細粒の風成砂の構成比が高くなっている。このことから風によって運ばれた砂丘砂が堆積したことがわかる。しかし堆積環境は完全に陸化した砂丘とは言えない。砂洲上面などに薄く風成砂が堆積して、薄い砂丘が形成され始めた時期の地形環境を想定できる。

西新町遺跡の基盤となる砂層の年代測定は適当な試料が得られず実施していないが、藤崎遺跡などとの関連から、縄文海進後の小海退期(3,500年前頃)以降、弥生中期の西新町遺跡の成立までの比較的短い期間に堆積したものと想定される。下山(1989,1998)の層序区分に従えば、層位140cmより下位層は住吉層上部に対比され、層位160cmより上位層が箱崎砂層に対比されることになるが、厳密な区分については、他地域における分析事例を増やした段階で判断する必要がある。

調査地域は縄文海進以降に三郡変成岩礫の混入する室見川の影響の強い河口域環境で砂礫を堆積し、その後次第に樋井川などの変成岩礫の供給の少ない河川の河口域環境となり、その後に陸化して砂丘砂が覆うように変化した。弥生中期には、この薄い砂丘は河川の影響をうけることが少なくなり、そこに西新町遺跡が形成され始めた。

なお、分析した層位より上の地層は砂丘砂から構成されており、この地点では砂丘砂が時代が下るにつれて次第に厚くなっていくことが確認された。

参考文献

水谷伸治郎・足立守(1987)砕屑性堆積岩,水谷伸治郎・斉藤靖二・勘米良亀齢編『日本の堆積岩』(岩波書店),p.29-84.

岡田博有(1972)砕屑性堆積岩の見方について(その1),鹿児島県地学会誌,No.40,p.1-13.

下山正一(1989)福岡平野における縄文海進の規模と第四紀層,九州大学理学部研究報告(地質学),Vol.16,No.1,p.37-58.

下山正一(1998)福岡平野の縄文海進と第四紀層,小林茂・磯望・佐伯弘次・高倉洋彰編『福岡平野の古環境と遺跡立地』(九州大学出版会),p.11-44.

下山正一・磯望・野井英明・高塚潔・小林茂・佐伯弘次(1991)福岡市鳥飼低地の海成第四系と更新世後期以降の地形形成過程,九州大学理学部研究報告(地球惑星学),Vol.17,No.1,p.1-23.

第4節　西新町遺跡14次調査出土ガラス小玉の調査

福岡市埋蔵文化財センター　比佐陽一郎

ガラスは古代メソポタミアを発祥として世界各地に広まり、日本では弥生時代前期後半頃に大陸あるいは半島を経由して伝来、中期以降、装身具を中心に本格的に流通するとされる。古代ガラスは珪素を主成分とする珪酸塩ガラスであるが、それらは肥塚隆保氏らの研究により成分的な分類が行われ、更には世界規模での流通や変遷が明らかにされつつある(肥塚2003)。また大賀克彦氏は成分的な分類に加えて日本全国のガラス製玉類を詳細に観察し、製作技法的な要素も加味した上で弥生～古墳時代のガラス玉の変遷を示している(大賀2002)。

これらの研究に基づき西新町遺跡14次調査で出土したガラス小玉の歴史的な位置付けを行うために、観察及び材質分析を行った。対象となった資料は18号竪穴住居跡出土の一括資料で、発掘調査担当者により1～283までの番号が付与されている。この中にはガラス以外の資料(炭化物)が含まれていたり、接合により欠番になったものが含まれているが、同一番号でもA、Bと分けられているものが数点ある結果、実際の点数は282点となっている。これらは大きく色調を中心に見ると青紺色、淡青色、赤褐色の3種類に分類され、最も多いのは青紺色で196点、次いで赤褐色85点、淡青色は小片が1点のみという構成となっている。出土遺構の時期は古墳時代前期に比定されている。

まず製作技法の推定を目的として、実体顕微鏡による観察を行った。ガラス小玉の製作技法としては大賀氏によって引き延ばし法、巻き付け法、鋳型法、連珠法、加熱貫入法、分割研磨法、融着法の7種が提示されている。この中には二次的な技法や特殊なものも含まれており、比較的普遍的なものとしては前三者が挙げられよう。これらは主にガラス内部に残る気泡や色むらの流れや、表面の風化によって生じた気泡の流れが浸食された痕跡、「蝕像」などを手掛かりに判別する。観察は透過光によって行われるが、破損や風化によって透過光観察に適さないものは除外している。結果、観察が可能であった資料は一部を除き、ほとんどが引き延ばし法によるものと考えられる要素が認められた。この技法は引き延ばして作られたガラス管を切断等により分割し、破断面を整形するために加熱する方法で、結果として孔の長軸に平行な引き延ばされた気泡の筋や、微細な気泡が列をなす様子、更にはそれらの蝕像が観察される。小瀬康行氏による実証的且つ詳細な研究では、実験の結果として引き延ばされた時点で連続していた気泡が、ガラス管の細分化、再加熱の過程で、加熱の度合いにより徐々に独立化する過程が明らかにされている(小瀬1987)。

青紺色の資料では1点を除くほとんどの資料で気泡の量や形状など個体差は大きいものの、筋や列をなす様子が観察されている。また小口面が平坦に整形されているという共通の特徴も有している。

ただ唯一No.73のみが気泡等の流れを読みとることができなかった。この資料は表面がざらついたような質感ということもあってか透明度が低く、また気泡自体も数が少ない。蝕像や色むらについても同様に製作技法に繋がる手掛かりとはなり得なかった。また外観も非常に整った筒形を呈しており、この点でも他の青紺色資料とは異質な感じを受ける。

なお肉眼観察による分類では青紺色という系統でグルーピングしているものの、顕微鏡による

透過光観察では細かい色調の違いが顕著に表れる。文字で表現するのは困難であるが、淡いもの、濁ったもの、鮮やかなもの、赤みの強い(紫色の)ものなどがあり、細分も可能かもしれないが、客観的な分類には至らず今回は見送っている。

赤褐色の資料は形状、寸法に個体差はあるものの、いずれも不透明で色の異なる筋が多数、孔に平行に並んでいる様子は共通しており、同じ材料、技法が用いられていると目される。気泡の存在は確認できないものの、この筋の流れにより引き延ばし技法で作られたことや、全体に丸みの強いもの(No.191)と、逆に角がシャープに角張っているもの(No.96)があり、この差異は管ガラスを分割した後の加熱の度合いを示しているであろうことなどが見て取れる。

1点のみの淡青色資料(No.250)は全体の1／3程の破片で、僅かに残る孔の縁部分から全体の形状が何とか推定できる。比較的透明感があり気泡も数多く見られるものの、規則性や流れは読みとりにくい。孔の長軸方向に伸びたラグビーボール形の気泡がある他、独立した小気泡が列をなしているかのように見えないこともなく、これらの点から引き延ばしと考えたが今ひとつ決め手に欠ける。

続いて蛍光X線分析法による材質調査について記す。この方法は試料にX線を照射し、含有する各元素から発生する二次X線(特性X線)を検出器でとらえてX線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。ガラス資料の場合、局部的に強いX線を照射するとその部分が変色を来す現象が起きるため、X線強度が小さくても検出感度の優れたエネルギー分散型蛍光X線分析法が有効である。またガラスは風化の影響によって組成が変化する場合があり、本来であれば風化層を除去した上で分析を行い、更に標準資料を用いた校正によって含有元素の定量値を算出し、データの比較検討を行うところであるが、遺物を損傷させずに実施したため定性分析のみに止めている。分析の条件は次の通りである。

分析装置:エネルギー分散型微小領域蛍光X線分析装置(エダックス社製／Eagle μ probe)／対陰極:モリブデン(Mo)／検出器:半導体検出器／印加電圧:20kV・電流:任意／測定雰囲気:真空／測定範囲0.3mm ϕ ／測定時間120秒

日本の古代ガラスは肥塚氏の分類に従えば、大きくアルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラスに分かれる。アルカリ珪酸塩ガラスは融剤に酸化カリウムを用いるカリガラス(K_2O-SiO_2系)と酸化ナトリウムを用いるソーダ石灰ガラスに、更にソーダ石灰ガラスは酸化アルミニウム含有量の高いもの(Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2系)と、低いもの(Na_2O-CaO-SiO_2系)に区分される。鉛珪酸塩ガラスには、鉛ガラス(PbO-SiO_2系)と鉛バリウムガラス(PbO-BaO-SiO_2系)がある(肥塚2003)。

今回の調査では完全非破壊分析による定性分析であり、得られた元素の種類と相対強度から判定することになる。過去の調査では特にアルカリ珪酸塩系ガラスの場合、カリガラスであればカリウムの強いピーク、ソーダ石灰ガラスであればナトリウムの存在やカルシウムの強いピークが検出されることにより判別していた。またソーダ石灰ガラスの高アルミナタイプとそうでないものについては、定量値を算出していないことから、アルミニウムのピークの相対的な強度比や、先学の研究により明らかにされている色調による傾向などを手掛かりとして判別している。

まず観察によって同一種と推定された赤褐色の一群は、カルシウムの強いピークとナトリウムの検出によりソーダ石灰ガラスと考えられる。またアルミニウムのピークも相対的に高く、更に色調を含めた外観的な特徴が肥塚氏や大賀氏によってMutisalah（ムチサラ）として紹介された

高アルミナタイプのソーダ石灰ガラスに合致していることから、この種のガラスとして認定しうる。またこの一群では銅の明瞭なピークが検出されているが、Mutisalahは銅コロイドによる特殊な着色技術が用いられているとのことである(肥塚他2002)。他に鉛のピークが確認できるものもあるが、これはピークが微弱であったり認められないものもあって検出にバラツキが見られる。

問題は青色系統の一群である。まずカリウムの強いピークから、カリガラスと考えられる資料であるが、明らかなものとして24点、不明瞭なものも含めると34点がこれに分類される。不明瞭な資料ではカリウムとカルシウムのピーク強度比が近接していたり、中には若干逆転しているものもある。この場合、ナトリウムが全く認められないことからカリガラスに区分しているが、後に述べるようにナトリウムは非常に不安定で、判断の要素とするには危険も孕んでいる。

他に特徴的な元素としてマンガンが認められるが、肥塚氏の研究では青紺色のアルカリ珪酸塩ガラスではコバルトが着色に用いられ、特に中国産のコバルト鉱石にはマンガンが不純物として含まれることから中国で製造されたことを示唆するものとされている。コバルトは含有量がそれほど多くないと推察されピークが低く、鉄のピークと重複する部分もあることから不明瞭であるが、微妙な高まりとして確認できるものもある。更に多くの資料において銅のピークと思しき微弱な高まりが認められた。

続いてカルシウムの強いピークからソーダ石灰ガラスと考えられる一群であるが、これらにおいてはもう一つの判断基準であるナトリウムの検出が非常に不安定で、若干微弱な高まりが認められるものもあるが、多くの資料ではピークとしての判別さえ困難なほどである。この原因としては風化の影響が考えられる。西新町遺跡は海岸部の砂丘に営まれた遺跡であり、埋蔵環境下においては水、酸素、塩素イオンの影響を多分に受けていたことは想像に難くなく、このタイプに限らず過去の分析事例との比較が困難な結果が認められた要因になっているものと思われる[1)]。

この一群でもマンガンは強く表れ、銅と見られる微弱なピークが見られるという、カリガラスと同様の特徴が認められる。またアルミニウムについては赤褐色の一群に比べると明らかに低く、色調の特徴からも通常のソーダ石灰ガラスと推察される[2)]。点数は不明確なものも含めると162点に達し、最多を占める。

この様な中で特筆すべきはNo.73である。外観の特異性同様、この資料はアルカリ珪酸塩ガラスの範疇では考えられないピーク構成となっており、鉛とバリウムが検出されることから鉛バリウムガラスと考えられるものである。この種のガラスは弥生時代に盛行し古墳時代には廃れていく。それも管玉や勾玉を中心に、変わったところでは璧などに用いられており、この様な形状の小玉は筆者の経験上あまり類を見ない。再加工品なのかも含め、どの様な経緯でこの一括資料に入り込んだのか興味深い問題である。

唯一の淡青色資料はガラスの種別としてはソーダ石灰ガラスの特徴を示し、アルミニウムも高い部類に属すると考えられる。しかしマンガンは低く、代わって銅が強く検出されており、色調の違いが検出元素にも現れている。

以上、観察と分析によって得られたデータを大賀氏の分類に当てはめてみたい。今回確認されたのは以下の4種類である。

BWⅠ：巻き付け技法による「鉛ガラス」(鉛ガラス、鉛バリウムガラスの総称)の小玉[3)]

BDⅠ：引き延ばしによるカリガラス製小玉で青色系統のもの

BD Ⅱ:引き延ばしによる高Alソーダ石灰ガラスの小玉
BD Ⅲ:引き延ばしによる低Alソーダ石灰ガラスの小玉で紺色透明のもの。

BW Ⅰは弥生時代の早い段階から出現、後期から終末に盛行しその後廃れる。BD Ⅰの内、青紺色の資料は弥生時代中期後半頃に現れ、後期から古墳時代前期を通じて盛行する。BD Ⅱの内、赤色は弥生時代の後期に盛行するものの一旦途絶え、古墳時代の中期以降に再び出現する。一方、同じタイプでも青色は古墳時代前期後半以降とされている。BD Ⅲは弥生時代後期以降に認められるが、盛行するのは古墳時代中～後期とされている。とすると、BD Ⅰは時期的に特に問題はないものの、BW ⅠとBD Ⅱの内の赤褐色は弥生時代終末的特徴を残し、BD Ⅱの青色はこれまで確認されていたよりも出現が遡る可能性をそれぞれ示すことになる。またBD Ⅲも時期的には存在して問題ないものの、細かい部分で見るとこれまで考えられていたものとは異なる様相が見える。筆者の見解では弥生時代など古い時期の当該資料は小口面が丸みを帯びているのに対して、古墳時代後期を中心とする資料では小口面が平坦に加工(＝研磨？)されている違いがあり、この違いはBD Ⅰについても当てはまる。これまで古墳時代前期の資料をまとまった形で詳細に調査したことがなかったこともあり、小口面の研磨は古墳時代でも新しい時期の特徴と考えていたが、それよりもかなり遡ることが確認できたことになる。

以上、本資料群の調査結果は弥生時代的な要素と古墳時代的な要素が混在するという、時代の過渡期のガラスにふさわしいものとも言えよう。また風化した資料の非破壊分析という悪条件により全てを明確にし得たものではなく課題も多く残されている。しかし福岡平野においては当該期のガラス資料はそれほど多く調査の俎上に上っておらず、新たな調査事例としてガラス文化解明の一助となれば幸いである。

註

1)これは外観にも現れており青色系統の資料では亀裂が入りそこに鉄分が沈着した資料があったり、赤褐色のものでは亀裂などは認められないものの破損しやすいなど脆弱化が著しい状況が看取される。

2)No.246はアルミニウムの相対強度が高くなっているが、これも、その他の検出元素の特徴は他の青紺色ソーダ石灰ガラスと変わるものではなく、風化によるイレギュラーと考えたい。

3)当資料の場合、製作技法の判別が明瞭ではないが、この種のガラスは管玉においては特に巻き付けられるものが多いことから便宜的にここに区分しておく。

参考文献

大賀克彦2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　福井県清水町教育委員会

肥塚隆保・大賀克彦・比佐陽一郎・高妻洋成2002「弥生・古墳時代のMutisalahに関する考古科学的研究」『日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

肥塚隆保2003「日本出土ガラスの考古科学的研究－古代ガラス材質とその歴史的変遷－」『考古科学の総合的研究』平成10-14年度科学研究補助金研究成果報告書　独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・沢田正昭

小瀬康行1987「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』第73巻第2号　日本考古學會

西新町遺跡第14次調査18号竪穴住居跡出土ガラス小玉　計測・分析表（1）

No.	写真	色調	最大径(mm)	最大高(mm)	備考	顕微鏡観察による所見	蛍光X線分析の結果	分類
1		青紺色	4.9	4.5		円筒形。小口面平坦。孔の長軸に平行な気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
3		青紺色	5.2	3.4		ドーナツ形。小口面平坦。孔の長軸に平行な気泡列多数。紫色。黒鉄色の介在物が表面に噛み込む。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
4		青紺色	4.9	3.6		小口面平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列多数。	Na無、Al弱、K＞Ca、高Mn	カリガラス
5		青紺色	5.3	3.0		小口面平坦。気泡は少ないが孔の長軸に平行に列を為す。濃紺色のマーブリング状模様が入る。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
6		青紺色	5.8	4.6		小口面平坦。孔の長軸に平行な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
7		青紺色	5.3+α	3.2	1/2残存	小口面平坦(研磨?)。破損により水中観察不能。孔の長軸に平行な蝕像有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
8		青紺色	5.9	3.8	1/3残存	小口面平坦。破損により水中観察不能。孔の長軸に平行な蝕像有り?。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
9		青紺色	5.6	3.5		小口面平坦。孔の長軸に平行な気泡列。青色。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
10		青紺色	5.7	4.5		小口面は若干凹む。側面に不規則な凹み。孔の長軸に平行な微細な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
11		青紺色	6.0	4.1		小口面は平坦。側面に不規則な凹み。孔の長軸に平行な微細な気泡列。マーブリング状模様有り。	Na無、Al弱、K＞Ca、高Mn	カリガラス
12		青紺色	4.1	2.6		小口面平坦。破損により水中観察不能。孔の長軸に平行な気泡列有り?。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
13		青紺色	5.2	3.3		小口面は平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列。マーブリング状模様有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
14		赤褐色	2.9	1.8		不透明。黒色の筋が孔の長軸に平行に走る。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb有	高Alソーダ石灰ガラス
15		青紺色	5.2	3.3		小口面は平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列と独立した巨大な気泡が共存。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、Cu明瞭	低Al?ソーダ石灰ガラス
16		赤褐色	2.7	1.8		管ガラスの形状を残す。黒色の筋が孔の長軸に平行に走る。	Na不明瞭、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb有	高Alソーダ石灰ガラス
17		赤褐色	3.1	1.7		小口と側面の境は角が立つ。側面に面を持ち小口から見た形が三角を呈する黒色の筋が孔の長軸に平行に走る。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb有	高Alソーダ石灰ガラス
18		青紺色	5.1	2.9		小口面は平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列。紫色。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
19		青紺色	5.1	3.2		小口面は平坦。孔が小さい。孔の長軸に平行な微細な気泡列。マーブリング状模様も筋状を呈する。紫色。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
20		青紺色	4.6	2.7		小口面は平坦。孔が大きい。孔の長軸に平行な気泡列。マーブリング状模様も筋状を呈する。青色。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
21		青紺色	5.3	3.2		整った形状。小口面平坦。孔の長軸に平行な気泡列、筋多数。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
22		赤褐色	3.3	1.9		管ガラスの形状を残す。小口面に微細な凸凹有り。黒色の筋が孔の長軸に平行に走る。	Na、Mg不明瞭、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb有	高Alソーダ石灰ガラス
23	◎	青紺色	5.4	5.1		小口面平坦(研磨?)。孔の長軸に平行に紫色、茶色の介在物が入る。同様に気泡列も有り。	Na有、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
24		赤褐色	2.8	1.5		全体に歪む。小口端部は角が立ち、小口面は凸凹。黒色の筋が孔の長軸に平行に入る。	Na、Mg不明瞭、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb有	高Alソーダ石灰ガラス
25		青紺色	5.3	4.2		小口面は平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列。マーブリング状模様有り。	Na有?、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
26		赤褐色	3.1	2.5		小口端部はやや丸みを帯びる。整った円筒形。孔の長軸に平行な黒色の筋が入る。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb有	高Alソーダ石灰ガラス
27	◎	青紺色	5.3	3.1		小口面は平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列。マーブリング状模様有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
28		青紺色	6.0	4.7		小口面平坦(研磨?)。破損により水中観察不能。孔の長軸に平行な気泡列有り?。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
29		青紺色	5.2	3.7		小口面平坦(研磨?)。破損により水中観察不能。孔の長軸に平行な気泡列・筋有り?。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
30		青紺色	4.9	3.9		小口面は平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列。若干のマーブリング状模様有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
31	◎	青紺色	5.7	4.3		小口面平坦(研磨?)。孔の長軸に平行な微細な気泡列多数。側面に若干の平坦面有り。	Na無、Al微弱、K≧Ca、高Mn	カリガラス
32		青紺色	4.9	4.1		小口面平坦。極端な紫色。孔の長軸に平行な気泡列は微細なものと大きなものが混在。	Na無、Al不明瞭、K≦Ca、高Mn	カリガラス?
33		青紺色	5.3	3.8		小口面平坦。気泡は少なく透明度が高い。気泡は孔の長軸に平行に列を為す。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
34		青紺色	6.3	2.5		小口面平坦(研磨?)。極端に扁平な形状。孔の長軸に平行な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
35		青紺色	5.4	3.8		小口面平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列多数。側面に若干の平坦面有り。	Na無、Al微弱、K＞Ca、高Mn	カリガラス
36		青紺色	4.9	4.8		小口面平坦。歪形の外観。破損のため水中観察不能。孔の長軸に平行な気泡筋有り?。	Na不明瞭、Mg有、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
37		青紺色	4.5	2.5		整った形状。小口面平坦。孔の長軸に平行な気泡列有り。透明度は高く小口面にマーブリング状模様有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
38	◎	青紺色	6.6	5.2		小口の平坦部は不明瞭。側面に平坦面有り。透明度は低いがマーブリング状模様有り。孔の長軸に平行な気泡列有り。	Na無、Al微弱、K＞Ca、高Mn、Cu有	カリガラス
39		赤褐色	3.6	1.6		小口端部は丸みを帯びる。ドーナツ形の形状。孔の長軸に平行な黒色の筋が入る。	Na、Mg不明瞭、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb不明瞭(無?)	高Alソーダ石灰ガラス
40		青紺色	5.4	4.1		小口面平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列、筋多数。側面に若干の平坦面有り。	Na不明瞭、Mg有、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
41		青紺色	5.3	3.4		孔が大きく小口平坦面の面積が少ない。孔の長軸に平行な微細な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、Cu有	低Al?ソーダ石灰ガラス
42		赤褐色	2.7	1.4	1/4破損	小口面端部は角が立ち、片面は平坦、もう一方は微細な凸凹。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb不明瞭(無?)	高Alソーダ石灰ガラス
43		青紺色	5.1	3.5		小口面平坦。孔は小さい。孔の長軸に平行な気泡や同様に色の濃い部分有り。小口面ではマーブリング状模様に見える。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
44		青紺色	4.6	3.8		小口面平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列、筋多数。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
45		赤褐色	2.6	2.8		管ガラスの形状を若干残す。孔の長軸に平行な色の異なる筋が入る。	Na不明瞭、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb不明瞭(無?)	高Alソーダ石灰ガラス
46		赤褐色	2.3	1.8		小口面端部には若干の角が残る。孔の長軸に平行な色の異なる筋が入る。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb不明瞭(無?)	高Alソーダ石灰ガラス
47		赤褐色	2.4	1.5		小口面は丸みを帯ながらも凸凹。孔の長軸に平行な色の異なる筋が入る。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb不明瞭(無?)	高Alソーダ石灰ガラス
48		赤褐色	2.2	1.6		小口面端部に角が立ち管ガラスの形状を残す。孔の長軸に平行な筋が入る。	Na、Mg不明瞭、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
49		赤褐色	2.8	2.6		全体に丸みを帯びる。孔の長軸に平行な筋が入る。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
50		青紺色	4.8	3.4		小口面平坦。孔の長軸に平行な気泡列は微細なものと大きなものが混在。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
51A		青紺色	5.2	2.9		小口面平坦。紫色。孔の長軸に平行な微細な気泡列、蝕像有り。マーブリング状模様。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
51B		青紺色	5.6	4.8		小口面平坦(研磨?)。鮮やかなコバルトブルー。側面に若干の歪み。孔の長軸に平行な微細な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス

西新町遺跡第14次調査18号竪穴住居跡出土ガラス小玉　計測・分析表（2）

No.	写真	色調	最大径(mm)	最大高(mm)	備考	顕微鏡観察による所見	蛍光X線分析の結果	分類
52A		青紺色	5.3	4.2		小口面平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列有り。マーブリング状模様。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
52B		青紺色	4.8	3.8		小口面平坦(研磨?)。孔の長軸に平行な微細な気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
53A		青紺色	5.9	3.2		小口面平坦。全体に歪み有り。孔の長軸に平行な微細な気泡列。筋、蝕像有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
53B		青紺色	5.4	2.8		小口面平坦。片面が若干凹む。孔の長軸に平行な微細な気泡列、筋、蝕像有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
54		赤褐色	3.1	2.3		整った形状。小口は平坦。孔の長軸に平行な黒色の筋が入る。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb有	高Alソーダ石灰ガラス
55		赤褐色	計測不能	2.9	破砕	孔の長軸に平行な黒色の筋が入る。破砕により詳細不明。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
56		赤褐色	2.4	1.1		小口面は平坦で端部は若干の角有り。孔の長軸に平行な筋。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
57		赤褐色	2.7	1.8		小口面は平坦（片側は若干膨らみ、もう一方は凹む）。端部は明瞭な角が立つ。孔の長軸に平行な筋有り。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb不明瞭	高Alソーダ石灰ガラス
58		青紺色	5.6	4.5		全体に丸みを帯小口の平坦面は不明瞭。破損により水中観察不能。孔の長軸に平行な蝕像有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
59		青紺色	4.4	3.0		小口は平坦だが端部の稜は不明瞭。孔の長軸に平行な微細な気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
60		赤褐色	2.9	1.2		小口片面は平坦、もう一方は一部凸凹有り（凹凸が激しく研磨が及ばなかった状況?）。孔の長軸に平行な筋。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb不明瞭	高Alソーダ石灰ガラス
61		青紺色	5.1	3.4		小口面平坦。濃い紫（透明度低い）。孔の長軸に平行な微細な気泡列が明瞭。	Na、Mg不明瞭、Al低(明瞭)、K≧Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	カリガラス?
62		青紺色	5.8	4.1		小口面平坦(研磨?)。孔が小さい。孔の長軸に平行な気泡列は少ないながらも有り。巨大な気泡や表面でそれが破れたもの有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
63		青紺色	5.3	2.8		小口面平坦(研磨?)。孔が小さい。孔の長軸に平行な気泡列は少ないながらも有り。マーブリング状模様有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
64		青紺色	4.5	2.0		小口面は平坦で端部の角が立つ。風化が著しく表層に鉄分?が沈着。気泡の状況は不明。孔の長軸に平行な蝕像有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、Cu有	低Al?ソーダ石灰ガラス
65		青紺色	5.2	3.4		小口の片面は平坦、もう片面は凹む。孔の長軸に平行な微細な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
66		青紺色	計測不能	3.1		透明感有り。孔の長軸に平行な微細な気泡列。表層は鉄分沈着により若干変色。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
67		青紺色	5.2	4.1		小口面平坦。孔の長軸に平行な気泡や同様に色の濃淡有り。小口面ではマーブリング状模様に見える。	Na、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
68		青紺色	6.1	2.8		小口面平坦(研磨?)。紫色。孔の長軸に平行な気泡列、筋。	Na、Mg不明瞭、Al不明瞭、K≧Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	カリガラス
69	◎	青紺色	5.9	3.4		小口面平坦。C字形に合わせたような状況＝孔の平面形が桃核形を呈する。気泡や色の濃淡は孔の長軸に平行する。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
70		青紺色	5.1	3.2		小口面平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列。マーブリング状模様。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
71		青紺色	5.8	5.2		小口面平坦。側面に凹み。破損のため水中観察不能。孔の長軸に平行な気泡筋、蝕像有り?。	Na、Mg不明瞭、Al不明瞭、K≧Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	カリガラス
72		青紺色	4.9	2.6		小口面平坦。破損のため水中観察不能。孔の長軸に平行な気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
73	◎	青紺色	4.4	4.4		孔、外形共に非常に整った俵形（全面研磨の可能性）。気泡は殆どなく製作技法不明。他と異質。	Na有、Ba、Pb強、Cu有?（K、Ca有）	鉛バリウムガラス
74		青紺色	5.0	3.8		小口面平坦。マーブリング状の色の濃淡が極端。側面では孔の長軸に平行に走る。	Na不明瞭、Mg有、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
75		青紺色	5.5	3.6		小口面平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
76		青紺色	5.3	3.6		小口面平坦。小口面から見た流璃は孔を取り巻くように桃核状を呈する。気泡は独立したものが多いが孔の長軸に平行列を為す。	Na、Mg有、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu、Pb?	低Al?ソーダ石灰ガラス
77		青紺色	5.0	3.7		小口面平坦(研磨?)。マーブリング状の色の濃淡が側面では孔の長軸と平行に走る。同様の微細な気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
78		青紺色	4.9	3.3		小口面平坦(研磨?)。マーブリング状の色の濃淡が側面では孔の長軸と平行に走る。同様の微細な気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
79		青紺色	6.7	4.8		小口面平坦。色が淡い。孔の長軸に平行な微細な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
80		青紺色	5.2	3.1		小口面平坦。マーブリング状の色の濃淡が極端。側面では孔の長軸に平行に走る。同様に気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
81		赤褐色	3.0	1.5		小口は平坦な部分もあるが端部は丸みを帯びる。孔の長軸に平行な筋。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb不明瞭	高Alソーダ石灰ガラス
82		青紺色	4.9	3.8		小口面平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
83		青紺色	5.7	4.4		小口面平坦。側面に凹み。孔の長軸に平行な微細な気泡列。	Na無、Al微弱、K＞Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス
84		赤褐色	2.6	1.6		小口面に対して孔の軸線が斜めになる。管ガラスの形状を残す。小口面は凸凹。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb有	高Alソーダ石灰ガラス
85		青紺色	4.8	3.6		小口面平坦(研磨?)。孔の長軸に平行な微細な気泡列。	Na無、Al弱、K＞Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス
86		赤褐色	2.3	2.0		角状に突出した部分もあるが全体に丸みを帯びる。孔の長軸に平行な筋。	Na、Mg有、高Al、K＜Ca、高Cu、Pb有	高Alソーダ石灰ガラス
87		青紺色	5.6	4.0		小口面平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列が多数。	Na無、Al微弱、K＞Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス
88		青紺色	5.6	4.4		小口面平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列、筋。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
89		青紺色	5.3	3.3		小口面平坦。孔の長軸に平行な微細な気泡列、筋。	Na、Mg有、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
90		青紺色	4.7	3.7		小口面平坦。側面に平坦面。孔の長軸に平行な微細な気泡列。	Na、Mg有、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
91		青紺色	6.2	4.0		小口面平坦。色は淡い。孔の長軸に平行な微細な気泡列が多数。色の濃淡若干有り。	Na無、Al弱、K≧Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス
92		青紺色	5.2	3.6		小口面平坦。側面に平坦面。破損のため水中観察不能。孔の長軸に平行な微細な気泡筋、蝕像有り。	Na、Mg不明瞭、Al弱、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
94		青紺色	5.6	4.0		小口面平坦。やや濁り透明度低いが鮮やかな青色。孔の長軸に平行な気泡列（大小）有り。	Na無、Al弱、K≧Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス
95		青紺色	4.7	3.6		小口面平坦(研磨?)。孔の長軸に平行な微細な気泡列が多数。色の濃淡若干有り。	Na、Mg不明瞭、Al弱、K＜Ca、高Mn、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
96	◎	赤褐色	2.6	2.7		管ガラスの形状を残す。小口面は平坦（片面は若干凹む）で、端部は角が立つ。	Na、Mg明瞭、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
97		赤褐色	2.3	2.4		全体に丸みを帯びる。側面に平坦面。孔の長軸に平行な筋。	Na、Mg明瞭、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
98		青紺色	5.4	3.8		小口面平坦(研磨?)。孔の長軸に平行な気泡列、筋。色の濃淡若干有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス

西新町遺跡第14次調査18号竪穴住居跡出土ガラス小玉　計測・分析表（3）

No.	写真	色調	最大径(mm)	最大高(mm)	備考	顕微鏡観察による所見	蛍光X線分析の結果	分類
99		赤褐色	2.7	1.5		片方の小口面は平坦、もう一方は波打つように歪む。端部は若干丸みを帯びる。	Na、Mg不明瞭、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明瞭	高Alソーダ石灰ガラス
100		青紺色	5.0	3.6		小口面平坦(研磨?)。孔の長軸に平行な気泡列、筋。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
101		青紺色	5.8	3.5		小口面平坦。孔の長軸に平行な気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
102		青紺色	4.8	3.6		小口面平坦。孔の長軸に平行な気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
103		青紺色	5.5	3.8		小口面平坦。紫色を帯びる。色が濃く気泡の観察は困難であるが、孔の長軸に平行な気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
104		青紺色	5.0	3.2		片方の小口面は平坦、もう一方は若干波打つように歪む。孔の長軸に平行な気泡列、蝕像多数。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
105		青紺色	5.0	3.5		小口面平坦、側面は凸凹歪む。明るい青色。孔の長軸に平行な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
106		青紺色	6.8	3.4	別個体の小片混入	小口面平坦(研磨?)。円盤状の外観。風化による亀裂が円の外周に添って螺旋を描く。気泡は孔の外周に添って螺旋を描く。破損のため透過光観察が困難で詳細は不明。巻き付けと断定はできないが、他の多くの資料とは気泡の流れが異なる。	Na無、Al弱、K≦Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス?
107		青紺色	6.8	5.1		小口面平坦。鮮やかなコバルトブルー。孔の長軸に平行な気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
108		青紺色	5.3	5.1		小口面平坦。円筒形の外観で側面に面を持つ。紫色を帯びる。孔の長軸に平行な微細な気泡列多数。	Na無、Al低、K＞Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス
109		青紺色	4.7	4.7		片方の小口面は平坦、もう一方は波打つように歪む。円筒形の外観。小口面が孔の軸に対して斜めになる。大粒の気泡が孔の長軸に平行して列を為す。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
110		青紺色	5.8	4.5		小口面平坦(研磨?)。小口面孔周囲にマーブリング状の色の濃淡有り。側面では孔の長軸と平行に微細な気泡列多数。	Na無、Al低、K＞Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス
111		青紺色	5.7	4.0		小口面と側面に明瞭な稜を有するが面は若干波打つ。全体に歪む。非常に色が濃いが、孔の長軸と平行な微細な気泡列が側面に並ぶ。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
112		青紺色	5.8	3.9		小口面は平坦。鮮やかな青色であるが濁りがあり透明度は低い。気泡は少ないが孔の長軸と平行に筋や列を為す。	Na無、Al弱、K≦Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス?
113		青紺色	5.7	3.6		片方の小口面は平坦、もう一方は若干波打つように歪む。マーブリング状に色の濃淡が見られ、側面には孔の長軸に平行な気泡列有り。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
114		青紺色	5.3	3.6		小口面は平坦ながら丸みを帯びる。孔の長軸に気泡が並ぶが、大きく独立したものと微細な列状のものが混在。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
115		青紺色	5.9	4.3		小口面と側面に明瞭な稜を有するが面は若干波打つ。孔が大きい。気泡は非常に多く、微細なものが孔の長軸と平行に列を為す。	Na無、Al低(他に比して明瞭)、K＞Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス
116		青紺色	5.2	3.6		小口面平坦。孔は大きめ。鮮やかな青色。気泡は少ないが微細なものが孔の長軸と平行に列を為す。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
117		青紺色	5.3	5.5		小口面平坦。孔の内部が凸凹に波打つ。気泡が非常に多く、孔の長軸と平行な列状のものと、側面で破裂した孔が観察できる。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、Cu有	低Al?ソーダ石灰ガラス
118		青紺色	5.3	3.9		小口は平坦ながら側面との間に明瞭な稜を持たない。鮮やかなコバルトブルー。孔の長軸と平行な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
119		青紺色	5.6	4.6		小口に平坦面はあるが全体に丸みを帯びる。緑みを帯びた色調。気泡は全体に散在するが一部孔の長軸と平行に列を為す。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
120		青紺色	5.5	3.0		小口面平坦(研磨?)。紫味を帯びる。マーブリング状の色の濃淡が側面では孔の長軸と平行に走る。同様の大きめな気泡列有り。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
121		青紺色	5.1	4.5		小口面平坦。マーブリング状の色の濃淡が側面では孔の長軸と平行に走る。同様の大きめな気泡列有り。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
122		青紺色	6.0	4.9		小口面平坦(研磨?)。彩度の低い色調。マーブリング状の色の濃淡が側面では孔の長軸と平行に走る。気泡は散在するが一部孔の長軸に平行に並ぶ。	Na明瞭、Mg有?、Al低?(他に比して強)、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
123		青紺色	5.4	5.0		円筒形でやや丸みを帯びた形状。孔の長軸に平行な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu有、Pb微弱?	低Al?ソーダ石灰ガラス
124		青紺色	5.7	5.8		小口面平坦。彩度の低い色調。微細な気泡が孔の長軸に平行に列を為す。小口面では気泡列の端部が不規則に並ぶ。	Na無、Al低(他に比して明瞭)、K＞Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス
125		青紺色	5.8	4.2		小口は平坦ながら丸みを帯びた外観。不明瞭ながら孔の長軸に平行な気泡列、筋。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Pb無、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
126		青紺色	5.6	3.2		片方の小口面は平坦、もう一方は波打つように歪む。孔の長軸に平行な気泡列。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu、Pb無?	低Al?ソーダ石灰ガラス
127		青紺色	4.6	3.5		小口面平坦。孔の長軸に平行な気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?	低Al?ソーダ石灰ガラス
128	◎	青紺色	4.7	3.6		側面に面を持ち、小口から見ると隅丸三角形を呈する。極端な紫味を帯びる。孔の長軸に平行な微細な気泡列が多数。	Na不明、Mg有?、Al不明瞭、K＞Ca、高Mn、Cu、Pb微弱?	カリガラス
129		青紺色	5.2	3.4		小口面平坦。彩度の低い色調。流璃がマーブリング状を呈する。孔の長軸に平行な気泡列は大型のものと微細なものが混在。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu、Pb無?	低Al?ソーダ石灰ガラス
130		青紺色	4.9	3.4		小口面平坦。孔の長軸に平行な気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?	低Al?ソーダ石灰ガラス
131		青紺色	5.0	3.4		小口面平坦。濃い紫色。孔の長軸に平行な微細気泡列多数。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?	低Al?ソーダ石灰ガラス
132		青紺色	5.5	4.0		小口面と側面に明瞭な稜を有するが面は若干波打つ。全体に歪む。非常に色が濃く紫味を帯びる。孔の長軸と平行な微細な気泡列が側面に並ぶ。	Na～Alが全体に下がる、K≧Ca、高Mn、微弱Cu	カリガラス?
133		青紺色	5.0	3.0		小口面平坦。若干紫味を帯びる。孔の長軸に平行な気泡列。	Na、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱	低Al?ソーダ石灰ガラス
134	◎	青紺色	4.8	4.3		小口は平坦ながら丸みを帯びた外観。淡目の色調。大型気泡が多く目立つが、微細な気泡列も混在。孔の長軸に平行する。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?	低Al?ソーダ石灰ガラス
135		青紺色	4.9	4.1		小口面平坦。側面が歪み、それと平行して孔の形状も変形。紫味を帯びる。孔の長軸に平行な微細気泡列多数。	Na～Alが全体に下がる、K≧Ca、高Mn、微弱Cu	カリガラス?
136		青紺色	5.2	3.6		小口面平坦。淡目の色調。気泡は少ないが、孔の長軸と平行に列を為す部分有り。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
137		青紺色	5.6	4.2		小口面平坦。側面に平坦面をもつ。鮮やかなコバルトブルー。孔の長軸に平行な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?	低Al?ソーダ石灰ガラス
138		青紺色	5.4	3.5		小口面平坦。濃い青色。マーブリング状の色の濃淡や微細な気泡列が孔の長軸に平行に並ぶ。気泡列が集中する部分有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
139		青紺色	5.3	3.9		小口面平坦。濃い紫味を帯びた色調。孔の長軸に平行な微細気泡列多数。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
140		青紺色	5.2	5.1		小口は平坦ながら側面との間に明瞭な稜を持たない。明るい色調で透明度が高い。気泡は孔の長軸と平行に並ぶが、大小様々。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス

西新町遺跡第14次調査18号竪穴住居跡出土ガラス小玉　計測・分析表（4）

No.	写真	色調	最大径（mm）	最大高（mm）	備考	顕微鏡観察による所見	蛍光X線分析の結果	分類
141		青紺色	5.0	3.6		小口面平坦。濃い紫味を帯びた色調。孔の長軸に平行な微細気泡列多数。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
142		青紺色	5.2	4.1		小口面平坦。鮮やかな青色。気泡は少ないが孔の長軸に平行に列を為す。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
143		青紺色	5.6	4.6		小口面平坦。側面から力が加わり潰れたような状況。やや濁って透明度が低い。孔の長軸に平行な微細気泡列多数。	Na～Alが全体に下がる、K≧Ca、高Mn、微弱Cu	カリガラス?
144		青紺色	5.9	3.7		小口側から見るとラグビーボール状に変形した上に、側面に極端な平坦部が有り、これにより小口の平坦部も歪む。極端に濃い紫味を帯びる。微細な気泡が密集し、孔の長軸に平行する。。	Na～Alが全体不明瞭、K＜Ca(Kが比較的明瞭)、高Mn、微弱Cu	ソーダ石灰ガラス?(カリガラスの可能性有り)
145		青紺色	5.8	4.1		小口面平坦。彩度の低い色調。孔の長軸に平行に明瞭に気泡が並ぶと共に、これと平行する黒色帯状の介在物有り。	Na有、Mg不明瞭、Al低?、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
146		青紺色	5.0	3.9		小口面平坦。孔は大きく偏在する。孔の長軸に平行な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
147		青紺色	4.8	5.6		円筒形でやや丸みを帯びた形状。孔の長軸に平行な気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
148		青紺色	5.5	3.5		小口面平坦。気泡は大小が散在するが一部孔の長軸に平行に列を為す。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
149		青紺色	4.7	2.6		小口の平坦面が整っているが側面はやや歪む。鮮やかな青色。気泡は少ないが孔の長軸に平行する。	Na～Alが全体に下がる、K≧Ca、高Mn、微弱Cu	カリガラス
150		青紺色	4.8	3.6		小口面平坦。濃い紫味を帯びた色調。孔の長軸に平行な気泡列多数。平行して色の極端に濃い（黒い）筋も並ぶ。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
151		青紺色	5.2	4.4		小口面が孔の長軸に対し斜めになる。濁りと風化による亀裂で気泡観察は困難。気泡自体少ない？。色の濃淡が孔の長軸に平行する。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
152		青紺色	5.2	4.4		小口面平坦。側面に平坦面（歪み）有り。鮮やかなコバルトブルー。気泡は少ないが、一部は孔の長軸に平行する。	Na～Alが全体に下がる、K≧Ca、高Mn、微弱Cu	カリガラス
153		青紺色	4.9	3.4		小口面と側面に稜を有するが面は若干膨らむ。孔の長軸と平行な微細な気泡列が側面に並ぶ。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
154		青紺色	4.1	3.0		小口面平坦。明るい色調。気泡は少ないが蝕像が孔の長軸に平行する。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn	低Al?ソーダ石灰ガラス
155		青紺色	4.8	4.9		小口面平坦。側面に平坦面（歪み）有り。若干紫味を帯びながら彩度は低い。気泡は孔の長軸に平行する。	Na～Alが全体に下がる、K≧Ca、高Mn、微弱Cu	カリガラス
156		青紺色	5.2	3.4		片方の小口面は平坦、もう一方は若干凹む。濃いめの色調。側面には孔の長軸に平行な微細気泡列多数有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
157		青紺色	5.6	4.1		小口面平坦。穴内に塊状介在物による突出有り。気泡は大小散在するが、孔の長軸に平行するものもあり。	Na、Mg有、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
158		青紺色	5.0	3.5		小口面平坦。気泡は極端に少ないが、マーブリング状の色の濃淡が側面では孔の長軸に平行。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
159		青紺色	4.7	2.7		小口面平坦。孔の長軸に平行な微細気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
160		青紺色	5.3	3.4		小口面平坦。紫味を帯びる。気泡は巨大なものから微細なものまで混在。比較的小型のものが孔の長軸に平行する。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
161		青紺色	4.8	3.2		小口面平坦。紫味を帯びた色調。孔の長軸に平行な微細気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
162		青紺色	3.7	2.4		小口の平坦面が整っている。鉄錆状のものが小口面に噛み込んでいる。気泡は極端に少ないが孔の長軸に平行する部分有り	Na、Mg不明瞭、Al低(他に比して明瞭で強)、K＞Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス?
163		青紺色	5.4	3.5		小口面平坦。若干緑味を帯びた色調。孔の長軸に平行する気泡列、筋多数。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
164		青紺色	5.2	3.5		小口面平坦。紫味を帯びた色調。孔の長軸に平行な微細気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
165		青紺色	4.5	3.6		小口面平坦。孔の長軸に平行な微細気泡列。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
166		青紺色	5.2	3.6		小口面平坦。紫味を帯びた色調。孔の長軸に平行な微細気泡列多数。	Na不明瞭、Mg有、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
167		青紺色	5.5	4.3		小口面平坦。気泡は少ないが、マーブリング状の色の濃淡が側面では孔の長軸に平行。	Na、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
168		青紺色	4.7	3.3		小口面平坦。若干紫味を帯びた色調。孔の長軸に平行な微細気泡列多数。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
169		青紺色	5.4	3.3		小口面平坦。鮮やかな青色。孔の長軸に平行する気泡列、筋有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
170		青紺色	5.4	3.8		小口面平坦。若干紫味を帯びた色調。孔の長軸に平行な微細気泡列、筋、蝕像有り。	Na不明瞭、Mg有、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
171		青紺色	5.1	3.7		小口面平坦。微細な気泡とマーブリング状の色の濃淡がは孔の長軸に平行。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
172		青紺色	5.4	3.2		小口面平坦。孔の長軸に平行な微細気泡列。	Na不明瞭、Mg有、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
173		青紺色	4.7	2.7		小口面平坦。高透明度。気泡は大粒なものがおおいが、孔の長軸に平行に並ぶ。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
174	◎	青紺色	4.7	2.6		小口面平坦。彩度の低い色調。微細な気泡が多数、孔の長軸に平行に列を為す。小口面では気泡列の端部が不規則に並ぶ。124と似る。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu有、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
175		青紺色	4.6	3.0		小口面平坦。紫味を帯びた色調。孔の長軸に平行な気泡列は大小有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
176		青紺色	5.0	4.4		小口は平坦ながら丸みを帯びた外観。微細な気泡及び色の濃淡が側面で筋になって孔の長軸に平行に並ぶ。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
177		青紺色	5.3	2.5		片方の小口面は平坦、もう一方は若干凹む。扁平な外観。若干紫味を帯びる。石英粒が噛み込む。側面には孔の長軸に平行な微細気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
178		青紺色	4.9	4.6		小口面平坦。樽型の外観。青色。気泡は大小が散在するが微小なものは孔の長軸に平行に並ぶ。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
179		青紺色	5.6	3.9		小口面平坦。濃いめの色調。孔の長軸に平行な微細気泡列多数。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
180		青紺色	5.0	3.7		小口面平坦。濃いめの色調。微細な気泡とマーブリング状の色の濃淡が孔の長軸に平行。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
181		青紺色	5.7	3.5		小口面平坦。赤紫で濃いめの色調。白色の石英粒？が嵌入、内数個が孔内に突出。微細な気泡が孔の長軸に平行に並ぶ。	Na、Mg不明瞭、Al低(他に比して明瞭で強)、K＞Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス?
182		青紺色	5.0	3.2		小口面平坦。鮮やかなコバルトブルー。気泡列、筋、色の濃淡が孔の長軸に平行に走る。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
183		青紺色	3.7	2.4		小口面平坦。淡く透明度の高い色調。気泡は少ないが大小有り。孔の長軸に平行に並ぶ。	Na無、Mg不明、Alは比較的高めであるが不明瞭、K＞Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス?
184		青紺色	4.4	5.5		円筒形でやや丸みを帯びた形状。小口面が孔の軸方向に対して斜めになる。気泡は少ないが孔の長軸に平行して並ぶ。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、Cu微弱?、Pb無	低Al?ソーダ石灰ガラス
185		赤褐色	2.8	1.6		不透明。やや丸みを帯びる。気泡や色の異なる筋が竹の組織のような状況を呈する。	Na有、Mg明瞭、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb有	高Alソーダ石灰ガラス

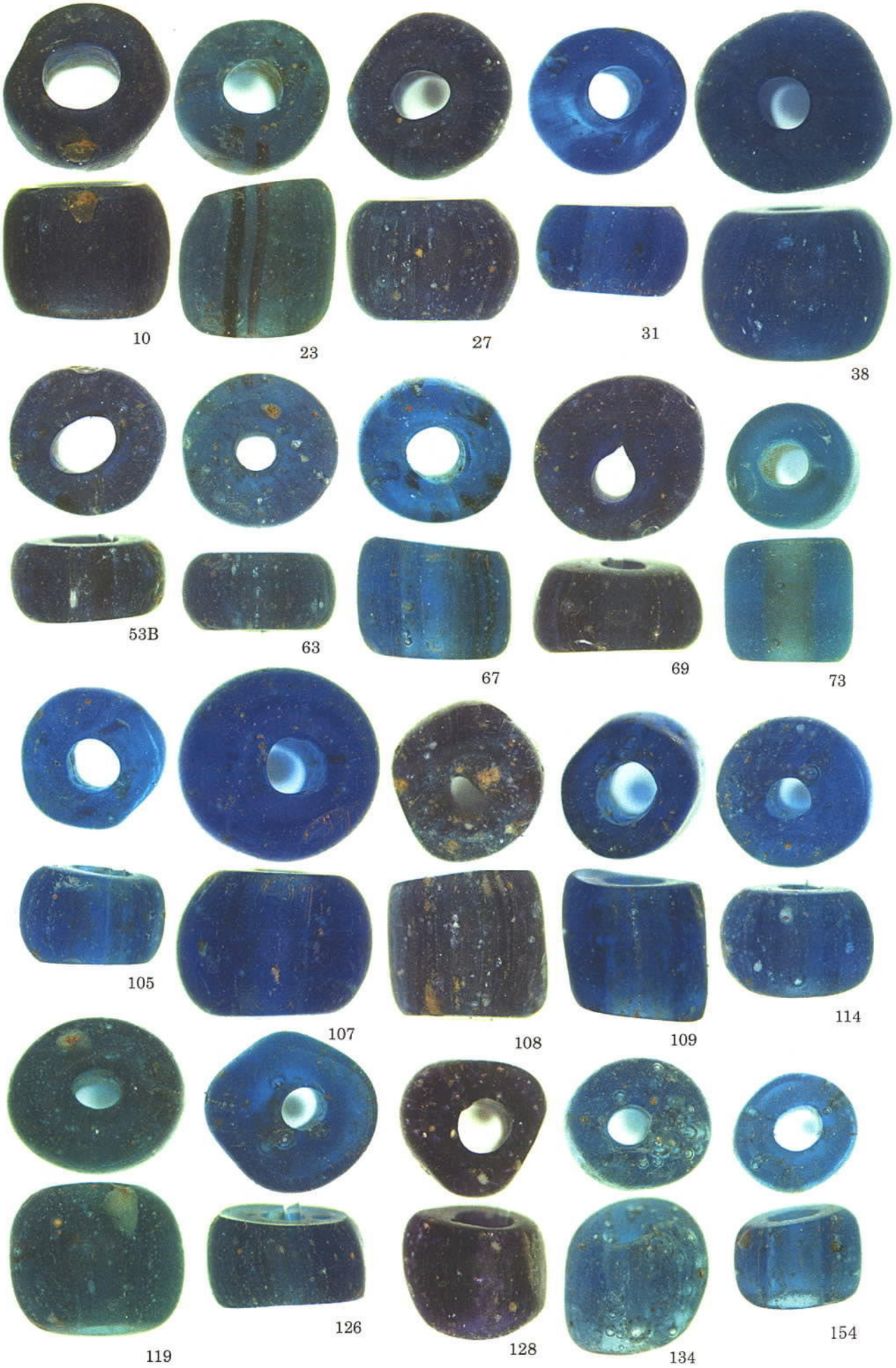
西新町遺跡第14次調査18号竪穴住居跡出土ガラス小玉　計測・分析表（5）

No.	写真	色調	最大径(mm)	最大高(mm)	備考	顕微鏡観察による所見	蛍光X線分析の結果	分類
186		赤褐色	2.7	1.8		小口と側面の境に明瞭な角。色の濃淡が小口ではマーブリング状、側面では孔の長軸に平行する。	Na不明、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
187		赤褐色	2.9	1.6		小口と側面の境に明瞭な角。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では孔の長軸に平行する。	Na不明、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
188		赤褐色	2.4	1.5		小口と側面の境は若干丸みを帯びる。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では孔の長軸に平行する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
189		赤褐色	2.5	1.7		小口と側面の境は若干丸みを帯びる。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では孔の長軸に平行する。	Na不明、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
190	◎	赤褐色	4.2	1.4		他の同系品に比して大型であるが扁平。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では孔の長軸に平行する。	Na不明、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
191	◎	赤褐色	3.1	2.5		全体に丸みが強い。色の違いが小口ではマーブリング状、側面では孔の長軸に平行する。	Na不明、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
192		赤褐色	2.1	1.8		管ガラスの形状を残す。小口面のマーブリング状は不明瞭。側面では筋が孔の長軸に平行する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
193		赤褐色	2.1	1.4		管ガラスの形状を残す。小口面のマーブリング状は不明瞭。側面では筋が孔の長軸に平行する。	Na不明、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
194		赤褐色	3.4	1.9		小口と側面の境は若干丸みを帯びる。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では孔の長軸に平行する。	Na不明、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
195		赤褐色	2.6	1.5		小口と側面の境は若干丸みを帯びる。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では孔の長軸に平行する。	Na不明、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
196		赤褐色	2.6	3.5		小口面が孔の軸方向に対して極端に斜め。色の違い（赤と黒）が強く明瞭。	Na明瞭、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
197		赤褐色	2.6	2.3		小口面が孔の軸方向に対して極端に斜め。色の違い（赤と黒）はそれほど無い。	Na微弱、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
198		赤褐色	3.0	3.1		丸みを帯びた外観。小口の片面が孔の軸方向に対して斜め。色の違い（赤と黒）はそれほど無い。	Na微弱、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
199		赤褐色	3.4	2.3		丸みを帯びた外観。色の違い（赤と黒）はそれほど無い。	Na不明、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
200		赤褐色	2.6	2.1		小口面が孔の軸方向に対して斜め。角張った外観。色の違い（赤と黒）が強く明瞭。	Na微弱、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
201		赤褐色	3.0	3.0		小口と側面の境が丸みを帯びる。側面に平坦（歪み）有り。色の濃淡による違いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
202		赤褐色	2.9	2.0		小口と側面の境がやや丸みを帯びる。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
203	◎	赤褐色	2.6	1.8		小口と側面の境が角張っている。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
204		赤褐色	2.7	2.5		小口と側面の境がやや丸みを帯びる。黒色の混ざり混みが見られない。側面の筋状痕は有り。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
205	◎	赤褐色	2.4	2.9		小口と側面の境が角張っている。管ガラスの形状を残す。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
206		赤褐色	2.9	1.5		丸みを帯びた外観。色の違い（赤と黒）によるマーブリング模様、筋模様が明瞭。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱?	高Alソーダ石灰ガラス
207	◎	赤褐色	3.0	2.9		小口と側面の境がやや丸みを帯びる。色の違い（赤と黒）はそれほど無いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
208		赤褐色	2.8	2.1		小口と側面の境がやや丸みを帯びる。小口は斜めになる。色の違い（赤と黒）はそれほど無いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
209		赤褐色	2.7	1.9		小口と側面の境が角張っている。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
210		赤褐色	2.4	1.8		全体に丸みを帯び、凸凹の歪みを持つ。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg不明瞭、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
211		赤褐色	2.5	1.8		小口と側面の境が角張っている。色の濃淡によるマーブリング状況や筋が殆どない。側面に気泡の破れ有り。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱?	高Alソーダ石灰ガラス
212		赤褐色	2.2	1.7		小口と側面の境が角張っている。色の違い（赤と黒）はそれほど無いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
213		赤褐色	2.4	1.2		小口と側面の境が角張っている。扁平。色の違い（赤と黒）はそれほど無いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
214		赤褐色	2.7	2.2		全体に丸みを帯び、凸凹の歪みを持つ。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
215		赤褐色	2.6	1.6		丸みが強く孔が偏在。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb有	高Alソーダ石灰ガラス
216		赤褐色	2.3	1.2		小口と側面の境が角張っている。色の違い（赤と黒）はそれほど無いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
217		赤褐色	3.1	3.0		全体に丸みを帯び、凸凹の歪みを持つ。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
218		赤褐色	3.2	1.8		小口と側面の境が角張っている。やや歪んだ外観。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
219		赤褐色	2.5	1.3		全体に丸みを帯び整った外観。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb有	高Alソーダ石灰ガラス
220		赤褐色	2.9	1.3		小口と側面の境に角があるものの歪みも有り。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
221		赤褐色	2.6	2.2		小口と側面の境がやや丸みを帯びる。色の違い（赤と黒）はそれほど無いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na不明瞭、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
222		赤褐色	2.7	2.5		小口と側面の境が角張っている。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
223		赤褐色	2.8	1.0		小口と側面の境に角があるものの小口そのものは凸凹。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na不明瞭、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
224		赤褐色	3.1	2.0		小口と側面の境がやや丸みを帯びる。色の違い（赤と黒）はそれほど無いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
225		赤褐色	2.3	1.7		小口と側面の境が角張っている。孔が大きく器壁が薄い。側面に面（稜線）を持つ。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス

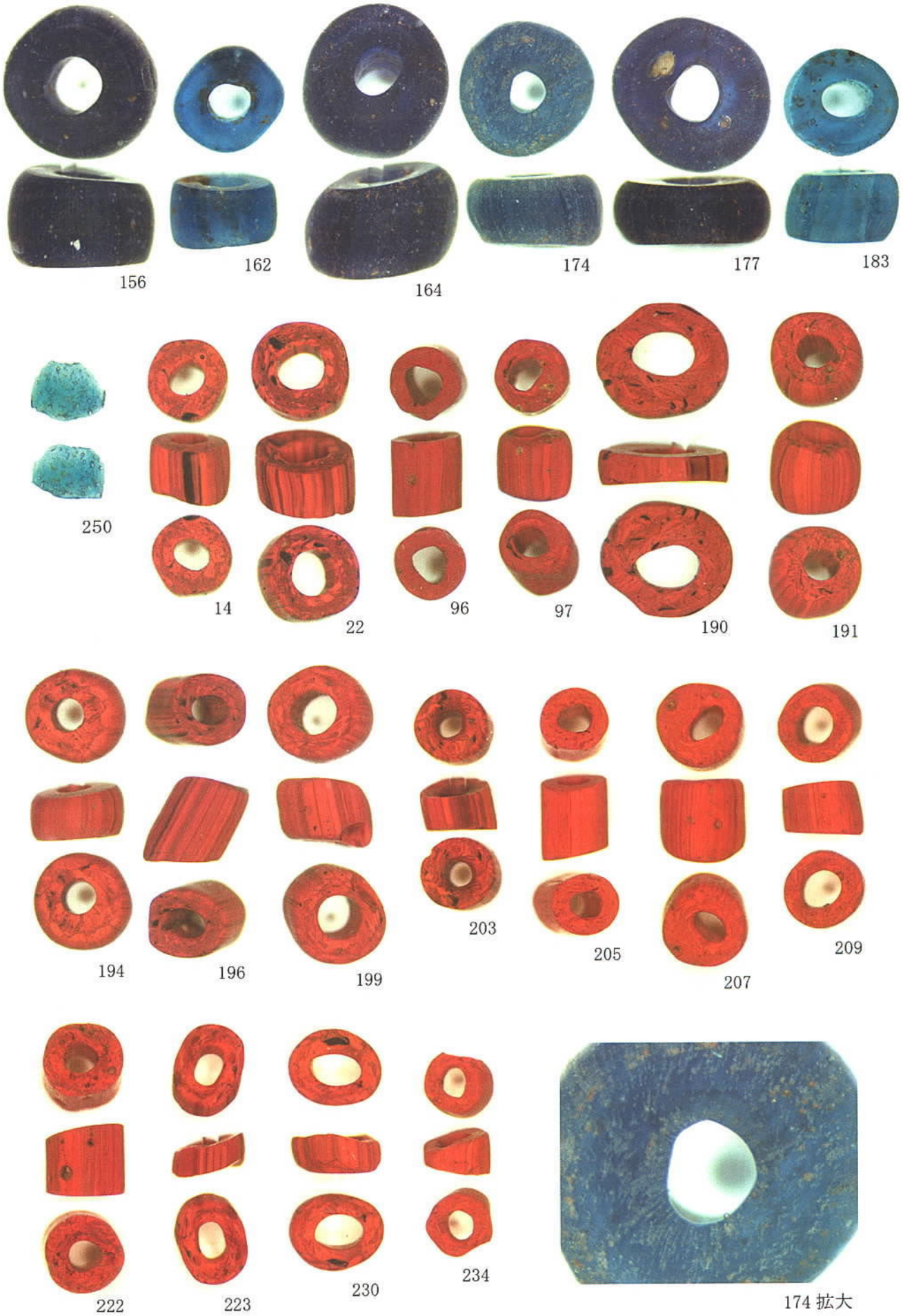
西新町遺跡第14次調査18号竪穴住居跡出土ガラス小玉　計測・分析表（6）

No.	写真	色調	最大径（mm）	最大高（mm）	備考	顕微鏡観察による所見	蛍光X線分析の結果	分類
226		赤褐色	3.1	1.2		小口と側面の境は角がある。整った形状。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na不明瞭、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
227		赤褐色	2.6	1.4		小口と側面の境がやや丸みを帯び、歪み有り。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na不明瞭、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
228		赤褐色	3.0	1.1		小口と側面の境は角張っているが歪み有り。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg微弱、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
229		赤褐色	2.6	1.4		小口と側面の境は角張っているが歪み有り。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na不明瞭、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
230		赤褐色	3.0	1.1		小口と側面の境がやや丸みを帯び、歪み有り。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg不明瞭、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
231		赤褐色	2.4	1.8		小口と側面の境がやや丸みを帯びる。小口は斜めになる。色の違い（赤と黒）はそれほど無いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na、Mg微弱、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
232		赤褐色	3.1	1.7		小口と側面の境がやや丸みを帯び、歪み有り。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na不明瞭、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
233		赤褐色	2.7	1.5		小口と側面の境がやや丸みを帯び、歪み有り。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na不明瞭、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
234		赤褐色	2.3	1.5		小口と側面の境は角張っている。側面に面（歪み）有り。色の違い（赤と黒）が小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na微弱、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
235		赤褐色	2.8	1.7		小口と側面の境が角張っている。色の違いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na微弱、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
236		赤褐色	2.3	0.9		小口と側面の境が角張っている。扁平で整った形状。色の違いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na微弱、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb有	高Alソーダ石灰ガラス
237		赤褐色	2.4	0.9		小口と側面の境が角張っている。扁平。色の違いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na微弱、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
238		青紺色	4.8	4.4	1/2残存	小口面平坦。気泡は少ないが、孔の長軸と平行に列を為す部分有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
239		赤褐色	計測不能	計測不能	1/2残存	破損により観察不能	Na微弱、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
240		赤褐色	計測不能	1.5	1個体	破損により観察不能	Na微弱、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
241		青紺色	5.3	3.1	1/2残存	鉄分沈着？により部分的に茶色く変色。亀裂は孔の長軸に平行。	Na～Al不明瞭、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス?
242		青紺色	計測不能	3.6	1/2残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
243		青紺色	計測不能	3.6	1/3残存	破損のため観察不能。	Na不明瞭、Mg有?、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
244		青紺色	計測不能	4.3	1/3残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn	低Al?ソーダ石灰ガラス
245		青紺色	計測不能	計測不能	1/4残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
246		青紺色	計測不能	計測不能	1/4残存	破損のため観察不能。	Na不明瞭、Mg有?、Al高?※、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
247		青紺色	5.0	3.2	1/2残存	気泡列が孔の長軸と平行に並ぶ。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
248		青紺色	計測不能	計測不能	1/3残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn	低Al?ソーダ石灰ガラス
249		青紺色	計測不能	計測不能	1/5残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
250	◎	淡青色	計測不能	計測不能	破片	唯一の淡青。小片で気泡が散在。流れは読み難いが引き延ばされたようなものもあり。	Na、Mg有、Al高、K＜Ca、低Mn、高Cu	高Al?ソーダ石灰ガラス
251		青紺色	計測不能	計測不能	1/4残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
252		赤褐色	計測不能	1.4	1/4残存	破損のため観察不能。	Na不明瞭、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
253		赤褐色	計測不能	1.2	1/4残存	破損のため観察不能。	Na不明瞭、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
254A		赤褐色	2.5	1.5	2/3残存	小口と側面の境がやや丸みを帯びる。色の違いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na不明瞭、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb微弱	高Alソーダ石灰ガラス
254B		赤褐色	計測不能	1.4	1/4残存	破損のため観察不能。	Na不明瞭、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明	高Alソーダ石灰ガラス
255		青紺色	計測不能	3.2	1/2残存	鉄分沈着？により部分的に茶色く変色。亀裂は孔の長軸に平行。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
256		青紺色	計測不能	3.0	1/3残存	淡く明るい色調。気泡は少ないが、孔の長軸と平行に列を為す部分有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
257		青紺色	計測不能	3.3	1/3残存	白色の結晶群が嵌入。孔の長軸に平行する気泡列有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
258		青紺色	計測不能	3.3	1/3残存	白色の結晶群が嵌入。孔の長軸に平行する気泡列有り。257と接合？。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
259		青紺色	計測不能	計測不能	2/3残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
260		青紺色	計測不能	計測不能	約1/2分残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明、Al低、K＞Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス
262		青紺色	計測不能	2.7	1/4残存	大型気泡が孔の長軸に平行して並ぶ部分有り。	Na不明、Mg微弱、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
263		青紺色	計測不能	計測不能	1/6残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
264		青紺色	計測不能	2.9	1/3残存	大型気泡が孔の長軸に平行して並ぶ部分有り。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
265		青紺色	計測不能	3.7	1/4残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
266		青紺色	計測不能	計測不能	1/8残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
267		青紺色	計測不能	計測不能	1/4残存	破損のため観察不能。	Na不明、Mg微弱、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
268		青紺色	計測不能	計測不能	1/6残存	破損のため観察不能。	Na不明、Mg微弱、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
269		青紺色	計測不能	計測不能	1/8残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
270		青紺色	計測不能	計測不能	1/3残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明、Al低、K＞Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス
271		青紺色	計測不能	4.1	1/4残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
272		青紺色	計測不能	計測不能	1/4残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明、Al低、K＞Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス
273		青紺色	計測不能	計測不能	1/4残存	破損のため観察不能。	Na不明、Mg微弱、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
274		青紺色	計測不能	計測不能	約2/3残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明、Al低、K＞Ca、高Mn、微弱Cu?	カリガラス
275		青紺色	計測不能	計測不能	1/3残存	破損のため観察不能。	Na、Mg不明瞭、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
277		青紺色	計測不能	3.3	1/3残存	破損のため観察不能。	Na不明、Mg微弱、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
278		青紺色	計測不能	計測不能	1/8残存	破損のため観察不能。	Na不明、Mg微弱、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
279		青紺色	5.9	4.6		小口面平坦。微細な気泡列、触像、流璃が孔の長軸に平行する。気泡（或いは介在物）が孔内に突出。	Na不明、Mg微弱、Al低、K＜Ca、高Mn、微弱Cu?	低Al?ソーダ石灰ガラス
280		赤褐色	2.7	1.3		小口と側面の境が角張っている。扁平で整った形状。色の違いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na微弱、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明瞭	高Alソーダ石灰ガラス
281		赤褐色	3.2	3.2		小口と側面の境がやや丸みを帯びる。色の違いが小口ではマーブリング状、側面では筋状を呈する。	Na微弱、Mg有、Al高、K＜Ca、高Cu、Pb不明瞭	高Alソーダ石灰ガラス
282		青紺色	4.8	4.7		小口に平坦面はあるが丸みを帯びた外観。濃く鮮やかなコバルトブルー。気泡の流れは明瞭ではないが色素の濃淡と共に孔の長軸に平行して走る。	Na微弱、Mg有、Al低、K＜Ca、Cu、Pb微弱	低Al?ソーダ石灰ガラス
283		青紺色	5.5	3.9		小口面平坦。気泡列、筋が孔の長軸に平行する。	Na微弱、Mg有、Al低、K＜Ca、Cu、Pb不明	低Al?ソーダ石灰ガラス

※欠番はガラス以外の資料や接合によって他の番号に統合されたもの
◎は写真を掲載しているものを示す



西新町遺跡第14次調査18号竪穴住居跡出土ガラス玉（1）（約5倍）



西新町遺跡第14次調査18号竪穴住居跡出土ガラス玉（２）（約５倍）

第5章　西新町遺跡第14次調査のまとめ

第1節　古墳時代について

1．遺構について

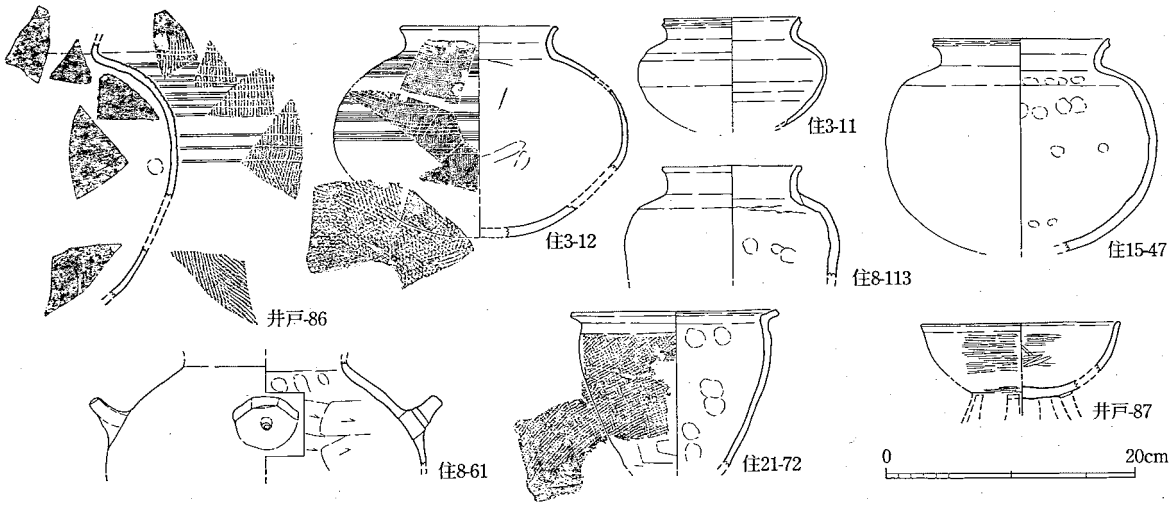
地床炉を持つ住居は、6・7・16・24号住の4軒であり、また8号竪穴住居跡では壁面より炉が確認されている。これに対し、カマドを持つ住居は1・2・12・15・18・19・20・21・23・26・27・29の計12軒と、カマドのほうが多数派を占めている。時期的にみても、西新町3式後半より炉・カマドともに存在し、その後も併存する状況が続く。また、武末純一の説く「偏在炉」については、7号住居の炉が東壁よりに位置するほかは、当調査区では特に見られない。

また、今回は井戸が良好な状態で確認できた。砂地で埋没を防ぐためであろうか、巨大な掘り方を持つ。第12次調査の41号土坑および第13次調査では1号落ち込みも同様な性格のものと考えられるが、今回は井筒部分についても木枠の痕跡がみられ、良好な状況で検出された。集落において水源の確保は重要な問題であるが、今回の調査では井戸より適度な距離をおきながらも、それを取り巻くように住居が構築される状況が確認されている。なお、福岡市内の砂丘遺跡では、博多遺跡第33次調査で同様な遺構が確認され、井筒に比べ巨大な掘り方を持つ〔加藤1988〕点で共通している。

次に、住居の年代および集落全体の中での当調査区の位置づけを行う。西新町遺跡出土の土器については、森貞次郎氏の西新町式土器の提唱から近年に至るまで、様々な角度からの研究が盛んに行われている。特に土器編年に関しては、非常に綿密な研究が行われている。第12・13次調査の報告は重藤〔2000〕の編年に基づいている。重藤編年には批判〔久住2004〕もあるが集落としての変遷を考える上ではなお有効であると考え、これを元に最近の研究を援用しつつ位置づけを行う。なお西新町3式前半は柳田〔1982〕Ⅰa、久住〔1999〕ⅠB～ⅡA期、西新町3式後半が柳田Ⅰb、久住ⅡA～ⅡB期、西新町4式前半が柳田Ⅱa期の一部、久住ⅡC期、西新町4式後半が柳田Ⅱa～b、久住ⅢA期に相当する。

本調査区では 西新町3式前半より住居が構築される。西新町3式前半に当たるのは、16・23・24・26号竪穴住居跡の4軒で、16号竪穴住居跡が単独で北側に位置し、23・24・26号竪穴住居跡は南側に比較的まとまって位置する。つづく西新町3式後半には、住居数がぐっと増加し、1・3・5・6・7・8・9・11・12・13・14・15・18・19・20・21・22・27・28・29号竪穴住居跡の20軒、井戸および6・8・11・12・13号土坑もこの時期に属す。遺構の分布は調査区全体にわたり、この調査区の最盛期にあたる。しかしつづく西新町4式前半になるとぐっと集落の規模が縮小し、2・4・10・17号竪穴住居跡の4軒および10号土坑のみになる。この時期をもって当調査区における古墳時代の遺構は消滅する。また、25号竪穴住居跡および7号土坑は土器が少なく断定はできないが、遺構の切り合い関係から、25号竪穴住居跡は西新町3式後半以前、7号土坑は西新町3式後半以降と考えられる。

第12・13次調査の報告の成果に今回の調査区の年代を合せたものが第129図である。これによると西新町1・2式の住居は点的に5次調査区に見られるものの後は第2・6・7・8・9・10次調査区に位置し、特に2次調査区のD区以西に作られる。続く西新町3式前半になると第2次調査区D区付近に集中し、また北は第14次調査区まで広がり、北東に分布の中心が移る傾向が窺える。西新町3式後半になると南は2次調査区D区以西に限られるが、一方で第3・4・5・12・



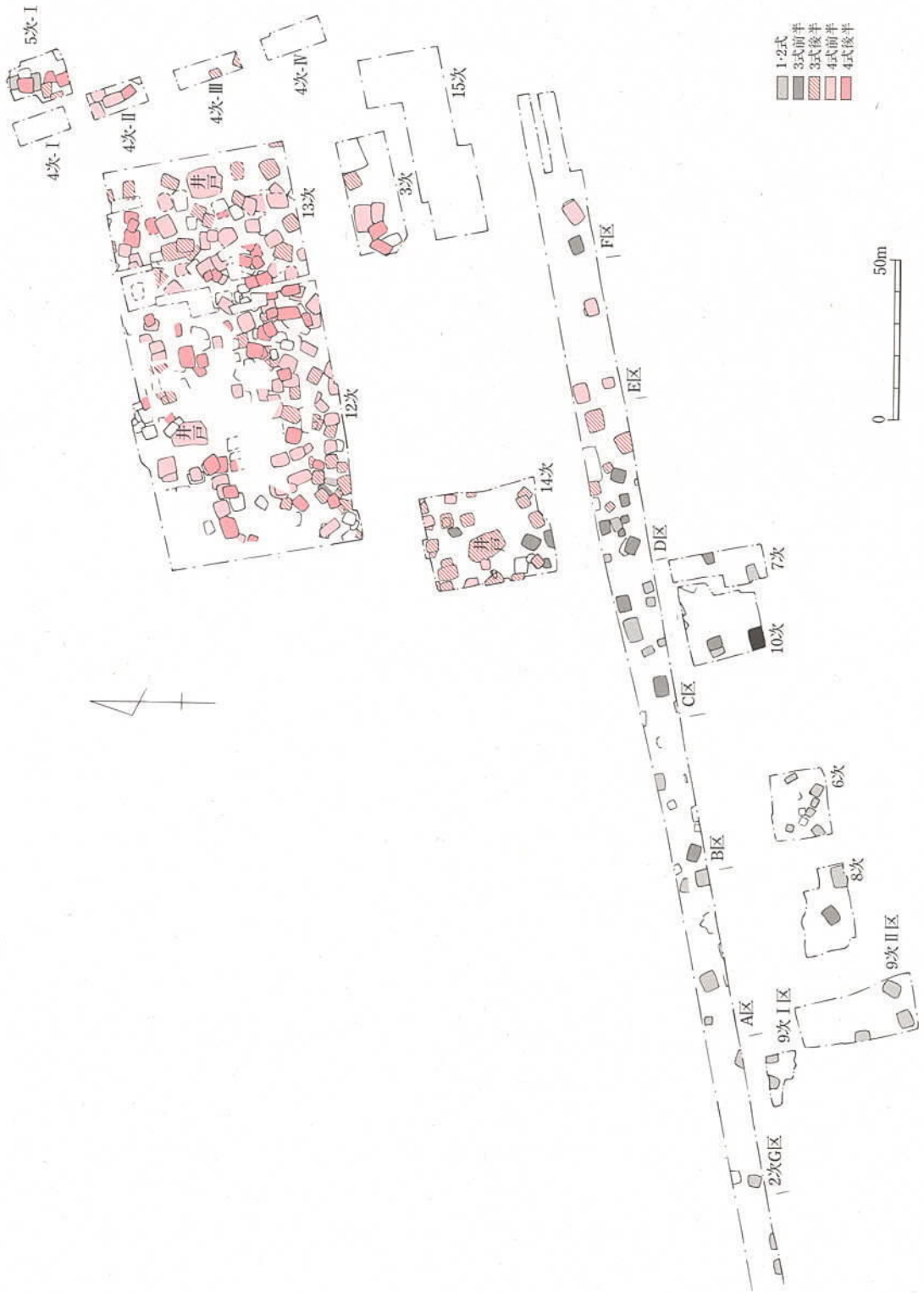
第129図　西新町遺跡第14次調査区出土半島系土器実測図（1/6）

13次調査区の北東にかけて集落が広がり、住居数も一気に増加する。続く西新町4式前半になると第12・13次調査区が完全に集落の中心となる。西新町4式後半では、西は第14次調査区に遺構がなくなり、第3次調査以北に限られるようになる。このように、遺跡南西側に古い住居が集中し、新しくなるにつれて北東側に集落の中心が移っていく傾向が看取される。この結果はこれまでの集落の展開についての検討を裏付けるとともに、よりその傾向が顕著なことをあらわす。

2．出土遺物について

今回の調査でも、畿内系・山陰系土器が多数が出土しており、在地系の土器の数を完全に上回る。13次調査の報告では、胎土分析の結果より、在地で作られている可能性が高いという結論に至った〔三辻2002〕が、目視でも基本的に金雲母の微粒子を含む胎土が大勢をしめており、遺跡周辺で製作された可能性が高いと思われる。また出土状況をみても、搬入されたと言うより、日常的に使用されていたと考えるのが妥当である。

今回の調査でも数は少ないものの半島系土器が出土しており、ここでは簡単な検討を行いたい(第129図)。無文短頸壺住15-47は、金海市礼安里古墳群第138号墳副槨出土遺物と類似する。また住3-11は12次住21-74および13次住67-18と類似し、釜山市老圃洞第33号墳出土資料に類例がある。住18-112も肩の張る器形でこれに近いが、口縁端部を丸く仕上げる点で異なる。タタキ文短頸壺は二個体とも破片をつなぎ合わせての復元であるが、井戸86は倒卵形に近い。住3-12は第12次Ⅰ区包含層-109に似る。また井戸-87の高坏については、坏底部に透孔痕があることから、金海礼安里古墳群第27号墳出土資料などを参考に復元した。嶺南地方のものと考えられるが、陶質土器というよりは黒色磨研土器に近い胎土であり、判断に苦しむ。両耳付壺は住8-61があり、第12次住21-79と類似する。軟質土器深鉢住21-72は第13次撹乱-262および慶尚南道居昌郡大也里遺跡第12号住出土資料と類似する。今回出土した資料は、慶尚南道地方に類例があるいわゆる新羅・伽耶系土器が多いが、忠清道・全羅道地域に由来すると考えられるものに両耳付壺および住4-67・土10-29の甑把手が上げられる。また半島系土器の出土量は少なく感じるが、これまで出土した半島系土器出土のピークは西新町4式以降にあり、時期的に早いことが理由に挙げられよう。またカマドを持つ住居が遺跡東側に多い点や半島系土器の出土状況から武末は「百済(馬韓系)と加耶系の人々は、大まかには西と東に住み分け」ていた〔武末2004〕と考える。しかし第14次調査区でも、カマドおよび伽耶系の無文短頸壺を持つ住居は



第130図　西新町遺跡竪穴住居跡変遷図（1/2000）

確認されており、むしろ時期的な問題と考えられる。

つぎに、29号竪穴住居跡の覆土内より柳葉形銅鏃が1点のみ出土した。近郊の福岡市早良区五島山古墳でも銅鏃は出土しているが形態は異なる。九州内の同時期の古墳出土品に、長崎県下県郡出居塚古墳、福岡県大牟田市潜塚古墳、同県京都郡苅田町石塚山古墳が知られるが、潜塚古墳のものと形態・規模ともに類似する。また岡山県浦間茶臼山古墳出土品とも類似するが、若干小さい。

また、18号竪穴住居跡よりガラス小玉が282点出土した。土器と同じく住居廃絶時に伴うものと考えられる。第12・13次調査では半島系のガラス小玉の土製鋳型が出土しているが鋳造された物ではなく、顕微鏡観察から引き延ばし法もしくは、巻き付け法で作られたものであり、大陸から渡来したものと考える。また青色ガラスは弥生時代はカリガラスが主流であるが、古墳時代前期後半からはソーダガラスに原料が移っていく。出土資料はソーダガラスが大勢を占めるものの、カリガラスのものも存在しており、過渡的様相を示すものとして重要な資料であると考える。また、赤色の小玉は非常に微細なものであるが、引き延ばし法で作られており、ソーダガラスが原料であり、インド由来のものと考えられる。これらの銅鏃・ガラス小玉については、通常前期古墳の副葬品として用いられるもので、住居からの出土例はまれであり、西新町遺跡に居住した人々が、これらの取得に関わったことを示す資料と考える。

第2節　近世以降について

1・2号石組遺構は長方形土坑の中に割り石を組んでいくものであり、建物基礎と考えられる。4号石組遺構は比較的小さい正方形・隅丸方形の掘り方に石組を2～3段組むもので、各々が礎石であり、全体でひとつの建物の基礎であったと考えられる。次に3号石組遺構は円形の深い土坑に石を円形に組むもので、先の遺構とは性格が異なる。1・3・4号石組遺構は主軸方向がN12°Wと共通する。また2号石組遺構の主軸方向は、N102°Wとこれらの遺構とほぼ直交する。検出された石組遺構は、軸をあわせて作られた可能性が高く、それ故同時期と考えられる。3号石組遺構は、石材加工の類似性から、一連のものと考えて良いと思われる。また、溝については下水溝または、区画溝と考えられる。溝3はやや北東にふれるが、溝1・2・4については2号石組遺構と同じ主軸を取る。このことから、溝も一連の遺構であり、建物を巡る排水溝であったのではないかと考えられる。

次に建物の時期であるが、磁器から年代をみると1号石組遺構は17世紀後半、2号石組遺構は17世紀末～18世紀後半、4号石組遺構は17世紀後半～18世紀中頃であるが、印判転写の磁器碗も出土しており、近代まで下がる可能性もある。また、井戸の年代は17世紀末から19世紀初頭まで継続している。次に溝は溝1が18世紀から近代、溝3が17世紀末から18世紀代、溝4が17世紀末～18世紀後半となる。以上から当遺跡の年代は17世紀後半～近代までと考えられる。

また、出土遺物をみると、第12・13次調査では多量の窯道具および陶磁器の焼成失敗品が出土していることから、鷹取焼の西皿山に関連する施設と考えられる。しかし当調査区では近世陶磁器の遺物量が比較的少なく、特に第12・13次で多く出土した窯業関係の遺物がみられない。出土した陶磁器の殆どは生活用具であり、第12・13次調査とは明らかに異なる性格が窺える。以上から、当遺跡は17世紀後半頃から近代までの屋敷地と考えられよう。

西新町は寛文6年(1666)黒田藩三代藩主光之の時代に早良郡壱岐村橋本にあった紅葉八幡

宮がこの場所に移されたところ、次第に家屋が立ち並んだため、福岡の西町に続く新たな市街ということから西新町と称されたのがはじまりという。本調査区は紅葉八幡宮があったとされる位置の東にあたり、移築とほぼ時を同じくして屋敷地になったものと考えられる。

参考文献

＜古墳時代＞

大賀克彦2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

大阪府立弥生文化博物館2004『大和王権と渡来人』大阪府弥生文化博物館図録30

大牟田市教育委員会1975『潜塚古墳』

小田富士雄・韓炳三1991『日韓交渉の考古学　弥生時代編』

加藤善彦1988『博多11』福岡市埋蔵文化財調査報告書第176集

亀田修一2003「渡来人の考古学」『七隈史学』第4号

苅田町・かんだ郷土史研究会1996『豊前石塚山古墳』

久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ

久住猛雄2004「古墳時代初頭前後の博多湾岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と倭』

慶尚南道・東義大学校博物館1989『大也・武陵里住居址』

国立全州博物館1998『扶安竹幕洞祭祀遺蹟研究』

小林茂・磯　望・佐伯弘次・高倉洋彰編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会

近藤義郎・新納泉編1991『岡山市浦間茶臼山古墳』

白井克也2000「日本出土の朝鮮産土器・陶器―新石器時代から統一新羅時代まで―」『日本出土の舶載陶磁』

高木正文1979「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第6集

武末純一1996「西新町遺跡の竈」『碩晤尹容鎮教授退任記念論集』

武末純一2000「北部九州の百済系土器-4・5世紀を中心に－」『福岡大学総合研究所報』第240号

武末純一2004「伽耶と倭の交流－古墳時代前・中期の土器と集落－」『国立歴史民族博物館研究報告』第110集

田崎博之1983「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』第120集　九州大学文学部

常松幹雄編1996『西新町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第483集

寺井誠2001「古墳出現前後の韓半島系土器」『3・4世紀日韓土器の諸問題』釜山考古学会・庄内式土器研究会・古代学研究会

西谷正「伽耶地域と北部九州」『太宰府古文化論叢』上巻　九州歴史資料館

福岡市教育委員会1997『今宿五郎江遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第479集

福岡市教育委員会1982『西新町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集

釜山大学校博物館1993『金海禮安里古墳群』2釜山大学校博物館遺蹟調査報告書第15輯

釜山大学校博物館1988『釜山老圃洞遺跡』釜山大学校博物館遺蹟調査報告書第12輯

釜山大学校博物館1998『金海鳳凰台遺蹟』釜山大学校博物館遺蹟調査報告書第23輯

釜山女子大学博物館1984『昌原三東洞甕棺墓』釜山女子大学博物館遺蹟調査報告第1輯

李　在賢1999「韓国3世紀代の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅧ、ⅩⅨ

溝口孝司1989「古墳出現前後の土器相―筑前地方を素材として－」『考古学研究』第35巻第2号

三辻利一2002「西新町遺跡第12次調査出土土器の蛍光X線分析」『西新町遺跡Ⅳ』

三辻利一2003「西新町遺跡第13次調査出土土器の蛍光X線分析」『西新町遺跡V』
柳田康雄1982「3・4世紀の土器と鏡」『森貞次郎先生古希記念古文化論集』
柳田康雄2002『九州弥生文化の研究』
＜近世＞
江戸遺跡研究会2001『図説　江戸考古学研究辞典』
九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』
堀内秀樹1996「東大本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年的考察」『江戸出土陶磁器・土器の問題Ⅱ』
成瀬晃司1997「江戸出土資料による磁器碗・皿の変遷－文様・銘款を中心に－」『東大構内遺跡調査研究年報1』

第2表　西新町遺跡第14次調査竪穴住居跡一覧

番号	位置	挿図番号	平面プラン	規模 ()は残存長			燃焼施設	時期	備考
				長軸(m)	短軸(m)	総床面積(㎡)			
1号竪穴住居跡	調査区北東	第8図	長方形	(3.25)	(1.93)		カマド	3式後半	3号住に切られる
2号竪穴住居跡	調査区北東	第11図	隅丸方形	3.28	3.05	10.0	カマド	4式前半	
3号竪穴住居跡	調査区北東	第8図	方形？	(1.15)	0.00			3式後半	1号住を切る
4号竪穴住居跡	調査区北東	第16図	方形	3.47	(3.00)			4式前半	
5号竪穴住居跡	調査区北東	第16図	方形	4.35	(2.38)			3式後半	4号住に切られる
6号竪穴住居跡	調査区北東	第16図	長方形	2.95	2.31	6.8	炉	3式後半	9号住を切る
7号竪穴住居跡	調査区東	第23図	長方形	(3.15)	(1.76)		炉	3式後半	13号住を切る
8号竪穴住居跡	調査区中央東	第23図	長方形	3.88	(1.43)		炉	3式後半	
9号竪穴住居跡	調査区北東	第16図	長方形	4.14	3.75	15.5		3式後半	6号住に切られる
10号竪穴住居跡	調査区中央西	第30図	いびつな方形	5.49	(2.88)			4式前半	
11号竪穴住居跡	調査区北中央	第30図	方形	3.56	(1.90)			3式後半	12号住に切られる
12号竪穴住居跡	調査区北中央	第30図	長方形	4.39	4.37	19.2	カマド	3式後半	11号住を切る
13号竪穴住居跡	調査区北西	第34図	長方形	(1.93)	0.65			3式後半	7号住に切られる
14号竪穴住居跡	調査区北西	第34図	長方形	(4.60)	2.85			3式後半	15号住に切られる
15号竪穴住居跡	調査区北西	第34図	隅丸方形	3.06	(2.74)		カマド	3式後半	14号住に切られる
16号竪穴住居跡	調査区北東	第42図	いびつな長方形	3.72	3.02	11.2	炉	3式前半	溝3に切られる
17号竪穴住居跡	調査区中央西	第42図	正方形	2.65	2.48	6.6		4式前半	井戸を切る
18号竪穴住居跡①	調査区中央西	第44図	方形	4.92	(1.56)			3式後半	7号土坑に切られる
18号竪穴住居跡②	調査区中央西	第44図	方形	(3.40)	(2.60)			3式後半	
18号竪穴住居跡③	調査区中央西	第44図	方形	(3.73)	(1.50)		カマド	3式後半	
19号竪穴住居跡	調査区北東	第50図	長方形	4.82	3.72	17.9	カマド	3式後半	
20号竪穴住居跡	調査区南西	第57図	長方形	3.72	3.20	11.9	カマド	3式後半	24・25号住を切る
21号竪穴住居跡	調査区南東	第59図	長方形	5.05	3.82	19.3	カマド	3式後半	4号石組遺構に切られる
22号竪穴住居跡	調査区南西	第65図	長方形	(3.98)	(1.92)			3式後半	28号住を切る
23号竪穴住居跡①	調査区南西	第67図	方形	(2.40)	(1.49)			3式前半	
23号竪穴住居跡②	調査区南西	第67図	方形	(3.49)	(2.22)		カマド	3式前半	
24号竪穴住居跡	調査区南西	第71図	正方形	2.82	2.69	7.6	炉	3式前半	20号住に切られる
25号竪穴住居跡	調査区南西	第71図	正方形	2.43	(2.03)				20号住に切られ、28号住を切る
26号竪穴住居跡	調査区南西	第71図	長方形	4.86	3.80	18.5	カマド	3式前半	
27号竪穴住居跡	調査区南東	第78図	方形	4.11	3.67	15.1	カマド	3式後半	29号住を切る
28号竪穴住居跡	調査区南西	第81図	長方形	5.40	3.62	19.5		3式後半	
29号竪穴住居跡	調査区南東	第87図	隅丸方形	4.02	3.99	16.0	カマド	3式後半	27号住に切られる

第3表　西新町遺跡第14次調査出土石製品・土製品・金属製品一覧
土製品

挿図番号	種類	出土遺構	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
6-8	剥片	28号竪穴住居跡	黒曜石	2.2	1.3	0.2	0.5	
6-9	打製石鏃	18号竪穴住居跡	黒曜石	3.5	1.5	0.5	1.8	
105-1	石錘未成品	18号竪穴住居跡	滑石	6.0	2.0	1.5	30.0	研磨痕著しい
105-2	石錘未成品	13号竪穴住居跡	硬質砂岩	5.5	4.0	2.7	73.3	
105-3	有孔石錘	排土中	滑石	4.3	2.9	2.1	30.0	欠損
105-4	有孔石錘	23号竪穴住居跡	滑石	6.5	3.0	2.0	57.9	完形
105-5	有孔石錘	4号竪穴住居跡	細粒砂岩	7.7	1.0	1.8	17.9	完形
105-6	有孔石錘	8号竪穴住居跡	砂岩	11.9	3.7	3.7	207.5	完形
105-7	打欠石錘	16号竪穴住居跡	細粒砂岩	7.2	6.4	1.4	82.8	完形
105-8	打欠石錘	ピット	滑石	6.6	6.4	2.3	111.8	完形
105-9	有孔石錘	包含層	滑石	7.3	10.3	4.2	556.5	欠損後再加工
106-10	軽石	井戸		2.3	3.0	1.4	2.3	
106-11	軽石	18号竪穴住居跡		3.4	3.1	1.8	3.1	
106-12	軽石	7号竪穴住居跡		3.0	3.4	1.8	3.1	
106-13	軽石	遺構面		2.7	3.5	2.0	3.2	
106-14	軽石	19号竪穴住居跡		3.0	3.9	1.5	1.9	
106-15	軽石	井戸		3.9	5.0	2.4	7.8	
106-16	軽石	4号竪穴住居跡		3.4	6.0	2.5	13.4	
106-17	軽石	ピット		5.2	5.0	3.7	20.0	
106-18	軽石	19号竪穴住居跡		5.6	6.8	5.6	77.4	
106-19	軽石	9号竪穴住居跡		5.7	7.1	2.4	21.1	
106-20	軽石	19号竪穴住居跡		6.7	6.2	4.6	29.6	
106-21	軽石	18号竪穴住居跡		6.2	3.8	4.7	14.5	
106-22	軽石	井戸検出面		6.7	8.2	2.2	30.0	
106-23	軽石	井戸		7.2	8.0	5.7	52.8	
106-24	軽石	8号竪穴住居跡		9.9	6.8	6.9	73.9	
106-25	軽石	19号竪穴住居跡		8.0	9.9	6.0	114.8	
106-26	軽石	ピット		7.7	9.9	6.4	78.0	
図版36	軽石	排土中		9.2	7.1	4.5	46.1	
107-27	台石	23号竪穴住居跡	砂岩	33.8	39.7	18.0	約32000	完形　上面やや赤変
107-28	台石	2号竪穴住居跡	砂岩	33.3	45.0	11.6	約27500	完形
107-29	不明石製品	18号竪穴住居跡	花崗岩	6.7	3.5	2.8	90.0	
107-30	不明石製品	1号竪穴住居跡	砂岩	5.6	4.3	1.8	33.3	
107-31	叩石	28号竪穴住居跡	砂岩	10.1	7.2	3.3	380.9	完形
107-32	叩石	18号竪穴住居跡	砂岩	8.2	6.7	3.3	272.9	完形
107-33	叩石	4号竪穴住居跡	砂岩	8.8	3.3	3.4	141.4	
107-34	叩石	11号竪穴住居跡	砂岩	8.9	5.5	3.2	196.6	完形
107-35	叩石	15号竪穴住居跡	硬質砂岩	9.4	5.1	4.1	319.5	完形　端部片側は平滑
107-36	磨石	13号竪穴住居跡	硬質砂岩	7.0	13.8	5.0	633.7	側縁を使用
107-37	カマド支脚	20号竪穴住居跡	砂岩	13.6	10.0	5.1	1058.5	完形　強く被熱
108-38	砥石	14号竪穴住居跡	細粒砂岩	6.6	2.0	0.9	16.7	大きく欠損
108-39	砥石	28号竪穴住居跡	細粒砂岩	6.6	2.0	1.6	24.8	大きく欠損
108-40	砥石	井戸下層	細粒砂岩	10.8	5.4	1.6	199.4	
108-41	砥石	19号竪穴住居跡	硬質砂岩	9.7	3.9	3.2	188.1	
108-42	砥石	4号竪穴住居跡	硬質砂岩	9.5	3.4	2.5	149.1	完形
108-43	砥石	21号竪穴住居跡	細粒砂岩	10.7	4.2	1.7	58.9	
108-44	砥石	8号竪穴住居跡	細粒砂岩	11.9	4.2	3.5	169.0	
108-45	砥石	14号竪穴住居跡	硬質砂岩	16.5	6.7	4.2	617.4	
108-46	砥石	8、29号竪穴住居跡	細粒砂岩	36.4	4.8	3.3	706.5	完形
109-47	砥石	6号竪穴住居跡	硬質砂岩	8.0	10.0	4.2	412.9	完形
109-48	砥石	7号竪穴住居跡	玄武岩	9.2	10.2	4.6	631.7	完形
109-49	砥石	6号竪穴住居跡	硬質砂岩	13.6	8.4	4.0	732.0	完形
109-50	砥石	4号竪穴住居跡	硬質砂岩	13.5	6.1	3.7	489.3	
109-51	砥石	井戸	細粒砂岩	15.0	9.2	4.7	791.1	
109-52	砥石	25号竪穴住居跡	硬質砂岩	6.7	6.7	1.8	145.0	完形
109-53	玉原材	13号竪穴住居跡	碧玉	2.5	1.9	1.4	7.9	
109-54	勾玉	12号土坑	碧玉	1.7	1.0	0.5	1.0	完形
127-1	碁石	1号土坑	蛇紋岩	2.4	1.7	0.6	3.5	
127-2	砥石	2号石組遺構	粘板岩	2.4	7.5	0.6	11.2	
127-3	砥石	2号石組遺構	砂岩	15.2	14.9	10.6	3467.2	大きく欠損
127-4	石捏鉢	2号石組遺構	砂岩				5901.1	大きく欠損
127-5	挽臼	2号石組遺構	砂岩				4204.3	大きく欠損

土製品

挿図番号	種類	出土遺構	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
110-55	土板	4号竪穴住居跡		5.6	6.3	1.5	56.3	完形
110-56	土錘	6号竪穴住居跡		6.6	1.3	1.0	12.9	完形
128-11	土玉	溝4		径2.0			6.6	
128-12	土錘	3号土坑		径2.3			9.5	
128-13	土錘	3号土坑		5.0	径1.7		17.4	
128-14	陶鎮	5号土坑		4.4	3.4	3.1		土灰釉を施す
128-15	土製人形	溝3		4.0	4.1	1.9		天神
128-16	土製人形	溝3		5.3	2.9	1.6		童子立像
128-17	土製人形	2号土坑		10.2	7.8	5.1		男性像
128-18	面型	1号石組		5.0	4.7			

金属製品

挿図番号	種類	出土遺構	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
103	銅鏃	29号竪穴住居跡	青銅	4.7	1.4	0.5	8.5	
104-1	鉄鏃	28号竪穴住居跡	鉄	2.3	1.3	0.5	1.2	
104-2	ヤリガンナ	20号竪穴住居跡	鉄	5.0	1.9	0.3	5.8	
104-3	ヤリガンナ	22号竪穴住居跡	鉄	8.4	1.5	0.3	9.3	
104-4	手鎌	井戸	鉄	9.7	2.0	0.6	17.3	
104-5	曲刃鎌	井戸	鉄	14.3	3.0	0.5	56.3	
104-6	不明鉄製品	ピット10	鉄	3.0	2.5	0.2	5.4	
104-7	不明鉄製品	15号竪穴住居跡	鉄	2.8	1.5	0.2	1.0	
125-1	鉄釘	2号土坑	鉄	2.8	0.6	0.4	1.2	
125-2	鉄釘	4号土坑	鉄	3.3	0.6	0.6	1.6	
125-3	鉄釘	4号土坑	鉄	4.4	0.8	0.4	3.3	
125-4	鉄釘	溝3	鉄	4.7	0.6	0.7	3.6	
125-5	鉄釘	溝3	鉄	2.5	2.5	0.4	4.4	
125-6	鉄釘	ピット10	鉄	5.8	3.4	0.5	5.8	
125-7	鉄釘	2号土坑	鉄	6.1	0.7	0.7	7.9	
125-8	鉄釘	溝4	鉄	8.0	1.8	0.6	10.3	
125-9	鉄釘	2号土坑	鉄	8.4	3.3	1.0	24.1	
125-10	不明鉄製品	2号土坑	鉄	4.2	1.0	0.4	1.6	先端が鉤状
125-11	不明鉄製品	溝4	鉄	4.6	1.1	0.3	3.4	先端が鉤状
125-12	不明鉄製品	溝1	鉄	6.2	3.2	1.1	18.1	先端が鉤状
125-13	不明鉄製品	溝4	鉄	6.0	4.4	0.6	31.2	
125-14	不明鉄製品	19号竪穴住居跡	鉄	5.2	1.0	0.6	3.8	
126-1	小刀鞘金具?	ピット	青銅	2.5	1.3	0.9	10.1	
126-2	ボタン	3号土坑	青銅	径2.3		0.8	3.0	表面に桜の意匠
126-3	寛永通宝	表採	青銅	径2.3		0.1	2.7	
126-4	寛永通宝	調査区西壁	青銅	径2.2		0.08	1.9	

第6章　西新町遺跡第15次調査

第1節　調査の概要

第15次調査の対象地は学校敷地の南東隅にあたり、北側は第2次調査区に隣接している。第2次調査では遺構密度は低いものの古墳時代の竪穴住居跡等が検出されており、今回の調査でも同様の遺構が検出されるものと期待された。

調査は、まず重機を用いて表土を除去することから開始した。校舎は昭和42年（1967）に建てられた東側と同46年に建てられた西側との2棟からなる。校舎基礎は細かく碁盤目状に走っており、かつ表土には産業廃棄物とでも言うべきコンクリート片・瓦・煉瓦が多量に投棄されており、除去する作業は容易ではなかった。地山面は基礎上面から180～200㎝下げたレベルで検出された。既往の調査では、遺構面に至るまでに遺物包含層が形成されており、土師器片が多数出土したということであったが、今回は全くといっていいほど遺物は目に留まらず、地山が検出される段階でも遺構・遺物とも皆無に近い状況であった。また、地山が検出された時点においても、基礎とその周辺は基礎設置時の布掘りが下層へ続いており、遺構検出面は島状に残されている状況を呈している。特に東側の校舎部分に関しては、撹乱が著しいこと、遺構は撹乱とみられる小ピットしか検出されなかったこと、遺物が表土中も含めてほとんど出土しなかったことから、発掘調査の必要が無いものと判断され、簡潔な記録を取った後にすぐに埋め戻しを行った。したがって調査の対象面積は1800㎡であったが、最終的に精査を実施したのは230㎡に留まる。

検出された遺構は古墳時代の土坑1基と近世の土坑（井戸）1基である。他に不整形のピットが検出されたが、浅く出土遺物もごく少ない。出土遺物は遺構・包含層のものを合わせてもパンケースにて1箱に留まった。

今回の調査区が、撹乱の多さから遺構が存在しなかったのか、若しくはもともと遺構がなかったのかを判断するために、精査終了後の重機を用いた埋め戻し時に、調査区南側の校舎

第15次調査区全景（北から）

基礎が入っていない部分にトレンチを設定し、遺構の有無を確認した。その結果、撹乱は少ない中に近世の遺構が若干検出されたのみであった。しかも表土中には古墳時代の遺物は含まれておらず、今回の調査区およびその周辺においては古墳時代の遺構は極めて希薄になっていることが確認できた。

調査は平成14年10月3日に開始し、埋め戻しまで終了したのは同年10月29日であった。

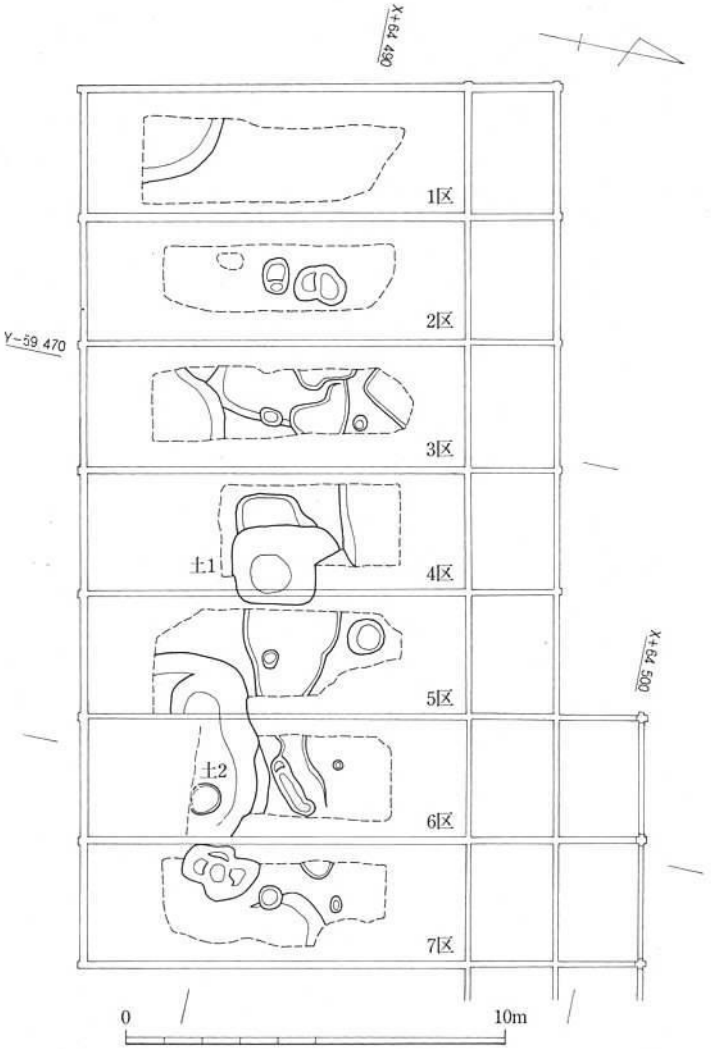
第2節　古墳時代の遺構と遺物

土坑1（第132図）

校舎基礎の西から4～5区画に跨って検出されたもの。平面プランは東西3.0m×南北2.8mの隅丸方形を呈する。西側には浅いテラス面があり、深くなる東側に対するステップのようなあり方である。検出面からの深さは82㎝を測る。遺物はごく少なく1点しか図化し得なかったが、いわゆる半島系の甑と判断され注目に値する。

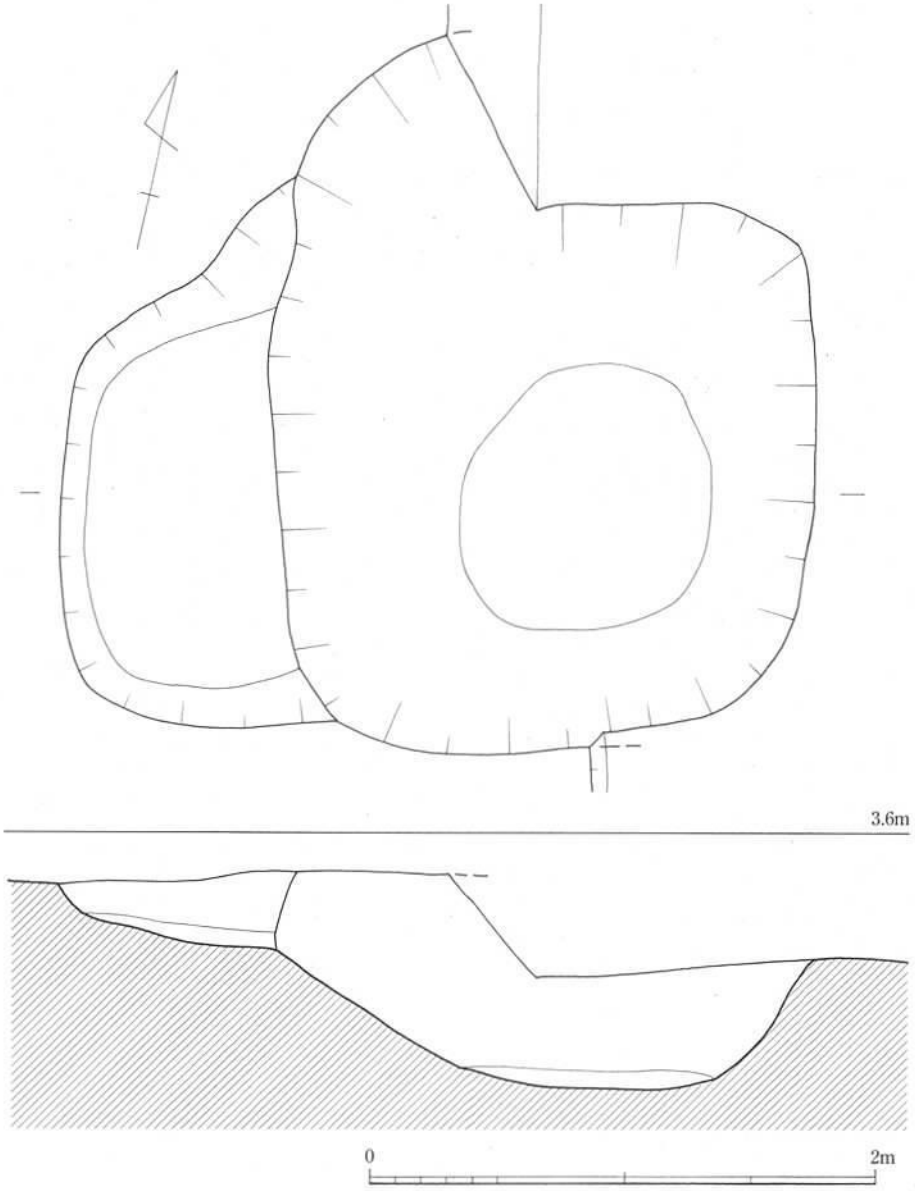
出土遺物（第133図1）

土師器の甑で、口縁部から胴部中位まで1/2周弱が残存する。底部は出土しておらず、また把手も欠損する。把手の付根にあたる胴部には円形のホゾ穴状の刳り込みが確認される。口縁部は直線的にわずかに開く形状で、口径は21.0㎝を測る。外面調整はタテハケであるが、口縁部から把手の高さまで幅広くヨコナデがはいる。内面調整はナデであるが器壁は荒れる。



第131図　第15次調査遺構配置図（1/200）

土坑1（南から）

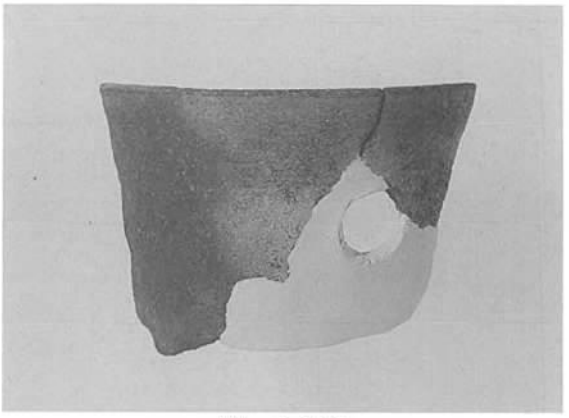


第132図　土坑1実測図（1/30）

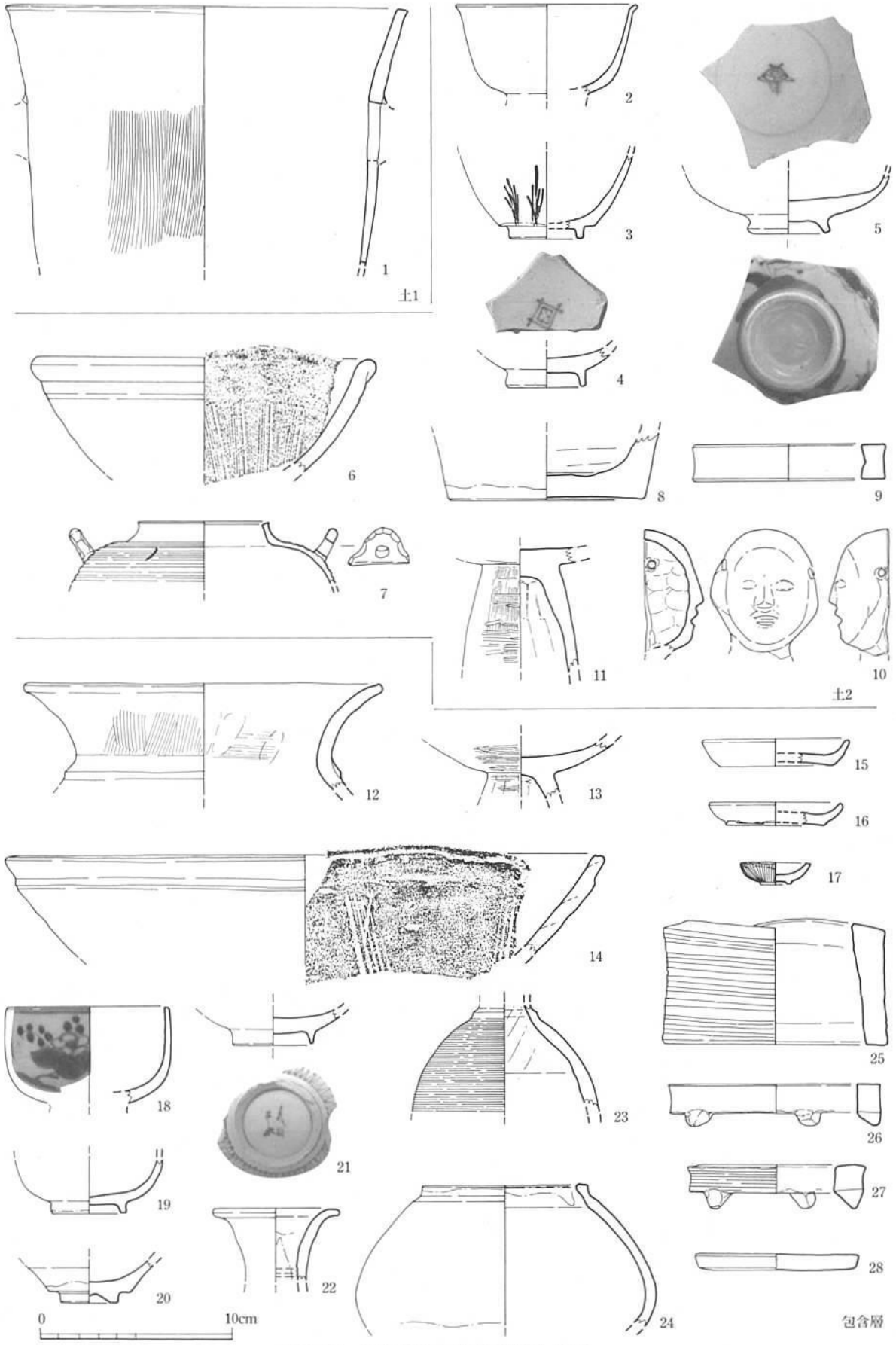
包含層出土遺物（第133図）

表土・包含層からも若干量の土師器が出土したが、図化したもの以外はローリングを受けて摩滅が著しい小片のみである。西新町遺跡でしばしばみられる陶質土器は、今回の調査区からは出土していない。

11は近世の土坑2から出土した高杯脚。外面はタテハケ調整で、下半は横方向のミガキを密に施す。12は壺の口頸部。強く外反する口縁部で、頸部には断面三角形の低い突帯を巡らせる。



土坑1出土遺物



第133図　15次調査出土遺物実測図（1/3）

13は高杯の杯〜脚部。

第3節　近世以降の遺構と遺物

土坑2

土坑2（西から）

校舎基礎の西から5〜6区画に跨って検出されたもの。検出面では東西5m以上(東側は調査区外)×南北2m以上の長方形の大きな落ち込み状に検出され、南側は校舎の基礎による撹乱が入っている状況であった。遺構面から40㎝下げた時点で、径80㎝の円形の土坑が検出され、周辺は赤褐色粘質土を含む硬化面が検出された。円形の土坑部分を下げると瓦を用いて壁（井戸枠）とした状況が確認され、井戸と判断された。井戸は狭く、かつ周辺の埋土・地山ともに砂層で脆弱であったために簡単な記録をとりつつ、土坑2全体を掘り下げた。しかし、井戸が狭い点と周囲の地山・撹乱層の崩落が危惧されたために調査を中断し、最後の埋め戻しの際に重機を用いて底面の確認を行う方針とした。重機を用いて井戸検出面から270㎝下げた時点でも井戸径は変わらず底面も確認できなかった。それ以上は壁の崩落・湧水で計測も危険であったために調査を終了した。

出土遺物（第133図）

井戸枠に用いられた瓦は完形品を用いるのではなく、大小の破片を用いていたようである。瓦の厚さは23㎜を測るもので、大形のものと考えられる。裏込め及び目地には黄褐色の粘質土を用いている。2は裏込め土中から出土した陶器碗で、井戸開削時を示すものと見られるが、細かな時期の判断は困難である。深い体部をもち、口縁部は短く外反させる。灰釉をかけるもので、透明感のある発色であり、細かな貫入が密にはいる。3は陶器碗の底部。高台際のケズリは深く、強い稜が生じる。草文の鉄絵が描かれ、長石釉が掛けられる。4·5は磁器碗。4は見込に格子文、5は見込に昆虫文、外面に松を含む草木文を描く。6は小型の陶器擂鉢で、口縁端部は丸みをもって肥厚させる。7は球形の体部に短く直立する口縁部をもつ陶器で、弦を掛ける耳を有する。長石釉の上に藁灰釉を掛ける二重掛けで、鉄絵の一部が確認できる。8は陶器甕或いは瓶の底部。飴釉で、内面は小豆色に発色し泡立ったような凹凸が生じている。9はドーナッツ形のハマ。10は形押し成形の人形顔面部。土師質で精良な胎土を用いている。両側面には小穿孔があり、内面は指の圧痕が顕著に残る。

包含層出土遺物（第133図）

14は土師質の擂鉢で、4本一単位の擂目が粗く施される。15·16は土師器の小皿で、底面は

糸切りである。17は磁器紅皿。18·21は磁器碗。18は外面に草花文を描き、21の外面には密な網目文を描き高台内には「太明年製」の二行四字銘をいれるが書体は大きく崩れる。19·20は陶器碗。19は飴釉で内面は海鼠釉となる。焼成時に既に底部に割れが生じている。20は高台際のケズリが強く、直線的に開く体部が続くもので、天目形となろうか。藁灰釉で乳濁色を呈する。22は陶器瓶の口縁部。鉄釉・藁灰釉の二重掛けである。23は土師質の瓶の体部上半で、頸部には低い断面三角形の突帯を巡らせる。外面はカキメ状の調整である。24は球形の体部をもつ陶器壺で、短く直立させる口縁部をもつ。飴釉で口縁部上面は釉を掻き取る。25～28は窯道具。25は円筒形のもので、歪みが大きい。26·27はドーナッツ形のハマで、推定三箇所に手捏ねの脚をもつ。28は円盤形のハマ。なお、窯道具は出土するものの製陶につながるような遺構は確認できなかった。

第4節　西新町遺跡第15次調査のまとめ

以上のように第15次調査は遺構密度・遺物量ともに西新町遺跡としては極めて希薄なものであった。撹乱が多かったのもその要因の一つであろうが、表土中にも遺物が少なかった点から考えて本来遺構は少なかったものと判断できる。南に隣接する地下鉄建設関連の発掘調査でも遺構密度が希薄であることが判明しており、さらに南側の開発事業に係る試掘調査でも遺構が確認されない地点が多いとの教示を福岡市教育委員会から得た。北側に隣接する第12·13次調査区の極めて遺構密度が高く遺物量も多い状況とは非常に対照的な状況であった。以上のような点から、第15次の調査区には集落は及んでいないものと想定され、西新町遺跡の集落の範囲を考える上では大きな情報が提供できたといえよう。

第15次調査区から修猷館高校本館（第12次調査地点）を望む（手前右建物は第2次調査地点）

図　版

1．調査区北半古墳時代
遺構空中写真（上が北）

2．調査区南半古墳時代
遺構空中写真（上が北）

図版2

1．1号竪穴住居跡土器出土状況
（北から）

2．1号竪穴住居跡完掘状況
（北から）

3．2号竪穴住居跡
（東から）

4．2号竪穴住居跡カマド
（南西から）

1．3号竪穴住居跡（西から）

2．4号竪穴住居跡（北から）

3．5号竪穴住居跡（西から）

4．6号竪穴住居跡（南から）

図版4

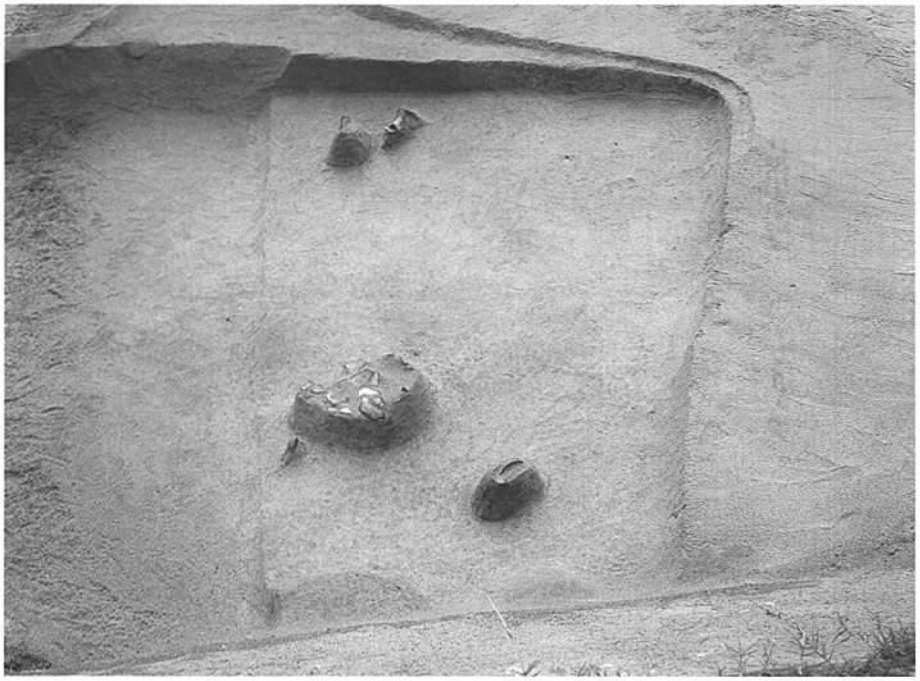
1．7号竪穴住居跡（北から）

2．8号竪穴住居跡土器出土状況
（東から）

3．8号竪穴住居跡完掘状況
（東から）

4．9号竪穴住居跡（南から）

1．10号竪穴住居跡（北西から）



2．11号竪穴住居跡（北から）

3．12号竪穴住居跡（北から）

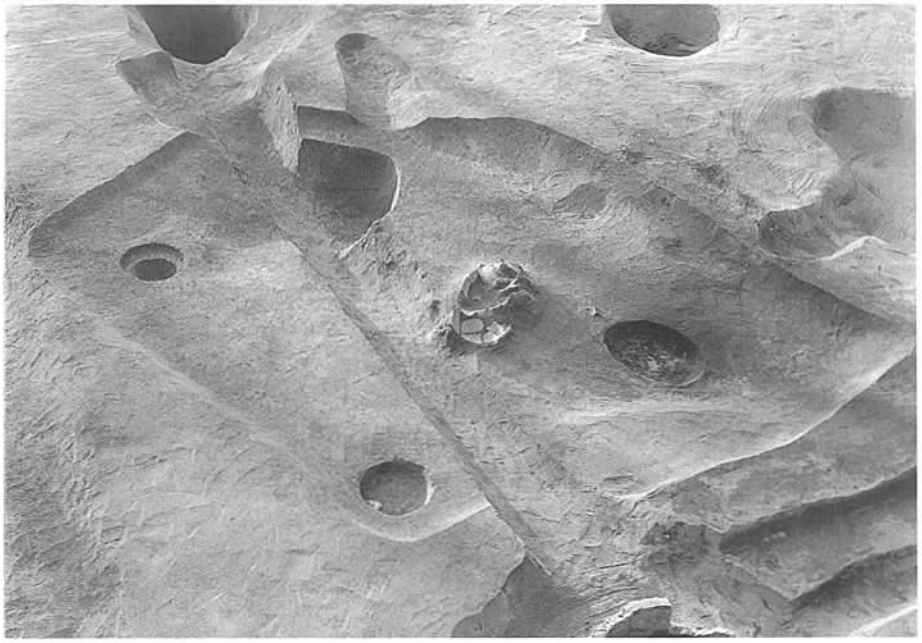
1．12号竪穴住居跡カマド
（南から）

2．13号竪穴住居跡（西から）

3．14号竪穴住居跡（南から）

1．15号竪穴住居跡（南から）

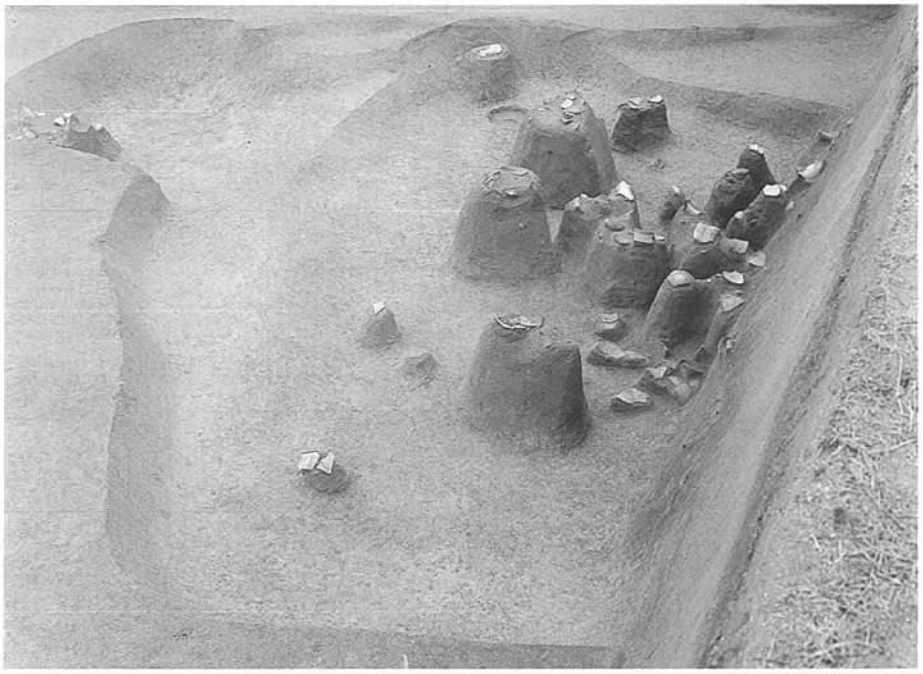
2．15号竪穴住居跡カマド（南から）



3．16号竪穴住居跡（南東から）

図版8

1．17号竪穴住居跡（南から）



2．18号竪穴住居跡（北から）

3．18号竪穴住居跡カマド
（南から）

1．19号竪穴住居跡（南から）

2．19号竪穴住居跡カマド（南から）

3．20号竪穴住居跡（南から）

図版10

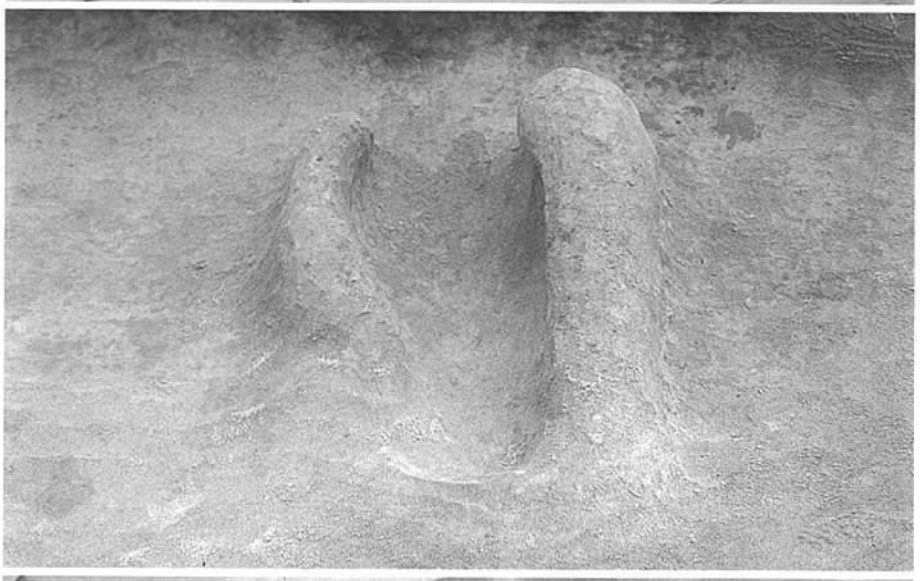
1．20号竪穴住居跡カマド
（東から）

2．21号竪穴住居跡（南から）

3．21号竪穴住居跡カマド
（南から）

1．22号竪穴住居跡（西から）

2．23号竪穴住居跡（南から）



3．23号竪穴住居跡カマド（南から）

4．24号竪穴住居跡（南から）

図版12

1．25号竪穴住居跡（北から）

2．26号竪穴住居跡（南東から）

3．26号竪穴住居跡カマド
（南東から）

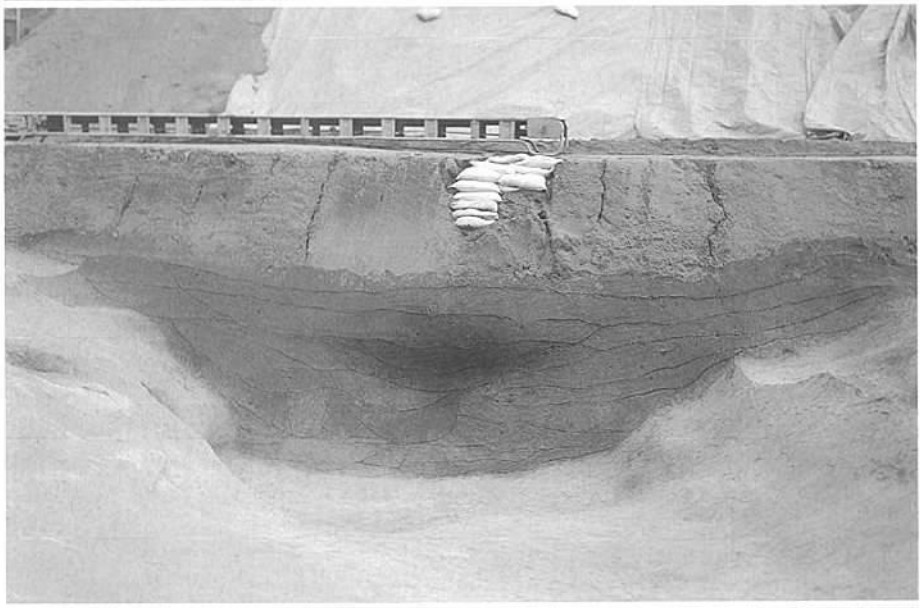
1．27号竪穴住居跡（南から）

2．28号竪穴住居跡（北から）

3．29号竪穴住居跡（南から）

図版14

1．井戸北半（南から）



2．井戸土層東西断面（北から）

3．井戸南半土器検出状況
（北から）

4．井戸南半（北西から）

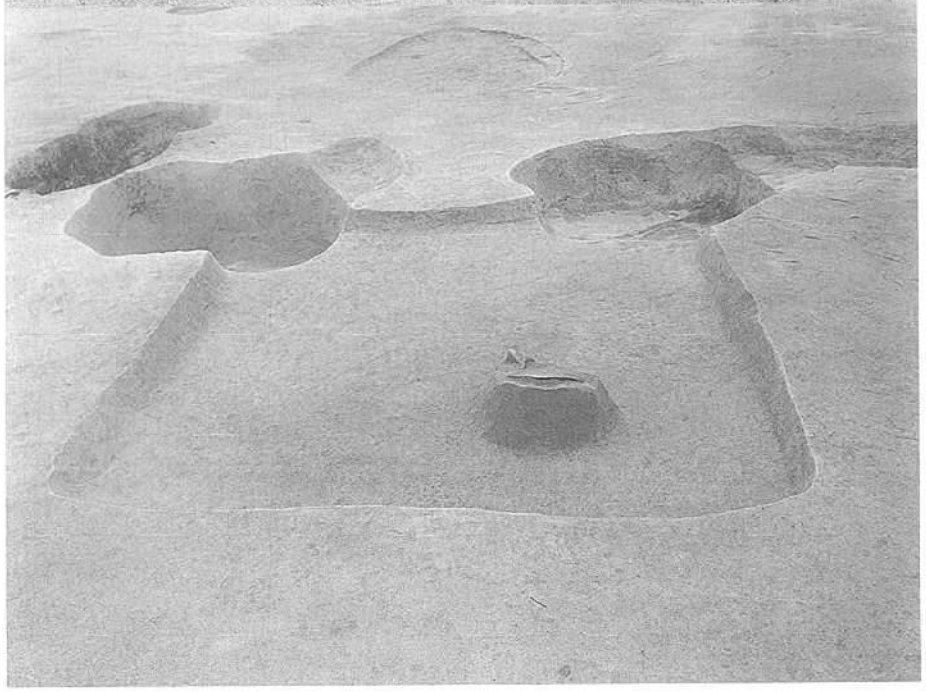
1．井戸中央ピット土器出土状況（北から）

2．井戸中央ピット土器・井戸枠検出状況（北から）

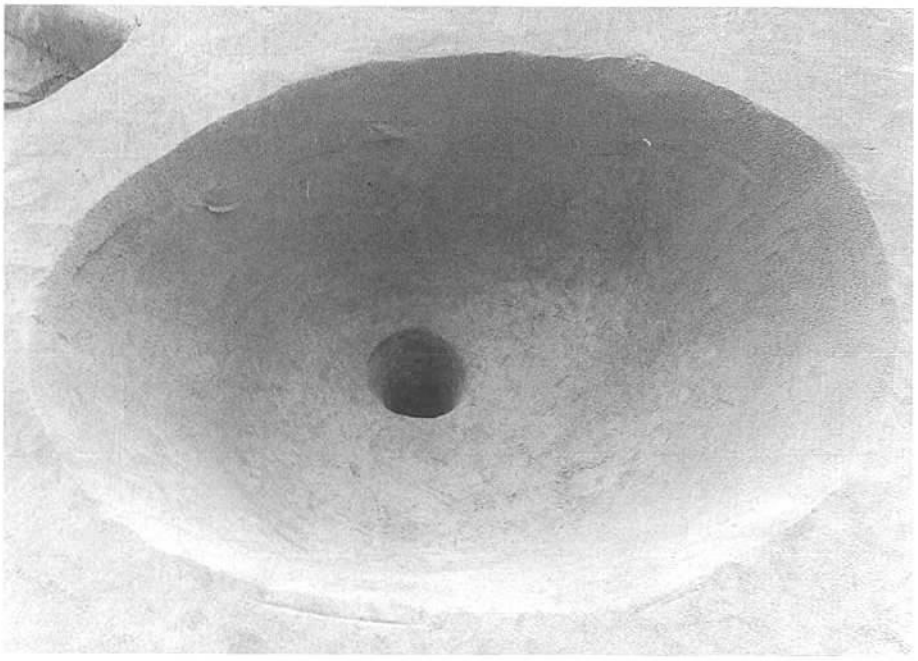
3．井戸中央ピット掘方東西土層断面（北から）

1．8号土坑（南から）

2．10号土坑（北から）

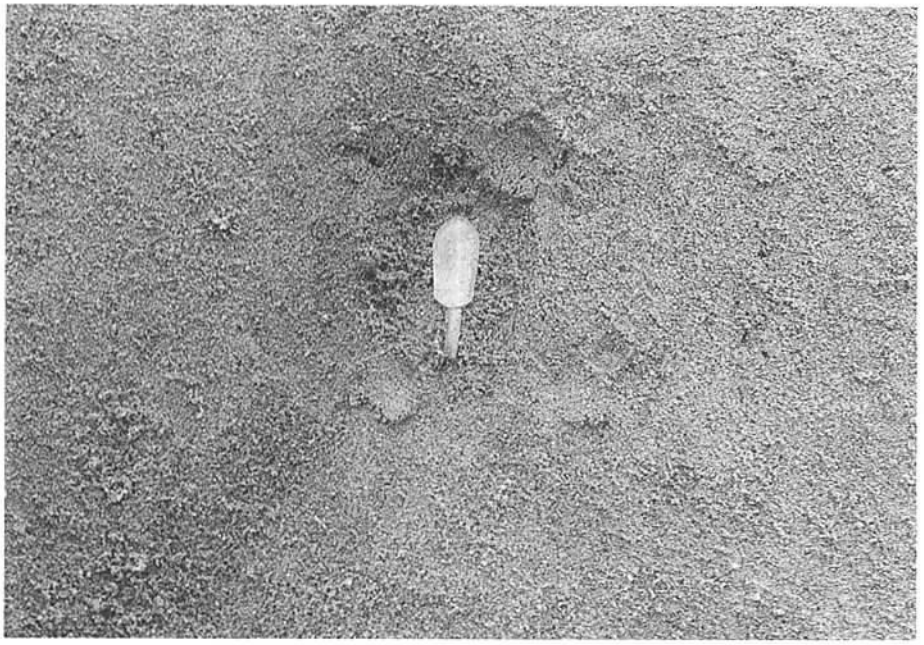


3．11号土坑（南から）



1．12号土坑（北から）

2．13号土坑（南西から）

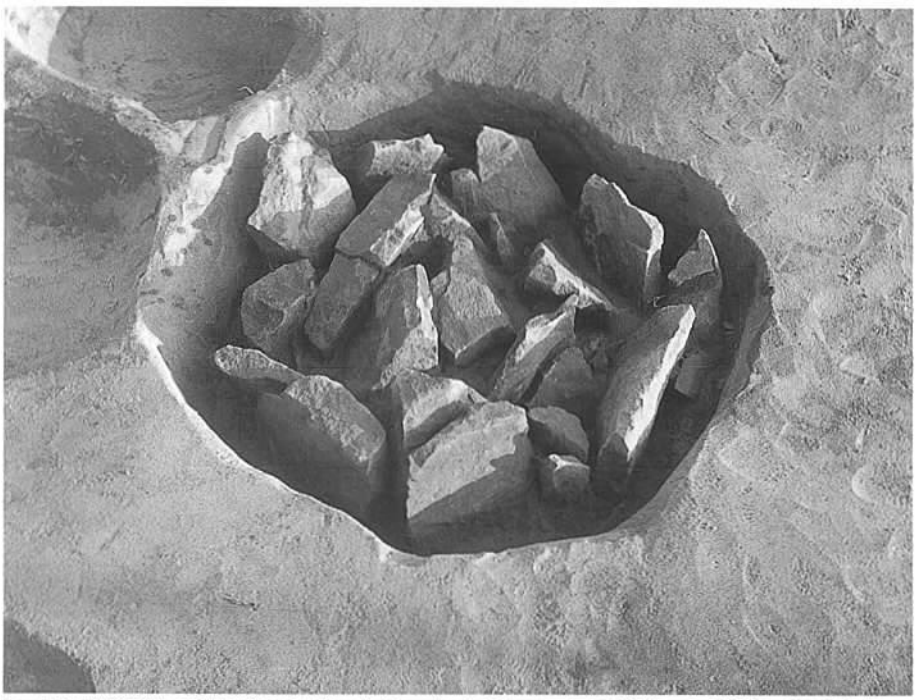


3．29号竪穴住居跡銅鏃
出土状況（東から）

1．調査区北半近世遺構
（南から）

2．1号石組遺構（西から）

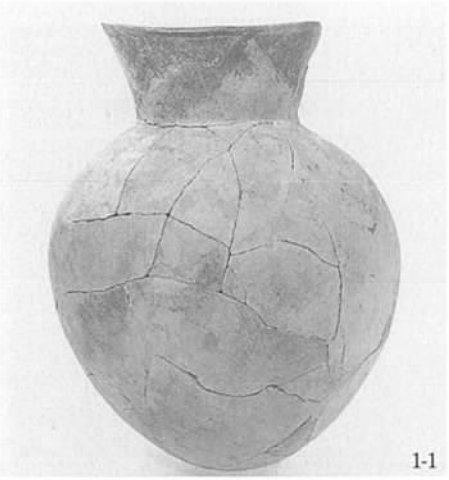
3．2号石組遺構（南から）



1．3号石組遺構（北から）

2．4号石組遺構（西から）

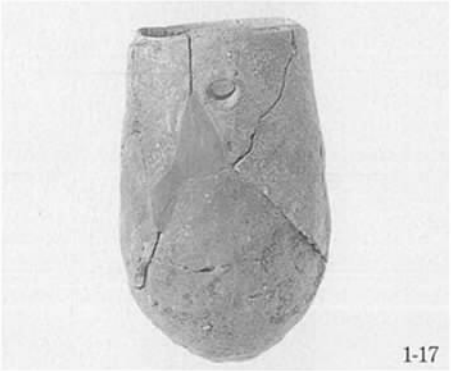
3．近世井戸（北から）


1-1

1-16

2-5

1-6

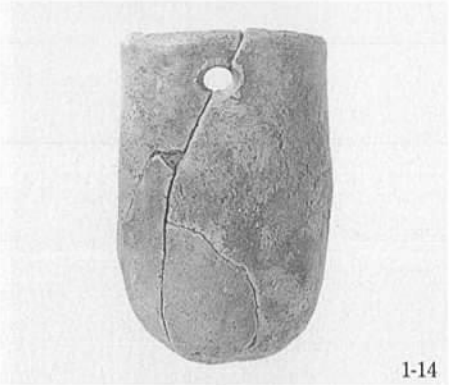

1-17

2-21

1-10

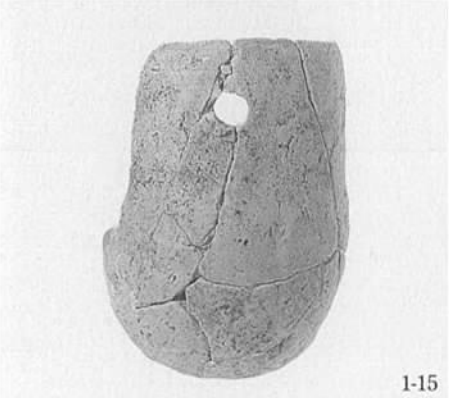
1-18

2-28


1-14

1-19

2-32


1-15

2-1

2-33

1・2号竪穴住居跡出土土器

3-5

4-12

4-27

4-1

4-13

4-30

4-1

4-15

4-31

4-2

4-25

4-33

4-3

4-26

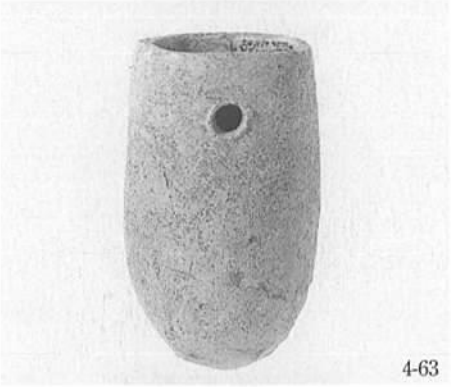
4-34

3・4号竪穴住居跡出土土器

4-54

4-62

4-57


4-63

5-2

5-9

6-18

7-1

7-2

7-3

8-4

8-16

8-17

8-19

8-22

8-36

8-41

4～8号竪穴住居跡出土土器

8-43

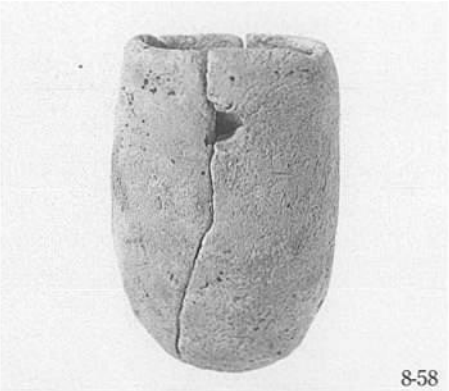
8-44

8-47

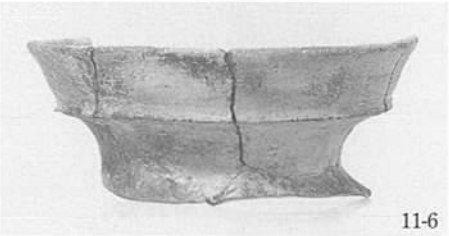
8-50

8-56

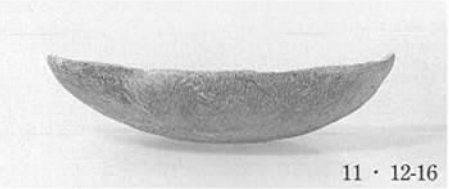
8-57


8-58

9-67


11-6

11-11


11・12-16

12-3

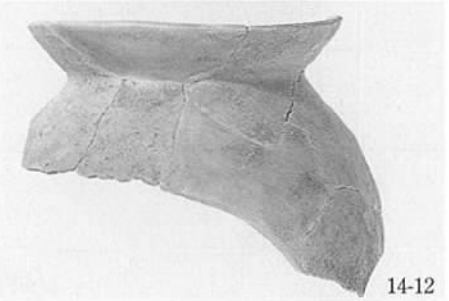
12-13

12-7

14-7

14-10

14-6


14-12

8・9・11・12・14号竪穴住居跡出土土器

14-11

14-13

14-14

14-16

14-17

14-20

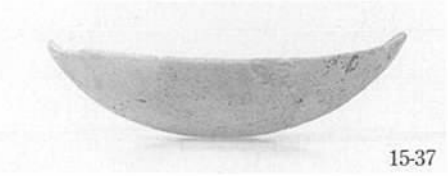
14-29

14-30

15-1

15-6

15-30

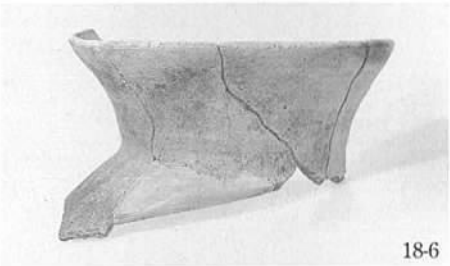

15-37

15-38

16-40

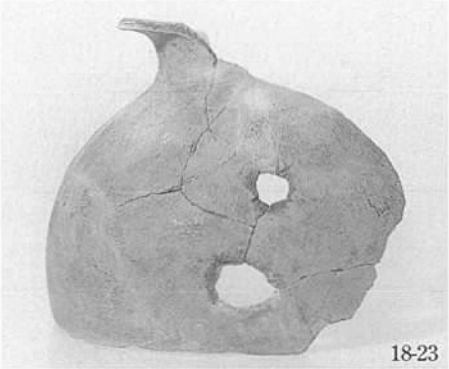
16-50

17-1


18-6

18-7

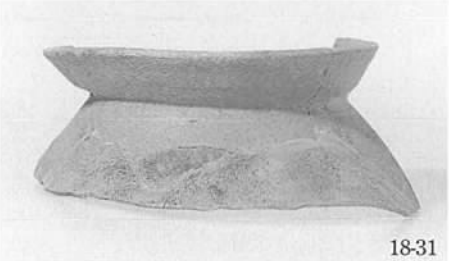
14～18号竪穴住居跡出土土器


18-23

18-25

18-29

18-30

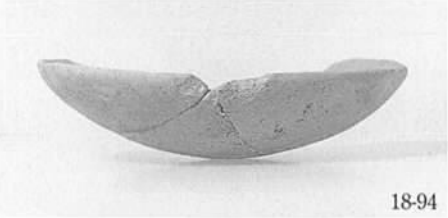

18-31

18-32

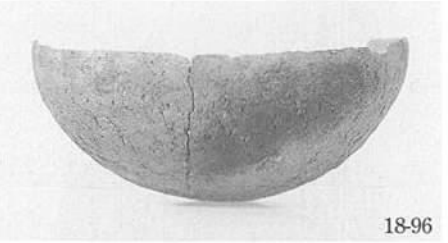
18-38

18-67

18-72

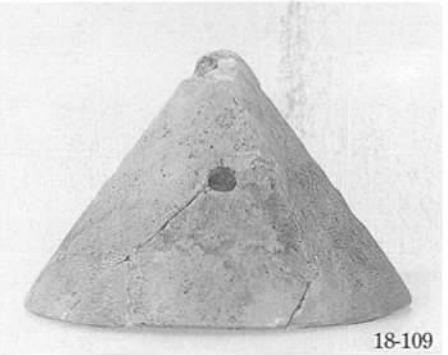

18-94

18-95


18-96

18-97

18-104


18-109

18-111

19-1

18・19号竪穴住居跡出土土器

19-6

19-7

19-8

19-13

19-14

19-17

19-32

19-33

19-36

19-41

19-44

19-46

19-47

19-50

19-56

19-57

19号竪穴住居跡出土土器

19-63

19-65

19-68

19-69

19-70

19-71

20-12

21-13

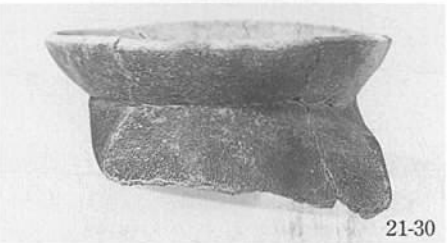
21-19

21-21

21-26

21-27

21-28


21-30

21-31

21-35

21-40

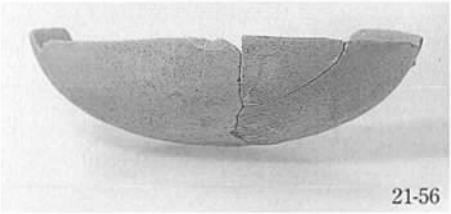
19～21号竪穴住居跡出土土器

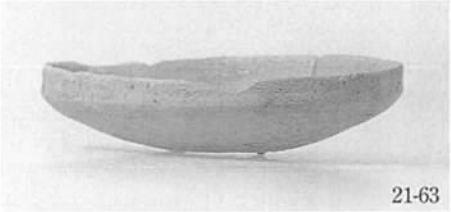
21-41

21-42

21-44

21-59


21-56


21-63

21-66

23-10

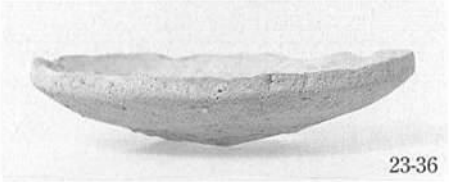
23-11

23-15

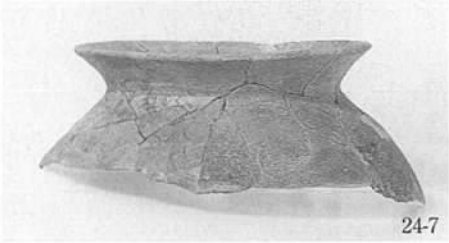
23-16

23-28

23-35


23-36

24-3


24-7

24-13

24-14

21・23号竪穴住居跡出土土器

26-4

26-10

26-12

26-14

26-18上

26-18下

26-19

26-25

26-31

26-32

26-33

26-37

26-40

26-50

26-52

26-55

26-64

26-65

26号竪穴住居跡出土土器

27-2

28-9

28-14

27-5

28-10

28-15

27-19

28-11

28-16

28-3

28-12

28-17

28-7

28-13

28-19

27・28号竪穴住居跡出土土器

28-20

28-21

28-22

28-23

28-24

28-25

28-26

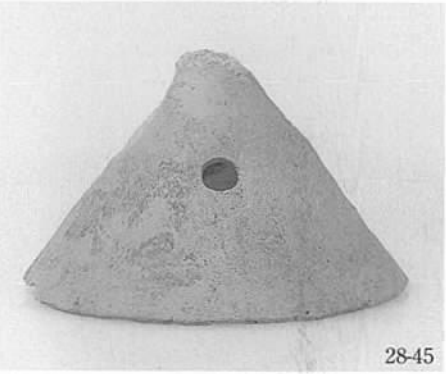
28-27

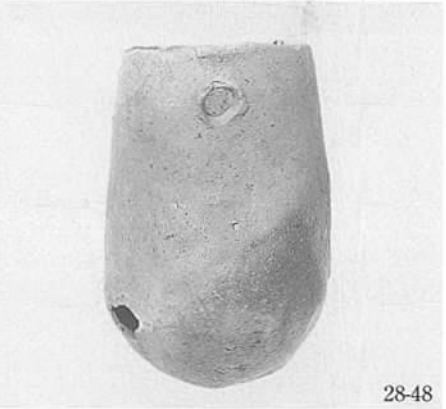
28-32

28-39

28-38

28-43


28-45

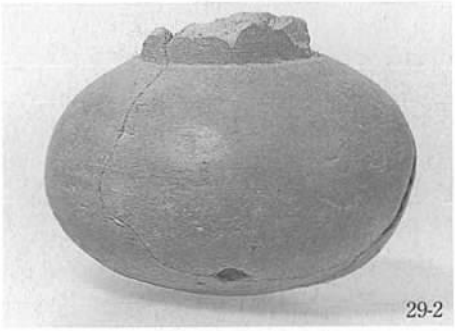

28-48

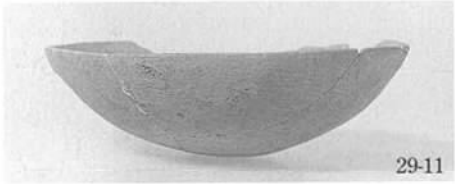
28-49

28号竪穴住居跡出土土器

28-50

29-1


29-2


29-11

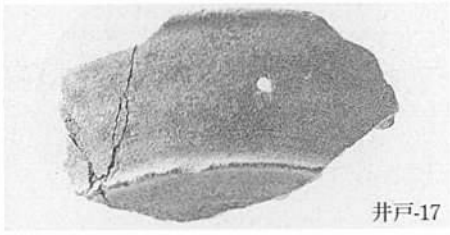
29-14

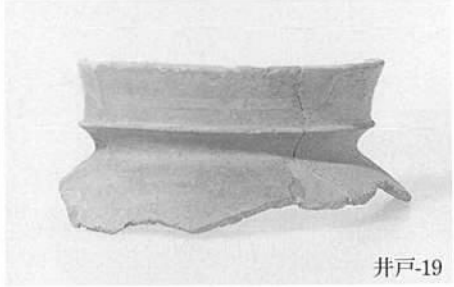
井戸-1

井戸-6

井戸-7

井戸-13


井戸-17

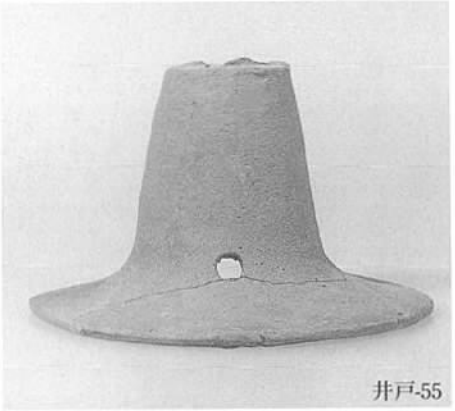

井戸-19

井戸-30

井戸-31

井戸-32

井戸-35

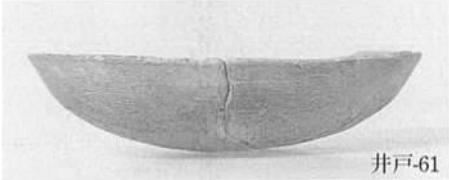

井戸-55

井戸-58

28・29号竪穴住居跡・井戸出土土器

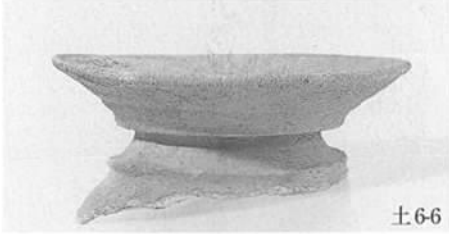
井戸-59

井戸-60


井戸-61

井戸-64

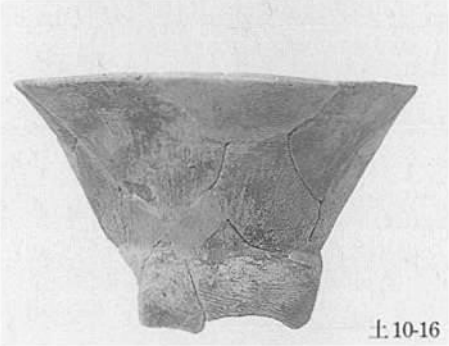
井戸-66


土6-6

土8-10

土8-11

土10-12


土10-16

土10-19

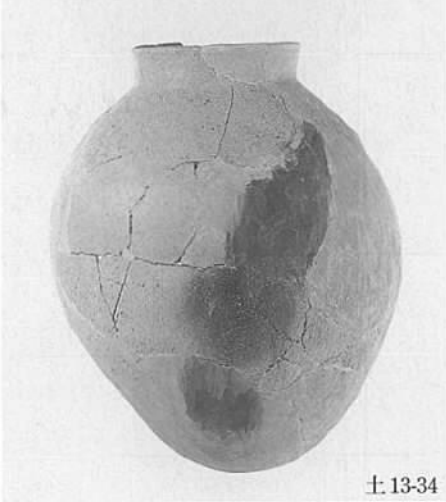
土10-22

土10-23

土10-25

土10-28

土12-32


土13-34

井戸・土坑出土土器

土13-35

土13-42

表土-1上

表土-1下

表土-3

表採-7

検出面-15

検出面-16

検出面-22

検出面-27

排土-8

排土-11

排土-14

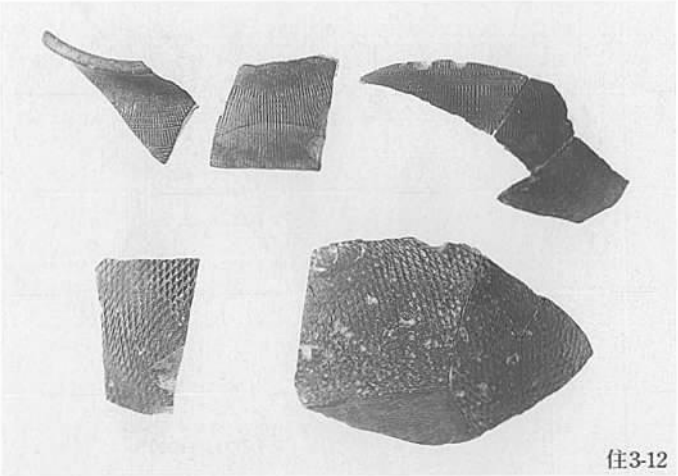
排土-15

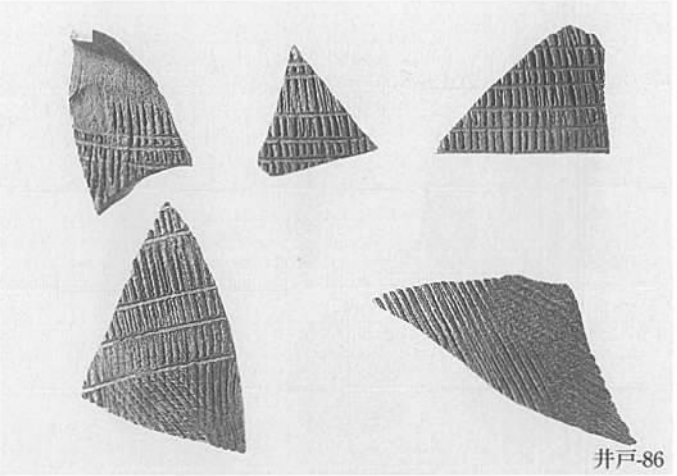
住3-11

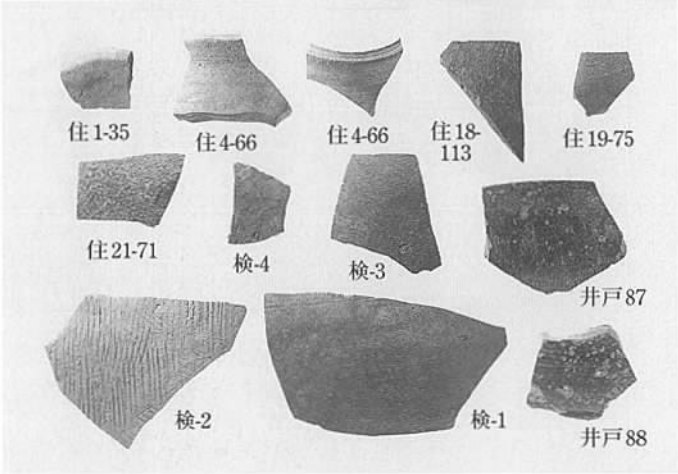
住15-47

住18-112

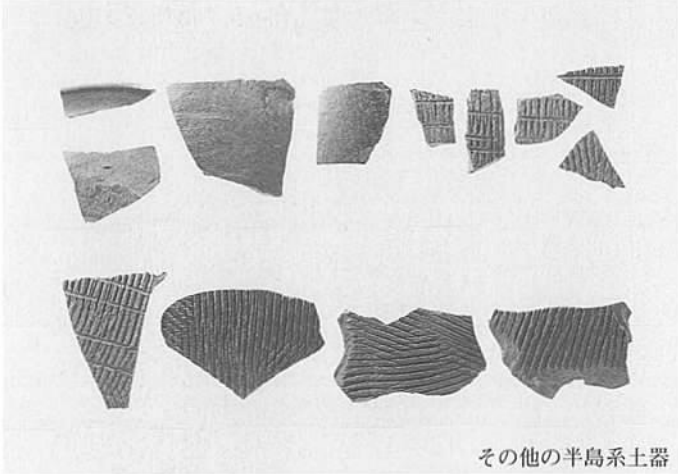
土坑・表土・検出面・排土中出土土器、半島系土器

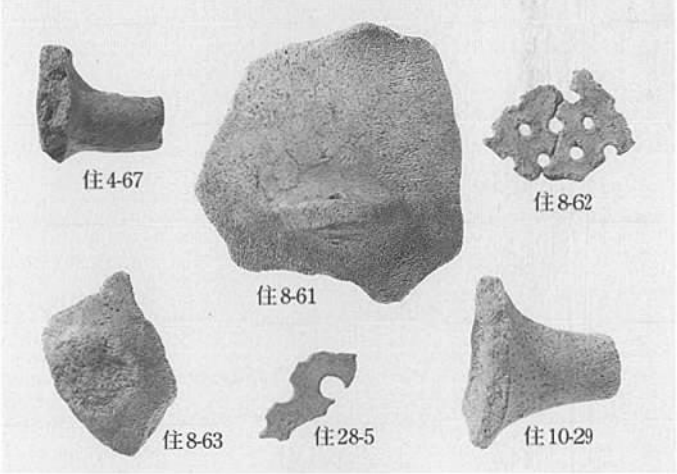

住3-12

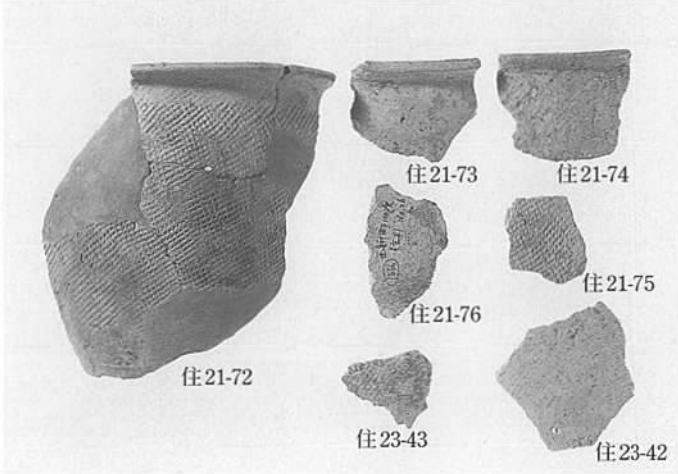

井戸-86

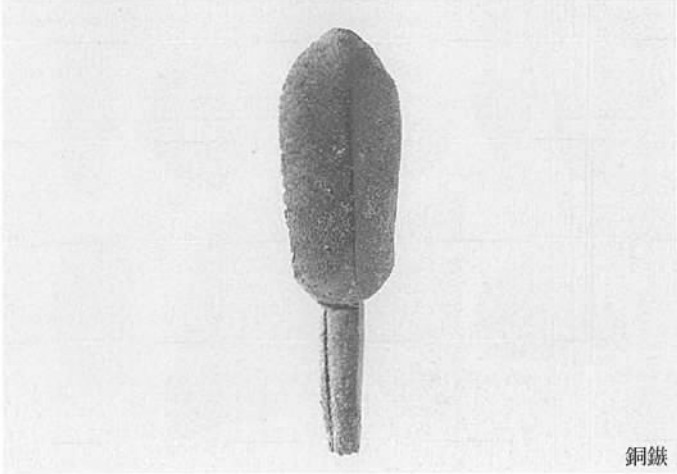

住1-35
住4-66
住4-66
住18-113
住19-75
住21-71
検-4
検-3
井戸87
検-2
検-1
井戸88

井戸87

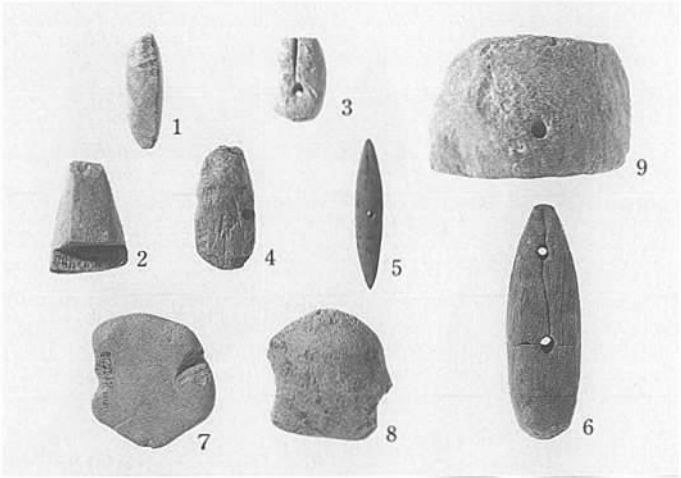

その他の半島系土器

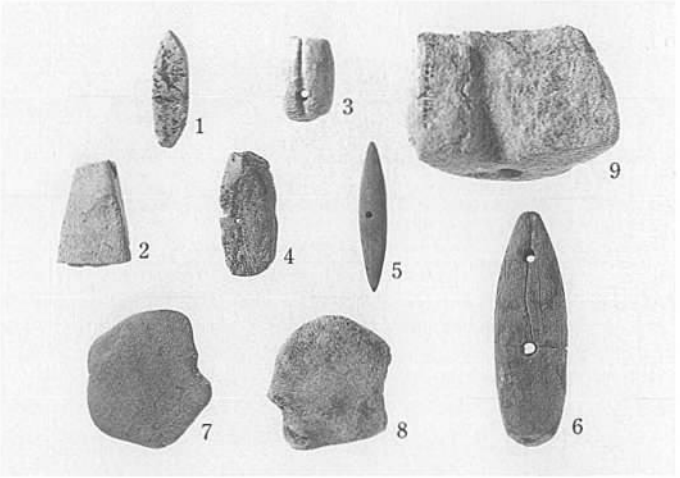

住4-67
住8-62
住8-61
住8-63
住28-5
住10-29

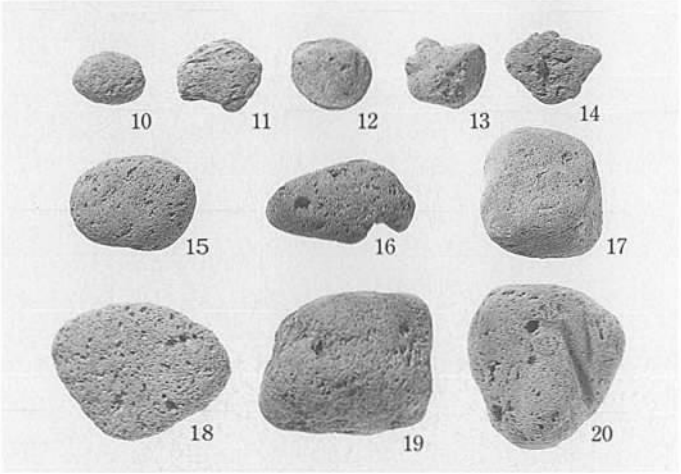

住21-73
住21-74
住21-75
住21-76
住21-72
住23-43
住23-42

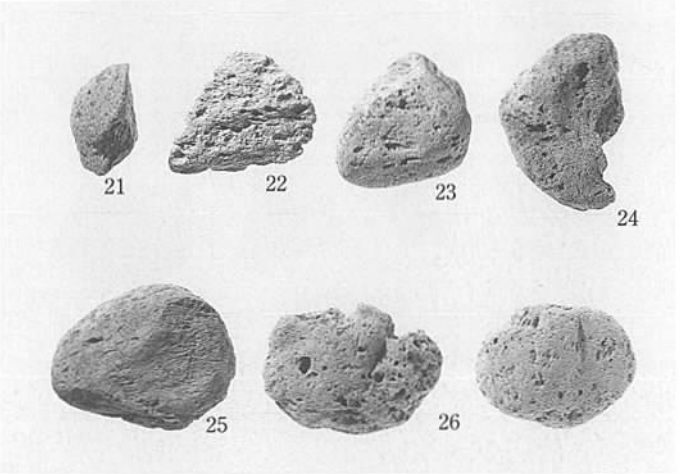

銅鏃

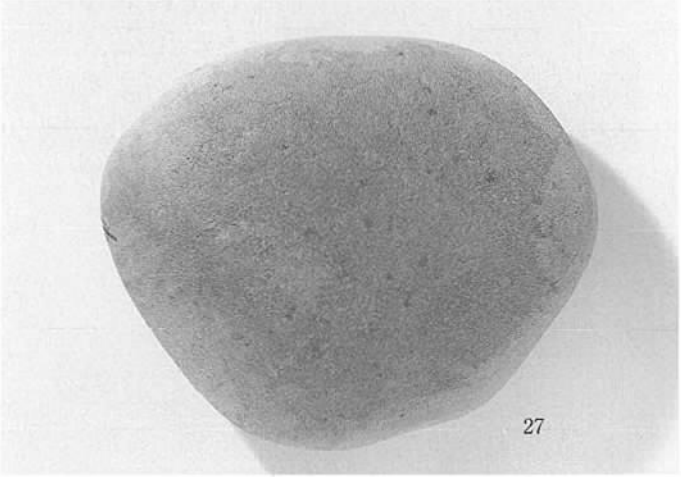
半島系土器・銅鏃

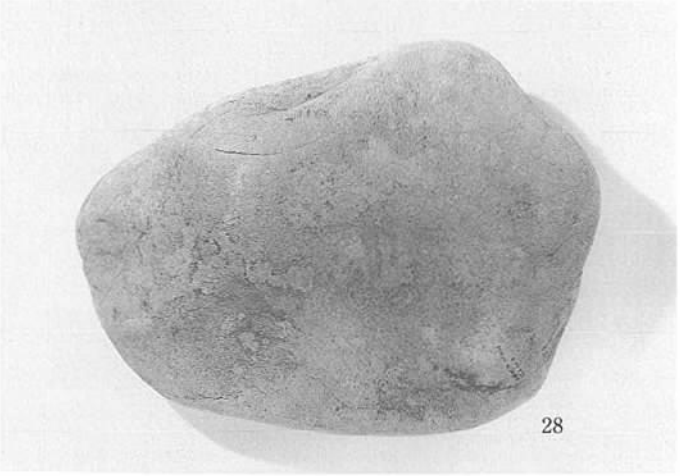

1
3
9
2
4
5
7
8
6

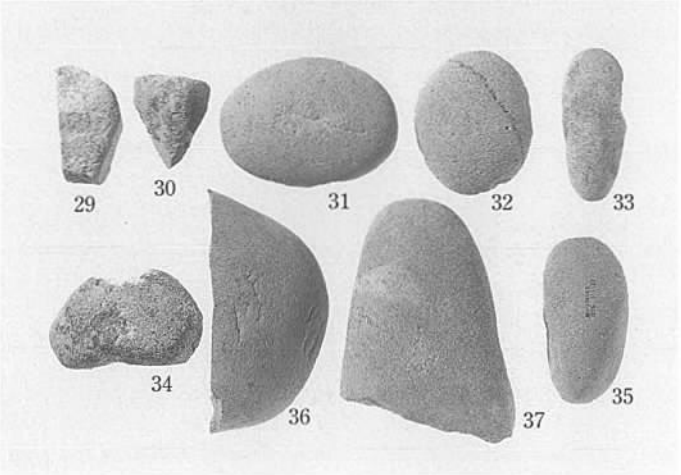

1
3
9
2
4
5
7
8
6

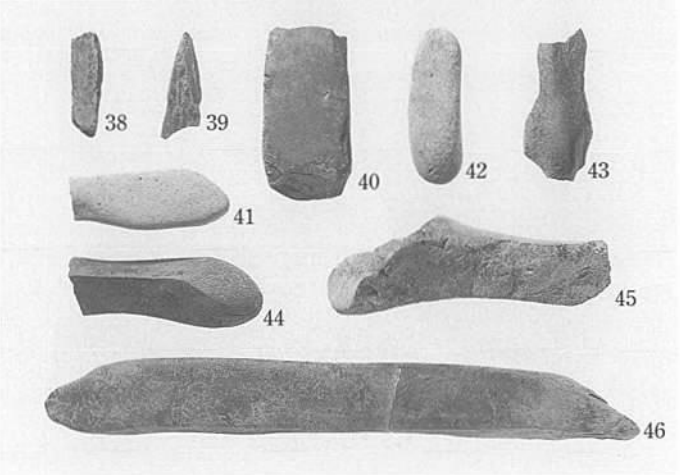

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20


21
22
23
24
25
26

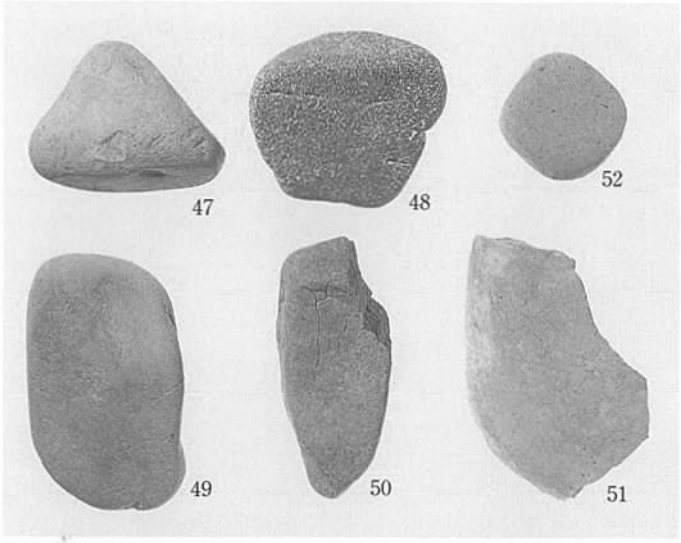

27

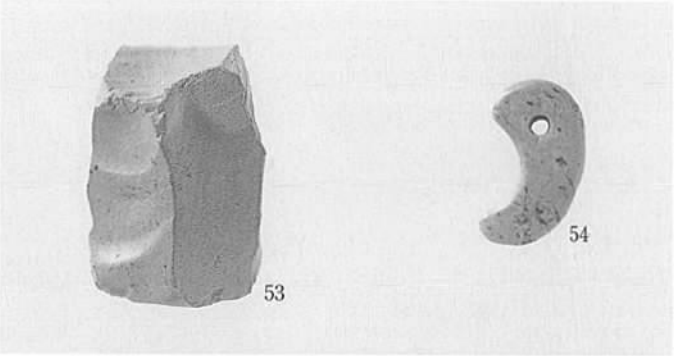

28

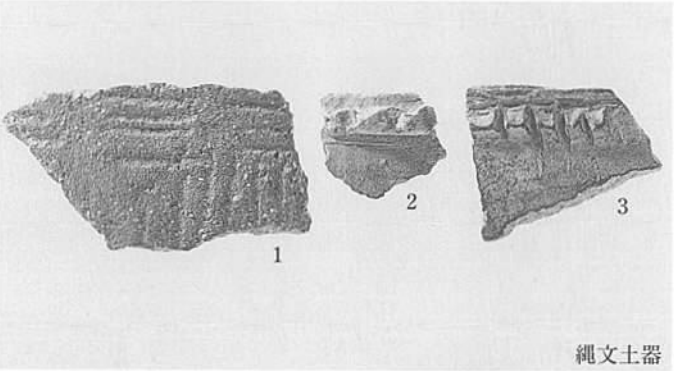

29
30
31
32
33
34
36
37
35

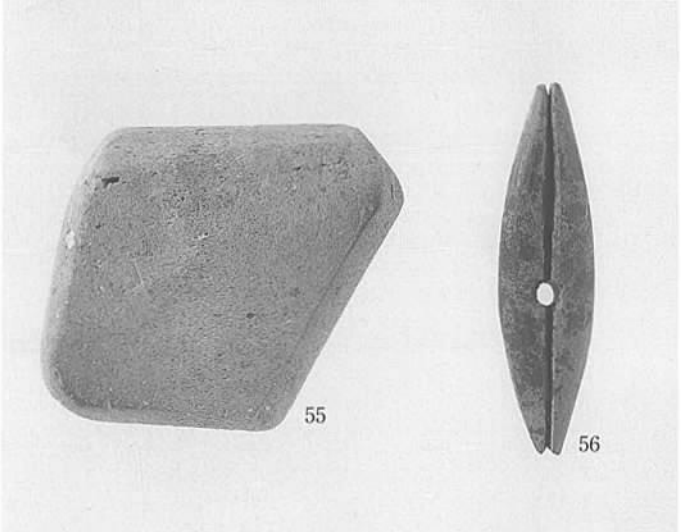

38
39
40
42
43
41
44
45
46

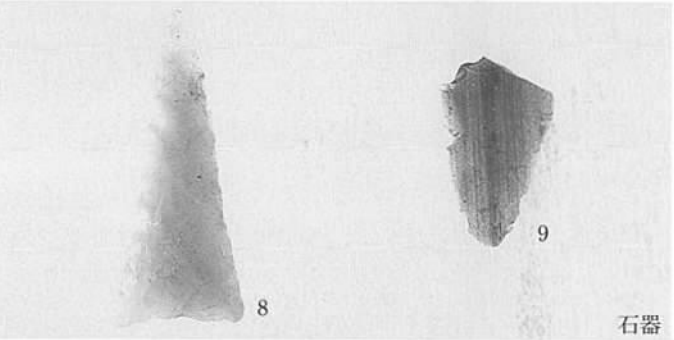
石製品

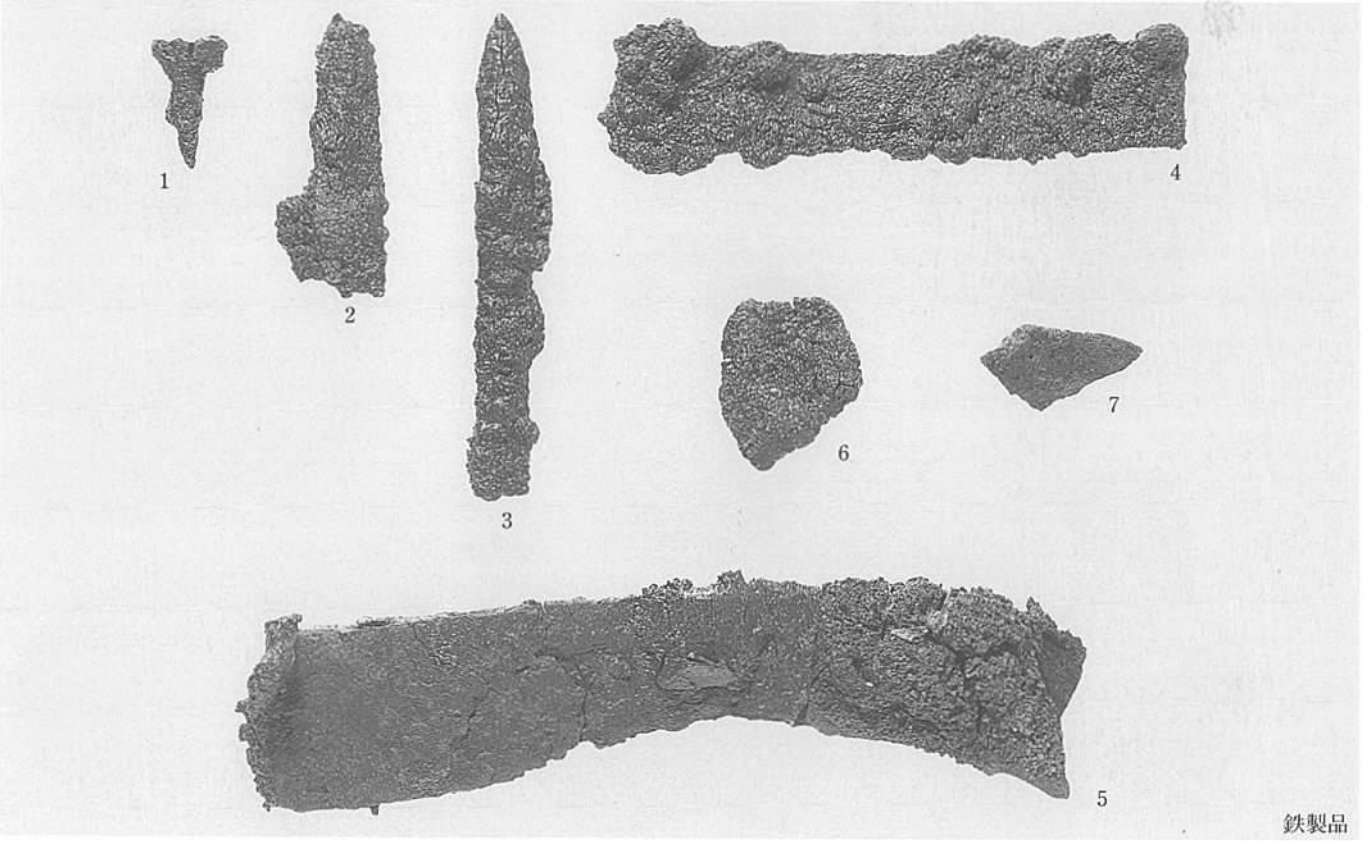












石製品・鉄製品・縄文時代の遺物

石組1-21

井戸-10

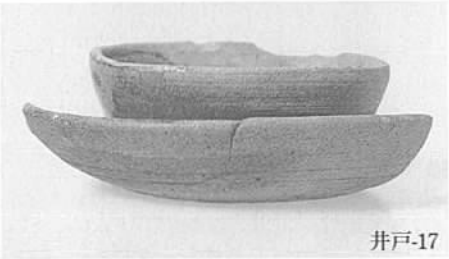
井戸-11

井戸-12

井戸-13

井戸-15

井戸-16


井戸-17

井戸-19

井戸-20

井戸-21

井戸-25

井戸-26

井戸-27

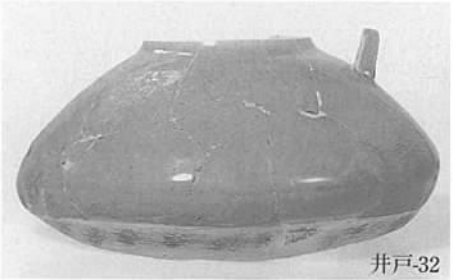
井戸-28

井戸-29

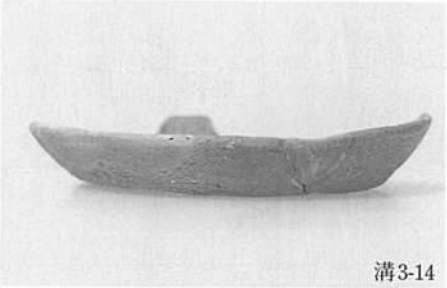
井戸-30

井戸-31

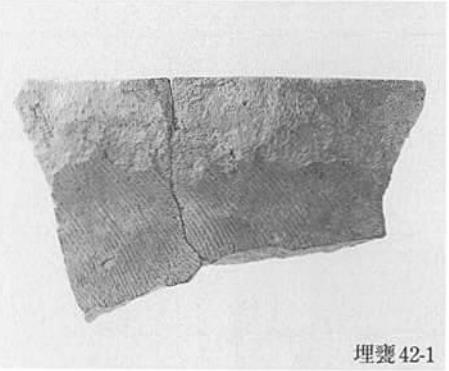
近世遺構出土陶磁器①


井戸-32

井戸-40


溝3-14

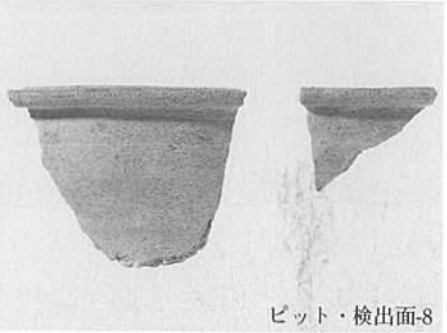
井戸-33


埋甕42-1

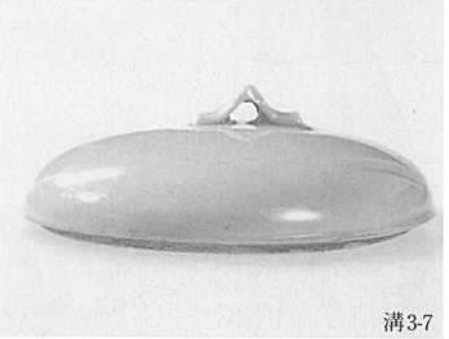
ピット・検出面-7

井戸-38

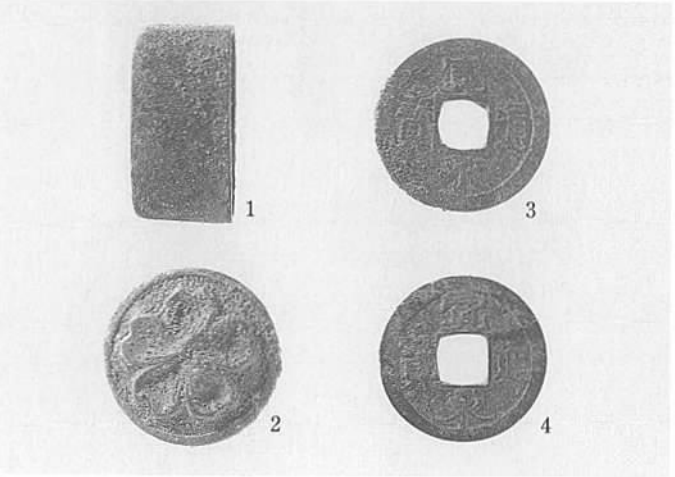
埋甕42-2

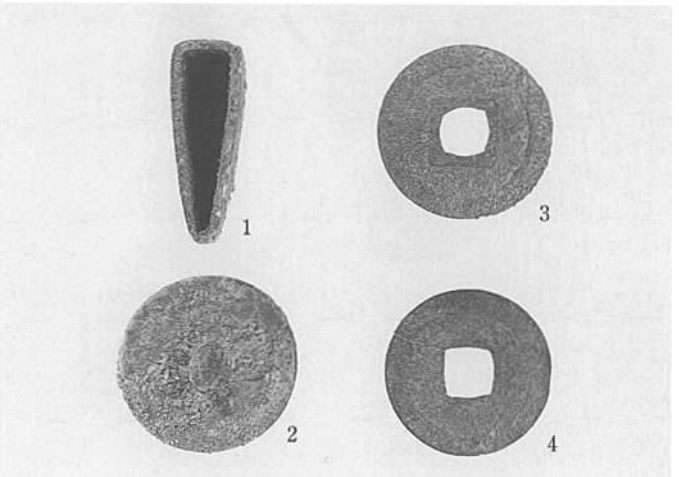

ピット・検出面-8

井戸-39

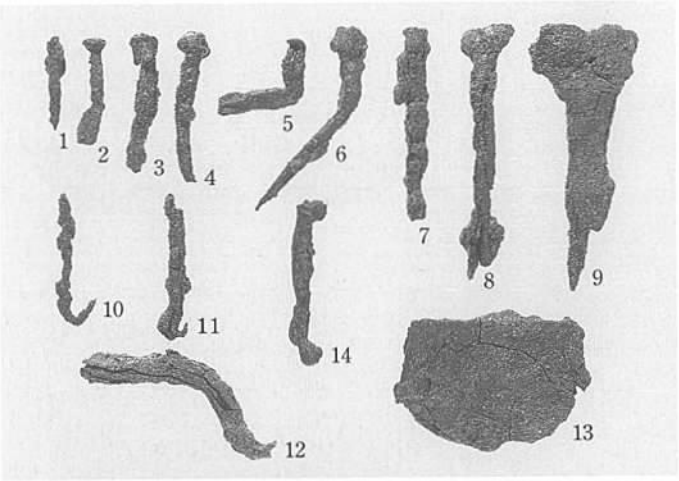

溝3-7

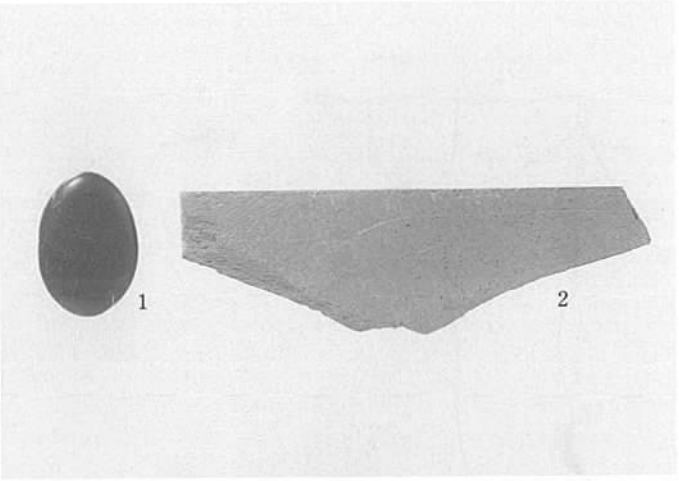
ピット・検出面-14

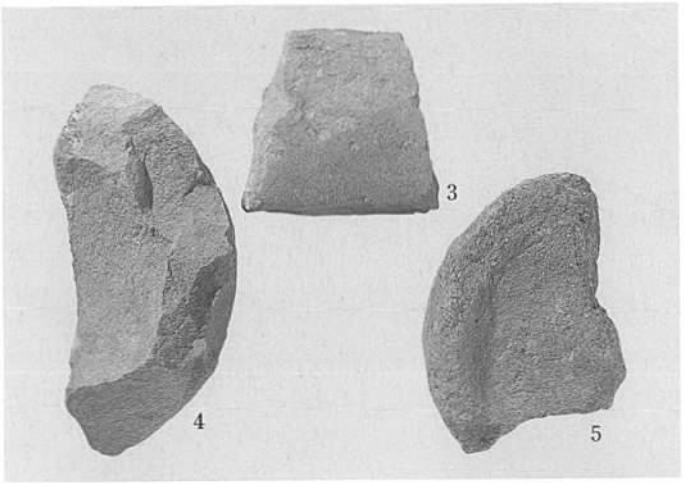


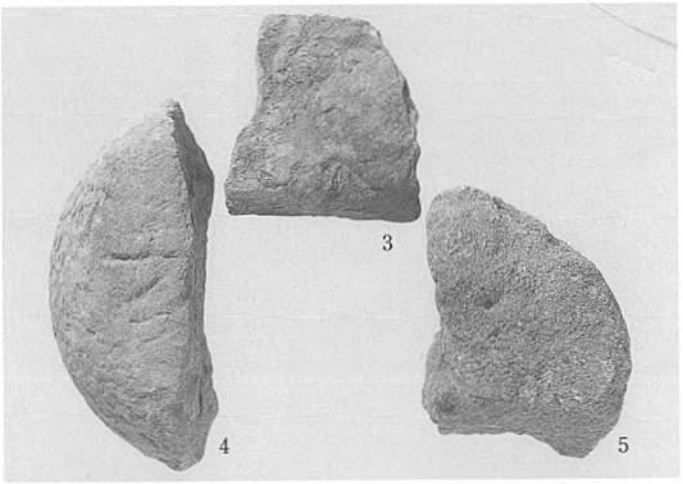


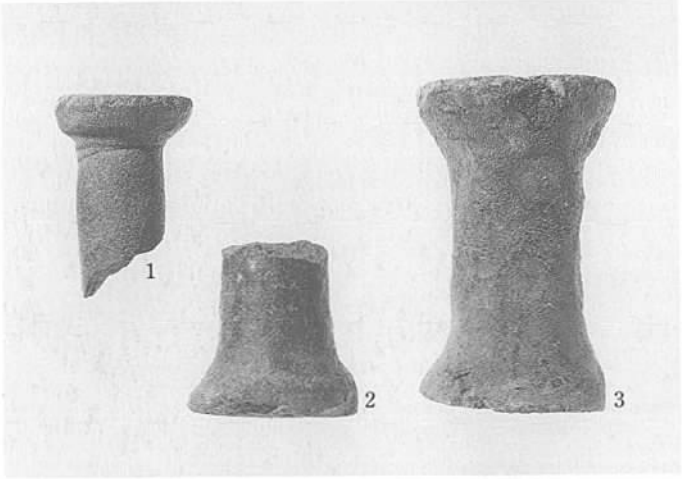
近世遺構出土陶磁器②・青銅製品

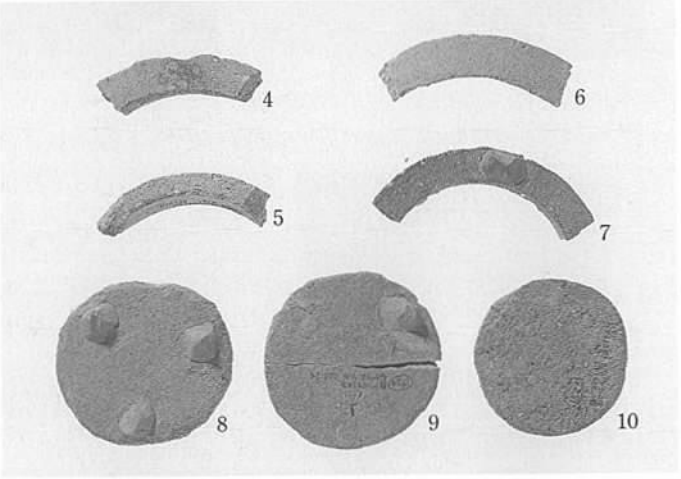


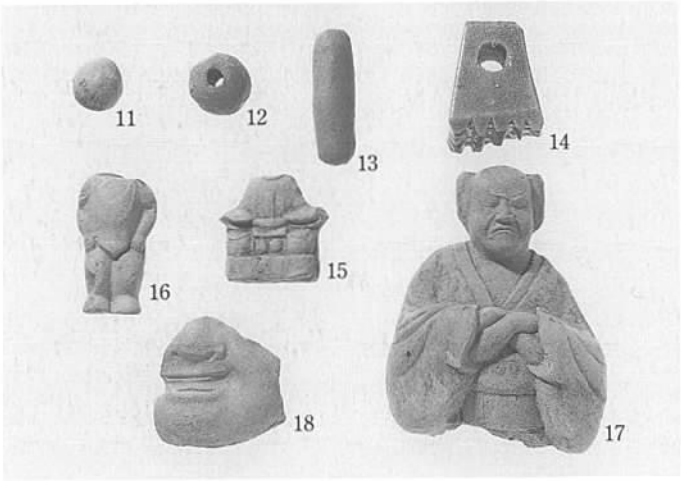


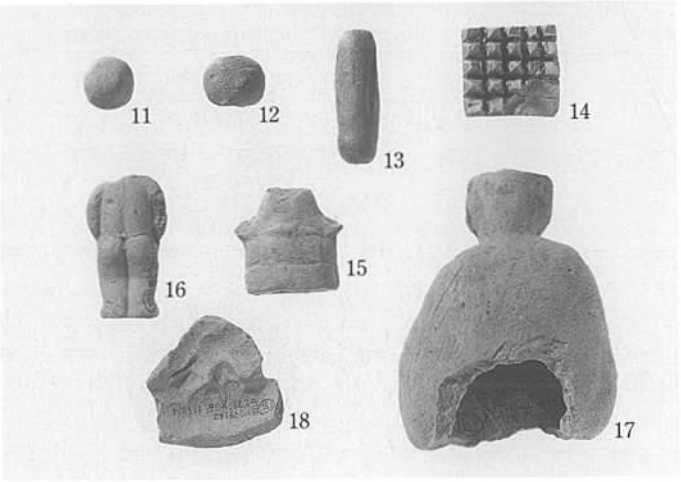












近世鉄製品・石製品・土製品

報告書抄録

ふりがな	にしじんまちいせき
書名	西新町遺跡Ⅵ
副書名	県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告5
巻次	
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第200集
編著者名	岸本　圭・岡寺未幾・坂元雄紀
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812－8575　福岡市博多区東公園7番7号
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
西新町遺跡　14次	福岡市 早良区西新 6－1－10	401307	0240	(日本測地系) 33° 34′ 47″ (世界測地系) 33° 34′ 58″	(日本測地系) 130° 21′ 29″ (世界測地系) 130° 21′ 20″	2001.9.25 ～ 2002.3.11	1,110	学校改築
西新町遺跡　15次				(日本測地系) 33° 34′ 47″ (世界測地系) 33° 34′ 58″	(日本測地系) 130° 21′ 33″ (世界測地系) 130° 21′ 24″	2002.10.3 ～ 10.29	800	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西新町遺跡　14次	集落	古墳 近世 近代	住居 井戸 土坑 溝	土器 陶磁器 石製品 土製品 金属製品 ガラス製品	半島系遺構・遺物 井戸 銅鏃・ガラス小玉
西新町遺跡　15次	集落	古墳 近世	土坑	土器 陶磁器	

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 16	登録番号 6

西新町遺跡 Ⅵ

福岡県文化財調査報告書　第200集

平成17年3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷　大成印刷株式会社
福岡市博多区東那珂3－6－62